

タイに生きて

バンコク日本人会百周年に寄せて

瀬戸正夫



瀬戸正夫

はじめに

本書を書くにあたり、過去において自分が体験したことや、いろいろと面白かったことなどを、忘れないうちに、自分の記憶がまだしっかりしているうちに、後世の人たちのために書き残しておき、大勢の人たちに読んでいただきたいと思います。

それと、今回『タイに生きて』を書き残しておきたいと思ったきっかけは、この80年間美しい自然と語り合い、地球上でうごめいている人々の様々な辛苦に耐えながらも頑張って生き抜こうとする姿を無言でじっくり見つめていた僕の瞳に、陰りが生じはじめたからです。

はじめの頃は眼に危険信号が発せられていることなどぜんぜん気づきませんでした。視力がだんだん衰え、視界に霧がかかったようになり、眼のふちに、カメラの広角レンズに50ミリのレンズフードをつけたように、黒い丸枠がはつきり見えるようになりだしたので、これはいけない、と思い、チューラーロンコーン（一般には短くチューラーという）病院の眼科医の先生にお世話になることになったのです。眼の診断を受けた結果は、老人病のひとつとされている、白内障だったのですが、先生から「あなたの場合は遺伝性で、緑内障も患っている。白内障と緑内障がふたつ重なっているけれど、白内障は治療すれば簡単に治る。だけど、緑内障は一生治らない、しかも、毎日朝

夕眼薬を欠かさずに注さなければならない。眼薬を注すのを忘れたら、失明する恐れがある」との宣言を頂戴しました。

そこで、2008年に白内障の治療をしてもらったのですが、このところまた眼の調子がおかしく、よく見えたり、霞んだりするようになってきたのです。

ですから、万一失明してからでは話にならないので、今のうちに身の回りの整理をしておかなければいけない、と思うようになった次第です。

まだ一人どこへでも行けますし、この世の中のもの何でも見えますので、運がよいほうです。もし失明したならば、失明に相応しい人生航路を辿ればいいのであって、別に悔いはありません。

眼の治療について普通には信じがたい不思議な経験をしましたので、のちほど詳しく述べることにします。

本書では終戦後65年も経過していますが、当時戦場で悲惨な戦争を体験した人たちが高齢化し、徐々に他界していますので、地獄絵図を描いた戦争の怖さを語る人が、少なくなっています。

65年の月日の流れとともに、世の中は想像もつかないほど速いスピードで近代化したばかりか、さらにハイテクスピーディー時代へと変貌し、人々の心境も平和なムードに溶け込み、幸せでいいなあ、と思います。

しかし、一方で、「第2次大戦で日本は2回戦った、それは大東亜戦争が1回で、2回目が太平

洋戦争だった」という人もいます。

それに、広島、長崎に原爆が落とされたことも知らない人がいるかと思えば、「日本は沖縄でアメリカと戦ったのだ」ということすらも知らない人もいます。

この他に、日本で映画化された、かの有名なマレーの虎（ハリマオ）の子分が約300人ほどいた元マレー半島のコタバルにいた豊谷さんのことを、「マレーの虎は山下奉文中将である」と間違ったことをいう人もいる有様なのです。

これは異常なことであり、一体どうしたことなのかと、原因を追及しなければならない問題だ、と思うのですが、恐らく日本の文部省の教育方針に関わってくる大きな問題ではないかと思っています。第2次大戦が終わってからまだ僅か65年ほどしか経っていないのに、過去において自国で世界の強敵を相手に戦ったことなどは、もうほとんど忘れ去られ、現代の若者にとって関心のないできごとになっているのです。

僕みたいなタイ生まれの頭の古い人間にとっては、「これは大事なことだ」と、思うのですが、本書では日本の戦争や、終戦後のバンコクの様子などを、思い出しながら記してみるつもりです。

それと、タイ語の人名および地名は、タイ語の発音に近いと思われるカタカナ表記にし、現在公式には1989年5月18日から、「ミャンマー連邦」と改称されているミャンマーの国名は、地元では、今でもタイ人は「パマー」、ビルマの国内でも同じくビルマと、言っていますので、日本

語では「ビルマ」と表記しましたことをご了承願います。

第1章	バンコクの渦のなかで	10
第2章	太平洋戦争に巻き込まれて	22
第3章	海底に藻屑と消えた船舶の悲劇 敗戦当初の艦船及び船舶の悲劇	37
第4章	右目の運命 不思議な幻の世界	97
第5章	サヤームの大地	112
第6章	日本軍に巻き込まれたタイ 自給自足への道 敗戦後のタイ 日本へ引き揚げ開始 日本人納骨堂の奇跡 奇跡的に残った日本人納骨堂 終戦後のバンコクの素顔	244
第7章	ふらふらカメラマンの眼 タイは仏教国なのか 悲惨な津波に遭遇したタイ タイに地震は起きないのか バンコク水没 工業化を目指すタイ タイの自然は破壊されている 山の声 山の民の行方	334
第8章	ビルマの民に人権と優しい安堵の光を ネ・ウイン将軍体制 反政府ゲリラは団結したが カレンゲリラ基地(KNU)に潜りこんで	397
第9章	尋ね人欄 おわりに	440 444

第1章 バンコクの渦のなかで

教育問題や世間のことも何も知らずに育った僕が、日本人学校で日本語を勉強するためにバンコクへ出てきたのが1939（昭和14）年の5月初旬でした。ですが、なぜかいつの間にかバンコクの住人になってしまいました。

僕がバンコクに来たきっかけは、日本人学校に入学し、日本語を習うためであり、勉強が終われば、またソンクラの我が家へ戻れるもの、と思っていました。僕は、当時シンゴラと呼ばれていた南タイの、海の幸の匂いが漂う漁村の町に両親と暮らしていました。マレー（マレーシア）半島のパダンベツサールの国境に接したソンクラ県のシンゴラは人通りもまばらなひっそりした町でした。父は医者でしたので、ソンクラの目抜き通りにあたる四辻のドーンラック寺が目の前に見える大きな二階建ての洋館式の家を借りて、ローンモオ・カイセイ『回生医院』の大きな看板を掲げて生計を立てていました。当時、ソンクラの町には、日本人は、医者をしていた父と歯医者をしていた久松さん、ならびに茶碗屋を経営していたおばさんの三人しかいませんでした。

けれど、あとから父を頼って1935（昭和10年）年にきた滝川虎若ドクターと、西野歯科医師が加わりました。

母は瀬戸テルと名乗っていましたが、実は、夫婦ではなく、父がブーケツにいた頃から一緒に同居していたからゆきさんでした。けれど誰もが瀬戸ドクターの奥さん、と呼んでいました。

僕にとっては義理の母にあたるわけですが、小さかった頃の僕は何も知らなかったので、本当のお母さんだ、と思っていました。

僕が母と一緒にハートヤイの小さな駅から機関車に薪を一杯積んだ急行列車に乗り、ガッタングットンと揺られながらバンコクに向かったのは、8歳のときでした。

タイでは一番暑い真夏の時期でしたが、フワラムポーン中央駅のむっとする熱気に迎えられ、駅前で屯（とどろ）っていたサムロー（ペダルを踏んで走る三輪車）に乗り、チャローンクルン通り（ニューロード）の中央郵便局の前で茶碗屋を経営していた藤島護三郎さんの店に向かい、その2階で、日本人学校の入学手続きが終わるまでお世話になることになりました。

僕は間もなくスリヴォン通りの小太りした橋本の女将さんが切り回していたメナムホテルに預けられることになり、そこから歩いて行けるソーイサップ通りにあった1926（大正15）年6月1日にシーパヤー通りで開校した盤谷日本尋常小学校（昭和16年4月1日、盤谷日本国民学校と改称）に通うことになりました。

学校に通う初日にメナムホテルに預けられ、そのまま母と一緒にシヤム日本人倶楽部の2階にあ

る日本人学校へ行きましたが、周囲に何の囲いもない古ぼけた小さな講堂で入学式が行われました。

全校生わずか27名しかいなかった寂しい学校でしたけど、見知らぬ新しい友達と巡り合うチャンスに恵まれました。授業がはじまると、母は用事があるから、と言って、僕を学校に残して先に帰ってしまいました。午後学校の授業が引けてから、みんなと一緒に並んでスリウォン通りを歩きながらメナムホテルに戻ったのですが、母がいなかったのも、僕はホテルの玄関の入り口にある綺麗な金魚が泳いでいる築地の所で暗くなるまで母が戻ってくるのを待っていました。

もう来るか、もう来るかと、母の姿をもとめ、門の入り口を見つけていました。ですが、次第に悲しくなり、じわじわと涙が溢れ、シクシク泣きながら母の帰りを待ちわびていましたが、母はついに戻って来ませんでした。

その日から一人ぼっちにされた僕は、悲しいかな、それ以来今日に至るまで未知の大人の社会の渦の中に放り込まれ、揉みくちやにされながら、バンコクで自力で生き抜かなければならない羽目になったのです。

早いもので、今年で80歳の高齢者仲間入りをし、バンコク在住が72年になりましたが、自分はまだ子供だ、若いのだ、と思っていました。

ですけども、気持ちとは裏腹に、顔には皺が増え、頭の天辺は禿げ上がり、真っ白い髪が風で左右にフワフワ揺れながら絡み合い、眉毛も白くなり、体力も徐々に衰え、動作もかなり鈍くなって

きたお爺ちゃんになってしまいました。

今のところ僕自身は、自分ではまだしつかりしているつもりですけど、一般に同年輩の高齢者仲間を見つめていると、眼の視力は衰え、足腰もますます弱くなり、立ったり座ったり、あるいはトイレでしゃがんだり立ったりするのも大儀になってくると同時に、記憶力も次第に消失しているのを目撃しているのも、僕もこれから、このような現象に巻き込まれないうちに、今まで遣り残してきたことをきちんと整理しておかなければいけないんだ、と自分を叱咤している今日この頃です。この歳になってくると、人間は何のために生きているのであろうか、人間の一生とは一体なんなのだ、この複雑な社会の大波小波の渦に巻き込まれ、あくせくしながら今日までなんとか頑張ってきたけど、これから先あと何年生きていられるのであろうか。

何れは死ななければならない生命、どうせ死ぬのなら、家族や他人には一切迷惑をかけないで永遠の眠りにつきたい、と思うようになりました。

僕はこの70年間バンコクで何をしてきたのであろうか、と思い、考えてみると、現在までバンコクに在住するようになったきっかけは、はじめに記したように、日本人学校で日本語を勉強するため、あるいは、日本人の子供だったのだから、どうしても義務教育を受けなければならない、といった、理由も考えられるのですが、やはりどう考えても、第2次世界大戦の渦に巻き込まれたのが、僕の人生を大きく左右したのだと思います。

勿論、戦争で各々の人生が左右されたのは僕一人だけではありません。第1次世界大戦、第2次世界大戦のお陰で、世界の各地で想像もできないほど大勢の人たちにおよんでいるはず。特に僕の場合は、どう逆立ちしても、日本が引き起こした戦争から切り離すことはできないのです。なぜか、と言いますと、その理由はちよつと長くなりますが……

僕が生まれた所は、当時はプーケット州といわれていた鈴の産地で鈴鉦山が多く、中国大陸から中国人の荒くれ労働者が大勢出稼ぎに来ていた、タイの島々の中では一番大きなアンダマン海に囲まれた美しいプーケットの孤島（幅20 km、長さ45 km）だったのです。

僕がプーケット郡の市場のそばの Nippon Dispensary Phuket（プーケット日本薬局）で、父の手によってオギヤオギヤ、と産声をあげたのが、1931（昭和6）年5月23日でした。

当時、タイの国名は、まだプラテート・タイ（タイ王国）ではなく、プラテート・サヤーム（シャム王国）の称号でした。

僕が生まれたのが5月23日でしたけど、同年の9月13日に、中国大陸で、大日本帝国関東軍による満州事変が勃発し、続いて翌年の1月28日には上海事変が勃発し、1937（昭和12）年7月には支那事変へと突入し、1941（昭和16）年12月8日未明の大東亜戦争（米国では太平洋戦争）へと、戦場は休む暇もなく続行され、南方作戦などが破竹の勢いで拡大され、平和に暮らしていた一般市民は平和で安全だった家庭を破壊され、揉みくちにされてしまったのです。

欧州では、僕が1年生に入学した年の1939（昭和14）年9月1日にドイツのポーランド進撃が決行され、続いて日本軍の奇襲（宣戦布告通報前）攻撃による大東亜戦争が1941（昭和16）年12月8日に勃発し、第2次世界大戦へと拡大され、欧州をはじめ、アジアや太平洋上の各地で悲惨な地獄絵図が展開されたのです。

この戦争のお陰で僕の人生が狂ってしまったわけですが、それに加えて運命を複雑にしたのは、僕の家庭には世間には発表できない秘めごとが隠されていたからです。

僕が自分の身の上に、両親が僕に隠している秘密があることをはっきり感知したのは、1945（昭和20）年8月15日の日本の敗戦で、ノンタブリー県のパーンブアトーンキャンプに抑留され、約1年後にタイ残留許可書を貰い、釈放され、タイに残留できるようになってからでした。

僕はまだ15歳の少年でしたが、抑留所から釈放されて自由の身となったその日から、人生に伴う生活費すべてを自分で切り回さなければならぬ羽目になってしまったのです。

抑留所から釈放された当初、母テルは僕の実母ではないことだけは確認できたのですが、では僕を産んだ実母はいったどこにいるのか、それと、いま日本にいる日本人の父は、果たして本当の父なのだろうか、といった疑問が脳裏に掠め、不安が残りました。

そこで敗戦後、シンガポールのチャンギー刑務所に戦犯容疑者として投獄され、のちに日本に送還されて山口の須佐にいた父に、再三にわたり、父は本当に僕の父であるのか、それと、実母の消

息についても問い合わせてみたのです。

父からはなかなか具体的な回答が得られず、最終的に父から得た回答は、正夫の父は自分である、僕の母はタイ人でシャン、という名前で、26歳のときプーケットで僕を生み、のちに死んだ、といった淡々とした内容のものでした。

僕には不思議な予知感があるのですが、父の手紙を読んだ瞬間に、父は真実を隠そうとしている、嘘をついている、信じられない、母はどこかで絶対に生きているはずだ、といったようなことが僕の脳裏を掠めたのです。

ですから、僕はキャンプから釈放されてバンコクに住むようになってからは、見知らぬ母の姿を求め、歩道を歩いている人や、バスや路面電車に乗っている見知らぬ人々に、遠慮会釈もなく手当たり次第に母の消息を尋ね歩いたのです。

数年にわたり新聞に広告を出したりして必死になって母を探した甲斐があり、運よくプーケットにいる母の居所がはつきりわかったのが、1960（昭和35）年の12月初旬でした。

僕はすぐにでも母に逢いに行きたい気持ちに駆られました。当時、僕は住友商事に勤めていた平社員の給料取りに過ぎず、自由に身動きできない辛い身でしたので、会社から休暇を貰い、やつとの思いで待望の母に逢いに行けたのは翌年の1月18日、僕が30歳のときでした。

母はプーケット郡プーケット通りの古ぼけた2階建ての長屋に住んでいました。地面は玄関から裏の

奥までカラカラに乾いた土のままでしたが、土地付きで自分で買った母の家でした。

やっと見つけた母との再会は、僕がおもちゃを引っ張ってヨチヨチ歩きはじめた3歳の頃のある日、急にプーケットからいなくなつて以来27年ぶりの再会でした。母に会えたお陰で、僕に秘められていたいろんな事情が判明したわけですが、家庭内のいざごは別として、もし日本が中国で戦争を起こしていなかったらば、僕の人生は今とは違った人生行路を辿っていたかもしれないと思うのです。なぜなのか、と問い正せば、はじめに記したようにプーケットは当時、錫鉱山が多く、中国大陸から出稼ぎにきていた労働者が大勢いたのです。

ですから、中国で、関東軍が仕掛けた満洲事変が勃発すると同時に、日本人に対する激しいボイコットが頻繁に実行されるようになり、日本人は生計を立てていけない窮地に追い込まれ、命の危険を感じ、プーケット島から追い出される羽目となり、父は一足先にバンコクへ去ったのです。

したがって、僕もそのとばっちりを受けたわけですが、戦争さえなければ、僕は美しいアンダマン海に囲まれたプーケットの住人になっていたかもしれないのです。しかし要は、マレー半島のシンガポールから北上してプーケットにいた父の経路を辿ってみると、財政もあまり芳しくなくバンコクで日之出病院に勤めていた父が、何の目的があったのか1935（昭和10）年に、バンコクからソンクラーに移転しているのです。

僕の考えでは、父はプーケットから追いだされなかったとしても、恐らくソンクラーに移住してい

ただろうと思います。

父は故郷の和歌山の串本を船で発ち、シンガポールに上陸した時点から、日本軍の諜報活動をしてたのかどうかは定かではありませんが、ソングラーで医者をしていたときは、表向きは医者だったかもしれませんが、実は軍属として、日本軍部のスパイ活動をしていた特務機関だったのです。

第2次世界大戦中に諜報機関の任務にあたっていた優秀な人たちはほとんどが陸軍中野学校の出身者でした。中野学校は特殊技術を養成するスパイ学校だったのです。

父もそうかと思ひ、念のために調べてみたところ、陸軍中野学校ができたのは1937（昭和13）年でしたが、東京中野囀町2番地（現中央線中野駅前の中野役所）に正式に陸軍中野学校が創設されたのは、翌年の1938（昭和14）年の秋でした。

しかし、陸軍中野学校のこととは外部には秘密にされていたために、中野学校の名称は、門の看板には『陸軍省通信研究所』とされ、はじめの一期生18名の卒業生を筆頭に終戦の日までに、約2000名の優秀な卒業生を戦場に送りだしています。

ですから、父は陸軍中野学校の出身とは関係なく、軍部が南方作戦に目を向け、特に南タイから約1000キロにおよぶシンガポール攻略の作戦を立てはじめた頃から軍部に内密に頼まれて、我が家に『回生医院』の看板を掲げてカムフラージュし、南タイの諜報機関本部とし、マレー半島周辺のスパイ活動をはじめたのだと思います。

当時のシンゴラの人口は僅か1万人ほどの小さな漁村の町でしたが、シンガポール攻略上マレー半島の国境と接していた重要な地点となっていました。

シンゴラには既にイギリスの領事館があり、オルダム領事が諜報機関の采配を振るい、日本人の行動を監視していましたが、日本の軍部は、太平洋戦争が勃発する年の1941年頃シンゴラ（ソングラー）に日本の領事館を開設する計画を立てていました。シンゴラの領事になる大役の白羽の矢は、中国の華北済南領事館で活躍していた中国語が万能な剣道四段の勝野敏夫領事に向けられ、勝野領事は同年2月28日バンコクに到着し、後から領事館部員と称して、大曾根義少佐を後藤書記生と名乗らせ、窪木少佐を石井書記生に変名し、二人をマレー半島のスパイ活動にあたらせたのです。

待望のシンゴラの日本領事館は1941年4月1日に開設しました。開所式の日には、バンコクから浅田総領事をはじめ、天田六郎領事、当事書記官だった西野順次郎さん、三菱の森さんや父を含めたおよそ30名の邦人が集まり、君が代の合唱で開所式がおこなわれました。披露宴は浜辺の公会堂で、イギリス領事のオルダム領事をはじめ、タイ関係の要人や華僑を含め、約300名が集まった盛大なパーティでした。



手前の父と後ろの滝川ドクター夫妻
1936年ソングラーにて



ソングラーの我が家



ソングラーの薬局で 父と後の両側に立っ
ている2人は滝川夫妻 1936年2月

第2章 太平洋戦争に巻き込まれて

プーケツで生まれ、優しい実母（シヤン）の胸に抱かれてすぐと育っていた僕は、やっと物心がつきはじめた頃に、中国人の反日運動に遭遇し、3歳の頃、いやおうなしに生まれ故郷から追いやられる羽目になってしまったので、残念ながら当時のプーケツの町の様子のことなどはほとんど記憶に残っていません。

僕の頭脳に記憶が染み込むようになったのは、プーケツから追い出されて、クローン（運河）が縦横無尽に流れていたバンコクで暮らすようになってからでした。

運河の街バンコクではじめて暮らした所は、1871年に掘られたクローン・マハーナークの水が緩やかに流れているプーカウトーン（ワツ・サケート）の目の前にクローンが流れている長屋でした。そこから後にプラパチャイの交差点があった小さなローンパヤバーン・カラーン（中央病院）の近くの華僑が大勢移住していた並びの、2階建ての長屋に引越しました。バンコクでは2年ほど過ごしましたが、父の都合（特務機関の課報関係の任務）で、さらに、バンコクから貨物船で南タイの大きな猫島と小さな鼠島が並んでいるシンゴラ（ソンクラ）に渡りました。

ソンクラは美しい自然に恵まれた静かな漁村の町でした。僕は、ソンクラには8歳までいましたので、いろんな出来事や、こまごましたことまで鮮明に覚えているのですが、僕は、いつも大勢の友達と、ソンクラの何もなかったひっそりした町中を、ワイワイ騒ぎながら、裸足で走り回っていたヤンチャな子供でした。

8歳になっても元気に走り回り、遊び歩いていた僕は一度も学校へ行ったこともありませんでしたので、頭の中にはまだ何も刻まれていない白紙のままの脳みそがあるのみでした。

日本人学校に入ったとき、僕はまだ日本語もあまり話せませんでした。生まれてはじめて日本語を習ったのですが、日本語の活字はおろか、日本語の単語の意味もほとんど理解できませんでしたので、1年生のときの担任の先生だった金井純雄先生（のちに校長）を困らせていました。

当時の日本の文部省が施していた教育方針は、1年生のときに片仮名のアイウエオを習い、片仮名を完全に覚えてから平仮名を習っていました。

漢字も、現代の当用漢字とは違い、昔の難しい漢文の漢字でしたし、仮名遣いにしても現在使用している現代仮名遣いとはまったく違っていました。

例えば、漢字の場合は、國Ⅱ国、歸Ⅱ帰、數Ⅱ数と書いていましたし、仮名遣いは、けふⅡきょう、おもふⅡおもう、いふⅡいう、てふてふⅡちようちよう、などでした。

漢字のあとの送り仮名にしても、歸るⅡ帰る、食るⅡ食べる、取替るⅡ取り替える、この他に、

文章の締めくくりとなる「です」、「ます」の敬語にしても、〇〇候、ナニナニ候、といった、候文を習い、1945（昭和20）年の敗戦間際には、平仮名と漢字の崩し字を習っていました。それと、公式の文章を書く場合の送り仮名なども、漢字とカタカナだけで表記していました。

戦前戦中文部省の規定によって、6年間の義務教育を、バンコクの日本人学校で受け、敗戦の年の1945（昭和20）年3月20日に無事に小学6年を卒業した僕は、一応、これで日本語はもう大丈夫だ、と思っていました。

しかし、日本では敗戦後、今まで習っていた日本語の教科書を、墨で消したり、のちに新しい当用漢字（1947年4月1日、小学校の国民学校初等科を改称し、中学校を発足させ、国民学校の名称を全国から消してしまい、当用漢字および現代平仮名の使い方を適用した教科書を使用するようになり、ローマ字もこの時点から習うようになった）に切りかえられていたことなどは露知らず、しかも終戦後数年経ってから、はじめて気づいたのです。

ですけど、数年間出遅れ能無しだった無知な僕は、日本人学校へ行きたくても、学校は敗戦で没収されて閉鎖されていましたし、誰かに教えてもらいたい、と思っても、親切に教えてくれる人もいませんでしたので、恥ずかしいかなみんなに笑われながら、文通で、徐々に現代用語の日本語の当用漢字や、漢字の後に付くふりがなの使いなどを、少しずつ憶えていくしか方法がありませんでした。

盤谷日本人学校で、日本人として教育を受けた僕は、学問に関する日本式の教育の他に、もういやだ、というほど厳しい軍事教練も受けました。

学校に入学した1939（昭和14）年当初、日本はまだ中国と戦っていただけだったので、「武道」と称する科目はありましたけども、ハードな軍事教練のようなものはまだ取り入れられていなかったのです。

ですけども、当時、日本の飛行機や、軍艦が入港するたびに、僕たち日本人学校の児童生徒は、全校生（当時約50名弱）動員で、小旗の日章旗を持って歓迎に行きました。

日本から世界一周飛行、と称して、飛行機が飛来した場合は、当時はまだ小さかった貧弱なドーンムアン空港に着陸してましたので、僕たちは学校からバスで歓迎に行っていました。

太平洋戦争がはじまる前から、このようにしてドーンムアン空港に行っていました。そのたびに、男子は機内に招かれ、機内の操縦席に案内され、そこで飛行機の操縦の仕方や、機関銃の撃ち方、爆弾の落とし方、それに風が吹いている方向や、広い滑走路で、エンジンのない一人乗りの木製の小さなグライダーの操り方などの説明を聞きながら、無意識のうちにいろんなことを頭に叩き込まれるように指導されていたのです。

軍艦がサムップラカーン県のパークナム（河口）に入港したりした場合は、フワラムポーン中央駅前のクローン・フワラムポーン（フワラムポーン運河）が流れているクローンに沿って走って

いた始発のがらあきのパークナム電車（パークナムまで25キロ）に乗り、ガタガタゴットンガットンと揺られつつ、みんなで歌を歌ったりして、ワイワイはしゃぎながら、歓迎に行ったものです。

軍艦の場合もそうでしたが、艦内で細長い水雷発射管に入っている水雷の発射装置の仕組みや、魚雷を発射する場合は、まず敵艦との距離や速度を計算してから発射するようにとか、艦砲の砲口の動かし方や、砲の角度の向け方、巨砲の撃ち方なども、ただ口頭で簡単に説明していただけでしたけども、それが、軍艦を見学に行くたびに何回も同じような説明を無意識に聞いているうちに、いつの間にか頭の中に叩き込まれていたのです。

日本軍が中国で泥まみれになって戦っていた当時、タイも含めてアジアの各地で、中国人の反日運動が頻繁に起こっていましたので、日本人学校で、先生が生徒を引率して地方へ遠足に行ったりするときは、数人のタイの私服の警官が、そ知らぬ顔で、遠くから見張っていたこともありました。日々安泰で平和だったタイに、戦雲の兆しが漂いはじめたのは、日本軍が1940（昭和15）年9月22日に、当時はフランスの植民地領（ベトナム、カンボジア、ラオス）だった北部仏印に進駐し、さらに1941年7月23日に、平和進駐と称して南部仏印に進駐、駐屯してからでした。タイ国内は全土にわたり、太平洋戦争がはじまる数年前から、当時的大日本帝国を筆頭に、英、米、フランス、支那（中国）、ドイツ、ソ連（ロシア）などの諸国が、入り乱れて地下工作に丹念し、

隠密に殺人行為まで実施したスパイ合戦の火花を散らした激戦地と化していたのです。

1941（昭和16）年12月8日未明、予期していた日本軍のマレー半島の奇襲上陸および、機動部隊の真珠湾奇襲攻撃による太平洋戦争が勃発し、マレー半島のコタバルに奇襲上陸を決行すると同時に、南部タイのシャム湾（現タイ湾）のプラチュアブキリカン、スラターニー、チュムボーン、ナコーンシータマラート、バッタニー、シンゴラ（現ソンクラーク）と、バンコクの南にあたるサムプラーカーン県のバーンブー避暑地の7ヶ所に敵前上陸を決行し、タイ軍（日本はタイと1940年6月21日「日泰友好条約」を締結していた）が、タイの承諾なしに独断で上陸したためにピブン首相の停戦命令がでるまで激戦を交え、双方で多数の死傷者を出す結果となったのです。当時、タイの兵力は軍警含めてわずか6万人ほどだ、と推測されていましたが、タイは各地で、田舎の小さな警察署の警官隊や、15、6歳の青年義勇兵が、駆けつけ、銃を手に取り、数倍にあたる日本軍を相手に応戦し、最後は銃剣を着剣し、市街戦まで交えた肉薄戦を決行し、必死でタイの国土を死守したのです。

今まで何事もなく日本人学校に通っていた僕たちは、太平洋戦争が勃発した途端に、空襲のときの心構えとして、両手で人差し指と中指を揃えて両目を押さえ、親指で両耳の穴を、（鼓膜が破れないようにするため）押さえ、口をアーンと開けて伏せる伏せ方や、焼夷弾が落ちたときに、砂袋やバケツでリレー式に焼夷弾を消す、消し方の練習なども数回にわたって訓練されました。

それと同時に、学校の教室の窓ガラスに、爆風でガラスが割れて飛び散らないように、新聞紙を細長く切り取り、糊でガラスに十文字に貼ったりしました。

バンコクが初空襲を受けたのは、1942（昭和17）年1月8日の午前4時頃から1時間ぐらいいでしたが、2機の爆撃機が市内のフワンポン中央駅や、日本軍の軍事施設を目標した連合軍の爆撃機から昼間のように明るくなる照明弾を投下しました。高射砲の弾が届かない高度を飛ぶB24による爆撃がはじまり、ずっと敗戦の日まで続きました。連合軍の空襲が次第に激しくなってきたので、学校の運動場には山型の防空壕がふたつ造られ、兄弟姉妹は別々の防空壕に入るように指示されました。

勉強中に空襲警報がウーウーと鳴り出すたびに、みんな急いで防空壕に駆け込み、遠くで爆弾がズシーン、ズシーンと地響きを立て地面に落ちると同時にドカドカーン、ドカーンと爆弾が爆発する音を、防空壕の薄暗い壁に身を丸めて聞き入る日々が続き、勉強がだんだん留守勝ちになってきましたが、そのお陰で、僕たち児童生徒に軍部から本格的な軍隊式の軍事教練が実施されるようになりました。

確か1942（昭和17）年の末頃からだったと思いますが、僕たちは、はじめの頃は学校の運動場で、町田実先生の指導の下に、軽い木の鉄砲を担いで行進したり、突撃の練習をしたり、戦争ごっこみたいな真似事をしていました。

ですが、次第に厳しくなり、火薬を抜いた本物の手榴弾で、様々な角度と距離から、トーチカの細長い銃口がある銃座口を直指して、立ったり、座ったり、伏せたりして、穴にうまい具合に投げ込む訓練を、叱咤されながら、肩の付け根が痛くなるほど何回も繰り返してやらされました。他にも、町田先生からは、相撲、柔道、剣道、古式泳法、忍者の忍び足で歩く歩き方、初歩の探偵の基本知識などに関したことも習いました。

学校で町田先生に指導してもらっているときは、何か間違えて失敗したとしても、もっとしつかりしろ、と叱られる程度で、せいぜいゴツーンと、先生の拳骨を頂戴するていどでした。しかし、ルムピニー公園に駐屯していた、独立混成第29旅団所属の外池（とのいけ）部隊（第162大隊の隊長・外池七郎大佐）で毎週日曜日ごとに実施された軍事教練は、そんなに生易しいものではありませんでした。

男女別々に分けられ、女子は挺身隊として軍医による指導の下に、戦場で将兵が負傷した場合の応急手当の仕方に關した、包帯の巻き方や、傷の手当の仕方、それと、負傷者を移動させるときの体の持ち方や、担架に寝かせて速足で歩いたり、走ったりする訓練が施され、最後には手榴弾で自殺する方法まで指導されていたのです。

女子はこの他にも、上級生だけが美人の松崎先生の指導の下に、細長い薙刀なぎなたを振り回し、基礎的な薙刀の使用法を習得し、学校の運動場や、講堂で特訓が実施されていましたが、薙刀で敵を殺す

のだと、いわれていました。

男子は、腰に長い軍刀をぶら下げた偉そうな数人の将校による指導の下に、ちよつとでもしくじつたりすると、叱咤され、ビンタが飛んでくる大人並みの軍事教練を、汗ぐつしよりになり、へとへとになりながら、死ぬ思いで受けました。

はじめの頃は、手始めに、楽なトントン、ツーツーと打つ、モールス信号の、アイウエオの暗号の暗記や、発信受信の打ち方、受信の仕方や、旗を両手に持つて手旗信号で、アイウエオの合図を送る旗の振り方の練習などから手解き^{てほど}を受けました。

一応大体の通信術（教育）を身につけてからですが、実際に本格的な軍事教練が始まると、本物の重たい三八銃の基礎的な持ち方、担ぎ方、続いて銃を担いで行進したり、走らされたりしました。また銃を持つて立ったまま撃つたり、中腰になり立膝で撃つたり、伏せて撃つたりする訓練も繰り返し実施されました。三八銃の他に、3人か4人で軽機関銃と重機関銃を持つて運ぶ運び方や、銃を解体したり、組み立てたりする訓練も施されましたが、ちよつとでもミスがあったりすると、「何をばやばやしているんだっ！これで敵を殺せるのかっ！」と怒鳴られ、大きな手のひらのビンタが飛んでくるし、「痛いか」と聞かれて、「はい、痛いです」と、正直に答えると、またビンタをくうので、同じことを2、3回繰り返し返してから、はじめて「痛くありません」と、答えなければいけないんだと、気づくのです。

銃剣術も特訓で習いましたが、はじめは軽い長い木銃で試合の練習をしましたが、大体のコツを覚えてから、本物の銃剣を銃口にくつつけて、藁をブスツと突いたりする練習もさせられました。

訓練中の軍隊式の試合の仕方は、一般の競技とは違った普通には想像もできない軍隊式の特別なルールがありました。

それは、剣道にしても、柔道にしても、相撲にしてもそうでしたが、本試合で5人抜きの場合などは別として、練習中の場合は、試合に勝った者が出て、負けた者が勝てる相手が現れるまで頑張つて勝負しなければならぬ羽目になる仕組みになっていたのです。

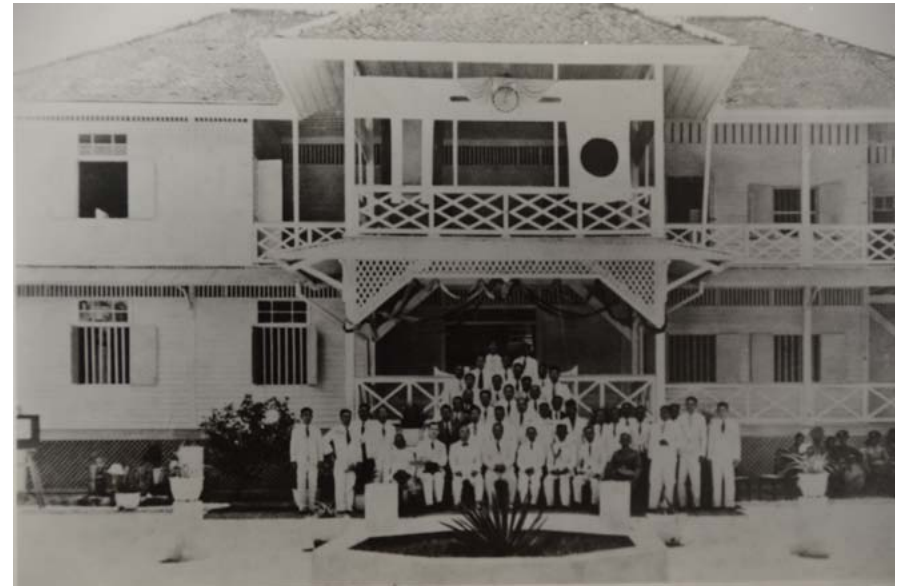
そこで、仮に友達が可哀想だと思ひ、わざと負けてやると、今度はあとが大変、わざと負けた本人は広い運動場を何周か走らされ、起立の姿勢でみんなの前に立たされたりしたものです。

軍事教練で受けた教訓は、「ばやばやしていたら、敵に殺されるのだ、先に素早く敵を殺せ」と訓示され、先ず、人間の急所を全部覚え込み、格闘術を習得し、敵を殺す殺人方法を、頭に叩き込まれたのです。

この他に、一発ずつしか撃てない長さ1.27メートルある重たい口径6.5ミリの旧式三八歩兵銃を担ぎ、サナームパウ（現在の戦勝記念塔付近の北側の右手にあった日本軍の射的場）の射的場で、銃座を肩の付け根にしっかりあて、左腕を曲げて地面に付け、左手で銃口が左右に動かないように真っ直ぐ支え、右目で的を狙ひ、右手の人差し指で引き金を引く実弾射撃の訓練まで受けました。



ルムビニー公園で軍事教練



ソンクラーの日本領事館開所式
1941年4月1日



女子挺身隊の訓練

僕が町田先生と一緒に射的場へ行き、銃と弾を受け取り、将校の厳しい指導の下に、真夏（タイは4月）の炎天下で実弾射撃の練習をはじめたのは、日本人学校中で僕一人だけでした。

それはなぜ僕だけだったのか、と言いますと、僕がちょうど14歳（1945／昭和20年）のときでしたが、僕は1年遅れて8歳のとき日本人学校に入ったので、僕一人だけ当時男の生徒で年長者だったからです。

要は、戦時中僕たちの年齢は、数え年で数えられるようになり、1年繰り上げられ、12歳であれば、13歳と数えられ、14歳になれば、もう一人前の少年兵となるわけで、僕なんかもその仲間に投入され、敗戦時の1945（昭和20）年には、数え年15歳でしたので、すでに少年兵の仲間入りしていたわけです。（当時ドーンムアン空軍基地には少年兵が大勢いた）

ですから、イザというときには、ルムピニー公園の外池部隊に駆け込めば、三八銃と実弾20発を支給してもらえることになっていたので。軍隊から仕込まれた教訓は、「弾が尽きたら、竹やりで敵を殺して死ぬんだ、絶対に敵の捕虜になつてはならん。軍人の恥だから」と、軍事勅諭（1882年1月4日下す）を暗記させられ、最後に手榴弾もなにもない場合は、右手で短刀を持って、切腹する切腹の仕方まで指導されていたのです。

太平洋戦争（第2次大戦）が早めに終わったお陰で、僕は運よく助かり、バンコクに残りましたけど、もし、戦争が長引いていたとしたらば、タイはビルマ方面から攻め込んでくる、と、予測さ

れていた敵の英印軍、英第14軍のスリム陸軍中将司令官率いる第33軍団の第2英師団、第19インド師団、第20インド師団、第254インド歩兵旅団、第4軍団の第5空挺師団、第7インド師団、第17インド機械化師団、第255インド戦車旅団、ルシヤイ旅団、第28東アフリカ旅団を含め、約17万の兵力と戦車約400輛、および、空軍機約600機の強力なウイングート空挺部隊が北部のメーホンソーン、チャンラーイ、チャンマイ方面から進撃してくるであろう、その時期は、恐らく雨季明けの1945年の11月から12月頃になるであろう、と予測されていました。

そのために1945年7月の時点で、バンコクの邦人老人婦女子は、当時タイ領だったプラタボン（バッターバン）へ疎開する段取りになっていました。ですが、七月後半のポツダム会談ののち8月初旬のポツダム宣言受諾の交渉がはじまった時点で取りやめになりました。

一方、タイに駐屯していた日本軍は、最後の決戦場と決めていたバンコクから107キロほど離れた標高1351メートルの山並みに囲まれた面積2万1000ライ（1ライは1600平米）もあるナコーンナーヨック（現ナコーンナーヨック士官学校）の山中に洞窟を掘り、弾薬糧秣を蓄え、ナコーンナーヨックを千早城として最後の決戦を挑もうとしていたのです。

いずれにしても戦争が早めに終わったお陰で、タイ全土は血みどろな激戦地に見舞われる惨事をまぬかれました。一般市民を含めて無数の生命が助かったので、運がよかったと思います。

当時、僕たち（僕だけかもしれないが）の頭脳に刻まれていた信念は、天皇陛下は神様であり、「

僕たちは神様の子である。僕たちは海軍の伝統を受け継ぎ、年中無休で奉仕する、土、日、なしの毎日が、『月火水木金金』であり、七生報国精神による『男は七たび生きて、七たび死に、天皇陛下のため、お国のために尽くすのだ』と、洗脳されていたわけですが、僕は日本人学校に入学した小学生の頃から、上記のことを頭に叩き込まれていたもので、絶対にそうだ、と、終戦になってからでも、真実を知るまでは信じきっていたのです。

第3章 海底に藻屑と消えた船舶の悲劇

遠い遠い東の海の彼方に、南西に細長く伸びた美しい富士山をシンボルとした本州、四国、九州、北海道、小笠原諸島、伊豆諸島、琉球列島など、大小様々な6千852島にもおよぶ島々が点在した日本の美しい島国があります。自然に恵まれた海の国です。

現在、四季に恵まれた日本の総面積は、37万7925・79平方キロ（戦時中は68万平方キロあった）大小様々な島におよそ1億2705万3471人の人たちが所狭しと居住し、各々の人生行路を辿っています。

現在は、新幹線や大型のジャンボ機が飛ぶ航空ルートも発達し、どこへでも自由に簡単に行けるようになりました。

ですが、島から島へ渡るには、やはり船が便利なので、船が一番利用されているのではないかと思います。

自衛隊の軍艦や潜水艦を除き、一般の民間人が運営している船舶には、小型の小さな漁船から渡し船でよく利用されているフェリー、貨物船や、巨大なタンカーなどが広い海原を航海しています

が、日本は先祖代々にわたり、船とは切っても切れない深い縁があると思います。

昔（昭和の初期頃）は、日本から海外へ行くには、ブルーインブルーと飛ぶ、双発のプロペラ機の飛行機か、貨客船しかありませんでしたけど、飛行機の便はまだそれほど発達していなかったもので、ほとんどの人たちが海と空を眺め、大波小波に揺られながら船を利用して渡航していました。

日本は資源に乏しい物資不足の国でしたので、不足分を海外からの輸入で補っていたのですが、1931（昭和6）年9月13日に、中国と（満州事変）戦争をはじめ、日中事変へと発展し、いつ終わるともしれない血みどろな激戦が拡大していました。

日本は、仏印から輸送されている蒋介石物資援助ルートの廃止、および、ビルマルート遮断を企図し、それと、南方作戦の重要な役割を果たす基地となる仏印に目をつけたのです。のちに日本軍は1940（昭和15）年9月26日に、北部仏印に進駐し、さらに1941（昭和16）年7月23日、平和進駐と称して、南部仏印にも軍隊を送り込みました。

北部仏印には、陸路と回路の二手に分かれて進駐しましたが、陸路部隊は、第23軍司令官久納誠一中将率いる第5師団が海防に向かったのですが、国境で紛争が起こったために、途中で進駐中止となったのです。

海路進駐部隊は、印度支那派遣軍の西村琢磨陸軍少将指揮官の下に、歩兵3大隊基幹は、9月26日に無事海防に進駐しました。

さらに10カ月後の7月28日に、南部仏印に進駐した部隊は、飯田禪二陸軍中将司令官指揮の下に進駐した、第25軍近衛師団と独立混成第21旅団でした。

このために、日本は米英連盟諸国から、7月27日に海外資産の凍結、続いて、源油ならびに物資の規制が実施され、ジュネーブ国際連盟に反対された強気な日本は、あっさりと国際連盟から脱退し、★日本が国際連盟から脱退したのは1933年です★★打開策として、日本がとった方針は、南方の豊かな海外資源の確保に着手したのです。

要は、仮に日本がどこかの国と戦うとしても、当然足となる大量に運べる大型の船舶が必要となってきました。そのためには、無数の船舶と、輸送船を海空から堅固に護衛できる海軍の強力な艦隊、速やかに行動でき、いつでもどこからでも直ちに飛躍できる大型の航空母艦を基幹とする機動部隊がなければなりません。例えば、どこかの陸地に敵前上陸し、敵と交戦し、戦ったとしても、後方からの補給ルートをしっかり確保しておかないと、敵前上陸に成功して勝ったとしても、のちに後方からの補給が続かないと、最後は敗北を招く結果になるからです。

第2次大戦と、第1次大戦（1914年7月）の戦術を比較してみますと、第1次大戦では、複葉機が中心で、爆撃も規模の小さいものでしたが、第2次大戦では、速度も航続距離も飛躍的に上がった、大爆撃も行なう大規模空軍部隊の出現でした。

それに、今まで最前線の基地から伝令で一番速いといわれていたのは、軍の連絡役で活躍してい

た可愛い伝書鳩でした。

戦争があるたびに、数十万羽も使われていた可愛い目をした伝書鳩の時代（1942年春に無電短波が開発されてから）は終わり、現場からすぐ通信できる便利な電波通信器が発明され、それと同時に、電波探知器や、暗号解読器などの新時代へと突入しました。

今までの戦いは、陸軍と海軍が主力だったのですが、第2次大戦では、開戦と同時に、空軍機による真珠湾奇襲（米国は1941年12月7日の朝だった）攻撃を筆頭に、はじめから最後まで威力を発揮し、戦果をあげたのは、新たに出現した瞬間にどこへでもひとつ飛びで移動でき、攻撃できる空飛ぶ新型の飛行機、空軍部隊の活躍だったのです。

過去の戦いでは、陸上の戦場（1916年9月15日、ソンムの戦場ではじめて英軍の戦車隊出現）は別として、海上の制海権さえ握っていれば、万事安泰でした。

ですが、第2次大戦では、勿論、制海権も大事でしたが、ほとんどが制空権を牛耳った方が、敵に対して数倍に勝る有利な戦果をあげることができたのです。

ですから、敵味方を問わず、大空の制空権と、洋上の制海権を完全に牛耳っていた方が有利に戦え、戦果をあげることができたのです。そのためには、海上で輸送船を護衛できる艦船、特に大型の航空母艦が重要な役割を示すことになるわけですが、日本は航空母艦が少なかったため、開戦間近に、日本郵船の新田丸（8000トン）を「沖鷹」の航空母艦に改良し、のちに、春日丸を「大鷹」

に、あるぜんちゃん丸を「海鷹」に、八幡丸を「雲鷹」にし、開戦当時はまだ設計図だった樫原丸を「隼鷹」に、出雲丸を「飛鷹」にと、それぞれを航空母艦に改良したのです。

日本は、1931（昭和6）年9月からおよそ10年間で、★中国との本格的な戦いは1937年の日華事変からです★★泥沼と化した中国戦線で激戦を交えていたのですが、疲れきった日本は、中国を完全に占領することもできず、足を抜けないまま1941（昭和16）年12月8日未明に、物資豊かな大国、米英を筆頭に連合国と戦う、第2次大戦へと突入してしまったのです。

資源もなく僅か1年間ほどの補給力しかなかった日本は、無理な戦争をしたわけです。

第2次大戦が勃発した当時、大本営のキャッチフレーズは、「日本の人口は1億人だ」と言われていましたが、実際の本土の人口は第2次大戦が勃発した1941（昭和16）年12月1日の時点では、7千311万430人（1940年10月1日内地人口7千311万430人〈外地人口当時日本人だった朝鮮、台湾は3千211万1793人〉）しかなかったのです。

敗戦時の1945（昭和20）年のおきの人口にしても、7千199万8104人（11月1日調査）しきいませんでした。しかも、女性の方が男子よりも420万人以上も多かったのです。

日本人だ、といわれていた朝鮮人も台湾人も、日本の敗戦と同時に日本国籍を破棄され、日本人と認められなくなったので、もし仮に戦時中に、日本人の人口が1億人いたとしたら、第2次大戦で戦死した人数は、約2千8000万人も戦死していることになり、とても信じられない数になり

ます。

実際には行方不明を含め、軍人、軍属、邦人を含めて約310万人が戦火に巻き込まれて死亡しているのです。

敗戦の時、日本の兵力は、内地（九州、本州、北海道、四国）が陸軍約240万人、海軍約130万人（朝鮮人、台湾人は含まない）で、外地部隊が、陸軍約310万人、海軍約40万人、計約720万人の兵力が残っていました。

海外からの引き揚げで、外地部隊が約350万人、外地邦人が約310万人いましたので、約660万人におよぶ引き揚げ者が、祖国への帰還を首を長くして待っていたのです。

日本は第2次大戦時に国家総動員で、およそ3年と9ヶ月間連合軍を相手に死に物狂いで戦火を交え、最後は本土決戦まで決めていたわけですが、その頃（1944年）は、ほとんどアメリカとの一騎打ちになっていたのです。

しかし如何せん、膨大なまでに資源豊かなアメリカに対し、物資不足だった日本は、武器の生産もままならず、ガソリンや食料が欠乏しても、制空権も制海権もアメリカに牛耳られていたので、補給ルートを完全に断ち切られ、身動きできない窮地に追い込まれました。

しかも、大波、小波、荒波が押し寄せる本土周辺は、植民地だった台湾、朝鮮半島も含めて本土近海は、米軍が図った「日本の餓死作戦」の一環として、空から1万2135個にのぼる3種類（磁

気機電、音響機電、磁気水機電）の機電をばら撒き、海上からの補給ルートを完全に封鎖していたのです。

それと、国内に潜んでいた日本の船舶は、米軍に海空双方から狙われ、小さな漁船にいたるまでもがしらみつぶしに狙われ、海底に葬られていたのです。

それに、大編隊を組んだB29機が本土上空を我が物顔で飛び回り、自由自在に爆弾の雨を降らししました。昭和20年には武器も飛行機も尽き、日本海周辺で、敵の潜水艦や、巡洋艦から本土めがけて艦砲射撃を受けても、抵抗する余力もなく、ただ涙を吞んで泣き寝入りするしかなかったのです。このために、日本は武器の増産はおろか、戦時用に蓄えていた戦備品や、食糧も徐々に欠乏し、国民には配給制度でなんとか生命を繋いでいたわけで、餓死寸前までに追いつめられていたのです。勿論、南方や、太平洋上の島々で守備にあたっていた日本の将兵も、同じような運命に立たされていたわけです。後方からの補給は皆無に等しく、武器弾薬や食料も欠乏し、島流しにされたような心細い心境で、気力のみで守備にあたっていたのです。

小さな島に立て籠もって守備にあたっていた将兵は、ビルマや中国大陸の陸地続きで戦っている将兵よりも悲惨でした。沖に停泊している敵の無数の機動部隊から、飛来してくる艦戦機の猛攻を受けると同時に猛烈な艦砲射撃で砲弾を撃ち込まれたとしても、身を隠して抵抗する場所があったにしろ、海に囲まれた島からは一歩もあとへはしりぞけず、最悪の場合は、弾尽きて全員が悲壮な

玉砕を遂げていたのです。

しかし、小さな島で死守していた守備隊よりも、もっともつと悲惨な目に遭遇していたのは、資材や武器弾薬糧秣などの戦争物資を満載し、戦場に向かう輸送船に一緒に乗船していた船員や、将兵、邦人、捕虜や、外国人の労務者、それに、可哀想な軍馬や軍犬でした。

第2次大戦で、中国大陆、ビルマ、マレー半島などの陸地および、マリアナ諸島や、バターン諸島の孤島で死守した悲惨な戦記物語のことを記した書籍は山ほどあります。ですが、戦時中、太平洋開戦と同時に、最後の最後まで国家のために、生命を捧げ、船内で甲斐甲斐しく将兵や、乗客の身の回りの世話役をはじめ、万一の場合は、自身を犠牲にしても乗客を救助し、最後には母船もろとも海底に散って逝った可哀想な船舶の乗組員でした。

孤島の守備隊よりも、もっともつと悲惨で惨めな目に遭っていたのは、逃げ場のない輸送船で、インド洋や太平洋上の果てしない荒波を航海していた将兵や、船舶の乗組員だったのです。島影も、一本の木すらない逃げ道もない、あるいは隠れる所もない洋上で、敵の潜水艦や、敵機に狙われ、猛攻を受けたときです。輸送船は海上で敵に発見されたら最後、数十機の敵機の猛爆に遭遇し、あるいは、敵の潜水艦に狙われ、船体に魚雷を撃ち込まれ、波間に吸い込まれる輸送船から逃げ出した乗組員は、命からがら海に飛び込み、漂流しながら泳いだとしても、酷いときは、さらに敵機の徹底的な機銃掃射に見舞われ、息の根を止められ、血の海と化し、船とともに海底に葬られていた

のです。

こんな悲惨な悲劇が起こってもいいのかと思いますが、見出しのキャプションにも記したように、「海底に藻屑と消えた船舶の悲劇」であり、輸送船の乗組員の悲壮な玉砕なのです。戦時中民間によつて運営されていた船会社、あるいは個人で使っていた大小様々な船舶は、日本軍の命令により、ほとんどが陸海軍のための御用船に使われ、将兵や武器、軍需物資、食料などを満載し、輸送船として船団を組み、あるいは、護衛艦無しで単独で行動し、戦場へ出航していたわけです。

軍部の命令で召集されていた船舶は、次のように配備されていました。陸軍が使用する陸軍船が（A）船、海軍が使用する海軍船が（B）船、一般の民間が使用する民間船が（C）船、と区別され、民間船のみが「船舶運営会社」に管理されていました。

航海中に敵の潜水艦や敵機に襲われて被弾し、沈んでいく船と運命をともにした乗組員、あるいは本土で航海中に機電に触れて沈没した小さな漁船も含めて、戦時中に敵の連合軍に沈められた船舶は、全部で1万5518隻にのぼり、このうち『戦時船舶史』の資料に記載されている200トン級以上の船舶が約2623隻（約900万トン）も沈められているのです。

全体のトン数は不明ですが、1万5518隻も海底に沈められ、眠っているとは、実に驚くべき数字です。第2次大戦が勃発した当初、世界で一番強い海軍は、日本かと思っていました。この国が強かったのかと、と聞けば、それはシンガポールの基地に1000万ポンドの巨費を投じ、

10年の歳月をかけて、海面に巨砲を向けた堅固な要塞を構築した英国の東洋艦隊だといわれていました。

日本は第2次大戦で気が遠くなるような2億3869万平方キロにおよぶ広大なインド洋ならびに太平洋上に点在している諸島の沖合いで、双方の機動部隊による激烈な海戦を交えていたのです。大荒れに荒れた海上の艦隊による日米の海戦は、大戦勃発当初は南方作戦によるインド洋方面の上陸作戦に集中していました。ですが、南方作戦が一段落した1942年6月頃を起点に、アメリカの反撃が開始されてからは、太平洋上での海戦が主体となり、マリアナ諸島、カロリン諸島、ソロモン諸島、アドミラルティ諸島、アリューシャン群島、バターン諸島などの、ミッドウェー島、ミンダナオ島、グアム島、アッツ島や、その他の島々の周辺で、輸送船団を組んだ上陸作戦などを含めて、双方の想像もつかないほど凄まじい攻防戦が展開されていたのです。

インド洋および太平洋上で、敵味方の機動部隊による死闘が繰り広げられた攻防戦は、1941年12月10日のマレー沖海戦を筆頭に、1942年の、2月4日のジャワー沖海戦、2月20日のバリ島沖海戦、2月27日のスラバヤ沖海戦、3月1日のバタヴィア沖海戦、5月7日の珊瑚沖海戦、8月24日のソロモン沖海戦、10月11日のサボ島沖海戦、10月11日の南太平洋海戦、11月30日のロンガ沖海戦。

1943年の、2月1日のイサベル島沖海戦、3月27日のアッツ島沖海戦、4月7日のフロリ

ダ沖海戦、7月13日のコロバンガラ島沖海戦、11月2日のブーゲンビル島沖海戦、および、1944年10月25日のフィリピン沖海戦などで、無限に広がる洋上のまったただ中で、悲壮な海空戦を交えた海戦が繰り返されたのです。

島への上陸作戦があるたびに、周囲を護衛艦に守られた輸送船が船団を組み、将兵および戦鬨物資を満載し、上陸地点目指して行動をともしにしていたわけですが、上陸作戦で敵に一番狙われたのは、航空母艦と輸送船だったのです。

輸送船が船団を組み、護衛艦が見守っている場合は、心強いのですが、単独で航海している場合もありますので、そのときほど、心細いものはないのです。

いつ敵の潜水艦に狙われ、発射された白い泡を立てた（のちに泡の出ない魚雷が開発された）魚雷が船体に向かって突進してくるかもしれない不安もあり、そうかと思うと、突如として大空から数機の敵機が現れ、輸送船めがけて攻撃してくるかもしれず、常に神経を失らせて見張っていないければなりません。

護衛艦に見守られている輸送船にしても、米軍の航空母艦の艦載機を主力とした機動部隊と遭遇した場合は、交戦したとしても、猛攻を受けた輸送船は、頼りにしていた味方の護衛艦とともに、爆弾の洗礼を受け、ほとんどの艦船が海底に沈められていたのです。

輸送船に乗船している船員は、航海中に、万一敵に発見されたら最後、島影ひとつなく逃げ場も

ない太平洋上のまん中で、木の葉のように揺れる母船を守るために、必死で敵機と交戦しても、次々に襲いかかってくる数十機の敵機の餌食となり、被弾した母船は沈められ、船員は勇敢に戦い戦死していたのです。

第2次大戦中軍部の命令に従い、部隊や戦争物資を満載し、果てしない海原を航海し、目的地まで無事に送り届けなければならない輸送船の任務にあたっていた船員の運命が、いかに大変であり、悲惨で可哀想であったかを、上記でも述べましたが、あまりにも惨めなので、戦時船舶史の記録を引用し、省略しながら、真相を多少記しておきたいと思います。

1942年11月4日、大阪商船の『かんべら丸』6477トン、ガダルカナル島輸送作戦に参加し、陸軍部隊390名、陸軍揚陸作業隊308名および、海軍の12糎高角砲4門と付属品、牽引車2、トラック4輛、弾薬1820箱、陸海軍糧秣4360梱、大発9隻を積み、目的地の島に上陸中に敵機38機の空襲で爆撃されて沈没。

乗船していた将兵75名、砲兵隊21名、船員4名、計100名が戦死し、船内の軍需品は何一つ持ち出せず海の藻屑となってしまったのです。

1942年12月31日、内外汽船の『琴平丸』6100トンは、糧秣、組立家屋、燃料などを積み、大晦日の日の朝アツ島目指して航海中に敵機の空襲に遭遇し、船は炎上して沈み、船員は北海湾の零下数十度もする海水に放り込まれました。

足先から冷える海水と、身に染みる寒風に見舞われ、「たすけてー」と叫んでも、救援にきてくれる船すらもなく、海中で寒さに耐えきれず、泳いでいるうちに身体は硬直し、力尽きて、一人またひとりと、息絶えて逝ったのです。この遭難で、便乗者2名、船砲隊54名、船員64名、計120名が悲運に没していますが、運よく1人だけ助かっています。

川崎汽船の『もんとりいる丸』6577トンは、1943年1月6日の午前7時頃、護衛艦もなく単独でキスカ島の東北方向160キロ付近の洋上を航海中、飛来したB17機1機の空爆を受けたので、船砲隊が必死になって交戦しましたが、交戦の甲斐もなく、残念ながら結局撃沈されまてしまいました。このとき『もんとりいる丸』に乗船していた独立歩兵隊第302大隊216名、独立工兵隊76名、野戦病院隊23名、船砲隊64名、船員93名、計472名全員が悲壮な戦死を遂げ、沈みゆく船とともに玉砕したのです。

東洋汽船の『愛洋丸』2746トンは、1943年3月1日、第51師団をニューギニア、ラエ、サラモア地区に逆上陸させる81号作戦に参加しました。旭盛丸などとともに8隻の船団を組み、陸海軍の精鋭約7300名、軍需物資約2500トンを8隻の輸送船に分乗させました。愛洋丸は3番船に配列されてラバウル基地を出撃。

2日の午前8時頃、ニューブリテン島北沖を西進中ツルブ北方沖で、B17機10機の攻撃を受け、旭盛丸が被弾し沈没。

3日の午前8時頃、ニューギニアのクレンチ岬東南東50キロ付近を航海中、大空からP38約30機、B17約25機、A20約40機と、別群のP38が22機、B26が6機、A20が20数機低空で飛来し、2群の空軍機による猛爆で、輸送船は1隻も残らず全滅し、護衛艦も3隻同じように悲壮な運命を辿ったのです。

愛洋丸には将兵252名、航空糧秣500立方米、燃料弾薬500立方米、燃料ドラム350立方米、大発5、その他軍需品を搭載していました。

愛洋丸が沈没した原因は、直撃弾4発、至近弾6発、雷撃2発の被弾を受け、機関停止で火災と浸水のため、午前11時半頃ニューギニアのクレンチ岬東南東45キロ付近で沈没し、将兵230名、船砲隊48名、船員45名、計323名が戦死したのです。

今回、51師団を逆上陸させるために、7300名の兵力を動員して戦場へ向かった輸送船団は、上陸寸前に敵機の猛攻に遭遇し、3700名におよぶ精鋭が戦死していますが、3日間にわたり、漂流中に敵機の機銃掃射を受けて戦死した将兵も大勢いたのです。

失敗に終わった第81号作戦は、護衛艦を含め、輸送船が1隻も残らず撃滅された悲運な運命に遭遇したので、「ダンピールの悲劇」と、いわれているのです。

東洋海運の『大井川丸』6494トンには1943年3月3日、第18軍司令部、第51師団、独立混成第20旅団の将兵1210名および、火炮13門、車輛18輛、大発8、軍需品2000立

方を積み、同じく81号作戦に参加し、ラエに向かって航海中、午前8時頃、敵機130機の空襲に見舞われました。本船に直撃弾6発、至近弾9発、雷撃に寄る魚雷2発を撃ち込まれ、エンジン機能不能となり、船は真つ暗闇の午後23時頃まで漂流し、ニューギニアのクレンチ岬付近で沈没しました。

遭難者は退船後、波間で漂流中に敵機の乱射する機銃掃射に直面し、生還者はわずか数人に過ぎませんでした。乗船していた将兵1100名、船砲隊51名、船員78名、計1229名が無念の思いで波に飲まれたのです。

1943年4月28日、日本郵船の『鎌倉丸』17526トンは、約2500名の便乗者と、車輛その他の軍需品多数を積み、単独で航海中、パナイ島ナソ岬西方9キロ付近で敵潜水艦に魚雷を2発撃ち込まれて沈没、遭難者は4日後に救出されましたが、便乗者が約2000名、船員176名が戦死しました。

大阪商船の『海福丸』3178トンは、1943年11月4日に単独で香港南西1キロ付近を航海中、敵潜水艦に3発の魚雷を撃ち込まれて轟沈したために、便乗していた山砲中隊29名、船砲隊13名、船員24名が戦死しましたが、生き残った船砲隊2名と、船員22名は1号艇で避難し、6日の日、南支揚江県に漂着し、中国側に逮捕されて抑留され、さらに重慶に護送されました。

重慶には1944年6月30日に到着したのですが、護送途中に3名が病死し、1名が逃亡した

ために、2名が銃殺され、残りの者は牢獄に放り込まれ、獄中で栄養失調で5名が死亡しました。

重慶の牢屋で、苦難の日々を送っていた生き残った船員は、終戦後やっと日本へ帰れる目途がつき1946年4月6日、重慶を発ち、2ヶ月後の6月7日に上海を出港し、祖国に向かい、9日の日に無事に鹿児島に到着したのですが、上海からの航海中に1名が入院したので、鹿児島に上陸したのは、お互いに助け合い、悪夢の苦闘の道とともに歩んだ疲労しきった12名だけでした。

1944年1月24日、三井船舶の『秋葉山丸』4603トン、将兵160名、雑貨、兵器、戦闘機などを積み、クエゼリン環礁に到着し、800メートルほど離れた沖合いで、荷揚げ作業を開始したのですが、作業は30日の朝まで継続されました。

荷揚げ作業中に、3回にわたる敵機の空襲を受け、午前3時半頃から第1陣15機、午前4時45分に第2陣60機、午前9時に第3次120機の爆撃で本船は沈没し、生き残った船員はクエゼリンに上陸し、軍隊とともに行軍し、2月1日に上陸してきた連合軍と激戦を交えましたが、敵の猛攻に撃滅され、日本軍は2月4日の夕方弾尽きて玉砕しました。

この激戦で船員57名が部隊とともに戦い玉砕しましたが、負傷などで力尽きた船員5名が米軍に逮捕されました。

東亜海運の『長城丸』2610トンは、1944年2月16日、単独でミンダナオ島ラモン岬東方55キロ付近を航海中、夜中のシケに見舞われていた真つ暗闇で、敵潜水艦の魚雷3発が船体に

命中し、約500名が4分後に船とともに水没し、船から脱出した約300名のうちの1人が、連絡係として筏で潮流を利用し、3日目に250キロ離れたラクム岬に着き、疲労していた体に鞭を打ち、やっとの思いでダバオに辿り着いたときは、本船遭難後16日間も経過していたので、救援隊が現場に駆けつけたときには、もうすでに手遅れで、残念ながら誰一人発見できなかったのです。この遭難で乗船していた部隊および便乗者748名、戦砲隊17名、警戒隊3名、見張員15名、船員72名、計855名が暗夜のシケが荒れ狂う洋上で玉砕したのです。

日本郵船の『崎戸丸』9245トンは、1944年2月26日、歩兵第18連隊主力、司令部の一部、29師団の各部隊3900名および、兵器、軍需品を満載し、サイパンに向かって宇品を出港し、航海中2月29日午後6時頃、沖大東島南南東220キロ付近で、機関室中央に被電し、瞬く間に大爆発を起し、翌朝（3月1日）4時頃沈没し、乗船部隊2358名、船砲隊65名、船員52名、計2475名が戦死したのです。日産汽船の『日秀丸』7785トンは、1944年7月14日、硫黄島増強部隊約700名および、戦車、臼砲、高射砲や機関銃などを積み、午後2時40分館山を出港し、硫黄島目指して航海中18日、父島北西250キロ付近で本船に2発の魚雷を撃ち込まれ、撃沈したために、部隊48名、船砲隊45名、船員3名、計96名が戦死しましたが、この日秀丸の遭難は、硫黄島防備に重大な損害を与える結果となったのです。

日本郵船の『対馬丸』6754トンは、1944年8月21日、那覇へ沖縄防衛兵力を無事に輸

送した後、無邪気な可愛い疎開児童生徒741名、教師や一般疎開者920名、船砲隊41名、船員86名を含め、1788名が乗船し、午後6時35分シケ模様の大波に揺れながら、沖繩から長崎に向かって出航しました。

しかし、22日の夜10時12分頃、トカラ列島悪口石島北西12キロ付近に差し掛かったとき、敵の潜水艦から発射された魚雷が4発撃ち込まれ、1番艙と2番艙に命中し、続いて20秒後にさらに5番艙と7番艙にも撃ち込まれたために、船体に大爆発が生じると同時に、4箇所の破孔から凄い勢いで海水が船内に流れ込み、児童生徒を救出していた教師や船員の救出作業もむなしく、船体は右舷に傾き、船首を夜空に向けたまま、午後10時23分、悲惨極まりない悲劇を残して姿を消したのです。

沖繩で遭難した対馬丸の悲劇で、疎開児童生徒682名、一般疎開者802名、船砲隊21名、船員24名、計1529名の幼い生命を含んだ尊い命が波に飲まれたのです。

大阪商船の『あらびあ丸』7398トンは、1944年10月17日、マニラ港から12隻の船団を組み、午後7時ミリーを目標して行動し、18日の午前7時頃、ルバング島北西25キロ付近まできたとき、待ち伏せしていた敵の潜水艦群に周囲から攻撃され、船体に2発の魚雷が命中し、12時28分に撃沈したために、乗船していた第20師団将兵の一部3500名のうち、1658名、船砲隊50名、船員39名、計1747名が戦死し、このほかに、海面に漂流中の6名が敵の

潜水艦に収容されて助かりました。

大連汽船の『西豊丸』4639トンは、1944年11月9日、第26師団の一部1010名の将兵と軍需品を積み、船団を組んで第3次レイテ特攻輸送作戦に参加し、レイテに向かう途中11日未明、マスバテ島の南端カドルアン岬で、敵の魚雷4隻の奇襲を受けましたが、護衛部隊の応戦で無事通過したものの、航行予定が遅れたために、オルモック湾口に到着したのが午前10時22分でした。

この時点で敵の艦載機の大群が飛来し、輸送船団目掛けて猛攻が開始され、西豊丸は爆撃で船体が真っ二つに炸裂し、レイテ島カルナンガン岬南西5キロ付近で午後1時50分頃撃沈されたのです。

このレイテ島の激戦で、海に飛び込み漂流していた人は、容赦なくバリバリ撃つ魚雷艇の掃射で、海は血に染まり、自力で泳いで助かった者は僅か数人に過ぎませんでした。

この戦場で将兵約1010名、船砲隊44名、船員86名、見張り4名、計1144名が玉砕を遂げたのです。

1945年1月4日、大阪商船の『大剛丸』5244トンは、鉄道枕木を満載し、若松から単独で南京の対岸にあたる浦口目指して出航したのですが、1月8日の午前1時頃、黄海の青島南東250キロ付近を航海中、敵の潜水艦に5発の魚雷を撃ち込まれ、船体は中央から切断されて沈み、

警戒隊14名と船員12名が戦死し、海の屍となりました。

このとき、あまり見えない暗闇で沈みゆく本船から運よく救命艇で逃げ出せたのは、船員49名のみでしたが、寒風が吹き付ける暗闇の海上を、上海目指して帆走したものの、全身びしょぬれの体を拭くタオルも着る物も何もなく、寒風にさらされ、耐えきれずガタガタ震えていた16名の船員が、凍死してしまっただけです。

残りの船員は1月12日の早朝大陸岸東付近に到着した頃、救命艇は氷の流れに取り囲まれて使用不能となっていました。が、地元から現れた中国人の道案内により集落で休んでいたとき、危険を感じたので、ジャンク船を1隻借り上げて海上への脱出を図りました。ですが、ときすでに遅く約30名の中国兵に包囲されてしまい、14日はジャンク船に軟禁されたまま、基地の本部に行されました。

ところが、16日川を溯航行中に座礁したため、中国兵は3名の見張りを残して下船したので、絶好のチャンスとばかり、17日の午前3時頃、一等運転士を指揮者として行動を起し、中国兵が寝静まっていたところを襲い、中国兵と乱闘し、小銃3挺と数発の弾薬を奪い取り、3名の中国兵を陸上に追放しました。

この争いで、残念ながら2名の船員が戦死しましたが、生き残った船員は、川の流れを利用して逃走を試みたのです。

ですが、また運悪く砂州に乗り上げてしまい、もうどうにも動きが取れない状況となってしまう

たのです。間もなく陸地には大勢の村人が集まり、およそ300名の共產軍に包囲されてしまい、逃げ場のない袋の鼠となったジャンク船上でこの様子をじっと見つめていた船員は、「もうこれまで」と、覚悟を決め、ジャンク船に火をつけ、メラメラ燃え上がるジャンク船内で、分捕った小銃で一人ずつパーン、パーンと引き金を引き、無念の思いで自決したのです。

このとき、最後に残った船員が小銃の引き金を引いたのですが、弾が中に詰まり自殺できなかったので、下船し、拳を振るって群集に向かって突進しました。しかし飲まず食わずで疲労しきっていたために力つきて捕らえられてしまいました。でも結果的に助かることになり、奇跡的に終戦後1946年5月2日の日に、無事に懐かしい祖国の地を踏んだのです。

第2次大戦で人並み以上に偉大な業績を残した船員さんの苦労話はあまり聞きませんが、参考までに、第2次大戦中に海の藻屑と消えた船舶や、船とともに尊い命を落とした可哀想な船員、戦地に向かう部隊や、捕虜など大勢の犠牲者の人数や、会社社名などを、参考までに記しておきます。

船舶社数

206社

撃沈船舶数

2623隻

総トン数(約)

910万9988トン

船員

3万4985名戦死

軍人

12万4394名戦死

邦人	1万5862	名死亡
船客	1万3591	名死亡
患者	1112	名死亡
インド兵と労務者	5237	名死亡
労務者（国籍不明）	4552	名死亡
慰安婦	26	名死亡
ドイツ人	20	名死亡
捕虜（国籍不明）	845	名死亡
現地邦人	139	名死亡
人夫	15	名死亡
遺体	2319	体
遺骨	2353	柱
軍馬	420	頭死亡
軍犬	120	匹死亡
敵に逮捕された邦人	12	名

参考までに、第2次大戦中に撃沈された各船舶社の撃沈された船舶の隻数ならびに、トン数を含めた明細を記しておきます。

第	船舶社名	隻数	総トン数
1	日本郵船	183	100万6953
2	大阪商船	152	79万6283
3	拿捕船	138	32万3878
4	日本水産	87	24万8411
5	東亜海運	85	24万7968
6	山下汽船	74	39万9492
7	三井船舶	74	32万4206
8	大連汽船	67	21万9780
9	川崎汽船	62	26万2065
10	日産汽船	50	21万7987
11	日本製鉄	43	2万4127
12	飯野海運	42	20万0598

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30
日本海汽船	松岡汽船	日本海運	極洋捕鯨	興国汽船	乾汽船	明治海運	日本油槽船	鐵道省	共栄タンカー	西海洋船	石原汽船	大同海運	大洋興業	大光商船	宮地汽船
1 2	1 3	1 3	1 3	1 4	1 4	1 5	1 6	1 6	1 7	1 8	1 8	1 8	1 9	1 9	2 0
3 8、 0 6 2	4 万 9 7 6 5	8 万 3 5 6 8	3 万 2 7 6 8	5 万 4 0 6 8	5 万 2 1 6 4	6 万 3 3 4 7	3 万 9 4 3 8	4 万 7 7 2 6	1 万 5 5 2 8	1 万 0 4 5 5	1 0 万 6 3 9 5	7 万 5 7 3 2	5 万 7 9 2 3	1 万 3 3 0 8	6 万 9 2 8 3

29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14
南洋海運	鶴丸汽船	岡田商船	栃木汽船	日本近海汽船	西日本汽船	東和汽船	葉葉タンカー	中村汽船	朝鮮郵船	西大洋漁業	日東汽船	辰馬汽船	三光汽船	栗林商店	南方油槽船
2 1	2 1	2 1	2 1	2 2	2 2	2 3	2 3	2 3	2 4	3 5	3 6	3 6	3 8	4 2	4 2
1 1 万 3 3 5 8	3 万 0 5 5 0	7 万 4 9 7 9	5 万 4 3 7 6	1 万 7 7 1 5	1 万 7 7 1 5	5 万 5 6 9 4	1 万 9 4 2 0	5 万 0 9 4 9	5 万 2 4 4 7	7 万 0 1 4 4	2 0 万 6 8 7 2	1 4 万 1 3 5 8	3 万 5 5 7 7	1 3 万 8 7 8 4	3 4 万 1 1 9 4

77	76	75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62
福洋汽船	広南汽船	広海商事	鎬大洋船	丸辰海運	橋本汽船	北海道炭鉦汽船	南日本汽船	玉井商船	北日本汽船	満洲海運	中川汽船	尼崎汽船	武庫汽船	九州郵便船	図南汽船
7	7	7	7	7	7	7	8	8	8	8	8	8	8	8	8
2 万 1 0 9 4	1 万 1 1 5 7	2 万 6 5 3 3	3 万 1 6 7 7	6 6 8 2	2 万 6 1 4 9	2 万 5 5 1 3	1 万 2 1 4 6	2 万 4 5 1 1	1 万 8 4 2 5	1 万 1 3 0 8	1 万 2 5 2 5	7 3 8 1	1 万 9 9 7 9	4 9 8 1	4 1 0 5

61	50	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46
近海油槽船	日本海洋漁業	五洋商船	名村汽船	巴組汽船	管谷汽船	入馬汽船	政改輪船	東海汽船	阿波国共同	日之出汽船	日魯漁業	浜根汽船	宇和島運輸	東邦水産	国際汽船
8	8	8	9	9	9	9	9	1 0	1 0	1 0	1 0	1 0	1 1	1 1	1 1
7 2 2 0	1 万 8 4 2 2	3 万 1 5 9 1	1 万 6 3 1 0	2 万 3 0 3 7	2 万 3 2 8 3	4 万 4 0 6 1	1 万 7 4 7 1	1 万 3 9 5 6	1 万 2 4 7 1	1 万 8 7 9 0	1 万 9 9 3 2	2 万 8 9 2 5	1 万 0 0 0 2	9 5 1 6	6 万 9 9 6 7 1

109	108	107	106	105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94
農林省	近海油槽船	玉井商船	広海汽船	京仁商船	馬場商事	土佐商船	昭和タンカー	大東商船	嶋谷汽船	原田汽船	東洋サルベージ	原商事	日東鋳業	白洋汽船	会陽汽船
3	3	3	3	3	3	4	4	4	4	4	4	4	4	4	4
2 6 4 4	2 8 9 2	1 万 6 7 6 9	2 万 0 0 6 9	7 4 8	1 万 1 0 8 5	3 4 2 9	2 万 4 1 6 7	8 2 9 2	1 万 0 0 3 9	2 万 1 7 0 1	4 5 6 2	1 万 6 1 1 6	2 7 1 9	2 万 2 2 1 4	2 万 0 6 1 5

93	92	91	90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78
浅野物産	太平汽船	巴組汽船	日の丸汽船	甲南汽船	大図汽船	金森商船	大光汽船	日下部汽船	三共海運	中央汽船	内外汽船	藤山海運	会陽汽船	正福汽船	沢山汽船
5	5	5	5	5	5	5	5	5	6	6	7	7	7	7	7
3 万 5 2 5 1	1 万 9 4 4 5	9 9 2 4	1 万 6 8 0 3	1 万 0 6 8 2	9 2 2 3	2 1 9 5	1 万 1 6 9 6	1 万 0 7 7 7	3 6 3 6	3 2 5 6	3 万 4 4 2 2	5 3 8 0	1 万 2 1 5 9	8 2 9 0	1 万 3 5 4 3

141 140 139 138 137 136 135 134 133 132 131 130 129 128 127 126

国洋汽船
坂本商事
太平洋汽船
宮城県
東亜汽船
アルコール輸送
中華輪船
開南汽船
撮洋商船
出光興産
海運省
日東鉦業汽船
益田合名
中国運航
太平洋漁業
近海池槽船

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

1
万
0
5
3
6
3
4
0
4
5
6
8
2
9
4
1
2
9
1
0
3
9
1
3
7
8
2
9
3
0
5
1
5
6
9
1
9
5
8
4
2
8
9
1
9
5
8
5
8
2
2
6

125 124 123 122 121 120 119 118 117 116 115 114 113 112 111 110

玉井商事
共同企業
日の丸航運
山陽燃料汽船
共同企業
日本石油
北日本汽船
小谷本之助
興運汽船
日本高周波重工
高知県
都汽船
南洋貿易
木原商船
甘柏汽船
神戸栈橋

1 1 1 2 2 2 2 2 2 2 2 2 3 3 3

5
8
7
2
6
0
4
2
8
5
2
1
2
8
0
3
万
1
1
0
7
1
4
3
8
4
2
8
6
4
5
3
8
4
4
1
1
4
4
1
0
7
2
1
9
8
2
1
6
5
8
1
万
0
2
7
9
3
0
7
3
1
万
6
1
4
9

173 172 171 170 169 168 167 166 165 164 163 162 161 160 159 158

永田定実 陸軍省 住徳海運 丸辰汽船 山九運輸 江口汽船 共同企業 東光商事 鹿兒島汽船 関口汽船 台湾総統府 利通公司 立石信吉 大家商事 松本正一 通信省

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

2 8 0 8 1 6 0 4 9 8 2 0 3 9 7 7 3 5 0 6 8 9 2 2 8 7 6 1 8 8 8 1 5 2 4 1 8 3 4 3 3 4 8 0 6 5 1 3 4 3 3 3 4 1 0 6 2 3 4 7

157 156 155 154 153 152 151 150 149 148 147 146 145 144 143 142

東京都 岡崎本店 石原汽船 東洋産業 元山運輸 成宮汽船 朝鮮総統府 瑞光汽船 貝島炭鉱 台湾海運 宇部興産 九辰海運 木村健商店 馬場汽船 大岩徳次郎 高知県汽船

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

6 0 0 2 1 8 3 3 8 3 6 0 2 9 0 2 2 5 9 2 8 5 7 7 5 2 1 8 7 3 9 9 8 3 0 2 3 7 8 7 5 9 9 4 9 9

205 204 203 202 201 200 199 198 197 196 195 194 193 192 191 190

産業設備団
大岩勇
宗像汽船
共立海運
南満州鉄道
浜川商店
波止岡汽船部
黒姫汽船
日神汽船
興亜海運
摂津商船
鍵富正作
高千穂商船
興亜汽船
犬上商船
塩山商会

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

5
6
0
0
0
5
0
9
8
7
7
5
8
2
3
3
2
5
2
0
3
6
9
7
4
6
3
7
7
3
6
2
3
2
9
1
7
3
7
0
7
2
5
7
2
2
8
6
2
2
5
4
7

189 188 187 186 185 184 183 182 181 180 179 178 177 176 175 174

三和汽船
大成
大和汽船
大倉徳次郎
酒井商店
三信汽船
林兼商店
近海汽船
沢山汽船
電通省
大真商店
大湖汽船
遼東海運
植田猪吉
原商船
蜜紹商船

1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1 1

8
7
3
5
4
5
3
5
8
0
7
8
0
3
3
6
4
5
2
6
0
5
1
2
1
5
1
2
0
0
3
1
2
2
6
9
1
0
9
2
2
0
1
8
8
7
3
3
0
7

206 大西商店 1 226
その他

1	引揚げ船		明細不明
2	引揚げ船	1000トン	社名船名不明
3	引揚げ船	800トン	社名船名不明
4	宝辰丸	1000トン	社名不明
5	福星丸	760トン	社名不明
6	宝嶺丸	1600トン	社名不明
7	泉興丸	300トン	社名不明
8	#2鳳丸	302トン	社名不明

タイ近海で沈められた輸送船

日本の輸送船は、タイのアンダマン海に面したプーケット島や、シヤム湾（現タイ湾）でも敵の攻撃を受けて14隻ほど沈められています。

アメリカ、イギリスに宣戦布告（1942年1月24日）した日本の味方だった同盟国タイも、

日本本土と同じように、連合軍による、日本軍の海上補給ルートを封鎖するために、アンダマン海および、タイ湾の近海にも多数の機雷がばらまかれていましたし、空襲や潜水艦によって撃沈された輸送船もあったのです。

ですが、当時機雷が波間に浮いていたことや、タイでも日本の輸送船が撃沈されていたことは、事実が隠されていたので、タイ人ですらほとんど誰も知らなかったのです。

タイで撃沈された日本船は、主にタイ湾周辺のソンクラ、パッタニー、チュムポーン、スラータニー、コ・シーチャン（シーチャン島）、工事中だったバンコク港（現クローン・トリー港）、プーケット島などで14隻撃沈されています。

アンダマン海に面したプーケット島以外は、主にタイ湾で敵の潜水艦または、空軍機の空襲によって撃沈されています。撃沈された輸送船は14隻におよび、乗船者の行方不明を含めて、224名が船とともに運命をともにし、戦死しているのです。

タイで撃沈された14隻の輸送船の船名、トン数、および撃沈地の明細は下記の通りです。

1 南洋海運の『びるま丸』 4585トン

1942（昭和17）年6月12日 0540時頃

北緯10・08／東緯102・34

タイ湾のフコク島西方150キロ付近で被雷し、6分後に沈没、船員3名戦死。

2 三井船舶の『荒尾山丸』6866トン

1945（昭和20）年4月6日 0100時頃

北緯09・18／東緯102・50

タイ湾のパンジャン島西方50キロ付近で左右両舷に

敵潜水艦の魚雷を撃ち込まれて轟沈。船員を含めて130名が乗船していましたが、30余名が船と運命とともにし、残りの者は3組に分かれ、筏などで漂流し、ある者は漁船に助けられましたでしたが、昭南島（シンガポール）に3名、西貢に6名、バンコクに1名辿り着き、この他に、5名が助かり、あとの85名は行方不明となったのです。

3 日本郵船の『豊橋丸』7031トン

1942（昭和17）年6月4日 0335時頃

北緯07・14／東緯98・06

アンダマン海に面した南タイのプーケット島南西72キロ付近で被弾し、0400頃沈没、船砲隊16名、船員1名戦死。

4 元山運輸の『#1東曹丸』2922トン

1945（昭和19）年9月2日 2200時頃

北緯07・57－東緯98・49

アンダマン海に面した南タイのプーケット島東方7キロ付近で停泊中に被弾、22

25時頃沈没。備砲隊1名、船員4名戦死。

5 拿捕船の『スマトラ丸』984トン

1944（昭和19）年10月28日 0940時頃

アンダマン海に面した南タイのプーケット島在港中に敵潜水艦の電撃を受けて沈没。

6 岡田商船の『開南丸』1130トン

1944（昭和19）年12月10日 1027時頃

アンダマン海に面した南タイのプーケット島在港中に電撃を受け、魚雷2発が船体に命中し沈没。船員8名を含めて28名が戦死。

7 拿捕船の『越南丸』2156トン

1945（昭和20）年5月29日

北緯10・30／東緯99・24

タイ湾に面した南タイのチュムボーン県東方20キロ付近で触電し沈没。

8 逢葉タンカーの『高砂丸』1117トン

1945（昭和20）年4月28日
北緯06・48／東緯101・37

タイ湾に面した南タイのパッタニー県東方47キロ付近で被電し沈没。
戦砲隊12名、船員14名戦死。

9 飯野海運の『新東邦丸』10238トン

1945（昭和20）年6月15日 1500時頃

タイ湾に面した南タイのスラターニー県サムイ島の南西岸で、B24機の空襲に遭遇し、油層に直撃弾を被り沈没。船員3名戦死。

10 南方油槽船の『#5南明丸』834トン

1945（昭和20）年7月10日 0500時頃

北緯09・38／東緯101・30

タイ湾に面した南タイのスラターニー県サムイ島東方150キロ付近で被雷し沈没。

11 東洋汽船の『寿洋丸』5457トン

1944（昭和19）年3月7日 0250時頃

タイ湾に面した東海岸のチョンブリー県のコ・シーチャン（シーチャン島）で空

12 襲を受け、9日1620時頃沈没。 船員3名戦死。

拿捕船の『九龍丸』1339トン

1945（昭和20）年2月24日

バンコク港内（現クローン・トイ港）で空襲を受け被弾し擱座。船員1名戦死。

13 日本郵船の『秋田丸』3817トン

1942（昭和17）年1月10日 1721時頃

北緯07・35／東緯102・50

タイ湾に面した南タイのソンクラーク県東北245キロで、機関室に被弾し、1800時頃沈没。乗船者は救命艇2隻で脱出し、無事に助かったが、船員3名が戦死。

14 日本郵船の『金鈴丸』867トン

1945（昭和20）年5月6日

北緯08・15／東緯102・00

タイ湾に面した南タイのソンクラーク県東北200キロ付近で被電し沈没。船員20名戦死。

以上がタイで沈められた輸送船の明細です。このようにいろんな資料から、第2次大戦中に沈められた輸送船の細かなデータを出してみました。ですが、未だに資料不足の部分もあり、多少のミスがあるかもしれませんが、その点はお許し願います。

第2次大戦で本船と運命をともし、戦死した船員だけでも、約3万5000名になりますし、航海中敵の猛攻に遭遇し、上陸前に戦わずして船舶とともに散った将兵は、なんと約12万5000名となり、全員で約20万名の霊が無念の気持ちで海底に眠っているのです。

この数字は、著者 駒宮真一郎氏の『戦時船舶史』に掲載されていた、輸送船2263隻のみのデータ进行分析したものです。

上記以外のその他の資料によりますと、戦時中に沈没した1万トン級以上の船舶は、79隻で、90万トンにあたり、輸送船の撃沈されたトン数は、推測600万トンである、と記載されています。

なお、現在チャンマイ★チェンマイ？★で村人と必死になって自然を守ろうと努力している「Link・森と水と人をつなぐ会」の木村茂氏の『アジア太平洋戦争海外戦没者の遺骨収集事業』—その経緯と問題点—の内容の一部から引用しますと、日本海および外地で撃沈された艦船、船舶および戦没者は下記の通りになりますが、

日本海 970隻 約5万9000名 遺骨収集 2747柱

外地 2297隻 約30万名 遺骨収集 3856柱

合計 3267隻 約35万9000名 遺骨収集 6603柱

戦争だとはいえ、お国のために狩りだされ、輸送船団を組んで戦った35万9000人におよぶ秘密にされていた無名戦士の尊い大事な生命が、今もなお海底で永遠に眠っているのです。

「海ゆかば みづく屍 山ゆかば 草むす屍 大君の へにこそしなめ 省みはせじ」

赤紙一枚で召集された将兵は、行きたくもない戦場で戦い第2次大戦では約340万人の将兵軍属および官民が戦亡しています。

このうち軍隊の死亡数は、陸軍1439101人、海軍419710人で、合計1858811人になり、戦時に家族に遺骨が届けられたのは（空の木箱だけでも含め）93万1730柱でしたが、戦後海外で戦死した将兵の亡骸を戦友会の団体、個人、および厚生省などの手によって遺骨収集がなされ、29万3370柱が祖国に戻っていますので、集計しますと、122万5100柱になります。

しかし、戦場と化した中国大陆や東南アジアの密林ならびに洋々たる太平洋上の諸島で、祖国に帰れず家族のことを思い、散って逝ったおおよそ1340570人におよぶ尊い霊が、未だに荒れ果てた荒野や海底で眠っているのです。

敗戦後すでに66年の歳月が経過していますが、戦場の跡には日本の国家に見捨てられたおよそ130万人の将兵の屍が荒野で雨ざらし日ざらにされたまま無念の思いで眠っているのです。

日本の国民を勝手に召集し、海外の戦場に出兵させたのは、当時の軍国主義だった大日本帝国の国家だったかもしれません。

時代の変化とともに国家の方針が変わったとしても、日本で一時問題となった、日本のシンボルとなる日の丸の国旗が示すように、日本の国家はどう間違っても誇り高き立派な日本の国家なのです。

ですから国家の命令で、日本の国民を戦士として海外の戦場に出兵させた責任は、将兵の生死にかかわらず、外地に眠っている尊い大事な霊も祖国に連れ戻さなければならぬ責任があるはずで

す。

大日本帝国は海外戦没者の取り扱いについて、日露戦争が勃発した時点（1904年5月10日）で、次のような「戦場掃除及戦死埋葬規則」が制定されているのです。この規定に基づきますと、

「帝国軍隊所属者ノ死体ハ各別ニ火葬シ其遺骨ヲ内地ニ還送スヘシ但シ場合ニ依リ遺髪ヲ還送シ遺骨ハ之ヲ戦場ニ仮葬スルコトヲ得る」（第9条）、

「前条還送ノ遺骨若ハ遺髪ハ陸軍埋葬規則第6条ニ基ヅキ内地ノ陸軍埋葬地ニ葬ルヲ例トス但シ

遺族ヨリ其ノ引受ヲ願フトキハ之許スコトヲ得、前条仮葬ノ遺骨モ他日之ヲ内地ノ陸軍埋葬地に改葬地ニ改葬スヘキモノトス」（第十条）

と規定されています。ですが、理由が何であれ、残念ながら守られていないのが実情ですし、これが現政府の日本の素顔です。ついでの参考までに、第2次大戦中に戦没した陸海軍および官民の明細を記しておきます。

死亡行方不明	身体障害、痲疾	計（人）
陸軍	143万9101	8万5620
海軍	41万9710	8895
官民	65万8595	1
合計	251万7406人	9万4515人

（1）陸海軍は軍属を含む

（2）官民の死亡数は、敗戦後満州中国で死亡した170,100人、沖縄市民165,000人及び内地の行方不明24,010人を含む

（3）陸軍の不具、痲疾94,515人のうち約20,000人は敗戦後死亡したものと推測されています。

なお、参考までに第2次世界大戦中の最大兵力、推定死傷者及び直接戦費の明細を記しておきます。

国名	最大兵力	死者 および行方不明	負傷	直接戦費 (単位／100万ドル)
連合国				
オーストラリア	680,000	37,637	25,685	12,544
ベルギー	800,000	22,651	14,500	7,905
ブラジル	200,000	975	4,222	-
カナダ	780,000	42,666	53,145	25,131
中国	5,000,000	1,500,000	2,000,000	51,348
チェコスロバキア	180,000	6,683	8,017	-
デンマーク	15,000	6,400	-	3,000
フランス	5,000,000	245,000	390,000	139,091
ギリシャ	414,000	17,024	47,290	-
インド	2,150,000	48,674	65,174	-
オランダ	500,000	230,177	-	12,032
ニュージーランド	157,000	10,764	19,345	3,200

ノルウェー	25,000	1,598	364	1,240
ポーランド	1,000,000	550,000	320,000	-
南アフリカ	140,000	9,500	15,000	2,692
ソ連	12,500,000	6,115,000	14,012,000	116,266
イギリス	4,683,600	403,195	369,267	62,233
アメリカ	16,112,566	545,108	670,846	312,803
ユーゴスラビア	500,000	305,000	425,000	-
計	500,836,566	10,098,052	18,440,026	755,488

枢軸国				
オーストリア	800,000	220,000	300,000	-
ブルガリア	450,000	18,500	19,000	-
フィンランド	250,000	76,893	265,420	
ドイツ	9,200,000	3,250,000	7,250,000	265,420
ハンガリー	350,000	147,435	89,313	-

イタリア	4,000,000	380,000	225,000	26,440
日本	6,095,000	2,565,678	326,000	265,420
ルーマニア	600,000	73,000	49,000	-

計	21,581,566	6,731,706	8,258,313	343,450
総計	72,581,566	16,829,758	26,698,378	1,098,938

(資料 Collier, s Encyclopedia vol.23 1963より)

さて、はじめに記しましたように、輸送船とともに、悲壮な戦死を遂げた船員の悲惨極まりない運命は、戦時中だけでなく、戦争が終わった当初も、まだ太平洋上にボカボカ浮いていた無数の機雷を避けながら航海し、海外に取り残されていたおよそ700万人に上る同胞の後始末役の救援義務が残されていたのです。

敗戦当初の艦船及び船舶の姿

1945年8月15日、日本はポツダム宣言を受諾し、惨めな思いで連合軍に無条件降伏したわ

けですが、敗戦当初、海国日本に残されたまだ使用できそうな海軍の生き残った艦艇は、破損した傷だらけのものが多く、補修(約半年かかる)してからでないと、使用できない惨憺たる状態でした。参考までに開戦当初の日本海軍保有艦船及び敗戦後の残艦の明細を記しておきます。

開戦当初の日本海軍保有艦船

艦種	隻数	トン数
戦艦	10	301,400
航空母艦	10	152,970
重巡洋艦	18	158,800
軽巡洋艦	20	98,855
駆逐艦	112	165,868
潜水艦	65	97,900
その他	156	490,384
合計	391	1,466,177

開戦後艦船建造数

艦種	隻数	トン数
戦艦	2	128,000
航空母艦	4	77,860
重巡洋艦	-	-
軽巡洋艦	4	42,700
駆逐艦	12	27,120
潜水艦	29	43,554
その他	37	57,225
合計	88	375,459

上記の他に、

既に整備完了した特別艦船	522隻	約115万トン
整備作業中の特設艦船	41隻	約17万トン
今後改装整備をする特設艦船	180隻	約29万トン
特設艦船としない微備船	-	約20万トン
合計	-	約180万トン

海軍艦艇喪失隻数 (第二復員局調査による)

種類	喪失	敗戦時残艦
戦艦	8	4
航空母艦	19	6
巡洋艦	36	11
水上飛母艦		
潜水母艦及び敷設艦	11	6
駆逐艦	133	41
潜水艦	131	59
海防艦	72	100
小計	410	308
その他の小艦艇	272	308
合計	682	535

本土空爆及び艦砲射撃の人的被害

区 分	死 亡	負 傷	行方不明
空爆の被害	198,961	271,617	8,064
7 月末数字	188,310	256,969	7,976
原爆の被害	109,328	78,488	15,917
艦砲射撃の被害	1,739	1,497	29
総 計	310,028	351,602	24,010
この他に全国の罹災者1,421,290人			

敗戦当初の軍事力 1945年8月15日、敗戦時の日本軍の総兵力は、次のようになりますが、本土防衛隊が（四国、九州、北海道、本州）陸軍約240万人、海軍約130万人でした。

海外で守備にあたっていた外地部隊が、陸軍約310万人、海軍約40万人、この他に、現地で活躍していた在留邦人が約310万人もいましたので、海外からの引揚げが、軍人軍属邦人老若男女を含めて、約700万人もの人たちが、外地の敗戦下の収容所内部で様々なデマが飛び交う不安な気持ちにかられながら、日本からの帰還船が迎えに来る日を、首を長くして待ち詫びていました。

日本の政府は、外地に取り残されていた日本人全員を、速やかに、しかも無事に、一日も早く祖国に連れ戻さなければならない責任を背負わされていたのです。ですが、残念ながら日本の船舶

は、ほとんどが戦時中に海底の藻屑として消え去ってしまいましたので、大小合わせても101隻ほどしかなく、しかもすぐ使用できそうな船舶はほんの数隻しかない惨めなものでした。

窮地に追い込まれていた日本は、アメリカの好意に泣きつき、約200隻の船舶を貸与されて、復員船の手はずを決めたのです。

当時、アメリカへ船舶を借りに行った船員は、港に船舶が一杯停泊していたのを目を見張り、「アメリカにはまだこんなに沢山の船があったのか」と、びっくりしたそうです。

したがって、海外の引揚げは、手近な朝鮮、台湾、沖縄周辺から開始されましたが、復員に関した内容は各地の部隊の報告を基準に、中国軍管区、東南アジア軍管区、濠軍管区、米軍管区、と、地域別に大きく4軍管区に分けられ、終戦の年の9月初旬より、現地からの引揚げが実施されたのです。

外地部隊の各軍管区に分けられた明細は左記の通りです。

（1）『中国軍管区』

満洲を除く中国、台湾、北緯16度以北の仏印（但し、国民政府管理下に満州から引揚げた者を含む）

約3,116,000名

(2) 『東南アジア軍管区』

ビルマ、アンダマン、ニコバル諸島、タイ、北緯16度以南仏印、マレー、スマトラ、ジャワ、小スンダ諸島、セラム諸島、アンボン、アル、タニンパル諸島、セレベス、ハルマヘラ、カイ、蘭領ニューギニア、香港
約 745,000 名

(3) 『豪軍管区』

ボルネオ、英領ニューギニア、ビスマーク諸島、ソロモン諸島
約 139,000 名

(4) 『米軍管区』

旧日本委任統治諸島、小笠原諸島、比島その他太平洋諸島、南朝鮮
約 991,000 名

終戦当時の各部隊の所在地及び部隊名並びに陸海軍の復員数
地域及び主要別部隊名

	陸軍	海軍	計
1 『朝鮮』	290,000	29,431	319,431
第17方面軍			

鎮海警備府部隊

2 『中国』	1,049,700	63,755	1,113,455
--------	-----------	--------	-----------

支那派遣軍

支那方面艦隊

3 『台湾』	128,080	46,713	174,793
--------	---------	--------	---------

第10方面軍

高雄警備府部隊

4 『南西諸島』	40,882	9,776	50,658
----------	--------	-------	--------

第10方面軍

高雄警備部隊

5 『比島』	97,300	36,151	133,451
--------	--------	--------	---------

第14方面軍南西方面艦隊

6 『仏印』	90,370	8,914	99,284
--------	--------	-------	--------

第38軍 第11特根

第1南遣艦隊

7 『タイ』	106,000	3,051	109,051
--------	---------	-------	---------

第18方面軍			
第1南遣艦隊			
8 『ビルマ』	70,350	1,372	71,722
ビルマ方面軍 第13特根			
第1南遣艦隊			
9 『マレー、アンダマン、ニコバル』	95,581	36,473	132,064
第7方面軍 第29軍 第10、第12、第15特根			
第1南遣艦隊			
10 『スマトラ』	59,480	4,984	64,464
第7方面軍 第25軍、第9根			
第1南遣艦隊			
11 『ジャワ、小スタン』	57,860	19,418	77,278
第7方面軍、第16軍第21特根、第2遣艦隊			
12 『ボルネオ』	24,580	10,879	35,459
第ハ方面軍 第37軍 第22特根			

第2南遣艦隊			
13 『濠北西部ニューギニア』	87,700	31,077	118,777
第2軍、第23、25特根			
第2南遣艦隊			
14 『東部ニューギニア』	12,100	1,200	13,300
第18軍、第27特根第2南遣艦隊			
15 『ビスマーク』	57,530	30,854	88,284
第8方面軍、第37特根第2南東方面艦隊			
16 『ソロモン』	12,330	16,729	29,059
第17軍、第8艦隊			
17 『中部太平洋』	48,644	44,178	92,722
(パラオを含む)			
第31軍、第14師団第30根、第4艦隊			
18 『小笠原諸島』	14,996	7,735	22,731
小笠原兵団			

合 計	2,343,483	4,026,690	2,746,073
-----	-----------	-----------	-----------

右記の部隊の内南方作業隊として現地に残され、強制労働を強いられ、1947年11月末、無事に日本へ帰還した作業隊員数

ビルマ	35,000 名
タイ	9,000 名
マレー	22,000 名
シンガポール	24,200 名
蘭 印	14,367 名

合 計	104,567 名
-----	-----------

ソ連シベリア方面からの陸海軍及び邦人復員数は下記の通りです。

地域	陸軍	海軍	邦人	計
シベリア	448,135	4,237	17,984	470,356
北 朝	25,151	236	297,159	322,546

樺太、千島	15,958	26	276,606	292,590
大 連	10,449	468	215,037	235,944

合 計	499,693	4,567	806,786	1,311,446
-----	---------	-------	---------	-----------

上記のように各地域からの引揚げは、310万名の邦人も含めて1945年9月初旬頃から開始されました。

中国大陸およびソ連では様々な難題が生じましたが、中国からの引き揚げは、1953年1月31日から開始され、興安丸、高砂丸などで9368名が舞鶴港に入港し、ソ連からは、1956年12月26日の最後の帰還船となった興安丸で1025名が舞鶴港に到着し、ソ連から最後の引き揚げ船となりました。

しかし、ソ連に連行された一部の将兵、それに中国大陸にも、中国内の国府軍と中共軍の内戦に巻き込まれて帰還できなかった気の毒な数万人の邦人が取り残されていたのです。

大日本帝国陸海軍に召集され、部隊、軍需物資を満載し、輸送船団を組み、荒波を蹴立てて第一線へ向かった船員は、将兵とともに戦い、果てしない太平洋上で敵の猛攻に遭遇し、逃げ場もなく

船舶とともに悲壮な玉砕を遂げていたのです。

船員は戦いが終わり、ヤレヤレ、と思う余裕すらなく、直ちに海外の島々の数ヶ所で島流しにされたような餓死寸前の将兵に、一刻も速く食糧や医薬品を届け、救出し、無事に内地に連れ戻さなければならぬ大役をおびていたのです。

戦時中お国のために尽くした、約3万5000名におよぶ（もっと多いかと思うが）大切な尊い命、霊が、今もなお優しい家族が待ち侘びている元へ帰ることもなく、拡大な印度洋上および太平洋上の海底で静かに無言で眠っているのです。

悲惨な戦争がもたらした悲劇の主人公、いまだに懐かしい故郷へも両親の元へも永遠に帰れない可哀想な船員さんに、両手を合わせ、「ご苦勞様でした、お疲れ様でした、どうか安らかに眠ってくださいますように……このような悲惨な戦争はもう二度と起こしません」と、大粒の涙を溜めて冥福を祈るのみです。

合掌

第4章 右目の運命

はじめに記したように、僕の大きな瞳に危険信号が発せられたのは4年ほど前（2007年）の春ごろからでした。

はじめのうちは、時々目が霞む程度でしたので、視力が落ちただ、と思い、別に気にもしていませんでした。

ですが、そのうちに、外出するたびに周囲の人々や街角の建物がうつすらとした美しい霧に包まれていて、まるでタイ北部のメーホーンソーンの、霧の町にしているような光景に接し、いつも「綺麗な風景だなー」と思い、見とれていた僕でした。

僕にとっては外の景色が何でもとても綺麗に見えたので、まさか目に異常が生じているのだ、早く病院へ行って目の検査をしてもらったほうがいいのだ、といったようなことは、毛頭考えたこともありませんでした。

しかし、そのうちに視界の光線が逆光になったりした場合に、景色や、人々の顔が黒いシルエットのように見えるようになり、人様の顔などもかなり近くまでにならないと、顔が黒くて誰なのか

わからなくなり、遠くのほうから誰かに挨拶されたとしても、誰だか見分けがつかなかったり、または、見えなかったりするようになってきたのです。

しかもそのうちに、目の周りに広角レンズに、レンズフードをつけたときのように、黒い丸い輪ができるようになったので、はじめてこれはいけない、と思い、ラーマ4世通りのルムピニー公園の近くにあるチュラー総合病院へ駆け込んだのです。

ちょうど雨期明けの2007年の10月ごろでしたが、チュラー病院で、眼科専門医の背のすらつとした美人のスパワディー・ウアチョンマニー先生にはじめて会い、目の診断をもらった結果、「僕の目はター・トーオカチョック（白内障）と、ター・トーオヒン（緑内障）がふたつ重なっている。白内障は治療すればすぐ治るけど、緑内障は遺伝性などもあり、一生治りません」と宣言され、暫く目の様子を診てもらうことになりました。まず、ひと月に一度、眼の診断をしてもらうことになりました。僕にとって白内障だ、緑内障だ、と、目の病状をとやかくいわれても、はじめての経験でピンとこなかったので、我が家に戻ってから、早速辞書を開いて調べてみました。

『白内障』とは、

眼の水晶体が灰白色に変じてにじる病気。主として老人性のもの。また先天性、糖尿病性、外傷性、赤外線による職業病性のものなどがある。原爆被爆者に見られたもの

を原爆白内障という。「しろそこひ」

『緑内障』とは、

眼球の圧力（眼圧）が異常に亢進した状態。種々の原因があるが、過労★過労？★★、睡眠不足、感動などが誘因となる。霧視、虹輪視、（灯火の周囲に虹のような輪を見る）

眼痛、頭痛があり重病では失明する。視力を失った瞳化の色が緑色に見えるので、この名がある。「あおそこひ」

辞書の説明を読んで、なるほどそうか、と領け、思いあたる点を自分なりにあげてみると、まず、水泳教室が頭に浮かびました。僕がタイの子供たちに、1人1バートで濁った蛭がいたりするバーンカップ（現スクムヴィツ地区）の池で水泳を教えはじめたのが17歳（1948年）のときでした。その頃のバーンコーク（現在はクルンテープ・マハーナコーン）には、今のよう立派なアパートや、豪華なコンドミニアムがあるわけでもなく、勿論きちんと整備された綺麗なプールつきのアパートなどどこにもありませんでした。

ですから何も見えない池で教えていたわけですが、水泳は上半身裸で皮膚丸出しですし、しかも炎天下で赤外線をまともに受けて教えていますし、それに水泳教室は今もまだ続いていますので、

長年（約63年）貯蓄した、ジリジリ照りつける太陽の熱が皮膚に染込み、目にも影響を与えたひとつの原因になるかもしれません。

もうひとつ考えられることは、毎晩遅くまで起きていて、本を読んだり、資料集めをしたり、寝るまでソフトと睨めっこしながら原稿をタイプしたりしていますので、視力を使いすぎている可能性があるかもしれません。

自分で自分の目の病状の原因を追求してみると、歳のせいにするよりも、このふたつが大きな原因になるのではないかと思います。要は、未だに一度も目が痛くなったり、頭が痛くなったりしたことがなかったので、ぜんぜん気づかずに過ごしていたことになりますが、スパワディー先生が一番心配していることは、やはり目が痛くなったり、頭が痛くなったりしないか、ということでした。

病院では、一応念のために糖尿病、その他の病状はないか、と血液検査もされましたが、健康状態は異常なし、と診断され、スパワディー先生から「頭痛や目も痛まない、目が悪いのに片目で写真撮っている、この歳でこんなに元気な人は珍しい。目の手術ですが、早めに白内障の手術をしたほうがいいです」と、アドバイスされたのは、2008年の5月ごろでした。

しかし、目の手術をしてから約1〜2ヶ月間、目に水が入らないようにしなければいけない、重たい物を持つな、運動もしてはいけない、常に安静を守り、外出するときはサングラスをかけるように、と、いろんな注意事項がありました。

僕としては丁度忙しいときでしたし、そんなに長い間休めなかったたので、僕の希望で目の手術を10月まで延ばしてもらうことにしました。

さて、左目の手術の前に、僕の右目のことについて少し記しておかなければならないことがあります。そうでないと、あとで「なぜ、どうして」といった、疑問が湧くかもしれませんので……。

僕がソーイ・サップのバンコク日本人学校にいた（1939〜1945年）頃、年に一度全校生の身体検査がありました。

特に戦時中で大日本帝国が大変なときでしたけど、僕の目の視力は1・2でしたので、町田先生が「正夫は目がいいから海軍に行ける」といって、笑顔を浮かべていました。

僕の目は確かに両目ともいい目だったのですが、右目は曰くつきの目とでもいいでしょうか、兎に角、予期せぬことで数回にわたり目が潰れそうになったことがあるのです。

1回目は、小学1年生のときでしたけど、メナムホテルに宿泊していたおじさんから「ゴルフの球を拾って」と頼まれて、朝ホテルの庭先でゴルフの球拾いをしていたときに、ピンポン玉ほどの大きさのゴルフの白い硬い球が、右目の眉毛の所にゴツンとあたり、血が吹き出して大騒ぎになり、近所の町医者に縫ってもらったことがあります。

2回目は、小学4年生のときでした。このときは義理の母とスリヴォン通りの一軒家に住んでいました。夜寝るときは何も異状はなかったのですが、朝目が覚めたら、右目に小さな茶色っぽい小

さな棘が刺さっていたのです。

痛くて目が開けられず、涙がポロポロ出るので、当時スリヴォン通りにあったドイツ人が経営していた敷地の広い松の木に覆われた眼科病院に駆け込み、棘を抜いてもらいました。棘が黒目から少しそれていたので、失明しないで助かりました。

3回目は、終戦直後でした。敵国人だとされていた日本人は、僕も含めてノンタブリー県のバーンブアトーンキャンプに抑留される身となりました。僕は第2キャンプにいましたが、第2キャンプの外れに日本人学校の寺小屋教室があり、僕たち日本人学校の生徒は毎朝午前中だけそこで勉強していました。

ニッパ椰子の小屋でできた教室の後ろにある運動場で、僕たちはよくキャッチボールをしたり、鬼ごっこをしたりして元気に飛び跳ねて遊びました。

或る日のことでしたが、みんなで二組に分かれて野球の試合をしたことがありました。そのとき、僕がキャッチャをしていたのですが、ピッチャーが投げた直球を受け損ない、まともに右目でバシッとボールを受け止めてしまったので、暫くの間目のふちに黒ずんだお土産を頂戴したことがあるのです。

4回目は、僕がバンコクカレッジ（現バンコク大学）で非常勤日本語の特別講師をしていた1970年の4月ごろでしたが、弟子たちとバンコクから貨物船でコ・サムイ（サムイ島）へ遊

びに行ったことがあります。そのときは、サムイ島へ行く約1カ月前からでしたけども、僕の脳裏に不吉な予感がよぎったので、来月は死ぬかもしれないと思い、教室で授業中に「今度サムイ島へ行ったら、僕は怪我をするか、死ぬかもしれない」と、宣言したところ、弟子は「先生はどうしてそんなことがわかるんですか、それなら行かなければいいでしょう」と、いわれたのですが、「僕はどこにいても同じだから、一緒に行くよ」と気楽に答え、当日は出発前に、ヨードチンキ、アルコール、包帯、脱脂綿、絆創膏、小さな鋏など（今までのことがない）を用意して、ファントン（川向こう）のクローン・サーンの栈橋から貨物船に乗り込み、学生と一緒にサムイ島へ遊びに行つたのです。

当時のサムイ島には、栈橋のそばに古ぼけたホテルが1軒あるのみで、まだ観光化されていなかったのも、島全体が椰子に覆われていて自然に恵まれたとっても綺麗な島でした。

毎日のんびりと寛ぎ、静かな風いだ綺麗な海で泳いだりして、帰りは漁船でスラタニー県（当時は今のよう大きな大きなフェリーはなかった）に渡り、スラタニー駅から夜汽車でバンコクに戻る予定になっていたのです。

最終日になっても僕の身には何事も起こらなかったのですが、時間がたっぷり余っていたので、夕飯を済ませてから、夜数人の弟子とスラタニーの町がよく見える小高い山に上り、こんもりした木陰から点々と灯っている町の明かりを眺めていたときでした。

遠くからヒューッと、弾が飛んでくる音が鼓膜に響き、危ないと思い、顔を横に向けた途端に右目に弾があたり、目から無数の星がパツと飛び散ったと思った瞬間、僕は地面にバツリ倒れていたのです。

右目から血がタラタラ出ていましたが、とっさの間に長居は危険だ、弟子が狙われたらヤバイと思い、すぐ立ち上がり、びっくりしておろしている弟子に「危ないから急いで山からおろし！」と、命令を下し、弟子に両手を引っ張ってもらい、暗い石ころだらけの坂道を急いで駆けおり、そのまま町医者の医務室に飛び込み、これまたびっくりしている年配の医者に「早く僕の目の手当てをしてください、早く血を止めてください」と、早口で頼み、出血止めの手当てをし、眼帯をしてもらい、そのままゴットン、ガッタンと揺られながら、夜汽車の旅人となったのです。

バンコクに戻ってから、友人の紹介で、シリラード病院にいた眼科の専門医、だといわれる女医に、右目を診てもらったのですが、診断の結果は、何の手当てもされず、薬も施されず、ただ簡単に「貴方の目はもう治りません。弾が黒目を掠めた傷があるので、失明しています、マイペンライナ」といわれたので、僕も「コップクン・カップ」と、お礼をいって、病院をあとにしたのです。

ですけど、それから2週間ほど経過してからのことでしたが、また不思議なことが起こったのです。それは、或る日の明け方でしたが、僕がまだ眠っていたときに、何かが右目に軽く触れた、と思った瞬間に、右目のふちが急に冷たくなったのです。ハッとした途端に目が覚め、そのまま無意識の

うちに階下にある大きな鏡の前に立って自分の右目をじっくりと見つめたのです。

右目はまだ真っ赤に充血していましたが、鏡と暫く睨めっこしていると、右目の右ふちに黒い物が見えたので、撃たれたときの血の塊か、と思い、右手の人差し指でちよつといじってみると、黒い塊はポロンと下瞼の所に落ちたのです。一体なんだろうか、と思い、指先で軽く押すと、塊はコロコロと、左右に動き逃げ回るので、最後に両手の指を揃えて塊が逃げないようにそおとと押し上げてみると、なんと、小指の先ほどの大きさの鉛色の弾が地面にポトーンと落ちて跳ね返ったのです。地面に落ちた弾を拾ってよく見ると、右目の右縁の骨にあたった弾の先が少しへこんでいたのです。

ですから、目の中に飛び込んだ弾がかろうじて骨の所で食い止められていたので、助かったのだと、思います。

まさか目の中に弾が入っていたとは、夢にも思っていないでし、なんといっても運がいいことに、骨も折れず、目は潰れず、めくらにもならず、化膿もしなかったし、それに、危機一髪で命拾いしているので、運がいいのだ、奇跡だ、と思うしかありません。

僕の両目はこのような事情で、右目を撃たれた時点で失明し、現在に至るまで（約40年間）片目は何も見えなくなっていたのです。スラータニーで過ごしたあの最後の夜、僕の身にはもう何事も起こらないのであろうか、と思っていました。やはり予感的中したのです。森に囲まれた山

の暗闇にいたとき、遠くから弾がヒューと飛んでくる微かな音をキャッチした瞬間、危ないと思い、弾が目の前にくる寸前によけたつもりでしたが、遂にくるべきものがきてしまったと、いうことです。要は、別になぜ僕の身に何事も起こらないのであろうかと、待っていたわけではありませんが、僕の予知感はあるにようにあたるのです。

例えば、僕最愛の可愛い娘、タリカが亡くなったときも、「明日タリカが死んでしまう」とわかっていても、何も知らないで娘にセーターを編んでいたユピン（家内）には「タリカは明日死んじやうんだよ」ともいえず、娘を助けるすべもなく悲しい思いをしたことがあるのです。話題がちよつと横道にそれてしまいましたが、まだこのほかにも、いろんなことに直面し、経験しましたが、不思議によくあたるので、怖いくらいです。

人の命は、すべて運次第かもしれませんが。しかし、例えどのような悲惨な目に遭遇したとしても、または、どのような環境におかれたとしても、本人の心の持ち方次第だと思います。

僕のこの場合のような境遇に遭遇した場合、一般の人のなかには悲観し、いつまでも悩む人がいるかもしれませんが。ですが、僕自身は、大事な右目が失明しても、別に苦にもならず、まだ左目が見えるからいいさ、と、呑気に考えているだけですし、医者から片目失明の宣言を受けたその瞬間から、まだ何でも見える左目があるからいいさ、と、タイ式に「マイペンライ」と、ごくあっさり素直に考えているだけです。

僕みたいなカメラマンにとつては、とても大事な目かもしれませんが。写真を撮るにしても、もし右目が見えないのであれば、左目で撮ればいいわけですし、まだもうひとつ残っている片目だけでも何でも見えるし、1人でどこへでも自由に行けるので、別にくよくよしたり、悲観したり、気にしたりしたことなども一切ありません。

その日、その日の自分に決められた運命線にしたがつてフラフラ歩き、大らかな気持ちで、のんびりと明るく朗らかな人生行路を辿ればいいのです。

右目の説明が長くなってしまいましたが、このような事情で、僕がチュラー病院で目の手術を施してもらったのは、丁度雑用に追い回されていた3年前の2008年10月27日でした。

今回、僕が医者世話になったのは、69年ぶりになるわけですけど、僕が大病し、命拾いしたのは、僕がまだメナムホテルから日本人学校に通っていた11歳のときでした。

僕が大病したのは、丁度第2次大戦中で、戦闘帽を被ったビルマ戦線へ向かう日本の将兵が大勢バンコクで待機していた1942年の1月末頃でした。メナムホテルで、日本軍の軍医にチフスの予防注射してもらったのが原因で大病し、死に損ない、あの世の静かな美しい花園まで覗き、かろうじて助かりましたが、それ以来今日に至るまで一度も病氣らしい病氣をしたこともなく、丈夫で、健康状態も普通の人たちよりもずば抜けてよいものでした。

目の手術をするにあたり、素直に生まれたときの姿に変身し、病院で指定された手術着に着替え、

細長い治療台に寝かされ、左目を瞬きできないようにピタ―ピタ―と糊付けにされ、局部麻酔用の目薬を注され、女医と助手の看護婦2人の静かに響いてくる会話を聞きながら、柔らかな透き通った空色をおびた美しいレーザー光線の世界にのめり込みました。

とっても綺麗な光線に見とれているうちに、手術はものの20分ほどで終わってしまったのですが、それからあとが大変でした。

手術済みの左目に眼帯を施され、さらに眼帯が取れないように絆創膏でしっかりと固定されてしまったので、さあ大変、何も見えない真っ暗闇で、突然盲目の世界に飛び込んでしまったのです。

看護婦に促されて手術台から起きあがったのはいいのですが、さて、足を伸ばしてもどこに床があるのやらで、看護婦に手を引っ張ってもらい、一步一步足を踏みしめながら脱いだ洋服を置いた所まで連れいってもらい、手術着を脱ぎ捨て、スッポンポンのしわくちゃの体を披露し、看護婦から「マイペンライナ」と優しい声をかけられ、「これが下着です、これがズボンです、こちらが前です、ここから足先を突っ込んでください」と、一々親切に教えてもらいながら、やっとの思いで黒いサファリーの洋服を着せてもらい、車椅子の盲人となったのです。

右目はそのまま開けっ放しになっていましたが、主治医の意見で、「目が見えないことがわかるし、瞬きもできるから眼帯をしないで、そのままにしておいたほうがいい」と、アドバイスされ、控え室で待ち侘びていたユピン（家内）に、病院のタクシー乗り場まで押してもらったのはよかったの

ですが、タクシーに乗るまでが一苦勞、病院の守衛と運ちゃんに手足を持ってもらい、頭が扉にぶつからないように押さえてもらったり、片足ずつ車の中に足を突っ込んでもらったりしながら、やっとの思いでタクシーに乗れたのです。

そのときまた不思議な幻の世界を体験しました。僕がタクシーに乗った時間は、丁度夕方のラッシュ時で、車が渋滞していましたが、何も見えない真っ暗闇の世界でも、車が右にカーブしたり、左に曲がったりするたびに、身体の揺れ具合で、今左へ曲がっているな、といったような感覚がなんとなく掴めるものです。

ところが、あら不思議、真っ暗で何も見えないはずなのですが、タクシーがスムーズにゆっくり動き出した途端に、両側の道路沿いの青空に真っ白い綺麗なビルが立ち並ぶ風景が見えたのです。

何も見えないはずなのになぜ見えるのか、まさか幻ではあるまい、だのに兎に角はつきり見えるのですから、現実には間違いない、一体どこのビルであろうか、どこなのか、と、いくら考えても思いあたる場所はなく、まずタイでは見たことがない綺麗な静かな街角のビルなのです。

しかしタクシーが我が家に到着し、エンジンを消した途端に、その綺麗なビルの姿が、パッと消えてしまい、また元の暗闇の世界に戻ってしまったのです。

ア―ア―もつと見たい、と思っても、もう何も見えません。しかし、その白いビルの面影は、ず

うっと僕の脳裏に焼き付けられたまま残されていたのです。

その忘れられない白いビルのことが、なんと、目の手術をした後、同年の12月4日に、横浜でアジアフォーラム横浜の講演会を引き受けていたので、日本へ行くことになっていたので、運悪くスワンプーム国際空港は黄色組みのデモ隊に占拠されていたので、飛ぶか飛ばないか、はっきりしないタイ航空機に乗るために、午前5時にバイテック展示会場でタイ航空の搭乗券をもらい、バスにチエックインし、空港の滑走路の真ん中に待機していたタイ航空機に乗り込み、運よく成田へ飛べたのです。

お陰で12月5日、6日と2日続けて横浜で講演を済ませてから、アジアプレスの野中章さんの案内で、沖縄の那覇へ行ったのです。

日本へは数回行ったことがありますが、沖縄は今回がはじめてでした。美しい海に取り囲まれた静かな那覇の町並みに、行儀良く並んでいる真っ白い綺麗なビルを見て、ハッと、びっくりしたのです。

それが、なんと紛れもなく僕が目を手術したあとにタクシーの中で見た忘れられない例の綺麗な白いビルの風景でした。その風景が目の前にあるのです。

実に信じがたいことですが、なぜ僕の身にこのような不思議な現象が起こるのか、自分でも理解できないし、わからないのです。

このような現象が僕に生じたのは、今回がはじめてではありません。過去において数回におよび見たこともない国や、友人の姿や、或るいは、いろんな人が遭難したりした場面が見えたりしたことがあるのです。

特に、遭難事件になるようなことは、いつも数日前にそのような現象が起こるのですが、要は、それがいつどこで起こるのかがわからないだけなのです。

例えばタイで行われた1998年のアジア大会のときもそうでしたが、大勢の人が暗闇の池の中でおぼれそうになりながらもがいている姿が見えたのです。

そのときも、いつどこで何が起こるのか想像もつきませんでした。ですが、僕の脳裏に閃いた予感ほ、「そのうちに飛行機が落ちる」ということでした。勝手に判断しただけなのですが、実際に3日後に、タイ航空機がスラターニーの海に落ちた事件があったのです。

第5章 サヤームの大地

インドシナ半島の仲間が、イギリスや、フランスの制圧に耐えかねて植民地になっていましたが、小さな弱国サヤーム（シャム）の大地に移住していたタイ族は、イギリスやフランスに、どんなに虐められ、脅迫され、フランスの鉄船の軍艦からメーナム・チャウプラヤー（チャウプラヤー川）の川岸に、ドカーンドカーンと、大砲を撃ち込まれても屈せず応戦し、いざ勝ちめなしとみるや、潔く自国の大事な国土を多少切り捨てても、独立を守り通してきたのは、ムアン・サヤーム（シャム王国）の自尊心の強い政治に長けたコン・タイ（タイ人）でした。

タイ人の起源は紀元前2000—4000に、揚子江の上流の北側地域の河南省、湖北省、四川省にタイ人が移住していたとされ、紀元前1971年にはタイ族のルンおよびバーが住んでいたが、中国の漢民族に虐められたタイ民族は、紀元前69年に自由の地を求めて南下し、インドシナ半島へ向かって移動を開始し、メコン川周辺沿いおよび、チャウプラヤー川が流れている自然豊かなスワンナプーム（黄金の地）のサヤームの大地周辺に移住するようになったといわれています。

タイがサヤームと呼ばれるようになったのは、西暦1051年頃からですが、タイ人はコン・サ

ヤーム（シャム人）とはいわず、自分たちのことをコン・タイ（タイ人）と呼んでいました

サヤームはサンスクリット語で、浅黒い、黄金という意味になります。一方タイとは、自由という意味になるので、当時のシャム人は自分を表現するときは、コン・タイといっていました。サヤームはスコタイ（1238—1488年）時代の小国からアユッタヤー王朝時代へと続き、アユッタヤー王朝からトンブリ王朝、そして、現在のチャックリー王朝となりますが、スコタイ時代は、『ムアン・タイ』または、『スコタイ王国』と呼ばれ、アユッタヤー王朝時代は（1350—1767年）時代は、『アユッタヤー王国』と呼ばれていました。

しかし、サヤームの国名はまだ統一されてなかったため、時と場合によって『ムアン・サヤーム』になったり、『ムアン・タイ』、または『クルン・タイ』となったりしていました。

チャックリー王朝（1782年から現在に至る）のモンクット王による、1855年4月5日のバーネイ条約時の国名は『ムアン・タイ』でしたが、1年後の1856年4月5日の時点からは『サヤーム』が公式な国名となり、それ以来83年間使用されていました。

しかし、ピブン首相時代の1939年6月24日に『プラテート・タイ』と改称され、さらに第2次大戦終戦後の1945年9月2日にイギリスの圧力で、また『サヤーム』となりましたが、最後は1949年5月11日に『プラテート・タイ』（タイ王国）、英語では『KINGDOM OF THAILAND』と国号を改称し、現在に至っています。

タイはこのように、スコタイ時代、アユッタヤー時代、トンブリー時代、そして現在のチャックリー時代へと、荒波に揉まれながら、ヨチヨチ歩いてきました。

スコタイ時代の頃からラオス、コーム、カメーン（カンボジア）、安南（ベトナム）、モーン、ビルマなどと、インドシナ半島領土内の近隣諸国との紛争が頻繁に繰り返されていましたし、フランスとイギリスの強烈な圧力も加えられていました。

それに当時のサヤーム国内でも各地でタイ民族同士の権力争いや、領土紛争などが続き、死闘が繰り返されていました。

特に、強敵だったビルマとは勝ったり、負けたり双方の戦が、アユッタヤー王朝時代から、タクシン王の、トンブリー時代へと継続し、さらに現在のチャックリー王朝時代の、ラーマ4世モンクツ王時代に至る（1538～1852年）まで長期間にわたり血みどろな戦乱が続きました。

しかしそれにもかかわらず、東南アジアでは、サヤームだけがフランスやイギリスの植民地にもされずに独立を守り通しました。誇り高きコン・タイであり、偉大な国家なのです。

元タイの地方行政は、モントン（州）を主体とし、その下に県が肩を並べていたのですが、時代の流れとともに国内の財政如何によって大きく左右されていたので、州や県の数が増えたり減ったりしていました。

1927年に18州から14州に減少し、1932年4月1日に、さらに14州から10州に

減り、同時に県の数も79県から70県に減らされ、最終的に州は廃止されてしまい、タイの地方行政組織も全部改革され、現在は左記のように東西南北合わせて76県だけとなっています。

（2011年3月23日から東北にブンカーン県が誕生し77県となる）

タイの行政組織は、2002年10月3日に、中央省庁の編成により、1府19省となり、内閣による行政機構は次のようになっています。

首相府、国防省、財務省、外務省、観光・スポーツ省、社会開発・人間安全保障省、農業・共同組合省、運輸省、天然資源・環境省、情報通信技術省、エネルギー省、商務省、法務省、労働省、文化省、科学技術省、教育省、保健省、工業省

なお、地方行政組織は、

中央政府（首相）

内務省地域行政局（内務大臣）

県（チャンワツ） 県知事（プーワー・ラーチャカーン）

郡（アムポー） 郡長（ナーイ・アムポー）

県庁所在地（アムポームアン） 県のセンターとなる

準郡（キンアムポー）

地区（タムボン） 地区長（カムナン）

村（ムーバーン） 村長（プーヤイバーン）

県行政機構 （オーボーチョー）

自治市・町 （テーサバーン）

地区行政機構 （オーボートー）

パッタヤー特別市

バンコク都

クルンテープ・マハーナコーン（英語ではBANGKOK）

現在、一般には「クルンテープ」または、「コートーモー」と言っています。

1 クルンテープ・マハーナコーン

面積 1,568.737 km² 戸数 2,263,680 50郡あるが、

バンコクのみ郡といわずケート（区）と区別している。

人口 男 2,722,313 女 2,988,570 計 5,710,883

病院 345 寺院 541 僧院 38

1 クローン・トーイ区

面積 12,994 km² 戸数 55,187 人口密度 8.827

男 55,401 女 59,293 計 135,302

2 クローン・サーン区

面積 6,051 km² 戸数 33,417 人口密度 13.369

男 37,960 女 42,934 計 80,894

3 クローン・サムワー区

面積 110,686 km² 戸数 59,837 人口密度 1.398

男 73,961 女 80,805 計 154,766

4 カンナヤール区

面積 25,980 km² 戸数 30,747 人口密度 3.307

男 40,276 女 45,636 計 80,483

5 チャトゥチャック区

面積 32,908 km² 戸数 81,111 人口密度 4.990

男 77,669 女 86,541 計 164,210

6 チョムトーン区

	面積	26,265 ^㉒ km ²	戸数	58,111	人口密度	6,174
	男	77,834	女	84,317	計	162,151
7	ドーンムアン区					
	面積	36,803 ^㉒ km ²	戸数	65,075	人口密度	2,954
	男	73,710	女	81,367	計	156,077
8	ディンブーン区					
	面積	8,354 ^㉒ km ²	戸数	51,036	人口密度	16,363
	男	64,240	女	72,456	計	136,696
9	ドゥーシツ区					
	面積	10,364 ^㉒ km ²	戸数	29,955	人口密度	10,735
	男	60,586	女	53,902	計	114,488
10	タリンチャン区					
	面積	29,479 ^㉒ km ²	戸数	36,109	人口密度	4,999
	男	50,699	女	56,264	計	106,963
11	タヴィーヴァッターナー区					
	面積	50,219 ^㉒ km ²	戸数	29,438	人口密度	1,462

	男	34,237	女	39,191	計	73,428
12	トゥンクル区					
	面積	30,741 ^㉒ km ²	戸数	43,826	人口密度	3,714
	男	53,897	女	60,283	計	114,180
13	トンブリー区					
	面積	8,551 ^㉒ km ²	戸数	44,106	人口密度	14,838
	男	60,234	女	66,649	計	126,883
14	バーンカピ区					
	面積	28,523 ^㉒ km ²	戸数	84,989	人口密度	5,265
	男	68,597	女	81,569	計	150,166
15	バーンコークノイー区					
	面積	11,124 ^㉒ km ²	戸数	44,316	人口密度	10,618
	男	60,699	女	66,124	計	126,823
16	バーンコークヤイ区					
	面積	6,180 ^㉒ km ²	戸数	25,683	人口密度	12,396
	男	36,433	女	40,175	計	76,608

17 バーンクンティヤン区

面積 120.687^{km} 戸数 67,875 人口密度 1,247
男 72,065 女 78,427 計 150,492

18 バーンケーン区

面積 42.123^{km} 戸数 85,476 人口密度 4,413
男 89,489 女 96,412 計 185,901

19 バーンコレーム区

面積 10.921^{km} 戸数 36,061 人口密度 9,156
男 47,981 女 52,013 計 99,994

21 バーンスーウ区

面積 11.545^{km} 戸数 45,930 人口密度 12,329
男 67,629 女 74,709 計 142,338

22 バーンナー区

面積 18.789^{km} 戸数 49,982 人口密度 5,299
男 47,038 女 52,523 計 99,561

23 バーンボーン区

面積 34.745^{km} 戸数 46,704 人口密度 2,978
男 49,883 女 53,587 計 103,470

24 バーンブラック区

面積 11.360^{km} 戸数 35,955 人口密度 9,007
男 47,581 女 54,739 計 102,320

25 バーンラック区

面積 5.536^{km} 戸数 24,971 人口密度 8,581
男 22,474 女 25,029 計 47,503

26 プンクム区

面積 24.311^{km} 戸数 60,895 人口密度 6,076
男 68,182 女 79,530 計 147,712

27 パトゥムワン区

面積 8.369^{km} 戸数 25,722 人口密度 7,033
男 27,463 女 31,395 計 58,858

28 プラヴェーツ区

面積 52.190 戸数 65,075 人口密度 2,954

29	男	73,710	女	81,367	計	155,077
	ポムプラープ区					
	面積	1,931 km ²	戸数	19,297	人口密度	28,276
	男	26,554	女	28,047	計	54,601
30	パヤータイ区					
	面積	9,595 km ²	戸数	33,339	人口密度	7,868
	男	37,518	女	37,975	計	75,493
31	プラナコーン区					
	面積	5,538 km ²	戸数	18,457	人口密度	11,086
	男	29,607	女	31,767	計	61,374
32	ブラカノーン区					
	面積	13,966 km ²	戸数	38,988	人口密度	6,927
	男	44,962	女	51,918	計	96,880
33	パーシーチャローン区					
	面積	17,834 km ²	戸数	43,684	人口密度	7,439
	男	62,856	女	69,814	計	132,670

34	ミンブリー区					
	面積	63,545 km ²	戸数	48,672	人口密度	2,092
	男	63,328	女	69,821	計	133,149
35	ヤンナワール区					
	面積	16,662 km ²	戸数	48,672	人口密度	2,092
	男	63,328	女	69,645	計	133,149
36	ラーチャテークウィー区					
	面積	7,126 km ²	戸数	35,846	人口密度	10,816
	男	36,949	女	40,129	計	77,078
37	ラーンプラナ区					
	面積	15,782 km ²	戸数	34,058	人口密度	5,738
	男	43,693	女	46,866	計	90,559
38	ラーツカバン区					
	面積	123,859 km ²	戸数	65,618	人口密度	1,231
	男	73,307	女	79,221	計	152,528
39	ラーンプラウ区					

40	面積	21,567 ² km	戸数	48,861	人口密度	5,599
	男	56,111	女	66,260	計	122,371
ワントンラアン区						
41	面積	19,885 ² km	戸数	53,256	人口密度	5,914
	男	53,376	女	62,337	計	115,713
ワッタナー区						
42	面積	12,565 ² km	戸数	52,320	人口密度	6,421
	男	38,160	女	42,514	計	80,674
サパンスウーン区						
43	面積	28,124 ² km	戸数	29,243	人口密度	3,129
	男	40,838	女	47,175	計	88,013
サートーン区						
44	面積	9,326 ² km	戸数	36,712	人口密度	9,575
	男	42,675	女	46,619	計	89,294
サーイマイ区						
45	面積	44,615 ² km	戸数	80,855	人口密度	4,004
	男	84,662	女	93,975	計	178,637
サムパンタヴォン区						
46	面積	1,416 ² km	戸数	13,267	人口密度	20,680
	男	14,283	女	15,031	計	29,283
スワンルワン区						
47	面積	23,678 ² km	戸数	52,739	人口密度	4,894
	男	53,971	女	61,912	計	115,883
ノーンチョーク区						
48	面積	72,276 ² km	戸数	75,392	人口密度	147,668
	男	72,276	女	75,392	計	147,668
ノーンケーム区						
49	面積	67,030 ² km	戸数	75,742	人口密度	52,962
	男	67,030	女	75,742	計	142,772
ラックシー区						
50	面積	54,954 ² km	戸数	59,226	人口密度	45,568
	男	54,954	女	59,226	計	114,180
フワイクワン区						
51	面積	15,023 ² km	戸数	43,533	人口密度	5,121
	男	35,573	女	41,573	計	76,987

合計 面積 1,568,737[㎡] 戸数 2,334,126 50区
男 2,713,535 女 2,989,060 合計 5,702,595 人

2 カラビー県

面積 4,708,512[㎡] 戸数 134,107
8郡 53地区 389村 10自治区
病院 10 寺院 79 僧院 10
男 209,827 女 208,878 計 418,107
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
アムポー・ヌアクローン 17 k m
アムポー・カウパノム 29 k m
アムポー・クロームトム 42 k m
アムポールック 48 k m
アムポー・プラーイプレイヤー 66 k m

アムポー・ラムタップ 67 k m
アムポー・コ・ランター 106 k m
カラビー県くクルンテープ 814 k m

3 カーンチャナブリー県

面積 19,483,148[㎡] 戸数 275,015
13郡 98地区 959村 27自治区
病院 38 寺院 262 僧院 17
男 423,950 女 416,955 計 840,905
アムポームアンより県内アムポー間の距離
アムポー・タームアン 12 k m
アムポー・プノムトゥワン 24 k m
アムポー・ターマカームティヤ 30 k m
アムポー・ターマコー 30 k m
アムポー・ポーポローイ 40 k m
アムポー・サイヨーク 50 k m

アムポー・フワイカラチャウ	64 k m
アムポー・ノーンプル	75 k m
アムポー・サウクワン	98 k m
アムポー・シーサワツ	102 k m
アムポー・トーンパープーム	145 k m
アムポー・サンカブリー	230 k m
カンチャナブリ〜クルンテーブ	128 k m

4 カラシン県

面積 6,946.746 km ²	戸数 250,550
18郡 135地区 1,585村	215自治区
病院 42 寺院 265 僧院 76	
男 488,205 女 490,378 計 250,550	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・カマラーサイ	12 k m
アムポー・ヤーンタラート	16 k m

キンアムポー・ドーンチャーン	26 k m
キンアムポー・コーンチャイ	28 k m
アムポー・ローンカム	39 k m
アムポー・サハッスカン	39 k m
アムポー・ソムデッ	40 k m
アムポー・ナーモン	42 k m
アムポー・フワイメック	50 k m
アムポー・フワイプン	60 k m
アムポー・ノーンタンシー	62 k m
アムポー・クチナラーイ	79 k m
アムポー・カムムワン	81 k m
キンアムポー・サームチャイ	85 k m
キンアムポー・ナークー	88 k m
アムポー・ターカントー	99 k m
アムポー・カウヴォン	103 k m
カラシン県〜クルンテーブ	543 k m

5 カムペーンベツ県

面積	8,607.490 ^{km}	戸数	226,332
11郡	78地区	956村	16自治区
病院	11寺院	256僧院	19
男	361,532	女	364,681
計	726,213		
カムポー・ムアンより県内カムポー間の距離			
カムポー・プラインカラタイ		25	k m
キンカムポー・コーソンピナコー		28	k m
カムポー・クローンカルン		42	k m
カムポー・サーイ・ンガーム		42	k m
カムポー・クローンラーン		52	k m
カムポー・サイトーンワッタナー		53	k m
カムポー・ラーンカラブー		59	k m
カムポー・カーヌヴォーラックサブリー		70	k m
カムポー・パインシラトーン		70	k m
キンカムポー・ブンサーマッキー		90	k m

カムペーンベツ県→クルンテープ 358 k m

6 コーンケン県

面積	10,885.991 ^{km}	戸数	499,450
26郡	199地区	2,331村	32自治区
病院	91寺院	497僧院	13
男	871,047	女	885,054
計	1,756,101		
カムポー・ムアンより県内のカムポー間の距離			
カムポー・バーンファーン		22	k m
カムポー・プラヨーン		25	k m
キンカムポー・バーンヘート		28	k m
キンカムポー・サムスーン		36	k m
カムポー・ナムポー		40	k m
カムポー・バーンパイ		44	k m
カムポー・ノーンルア		45	k m
カムポー・カウスワンクワーン		49	k m

アムポー・ウボンラツ	50 k m
キンアムポー・ノーンシラー	54 k m
アムポー・チヨナボツ	55 k m
アムポー・マンチャーキリー	56 k m
アムポー・プーウヴェヤン	65 k m
アムポー・カラヌワン	66 k m
アムポー・ヴェーンヤイ	72 k m
キンアムポー・ソートポートチャイ	75 k m
アムポー・ボン	78 k m
アムポー・ビヤノイ	80 k m
キンアムポー・ナーカム	82 k m
アムポー・チュムペー	82 k m
アムポー・ノーンソーンホン	95 k m
アムポー・ヴェンノイ	96 k m
アムポー・プーパーマーン	109 k m
アムポー・シーチョムプー	114 k m

コーンケン県くクルンテープ 449 k m

7 チャンタブリー県

面積 6,338 km² 戸数 187,923

10郡 76地区 731村 19自治区

病院 23 寺院 204 僧院 32

男 250,599 女 257,421 計 508,020

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ターマイ	11 k m
アムポー・マカーム	12 k m
アムポー・カルン	24 k m
キンアムポー・カウキツチャクト	25 k m
アムポー・レームシン	30 k m
アムポー・ポーンナムローン	42 k m
アムポー・ナーヤーイアーマー	42 k m
アムポー・ソーイダーウ	72 k m

アムポー・ケンハーンメーウ 78 k m
 チャンタブリー県くクルンテーブ 245 k m

8 チャチョンサウ県

面積 5,351 km²、 戸数 223,508

11郡 93地区 892村 22自治区

病院 49 寺院 220 僧院 28

男 326,360 女 338,470 計 664,830

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンポート 14 k m
 キンアムポー・クローシンクアン 18 k m
 アムポー・バーンナムピリヨウ 19 k m
 アムポー・バーンプラコン 24 k m
 アムポー・バーンクラ 25 k m
 アムポー・プノムサーラカーム 32 k m
 アムポー・タータキヤプ 32 k m

アムポー・ブレーンヤウ 35 k m
 アムポー・サナムチャイケート 50 k m
 アムポー・ラーチャサーソン 53 k m
 チャチョンサウ県くクルンテーブ 82 k m

9 チョンブリー県

面積 4,611.829 km²、 戸数 652,001

11郡 92地区 687村 38自治区

病院 90 寺院 273 僧院 23

男 621,057 女 643,630 計 1,264,687

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンブン 14 k m
 アムポー・パナツニコム 22 k m
 アムポー・バーントーン 24 k m
 アムポー・シラチャー 24 k m
 アムポー・バーンラムン 25 k m

アムポー・コシーチャン	35 k m
キンアムポー・コチャン	40 k m
アムポー・ノーンヤイ	51 k m
アムポー・ボートーン	56 k m
アムポー・サッタヒーブ	86 k m
チョンブリー県くクルンテープ	81 k m

10 チャイナート県

面積	2,469,746 km	戸数	106,295
8郡	53地区	505村	14自治区
病院	13寺院	134僧院	4
男	162,363	女	173,589
計	335,952		
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・マノーロム	14 km		
アムポー・サンパヤー	21 km		
アムポー・ワッシン	22 km		

アムポー・サンカブリー	27 k m
アムポー・ハンカー	35 k m
キンアムポー・ノーンマモーン	44 k m
キンアムポー・ノーンカーム	52 k m
チャイナート県くクルンテープ	194 k m

11 チャイヤブーム県

面積	127,778,287	km	戸数	326,043	
16郡	124地区	1617村	20自治区		
病院	42	寺院	349	僧院	14
男	559,298	女	563,349	計	1,122,647
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離					
アムポー・バーンケーワー				13	km
アムポー・ノーンサ・ンガー				30	km
アムポー・ノーンブアラヘーウ				35	km
アムポー・チャトゥラッ				36	km

アムポー・コオンサワン	38 k m
アムポー・ケンコロ	45 k m
アムポー・ノーンブアデー	49 k m
キンアムポー・サップヤイ	57 k m
アムポー・バンネッナロン	58 k m
アムポー・プーキヨウ	76 k m
アムポー・バックディーチュムボ	85 k m
アムポー・バーンテン	92 k m
アムポー・カセートソムブーン	102 k m
アムポー・テープサティツ	105 k m
アムポー・コーンサーン	120 k m
チャイヤブーム県くクルンテープ	342 k m

12 チュムポーン県

面積	6,010.849 km ²	戸数	183,384
88郡	70地区	743村	15自治区

病院	17	寺院	135	僧院	22
男	241,801	女	242,921	計	484,722
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離					
アムポー・パティウ	30 k m				
アムポー・ターセ	32 k m				
アムポー・サヴィー	45 k m				
アムポー・トゥンタコー	62 k m				
アムポー・ランスワン	76 k m				
アムポー・ラメー	95 k m				
アムポー・パト	115 k m				
チュムポーン県くクルンテープ	463 k m				

13 チャンラーイ県

面積	11,678.369 km	戸数	446,346		
18郡	124地区	1,752村	27自治区		
病院	106	寺院	452	僧院	18

男 606,775 女 620,542 計 1,227,317

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ヴィアンチャイ	12 k m
アムポー・メーラーウ	15 k m
アムポー・メーチャン	20 k m
アムポー・ヴィアンケーン	39 k m
アムポー・パーン	46 k m
アムポー・パヤーミヤンラー	48 k m
アムポー・パーデーツ	52 k m
キンアムポー・ヴィヤンチャルン	52 k m
キンアムポー・ドーイルワン	59 k m
アムポー・メーサルワアイ	60 k m
アムポー・チャンセーン	60 k m
アムポー・クンダーン	60 k m
アムポー・メーサーイ	63 k m
アムポー・トーン	64 k m

アムポー・メーファールワン	65 k m
アムポー・ヴィアンパーバウ	91 k m
アムポー・チャンコーン	141 k m
チャンラーイ県くクルンテープ	785 k m

14 チャンマイ県

面積 20,107.057 km² 戸数 636,928

25郡 204地区 2,066村 30自治区

病院 466 寺院 979 僧院 49

男 819,750 女 850,567 計 1,670,317

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・メーリム	6 k m
アムポー・サーラピー	10 k m
アムポー・サンサーイ	12 k m
アムポー・サンカムペーン	13 k m
アムポー・ハーンドン	15 k m

アムポー・ドーイサケツ	18 k m
アムポー・サムパートーン	22 k m
キンアムポー・メーオーン	29 k m
アムポー・メーワーン	35 k m
アムポー・メーテン	40 k m
キンアムポー・ドーイロー	43 k m
アムポー・サモーン	54 k m
アムポー・チョームトーン	58 k m
アムポー・チャンダーウ	68 k m
アムポー・ホート	88 k m
アムポー・ブラウ	103 k m
アムポー・ドーイタウ	121 k m
アムポー・チャイプラカーン	131 k m
アムポー・ヴィアンヘーン	150 k m
アムポーファーン	154 k m
アムポー・メーチェム	156 k m

アムポー・メーアーイ 174 k m
 アムポー・オームコーイ 179 k m
 アムポー・カラヤニワッタナー 130 k m
 チヤンマイ県くクルンテープ 696 k m
 (新郡のカラニヤワッタナー郡はメーチェム郡から分離)

15 トウラン県

面積	4,917.519 ^四	
戸数	185,592	10郡 87地区 723村 14自治区
病院	36 寺院 78 僧院 14	
男	302,348	女 312,521 計 614,869
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離		
アムポー・ナーヨン	12 k m	
アムポー・ヤーンターカーウ	22 k m	
アムポー・カンタン	24 k m	
アムポー・フワイヨート	28 k m	

アムポー・シカウ 33 k m
 アムポー・プラリヤン 44 k m
 アムポー・ラツサダー 57 k m
 キンアムポー・ハートサムラン 59 k m
 アムポー・ワンヴィセート 60 k m
 トウラン県くクルンテープ 828 k m

16 タラート県

面積 2,819 km² 戸数 86,925
 7郡 38地区 261村 9自治区
 病院 9 寺院 84 僧院 7
 男 111,466 女 110,361 計 221,827
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・カウサミン 16 k m
 アムポー・レーム・ンゴープ 17 k m
 キンアムポー・コチャーン 27 k m

アムポー・ボーライ 69 k m
 アムポー・クロンヤイ 74 k m
 キンアムポー・コクツ 82 k m
 タラート県くクルンテープ 315 k m

17 ターク県

面積 16,406.650 km² 戸数 167,558
 9郡 63地区 559村 14自治区
 病院 18 寺院 438 僧院 8
 男 274,547 女 263,783 計 538,330
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・バーンターク 2 k m
 キンアムポー・ワンチャウ 29 k m
 アムポー・サム・ンガウ 58 k m
 アムポー・メーソート 83 k m
 アムポー・メーラマート 120 k m

アムポー・ターソンヤーン	170 km
アムポー・ポッププラ	135 km
アムポー・ウムパーン	249 km
ターク県〜クルンテープ	426 km

18 ナコーンナーヨック県

面積	2,122 ² km	戸数	79,019
4郡	41地区	408村	5自治区
病院	32	寺院	128
		僧院	3
男	124,013	女	126,740
		計	250,753
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・パークプリー	9 km		
アムポー・バーンナー	17 km		
アムポー・オンカラック	32 km		
ナコーンナーヨック〜クルンテープ	107 km		

19 ナコーンバトム県

面積	2,168.327 ² km	戸数	305,855
7郡	106地区	930村	16自治区
病院	17	寺院	146
		僧院	12
男	406,431	女	437,168
		計	843,599
アムポームアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・ナコーンチャイシー	18 km		
アムポー・プッタモントン	20 km		
アムポー・サムパラーン	21 km		
アムポー・カムペンセーン	26 km		
アムポー・ドーントゥーム	31 km		
アムポー・バーンレーン	48 km		
ナコーンパトム県〜クルンテープ	56 km		

20 ナコーンパノム県

面積	5,5112.668 ² km	戸数	183,952
----	----------------------------	----	---------

12郡 99地区 1133村 10自治区

病院 38 寺院 305 僧院 10

男 348,701 女 350,663 計 699,364

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ターアウテイン 26 km

アムポー・ポーンサワン 30 km

アムポー・プラーパーク 44 km

アムポー・レーヌーナコーン 51 km

アムポー・タートパノム 52 km

アムポー・シーソクラーム 67 km

キンアムポー・ワンヤーン 67 km

アムポー・ナーケー 78 km

アムポー・バーンベン 93 km

アムポー・ナーワー 93 km

アムポー・ナートム 93 km

ナコーンパノム県とクルンテープ 740 km

21 ナコーンラーチャシーマー県

面積 20,493.964[㊦] 戸数 763,903

32郡 289地区 3,743村 49自治区

病院 238 寺院 1,304 僧院 50

男 1,269,885 女 1,295,232 計 2,565,117

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・チャロームプラキヤツ 18 km

アムポー・カームチャレーソー 22 km

アムポー・ノーンタイ 28 km

アムポー・チョークチャイ 30 km

アムポー・パクトンチャイ 34 km

アムポー・スーンノーン 36 km

アムポー・ノーンスーン 37 km

アムポー・チャツカラート 40 km

キンアムポー・プラトーンカム 45 km

アムポー・シーキュウ	45 k m
アムポー・カーンサケーセーン	50 k m
アムポー・ノーンブンナーク	52 k m
アムポー・カラブリー	58 k m
アムポー・ピマイ	60 k m
アムポー・フワイテーロン	65 k m
アムポー・ワンナムキヨウ	75 k m
アムポー・コン	79 k m
アムポー・ノーンデー	80 k m
アムポー・ダーンクントツ	84 k m
キンアムポー・シーダー	85 k m
アムポー・バーンルアム	85 k m
アムポー・パークチョン	85 k m
アムポー・センサーン	89 k m
キンアムポー・テーパーラッ	90 k m
アムポー・プラターイ	97 k m

22 ナコーンシータマラート県

面積 9,942.502 km² 戸数 452,972

23郡 169地区 1,551村 256自治区

病院 130 寺院 334 僧院 25

男 751,827 女 761,336 計 1,513,163

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・プラポロム	16 k m
アムポー・プラポノムシー	21 k m
アムポー・サーンサカー	21 k m

アムポー・チャロームプラキヤ	22 k m
アムポー・ターサーラー	30 k m
アムポー・ローンピブーン	32 k m
アムポー・パークパナン	36 k m
キンアムポー・チャーンカラ	50 k m
アムポー・チュラーポーン	50 k m
キンアムポー・ノップピダム	52 k m
アムポー・チャーンヤイ	52 k m
アムポー・トゥンソン	55 k m
アムポー・リソン	66 k m
アムポー・フワサイ	66 k m
アムポー・チュワン	71 k m
アムポー・チャウワト	71 k m
アムポー・ナーボーン	72 k m
アムポー・ピブーン	93 k m
アムポー・バーンカン	94 k m

アムポー・カノーム	100 k m
アムポー・トゥンヤイ	102 k m
アムポー・バンナラー	107 k m
ナコーンシータマラート県くクルンテープ	780 k m

23 ナコーンサワン県

面積	9,597.677 km ²	戸数	350,468
15郡	130地区	1,433村	18自治区
病院	53	寺院	378
		僧院	10
男	526,705	女	547,534
		計	1,074,239
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・コーロクカ	18 k m		
アムポー・カウリヨウ	20 k m		
アムポー・パユハシリ	28 k m		
キンアムポー・チュムターボン	32 k m		
アムポー・チュムセーン	40 k m		

アムポー・ラーツヤウ	40 k m
キンアムポー・メーピヤン	423 k m
アムポー・バンポッピサイ	45 k m
アムポー・タータコー	48 k m
アムポー・パイサーリ	64 k m
アムポー・タークリ	68 k m
アムポー・ノーンブア	69 k m
アムポー・タークファ	95 k m
アムポー・メーヴォン	120 k m
ナコーンサワン県くクルンテープ	237 k m

24 ノンタブリー県

面積	622,303 ^㉓	戸数	491,795
6郡	52地区	329村	10自治区
病院	227	寺院	162
僧院	17		
男	496,958	女	555,634
計	1,052,592		

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・バーンクルヴォイ	7 k m
アムポー・バーンヤイ	9 k m
アムポー・パーククレッ	10 k m
アムポー・バーンブアトーン	14 k m
アムポー・サイノイ	28 k m
ノンタブリー県くクルンテープ	20 k m

25 ナラティワート県

面積	4,475,430 km ²	戸数	168,681
13郡	77地区	593村	14自治区
病院	38	寺院	38
		僧院	7
男	356,481	女	363,449
		計	719,930
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・ウインオー			18 km
アムポー・ラ・ンゲ			24 km

アムポー・バーチヨ	28 k m
アムポー・チヨアイローン	31 k m
アムポー・タークバイ	33 k m
アムポー・チャナ	47 k m
アムポー・ルーウソ	48 k m
アムポー・ス・ンガイパディ	49 k m
アムポー・ス・ンガイコロツ	63 k m
アムポー・シーサーコーン	65 k m
アムポー・ヴェーン	83 k m
アムポー・スキリン	112 k m
ナラティワート県くクルンテープ	149 k m

26 ナーン県

面積	11,472.072 ³ km ²	戸数	144,258
15郡	99地区	889村	8自治区
病院	23寺院	237僧院	7

男	240,113	女	235,871	計	475,984
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離					
キンアムポー・プーピヤン	15 k m				
アムポー・ヴィアンサー	25 k m				
アムポー・サンテイスック	32 k m				
アムポー・メーチャリム	38 k m				
アムポー・ターワンパー	43 k m				
アムポー・バーンルワン	45 k m				
アムポー・ナーノイー	60 k m				
アムポー・プワ	60 k m				
アムポー・チャンカラーン	76 k m				
アムポー・ナムーン	80 k m				
アムポー・ソーンケウ	80 k m				
アムポー・トウンチャーン	98 k m				
アムポー・ボークルウア	133 k m				
アムポー・チャロームプラキヤーツ	135 k m				

ナーン県 ｸﾙﾝﾃｰﾌﾞ 668 km

27 ブリーラム県

面積 10,322.85 km² 戸数 379,550

23郡 189地区 2,544村 26自治区

病院 35 寺院 313 僧院 141

男 769,670 女 771,980 計 1,541,650

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・フワイラーツ	10 km
キンアムポー・バーンダーン	17 km
アムポー・カラサン	30 km
アムポー・ラムプライマート	31 km
アムポー・クームアン	34 km
アムポー・ノーンスワン	40 km
アムポー・プラップラーチャ	40 km
アムポー・サトゥック	40 km

アムポー・ブラコーンチャイ	44 km
アムポー・ナーンローン	55 km
キンアムポー・ケンドン	59 km
アムポー・ノーンホン	60 km
アムポー・プッタyson	64 km
アムポー・バーンクルワツ	66 km
アムポー・チャロームプラキツ	70 km
アムポー・チャムニ	70 km
アムポー・プラカム	78 km
アムポー・ナーポツ	80 km
アムポー・バーンマイチャイポツ	80 km
アムポー・ノーンキイ	83 km
アムポー・ノーンディンデーン	92 km
アムポー・ラハーンサーイ	99 km
ブリーラム県 ｸﾙﾝﾃｰﾌﾞ	410 km

28 パトゥムタニー県

面積	1,525,856 km ²	戸数	427,051
7 郡	60 地区	494 村	14 自治区
病院	24 寺院	158 僧院	18
男	443,191	女	486,059
計	929,250		
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・サムコーク		5 k	m
アムポー・ラーツルムケウ		16 k	m
アムポー・クローンルワン		27 k	m
アムポー・ラムルウクカー		32 k	m
アムポー・タンヤブリー		34 k	m
アムポー・ノーンスア		47 k	m
パトゥムタニー県↖クルンテープ		46 k	m

29 プラチュアプキリカン県

面積	6,367,820 km ²	戸数	187,381
----	---------------------------	----	---------

8 郡	48 地区	435 村	16 自治区
病院	34 寺院	92 僧院	11

男 251,428 女 248,950 計 500,378

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・クイブリー	30 k	m
アムポー・タップサケ	42 k	m
キンアムポー・サムローヨット	45 k	m
アムポー・プラインブリー	57 k	m
アムポー・バーンサパーン	75 k	m
アムポー・フワヒン	90 k	m
アムポー・バーンサパーンノイ	112 k	m
プラチュアプキリカン県↖クルンテープ	281 k	m

30 プラチーンブリー県

面積	4,762,362 km ²	戸数	159,699
7 郡	65 地区	708 村	12 自治区

病院 82 寺院 203 僧院 10

男 228,083 女 231,296 計 459,379

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンサーン 20 km

アムポー・シーマホーソツ 20 km

アムポー・シーマハーポーツ 21 km

アムポー・プラチャンカーム 30 km

アムポー・カビンブリー 60 km

アムポー・ナーデー 78 km

プラチンブリー県くクルンテープ 135 km

31 パッターニー県

面積 1,940,356^{km²} 戸数 149,522

12郡 115地区 642村 12自治区

病院 26 寺院 45 僧院 2

男 316,986 女 325,183 計 642,169

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ノーンチック 5 km

アムポー・ヤリン 14 km

アムポー・ヤラン 15 km

アムポー・コークポート 26 km

アムポー・マーヨー 29 km

アムポー・メーラーン 30 km

アムポー・パナレ 43 km

アムポー・トゥンヤンデーン 45 km

アムポー・サーイブリー 50 km

アムポー・マイケーン 65 km

アムポー・カポー 68 km

パッターニー県くクルンテープ 105 km

32 プラナコーンシーアユッタヤー県

面積 2,556,640^{km²} 戸数 250,256

16郡 209地区 1,452村 34自治区

病院 82 寺院 312 僧院 29

男 371,557 女 397,569 計 769,126

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンバーン 10 k m

アムポー・バーンパハン 13 k m

アムポー・ウタイ 15 k m

アムポー・ナコーンルワン 20 k m

アムポー・ワンノイ 20 k m

アムポー・セーナ 20 k m

アムポー・マハーラーツ 25 k m

アムポー・バーンバイン 28 k m

アムポー・バックハイ 29 k m

アムポー・バーンサイ 34 k m

アムポー・パーチー 35 k m

アムポー・バーンサイ 45 k m

33 パンンガー県

面積 4,170.895 km² 戸数 90,987

8郡 48地区 321村 9自治区

病院 58 寺院 49 僧院 4

男 125,420 女 124,513 計 249,933

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・タクワトウン 12 k m

アムポー・タツププツ 26 k m

アムポー・コヤーウ 38 k m

アムポー・カボン 47 k m

アムポー・ターイムアン 57 k m

アムポー・タクワパー	65 km
アムポー・クラブリー	125 km
パンンガー県くクルンテープ	788 km

34 パッターン県

面積	3,424.473 km ²	戸数	154,850
郡11	地区65	村670	自治区9
病院	19	寺院	145
		僧院	6
男	247,998	女	257,131
計	505,129		

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンケウ	10 km
アムポー・クワンカヌン	17 km
アムポー・バーパヨーム	20 km
キンアムポー・シーナツカン	20 km
アムポー・カウチャイソン	20 km
アムポー・シーバンポッ	35 km

アムポー・タモツ	39 km
アムポー・コンラー	40 km
アムポー・バーボーン	50 km
アムポー・パークバユン	66 km
パッターン県くクルンテープ	840 km

35 ピチット県

面積	4,531.013 km ²	戸数	166,388
12郡	89地区	88村	19自治区
病院	29	寺院	135
		僧院	5
男	271,599	女	282,513
計	554,112		

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・サム・ンガーム	18 km
キンアムポー・サークレック	20 km
アムポー・ポーップラタップチャーン	25 km
アムポー・タパーンヒン	28 km

アムポー・ヴァチラバラミー 29 km
 アムポー・ワンサーイプーン 31 km
 アムポー・タツプクロー 44 km
 アムポー・バーンムーンナーク 50 km
 キンアムポー・ブンナーラーン 64 km
 アムポー・ポータレー 66 km
 キンアムポー・ドンチャローン 74 km
 ピチット県 34 km
 　　クルンテープ 4 km

36 ピサヌローク県

面積 10,815.854[㊦] 戸数 284,518
 9郡 93地区 1,048村 15自治区
 病院 23 寺院 459 僧院 21
 男 415,106 女 428,889 計 843,995
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・バーンラカム 17 km

アムポー・ワントーン 17 km
 アムポー・ワツポーツ 30 km
 アムポー・バーンカラトゥム 35 km
 アムポー・ポロームピラーム 40 km
 アムポー・ノーンマパラーン 75 km
 アムポー・ナコーンタイ 97 km
 アムポー・チャレッタラカーン 130 km
 ピサヌローク県 37 km
 　　クルンテープ 7 km

37 ペッチャブリー県

面積 6,225.138[㊦] 戸数 160,240
 8郡 93地区 698村 11自治区
 病院 13 寺院 186 僧院 8
 男 222,421 女 236,554 計 458,975
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・バーンラーツ 8 km

アムポー・バーンレーム	12 k m
アムポー・ターヤーン	17 k m
アムポー・カウヨイ	22 k m
アムポー・ノーンヤープローン	33 k m
アムポー・チャアム	40 k m
アムポー・ケーカラチャーン	52 k m
ペッチャブリー県くクルンテープ	123 k m

38 ペッチャブーン県

面積 12,668.416 [㊦] 戸数 296,919	
11郡 117地区 1,430村 16自治区	
病院 30 寺院 192 僧院 17	
男 495,968 女 500,263 計 996,231	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・ロムサック	44 k m
アムポー・カウコーオ	47 k m

アムポー・チョンデーン	52 k m
アムポー・ロムカウ	55 k m
アムポー・ノーンバイ	56 k m
アムポー・ワンポン	70 k m
アムポー。ブンサームパン	83 k m
アムポー・ヴィチャンブリー	106 k m
アムポー・シーテープ	123 k m
アムポー・ナムナーウ	140 k m
ペッチャブーン県くクルンテープ	346 k m

39 プレー県

面積 6,538.598 [㊦] 戸数 156,884	
8郡 78地区 708村 13自治区	
病院 22 寺院 165 僧院 2	
男 226,466 女 237,011 計 463,477	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	

アムポー・スーンメン	11 k m
アムポー・ノーンムアンカイ	20 k m
アムポー・デンチャイ	24 k m
アムポー・ローンクワン	29 k m
アムポー・ローン	40 k m
アムポー・ソーン	40 k m
アムポー・ワンチン	49 k m
プレー県くクルンテープ	551 k m

40 バヤウ県

面積	6,335.060 km ²	戸数	167,010
9 郡	68 地区	805 村	12 自治区
病院	14 寺院	246 僧院	5
男	239,638	女	247,748 計 487,386
アムポー・ムアンより県内アムポー間距離			
アムポー・ドークカムタライ	15 k m		

キンアムポー・プーカームヤウ	18 k m
アムポー・メーチャイ	24 k m
アムポー・チュン	48 k m
アムポー・チャンカム	76 k m
アムポー・ボン	79 k m
キンアムポー・プーチャーン	88 k m
アムポー・チャンムワン	117 k m
パヤウ県くクルンテープ	691 k m

41 プーケット県

面積	543.034 km ²	戸数	157,360
3 郡	17 地区	103 村	9 自治区
病院	12 寺院	19 僧院	4
男	155,555	女	171,451 計 327,006
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・カトウー	10 k m		

アムポー・タラーン 19 k m
 プーケツ・クルンテープ 862 k m

42 マハーサーラカーム県

面積 5,291.683 km² 戸数 245,020

13郡 133地区 1,944村 11自治区

病院 23 寺院 269 僧院 4

男 464,579 女 472,275 計 936,854

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・カンタラヴィチャイ 18 k m
 アムポー・ヤーンシースラーツ 25 k m
 アムポー・ボラブー 26 k m
 アムポー・ケーダム 28 k m
 アムポー・コースムピサイ 28 k m
 アムポー・ワーパーパトゥム 40 k m
 アムポー・チャンユーン 55 k m

43 メーホンソン県

面積 12,681.259 km² 戸数 86,111

7郡 45地区 415村 5自治区

病院 29 寺院 113 僧院 3

男 130,571 女 122,121 計 252,692

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・パーンマパー 64 k m
 アムポー・クンユアム 67 k m
 アムポー・パーイ 111 k m

アムポー・メーラーノイ	134 km
アムポー・メーサリヤン	164 km
アムポー・ソップモーイ	192 km
メーホーンソーン県くクルンテープ	924 km

44 ムックダハーン県

面積 4,339.830 ^{km}	戸数 90,365
7郡 53地区 526村 6自治区	
病院 12 寺院 124 僧院 1	
男 169,260 女 158,237 計 337,497	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・ニコムカムソ	28 km
アムポー・ワンヤイ	30 km
アムポー・ドーンターン	34 km
アムポー・カムサイ	35 km
アムポー・ノーンスーン	52 km

アムポー・ドンルワン	55 km
ムックダハーン県くクルンテープ	642 km

45 ヤラー県

面積 4,512.078 ^{km}	戸数 130,143
8郡 58地区 379村 8自治区	
病院 9 寺院 27 僧院 7	
男 236,178 女 239,349 計 475,527	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・ヤハー	21 km
キンアムポー・コロンピーナン	22 km
アムポー・ラーマン	26 km
アムポー・バンナンサター	39 km
アムポー・カーバン	40 km
アムポー・ターントー	61 km
アムポー・ベートン	140 km

ヤラー県 〱 クルンテープ 1084 km

46 ヤソートーン県

面積 4,161,664^{km²} 戸数 141,941

9郡 79地区 885村 9自治区

病院 9 寺院 223 僧院 3

男 270,801 女 268,483 計 539,284

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・サーイムーン 18 km

アムポー・カムクアンケーウ 23 km

アムポー・バーティユウ 28 km

アムポー・クツチュム 37 km

アムポー・マハーチャナチャ 41 km

アムポー・タイチャローン 50 km

アムポー・ロンノッター 69 km

アムポー・コーワン 70 km

ヤソートーン県 〱 クルンテープ 531 km

47 ロイエツ県

面積 8,299,449^{km²} 戸数 327,816

20郡 193地区 2,444村 17自治区

病院 40 寺院 551 僧院 5

男 652,862 女 654,350 計 1,307,212

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・タワツブリー 12 km

キンアムポー・チャンクワン 12 km

アムポー・ムアンスワン 26 km

アムポー・チャトゥラツピマーン 26 km

アムポー・シーソムデッ 27 km

キンアムポー・トゥンカウルワン 27 km

アムポー・セーラプーム 32 km

アムポー・アーツサーマーツ 34 km

アムポー・ポーントーン	47 k m
アムポー・カセーッヴィサイ	48 k m
アムポー・チャンハーン	48 k m
アムポー・スワンナプーム	52 k m
アムポー・ポーツチャイ	53 k m
アムポー・プノムパライ	64 k m
アムポー・メーヤワディー	72 k m
アムポー・ノーンポーク	73 k m
アムポー・パトゥムラッ	76 k m
キンアムポー・ノーンヒー	78 k m
アムポー・ポーンサーイ	82 k m
ロイーエッ県くクルンテープ	512 k m

48 ラノーン県

面積	3,298.045 km ²	戸数	67,835
5郡	30地区	178村	7自治区

病院	9	寺院	21	僧院	5
----	---	----	----	----	---

男 95,313 女 87,416 計 182,729

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ラウン	43 k m
アムポー・カポー	52 k m
アムポー・カラブリー	58 k m
キンアムポー・スックサムラーン	92 k m
ラノーン県くクルンテープ	568 k m

49 ラヨーン県

面積	3,552 km ²	戸数	295,931
----	-----------------------	----	---------

8郡	58地区	441村	19自治区
----	------	------	-------

病院	112	寺院	130	僧院	15
----	-----	----	-----	----	----

男 295,124 女 303,240 計 598,664

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンカーイ	11 k m
-------------	--------

キンアムポー・ニコムパッタナー 24 k m
 アムポー・バーンチャーン 27 k m
 アムポー・プルワクデー 46 k m
 アムポー・ケレン 47 k m
 アムポー・ワンチャン 70 k m
 キンアムポー・カウチャマウ 74 k m
 ラヨーン県 ↳ クルンテープ 179 k m

50 ラーチャブリー県 面積 5,196,462 km² 戸数 256,839

10郡 104地区 975村 28自治区
 病院 43 寺院 324 僧院 25
 男 409,115 女 426,746 計 835,861
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・ワップレーン 15 k m
 アムポー・バーンペー 22 k m
 アムポー・パークトーオ 22 k m

アムポー・ポータラーム 26 k m
 アムポー・チョームブン 30 k m
 アムポー・バーンポーン 42 k m
 アムポー・ノーンサドゥワク 50 k m
 アムポー・スワンブン 60 k m
 キンアムポー・バーンカー 62 k m
 ラーチャブリー県 ↳ クルンテープ 100 k m

51 ロップブリー県

面積 6,119,753 km² 戸数 247,918
 11郡 124地区 1,129村 16時地区
 病院 512 寺院 315 僧院 9
 男 378,455 女 375,346 計 753,801
 アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離
 アムポー・ターヴン 15 k m
 アムポー・バーンミー 32 k m

アムポー・コークサムローン	36 k m
アムポー・パッタナーニコム	51 k m
アムポー・ノーンムワン	54 k m
アムポー・サボーッ	65 k m
アムポー・コークチャローン	77 k m
アムポー・タールワン	83 k m
アムポー・チャイバダーン	97 k m
アムポー・ラムソンティ	120 k m
ロップブリー県くクルンテープ	153 k m

52 ラムパーン県

面積	12,533.961 [㊦]	戸数	260,974
13郡	100地区	967村	19自治区
病院	20	寺院	364
		僧院	12
男	378,744	女	388,871
		計	767,615
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			

アムポー・タウウテーン	26 k m
アムポー・ポーンサワン	30 k m
アムポー・ブラーパーク	44 k m
アムポー・レーヌーナコーン	51 k m
アムポー・ターツパノム	52 k m
アムポー・シーソンクラーム	67 k m
キンアムポー・ワンヤーン	67 k m
アムポー・ナーケー	78 k m
アムポー・バーンペン	93 k m
アムポー・ナーワー	93 k m
アムポー・ナートム	93 k m
ラムパーン県くクルンテープ	599 k m

53 ラムブーン県

面積	4,505.882 [㊦]	戸数	156,112
8郡	51地区	576村	19自治区

病院 33 寺院 267 僧院 4

男 197,537 女 207,566 計 405,125

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・パーサーン 14 k m

アムポー・バーンティ 20 k m

アムポー・メーター 22 k m

アムポー・バーンホン 42 k m

キンアムポー・ヴィアンノーンロン 45 k m

アムポー・トゥンフワチャーン 100 k m

アムポー・リー 106 k m

ラムプーン県くクルンテープ 670 k m

54 ロイ県

面積 11,324.7612^{km} 戸数 179,721

14郡 90地区 916村 15自治区

病院 30 寺院 241 僧院 3

男 312,942 女 305,481 計 405,125

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ワンサトゥン 22 k m

アムポー・ナードゥワン 37 k m

キンアムポー・エラーワン 42 k m

キンアムポー・トーンヒン 44 k m

アムポー・タリー 46 k m

アムポー・チャンカーン 48 k m

アムポー・プーラ 49 k m

アムポー・プーラワン 50 k m

アムポー・プーカラドゥン 74 k m

アムポー・ダーンサーイ 82 k m

アムポー・パークチヨム 92 k m

アムポー・パーカーウ 112 k m

アムポー・ナーヘウ 117 k m

ロイ県くクルンテープ 520 k m

55 シーサケート県

面積 8,839.976 km² 戸数 333,083

22郡 206地区 2,633村 自治区14

病院 22 寺院 370 僧院 15

男 720,138 女 721,274 計 1,441,412

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ウトウムポーンプイサイ	20 km
アムポー・パユ	23 km
アムポー・ワンヒン	25 km
アムポー・カンタラーロム	26 km
キンアムポー・ポーツシースワン	32 km
アムポー・ヤーンチュムノイ	32 km
アムポー・シーラッタナ	37 km
アムポー・ムアンチャン	40 km
アムポー・ラーシーサライ	40 km

56 サコーンナコーン県

面積 9,605.764 km² 戸数 301,061

アムポー・フワイタツプタン	40 km
アムポー・ブンブーン	41 km
アムポー・プライブン	42 km
アムポー・ナムキリヤン	45 km
アムポー・クカン	50 km
アムポー・ノーンクーン	56 km
キンアムポー・シーラーラーツ	60 km
アムポー・クンハーン	60 km
アムポー・ベンチャラック	60 km
アムポー・プラーンクー	62 km
アムポー・カンタラック	65 km
アムポー・プーシン	78 km
シーサケート県〜クルンテープ	571 km

18郡 125地区 1514村 16自治区

病院 23 寺院 409 僧院 9

男 558,007 女 558,027 計 1,116,034

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・コークシースパン 22 k m

アムポー・タウ・ンゴイ 28 k m

アムポー・プーパーン 33 k m

アムポー・ノーンナーケウ 35 k m

アムポー・パンナーニコム 39 k m

アムポー・クスマーン 40 k m

アムポー・バンコーン 54 k m

アムポー・トックバーク 56 k m

アムポー・アカーッアムヌワイ 57 k m

アムポー・ワーリップーム 69 k m

アムポー・サワンデーニン 84 k m

アムポー・ワーノニワート 85 k m

57 ソンクラー県

面積 7,393,889 km² 戸数 409,713

16郡 127地区 1,023村 256自治区

病院 48 寺院 256 僧院 26

男 652,525 女 683,243 計 1,335,768

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・シンナコーン 23 k m

アムポー・ハーッヤイ 28 k m

アムポー・チャナ 37 k m

アムポー・ナーモーン	42 k m
アムポー・バーンタラー	46 k m
アムポー・クローンホイコーン	50 k m
アムポー・サティンプラ	53 k m
アムポー・スワンニヤン	55 k m
アムポー・ナータヴィー	57 k m
アムポー・ラップーム	58 k m
アムポー・サダウ	70 k m
アムポー・テーパー	73 k m
アムポー・カラセーシン	80 k m
アムポー・ラノーツ	90 k m
アムポー・サバヨイ	104 k m
ソンクラーク	950 k m
ソンクラーク	950 k m

58 サトゥーン県

面積 2,478,889 km² 戸数 79,434

7郡	36地区	279村	7自地区
病院	20	寺院	17 僧院 2
男 143,816	女 144,593	計 288,409	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・クワンドーン	21 k m		
アムポー・ターペー	28 k m		
アムポー・クワンカーロン	32 k m		
アムポー・ラ・ンダー	50 k m		
キンアムポー・マナン	59 k m		
アムポー・トゥンワー	76 k m		
サトゥーン県	973 k m		

59 サムップラークーン県

面積 1,004,092 km² 戸数 479,503

6郡	50地区	399村	16自地区
病院	31	寺院	110 僧院 22

男 555,811 女 591,413 計 1,147,224

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・パラプラデー 12 k m

アムポー・バーンプリー 17 k m

アムポー・パラサムツチェーデー 21 k m

キンアムポー・バーンサウトン 32 k m

アムポー・バーンポー 38 k m

サムップラカーン県くクルンテープ 29 k m

60 サムソンクラム県

面積 416,707 戸数 56,213

3郡 36地区 284村 5自治区

病院 4 寺院 111 僧院 1

男 93,331 女 100,723 計 194,054

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・アムパワー 6 k m

61 サムッサーコーン県

面積 872,347 戸数 220,469

3郡 40地区 290村 自治区7

病院 10 寺院 72 僧院 8

男 231,803 女 246,343 計 478,146

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・カラトゥムベーン 14 k m

アムポー・バーンペウ 23 k m

サムッサーコーン県くクルンテープ 36 k m

62 サラブリー県

面積 3,576,486 戸数 212,904

13郡 111地区 873村 自治区26

病院 130 寺院 334 僧院 15

男 308,263 女 313,377 計 621,640

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・サウハイ 8 k m

アムポー・チャロームプラキヤーッ 10 k m

アムポー・ケンコーイ 15 k m

アムポー・ノーンケー 21 k m

アムポー・ノーンセーン 25 k m

アムポー・プラプットタバーッ 28 k m

アムポー・ヴィハーンデー 28 k m

アムポー・バーンモオ 30 k m

アムポー・ムワクレック 38 k m

アムポー・ノーンドーン 38 k m

アムポー・ドーンプッ 42 k m

アムポー・ワンムワン 64 k m

サラブリー県くクルンテープ 107 k m

63 サケーウ県

面積 7,195.138^{km²} 戸数 167,332

9 郡 59 地区 731 村 自治区 9

病院 9 寺院 139 僧院 4

男 272,874 女 268,551 計 541,425

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・カウチャカン 19 k m

アムポー・ワッタナーナコーン 38 k m

アムポー・ワンナーイエン 50 k m

アムポー・アランヤプラテッ 54 k m

キンアムポー・コークスーン 60 k m

アムポー・クローンハーッ 65 k m

キンアムポー・ワンソムブーン 80 k m

アムポー・ターパラヤー 100 k m

サケーウ県くクルンテープ 237 k m

64 シンブリー県

面積	822,478 km ²	戸数	66,744
6 郡	4 3 地区	3 6 4 村	7 自地区
病院	6 寺院	1 2 6 僧院	3
男	103,118	女	112,433 計 215,551
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離			
アムポー・バーンラチャン			1 0 k m
アムポー・カイバーンラチャン			1 6 k m
アムポー・プロムブリー			1 6 k m
アムポー・インタブリー			1 7 k m
アムポー・ターチャー			1 8 k m
シンブリー県くクルンテープ			1 4 2 k m

65 スコタイ県

面積 6,596,092 km²

戸数 186,214

9 郡 8 6 地区 8 4 3 村 1 4 自地区

病院 2 3 寺院 1 4 1 僧院 4

男 294,657 女 309,169 計 603,817

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・シーサムローン	2 0 k m
アムポー・コンカライラーツ	2 1 k m
アムポー・キーリーマーツ	2 2 k m
アムポー・バーンダーンラーイ	2 8 k m
アムポー・サワンカローク	3 8 k m
アムポー・シーナコーン	5 4 k m
アムポー・シーサッチャナーライ	5 7 k m
アムポー・トゥンセーリーヨム	6 8 k m
スコタイ県くクルンテープ	4 2 7 k m

66 スパンブリー県

面積 5,358,008 km² 戸数 250,318

10郡 110地区 1,007村 自治区2区

病院 24 寺院 314 僧院 22

男 410,204 女 434,294 計 844,498

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・バーンプラマー 10 km

アムポー・シープラチャン 20 km

アムポー・ドーンチェーデー 31 km

アムポー・ウートーン 32 km

アムポー・サムチュック 39 km

アムポー・ドームバーンナーンブワット 54 km

アムポー・ノーンヤーサイ 58 km

アムポー・ソーンピーノーン 70 km

アムポー・ダーンチャーン 77 km

スパンブリー県・クルンテープ 100 km

67 スラターニー県

面積 12,891,469 m² 戸数 369,432

19郡 131地区 1,066村 24自治区

病院 212 寺院 205 僧院 17

男 487,455 女 496,031 計 983,486

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・プンピン 12 km

アムポー・カーンチャナディット 18 km

アムポー・ターチャーン 37 km

アムポー・バーンナーンサーン 41 km

アムポー・バーンナードーム 50 km

アムポー・ドーサック 61 km

アムポー・キヤンサー 61 km

アムポー・キララツニヨム 65 km

アムポー・チャイヤー 68 km

アムポー・ブラセーン 68 km

アムポー・ヴィアンサ 68 k m

キンアムポー・ヴィパワディー 70 k m

アムポー・バーンタークン 71 k m

アムポー・ターチャナ 78 k m

アムポー・パノム 80 k m

アムポー・コサムイ 84 k m

アムポー・コパ・ンガン 100 k m

アムポー・サイブリー 112 k m

スラットタニー県くクルンテープ 644 k m

68 スリン県

面積 8,124.056 km² 戸数 328,279

17郡 159地区 2,119村 17自治区

病院 44 寺院 309 僧院 11

男 688,142 女 687,418 計 1,375,560

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

キンアムポー・ケワーシナリン 15 k m

アムポー・ラムドゥワン 25 k m

アムポー・チョームプラ 26 k m

アムポー・プラサーツ 28 k m

アムポー・シーカラプーム 32 k m

アムポー・サンカ 49 k m

アムポー・サノム 50 k m

アムポー・サムローンタープー 51 k m

アムポー・タートウーム 52 k m

アムポー・カープチョン 58 k m

キンアムポー・シーナロン 65 k m

アムポー・ブアチェーツ 66 k m

アムポー・ラッタナブリー 79 k m

キンアムポー・パノムドンラック 79 k m

アムポー・チュムボンブリー 92 k m

スリン県くクルンテープ 457 k m

69 ノーンカーイ県

面積 7,332.280²km² 戸数 244,354

17郡 115地区 1,302村 自治区17

病院 28 寺院 286 僧院 7

男 456,068 女 459,809 計 906,877

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

キンアムポー・サラクライ	27 k m
アムポー・ターポー	41 k m
アムポー・ポーンピサイ	45 k m
アムポー・ブンカラ	45 k m
アムポー・シーチャンマイ	57 k m
キンアムポー・ラッタナーワービー	71 k m
キンアムポー・ファウライ	71 k m
キンアムポー・ポーツターク	72 k m
アムポー・パークカーツ	90 k m

70 ノーンブアラムブー県

面積 3,859.089²km² 戸数 124,849

6郡 59地区 587村 13自地区

病院 5 寺院 85 僧院 2

男 251,429 女 248,091 計 498,692

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ナーカラーン	30 k m
-------------	--------

アムポー・シーブンルアン 33 k m
 アムポー・ノーンサン 42 k m
 アムポー・ナーワン 42 k m
 アムポー・スワンクーハー 65 k m
 ノーンブアラムプー県くクルンテーブ 577 k m

71 アーントーン県

面積 968.372^{km} 戸数 84,397
 7郡 73地区 513村 10自地区
 病院 8 寺院 130 僧院 2

男 137,052 女 147,779 計 284,831

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ポートーン 11 k m
 アムポー・パーモーク 12 k m
 アムポー・ヴィセーッチャイチャーン 13 k m
 アムポー・サイヨー 15 k m

アムポー・サヴェーンハー 25 k m
 アムポー・サムコー 27 k m
 アーントーン県くクルンテーブ 105 k m

72 ウドーンターニー県

面積 11,730.302^{km} 戸数 413,693
 20郡 156地区 1,879村 31自地区
 病院 105 寺院 662 僧院 13

男 768,122 女 767,507 計 1,535,629

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・クッチャップ 24 k m
 キンアムポー・プラチャックシラパーコム 29 k m
 アムポー・ノーンハーン 35 k m
 アムポー・ノーンセーン 35 k m
 アムポー・ノーンウワソー 39 k m
 アムポー・クムパワーピー 43 k m

73 ウタラディツ県

アムポー・ペン	43 k m
アムポー・ピブーンラック	50 k m
アムポー・ノーンサアーク	53 k m
アムポー・バーンプルー	55 k m
キンアムポー・クークーウ	61 k m
アムポー・チャイワーン	62 k m
アムポー・トゥンフォン	65 k m
アムポー・サラーンコム	68 k m
アムポー・シーターツ	72 k m
アムポー・バーンドウン	84 k m
アムポー・ワンサムモ	96 k m
アムポー・ナムソム	110 k m
アムポー・ナユン	129 k m
ウドーンターニー県くクルンテーブ	564 k m

74 ウタイターニー県

面積 7,833.592 km ²	戸数 149,237
9郡 67地区 613村 18自治区	
病院 54 寺院 161 僧院 9	
男 229,207 女 234,998 計 464,205	
アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離	
アムポー・ラップレー	8 k m
アムポー・トロン	25 k m
アムポー・タープラー	40 k m
アムポー・トーンセーンカン	42 k m
アムポー・ピチャイ	47 k m
アムポー・ナムパーク	72 k m
アムポー・ファークター	115 k m
アムポー・バーンコーク	160 k m
ウタラディツ県くクルンテーブ	491 k m

面積 6,730.246 km² 戸数 102,099

8郡 70地区 642村 10自地区

病院 26 寺院 110 僧院 5

男 161,505 女 166,081 計 327,586

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ノーンカーヤーン 10 km

アムポー・タツプタン 19 km

アムポー・ノーンチャーン 22 km

アムポー・サワンアーロム 33 km

アムポー・フワイコッ 45 km

アムポー・ラーンサック 54 km

アムポー・バーンライ 80 km

ウタイターニー県くクルンテープ 219 km

75 ウボンラーチャターニー県

面積 22,475.096 km² 戸数 467,182

25郡 219地区 2,700村 28自地区

病院 59 寺院 506 僧院 10

男 899,951 女 885,502 計 1,795,453

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ワリンサムラープ 2 km

キンアムポー・サワンヴィラヴォン 23 km

キンアムポー・ラウスアコーク 27 km

アムポー・サムローン 28 km

アムポー・ターンスム 32 km

アムポー・ムワンサムシップ 34 km

キンアムポー・ナーヨイ 35 km

アムポー・ドーンモッデーン 35 km

アムポー・クオンナイ 38 km

アムポー・デーッウドム 45 km

アムポー・ピブマンサンハーン 45 km

アムポー・タランカーンブーッポン 50 km

キンアムポー・ナムクン	60 k m
アムポー・トゥンシーウドム	74 k m
アムポー・クツカーウブン	76 k m
アムポー・シリントーン	80 k m
アムポー・シームアンマイ	83 k m
アムポー・ブンタリック	87 k m
キンアムポー・ナーターン	93 k m
アムポー・ポーツサイ	99 k m
アムポー・ナーチャルワイ	100 k m
アムポー・ケーマラーツ	108 k m
アムポー・コーンチイヤム	110 k m
アムポー・ナムユーン	110 k m
ウボンラーチャターニー〜クルンテープ	629 k m

76 アムナーツチャローン県

面積 3,162.248^{sq} 戸数 93,878

7郡 56地区 607村 9自地区
病院 7 寺院 99 僧院 4

男 185,172 女 184,304 計 369,476

アムポー・ムアンより県内アムポー間の距離

アムポー・ルーウアムナーツ	22 k m
アムポー・パトゥムラーツヴオンサー	32 k m
アムポー・フワタパーン	35 k m
アムポー・パナー	47 k m
アムポー・チャーヌマーン	78 k m
アムポー・セーナンカニコム	81 k m
アムナーツチャローン県〜クルンテープ	585 k m

男	女	合計	戸数
31,255,869 人	32,133,861 人	63,389,730 人	20,608,269

各県の人口のみ

県名	男	女	計
クルンテープマハーナコーン	2,722,313	2,988,570	5,710,883
カラビー	209,827	208,878	418,705
カーンチャナブリー	423,950	416,955	840,905
カーラーシン	488,205	490,378	978,583
カムペンペッ	361,532	364,681	726,213
コーンケン	71,047	885,054	1,756,101
チャンタブリー	250,599	257,421	508,923
チャチョンサウ	326,360	338,470	664,830
チョンブリー	621,057	643,630	1,264,687
チャイナート	162,363	173,589	335,952
チャイヤブーム	559,298	563,349	1,122,647
チュムポーン	241,801	242,921	484,722
チャンラーイ	606,775	620,542	1,227,317

チャンマイ	819,750	850,567	1,670,317
トゥラン	302,348	312,521	514,869
タラーツ	111,466	110,361	221,827
ターク	274,547	263,783	538,330
ナコーンナーヨック	124,013	126,740	250,753
ナコーンパトム	406,431	437,168	843,599
ナコーンパノム	348,701	350,663	699,364
ナコーンラーチャシーデー	1,269,885	1,295,232	2,565,117
ナコーンシータムラート	751,827	761,336	1,513,163
ナコーンサワン	526,705	547,534	1,074,239
ノンタブリー	496,958	555,634	1,052,592
ナラティワート	356,481	363,449	719,930
ナーン	240,113	235,871	475,984
ブリラム	769,670	771,980	1,541,650
パトゥムタニー	443,191	486,959	929,250
プラチュアブキリカン	251,428	248,950	500,378

ブラチンブリー	228,083	231,296	459,379
パッタニー	316,986	325,183	642,169
シーアユッタヤー	371,557	397,569	769,126
パヤウ	239,638	247,748	487,386
パンンガー	125,420	124,513	249,933
パッタラン	247,998	257,131	505,129
ピチッ	271,599	282,513	554,112
ピッサヌローク	415,106	428,889	843,995
ペッチャブリー	222,421	236,554	458,975
ペッチャブーン	495,968	500,263	996,231
プレー	226,466	237,011	463,477
ブーケッ	155,555	171,451	327,006
マハーサーラカーム	464,579	472,275	936,854
ムックダハーン	169,260	168,237	337,497
メーホンソーン	130,571	122,121	252,692
ヤソートーン	270,801	268,483	539,284

ヤラー	236,178	239,349	475,527
ローイエッ	652,862	654,350	1,307,212
ラノーン	95,313	67,416	182,729
ラヨーン	295,424	303,240	598,664
ラーチャブリー	409,115	426,746	835,861
ロッパブリー	378,455	375,346	753,346
ラムパーン	378,744	388,871	767,615
ラムプーン	197,537	207,588	405,125
ローイ	312,942	305,481	618,423
シーサケートサコンンナコン	558,007	558,027	1,116,034
ソנקラー	652,525	683,243	1,335,768
サトゥーン	143,816	144,593	288,409
サムップラカーン	555,811	591,413	1,147,224
サムッソנקラーム	93,331	100,723	194,054
サムッサーコーン	231,803	246,343	478,146
サケーウ	272,874	268,551	541,425

サラブリー	308,263	313,377	621,640
シンブリー	103,118	112,433	215,551
スコータイ	294,657	309,160	603,817
スパンブリー	410,204	434,294	844,498
スラーターニー	487,455	496,031	983,486
スリン	688,142	687,418	1,375,560
ノーンカーイ	456,068	450,809	906,877
ノーンブアラムプー	251,429	248,091	499,520
アーントーン	137,052	147,779	284,831
アムナートチャローン	185,172	184,304	369,476
ウドーンターニー	768,122	767,507	1,535,629
ウタラディッ	229,207	234,998	464,205
ウタイターニー	161,505	166,081	327,586
ウボーンラーチャターニー	899,951	895,502	1,795,453

合 計 31,255,869 32,133,861 63,389,730

(2008年12月31日の内務省資料より)

人口100万人以上の県名

県 名	2002年	2005年	2006年
1 クルンテープマハーナコーン	5,782,159	5,658,953	5,702,595
2 ナコーンラーチャシーマー	2,581,244	2,546,763	2,571,292
3 ウボンラーチャターニー	1,792,774	1,774,808	1,803,754
4 コーンケン	1,767,643	1,747,542	1,762,242
5 チャンマイ	1,595,655	1,650,009	1,632,548
6 プリーラム	1,545,779	1,531,430	1,546,784
7 ウドントーニー	1,535,471	1,523,802	1,538,940
8 ナコーンシータマラート	1,533,894	1,504,420	1,516,499
9 シーサケート	1,458,969	1,443,975	1,446,354
10 スリン	1,399,377	1,374,700	1,377,827
11 ソンクラーク	1,271,067	1,302,421	1,343,954

12	ロイエート	1,322,664	1,310,672	1,308,159
13	チョンブリー	1,129,866	1,172,432	1,299,590
14	チャンラーイ	1,274,214	1,225,058	1,194,933
15	サムップラカーン	1,027,719	1,077,523	1,164,105
16	チャイヤブーム	1,136,508	1,116,934	1,125,166
17	サコンナコーン	1,107,752	1,104,106	1,118,449
18	ナコーンサワン	1,130,841	1,077,458	1,072,868
19	ノントブリー	-	-	1,076,071
20	ペッチャブーン	1,040,786	1,002,459	-

(2009年12月31日の内務省資料より)

77 県目の新県の提案

上記の原稿を執筆中からでしたが、2010年8月3日の議会でノンカイ県と、ラオスの国境線をメコン川で挟んだノンカイ県内のブンカーン郡を、ブンカーン新県に指定する件案が出ています。現時点(2011年3月)では、まだ公式発表はされていませんが、正式に決定した場合、両県は次のように(はっきりした明細不明)分割される予定です。

69	ノンカイ県			
	面積	3,026,264k ² m	9郡	人口 506,362
	アムポー・ムアン			144,408人
	アムポー・ターポー			82,769
	アムポー・ポーンピサイ			96,540
	アムポー・サクライ			25,623
	アムポー・ファウライ			50,530
	ポートターク			14,892
	アムポー・ラッタナーワーピー			37,297
	アムポー・サンコム			23,583
	アムポー・シーチャンマイ			30,790
77	ブンカーン県(2011年3月23日県となる)			
	面積	4,305,766k ² m	8郡	人口 399,043
	ラオスとの国境線	330km		

アムポー・ムアン 85,394 人

アムポー・セーカー 82,370

アムポー・ソーピライ 68,746

アムポー・ポーンチャン 41,811

アムポー・パークカーツ 33,768

アムポー・ブンコーンロン 35,472

アムポー・シーヴィライ 38,533

アムポー・ブンカラ 12,949

現在、ブンカーン県の他に、西部のカーンチャナブリー県のトーンバーブーム郡および、チャンマイ県のファーン郡とメーアイ郡を、新しい県にしたい要望がでています。

しかし、県内のアムポー（郡）を分離して、県に指定するためには、次のような規定を満たしていなければならない条件になっています。

県から郡を分離して新県とするためには、分離する県の面積が最低10,000 km²なければならない。

新県と分離した後、県内に残る人口は約30万人、6郡、最低面積5,000 km²残ること。

県の収益は元々500万バーツあり、

分離した後でも250万バーツの収益があること。

郡を新県とする条件は、

近隣国との国境に接しているかどうか。国境問題が生じているかどうか。

共産化しているかどうか。

ゲリラ活動の動きがあるかどうか。

国境線沿いで武器の密輸などが行われているかどうか。

新県の人口は約60万人、郡と準郡合わせて12郡

最低面積5,000 km²あること。

この他に、県庁、病院、学校、郡役所、その他の設備が整い、県の収益が250万バーツあること。

新しい県を誕生させるためには、以上のような様々な条件が揃っていなければならないわけです。県に指定されれば予算もぐっと増えますし、裏面工作している政治がらみもあり、現アピシツ政権は北部や東北部の草の根グループに弱いので、今のうちに密かに点数稼ぎをしているの

だ、といった、噂も流れています。

タイ王国は、北部の山岳地帯には、カレン族、アカ族、モン族や、ヤオ族などの山岳民族の集落がありますし、全国の至る所に綺麗な寺院や、昔の面影を忍ばせる素晴らしい遺跡が点在しています。

それに南部には、動物の尻尾のように細長く延びている地形に沿った海原に、大小様々な島影が浮かんでいて、まるで箱庭のような美しい景色を垣間見ることができるので、タイは観光地に恵まれた国だと思います。

2002年度山岳民族及び少数民族の人口

カリヤン（カレン）

1,919 村 87,628 戸 95,088 所帯 男 151,186 女 147,168

男子 70,193 女子 69,584 計 438,131

モン（メーウ）

254 村 19,287 戸 24,551 所帯 男 45,382 女 45,703

男子 31,578 女子 31,292 計 153,955

ヤウ（マヘン）

178 村 6,758 戸 8,022 所帯 男 15,260 女 15,442

男子 7,609 女子 7,260 計 45,571

アーカー（イーロー）

271 村 11,178 戸 12,909 所帯 男 20,948 女 21,756

男子 12,756 女子 13,073 計 68,653

ムーナー（ラフ）

385 村 18,057 戸 20,347 所帯 男 32,059 女 32,094

男子 19,430 女子 19,293 計 102,876

リーナー（リン）

155 村 6,553 戸 7,338 所帯 男 12,345 女 12,505

男子 6,737 女子 6,712 計 38,299

ルフ

69 村 4,361 戸 5,098 所帯 男 7,454 女 7,553

男子 3,536 女子 3,717 計 22,260

ティン

159 村 8,496 戸 10,474 所帯 男 15,512 女 14,941

男子 6,084 女子 6,120 計 42,657

カム

38 村 2,256 戸 2,523 所帯 男 3,991 女 3,873

男子 1,366 女子 1,343 計 10,573

トーンルアン(マラブリ)

2 村 63 戸 63 所帯 男 76 女 71

男子 71 女子 67 計 282

山岳民族人口集計 3,430 村 164,637 戸 186,413 所帯 男 304,213 女 301,223 男子 159,360
女子 158,461 計 923,257 人

少数民族人口

タイプーンラップ 847 村 50,257 戸 52,945 所帯 男 80,405 女 78,815

男子 26,923 女子 26,577 計 212,720

パローン 7 村 459 戸 500 所帯 男 663 女 769

男子 472 女子 420 計 2,324

トーンルー 4 村 42 戸 43 所帯 男 99 女 79

男子 24 女子 24 計 226

タイルー 16 村 857 戸 998 所帯 男 1,521 女 1,599

男子 328 女子 332 計 3,780

チーンホー 55 村 3,773 戸 4,109 所帯 男 9,028 女 8,556

男子 4,153 女子 4,588 計 26,325

タイヤイ 71 村 4,059 戸 4,658 所帯 男 8,057 女 8,500

男子 2,402 女子 2,452 計 21,411

その他 57 村 2,612 戸 2,922 所帯 男 4,248 女 4,271

男子 2,151 女子 2,436 計 13,106

少数民族集計

1,057 村 62,059 戸 66,175 所帯 男 104,021 女 102,589

男子 36,453 女子 36,829 計 279,892 人

総計 226,696 戸 252,588 所帯 男 408,234 人 女 403,812 人

男子 195,813 女子 195,290 合計 1,203,149 人

2002年度山岳民族移住地人口

カーンチャナブリー県

116 村 18,437 戸 20,076 所帯 男 30,377 女 29,083

男子 12,778 女子 12,695 計 84,933

ラーチャブリー県

24 村 5,670 戸 6,174 所帯 男 8,558 女 8,734

男子 3,667 女子 3,628 計 24,587

ベツチャブリー県

21 村 2,364 戸 2,380 所帯 男 3,388 女 3,418

男子 1,403 女子 1,342 計 9,551

プラチュアプキリカン県

8 村 1,717 戸 1,717 所帯 男 2,407 女 2,369

男子 1,537 女子 1,468 計 7,781

カムペーンベツ県

11 村 1,473 戸 1,844 所帯 男 2,790 女 2,794

男子 1,492 女子 1,518 計 8,594

チャンマイ県

408 村 62,986 戸 69,718 所帯 男 111,182 女 110,136

男子 50,748 女子 50,643 計 322,709

チャンラーイ県

232 村 36,597 戸 42,097 所帯 男 71,200 女 73,409

男子 38,409 女子 38,319 計 221,196

ターク県

199 村 25,280 戸 26,244 所帯 男 46,041 女 45,616

男子 26,610 女子 26,812 計 145,079

ナン県

172 村 15,706 戸 19,673 所帯 男 31,287 女 30,589

男子 14,338 女子 14,573 計 90,787

プレー県

39 村 4,418 戸 4,826 所帯 男 7,520 女 7,081
男子 2,184 女子 2,092 計 18,877

ラムパーン県

26 村 3,401 戸 3,769 所帯 男 5,850 女 5,715
男子 2,556 女子 2,553 計 16,674

ラムプーン県

45 村 6,818 戸 7,354 所帯 男 10,791 女 9,999
男子 4,243 女子 4,091 計 29,124

パヤウ県

35 村 3,513 戸 4,351 所帯 男 7,642 女 7,303
男子 3,615 女子 3,465 計 21,925

メーホーンソン県

275 村 23,506 戸 26,520 所帯 男 44,452 女 43,097
男子 19,966 女子 19,988 計 127,503

ピサヌローク県

60 村 6,283 戸 6,782 所帯 男 10,398 女 10,383
男子 4,078 女子 2,092 計 28,671

スコートタイ県

10 村 1,109 戸 1,143 所帯 男 2,265 女 2,136
男子 840 女子 784 計 6,025

ベッチャブーン県

41 村 4,211 戸 4,611 所帯 男 7,3412 女 7,604
男子 4,940 女子 5,082 計 24,938

ロীয়県

1 村 252 戸 291 所帯 男 432 女 398
男子 281 女子 426 計 1,537

ウタイターニー県

18 村 2,041 戸 2,087 所帯 男 3,067 女 2,885
男子 1,555 女子 1,429 計 8,936

スパンブリー県

9 村 914 戸 931 所帯 男 1,375 女 1,204

男子573

女子570

計3,722

合計 1,750 村 226,696 戸 252,588 所帯 男 408,812 女 403,813
 男子 195,813 女子 195,290 計 1,203,149 人

参考までに県所在地の遺跡数を記しておきます。

第	県 名	遺跡数
1	クルンテーブマハーナコーン	1 9 1
2	ラーチャブリー	2 7
3	スパンブリー	5 3
4	プラナコーンシーアユッタヤー	1 3 3
5	ロップブリー	4 9
6	プラチーンブリー	3 2
7	スコータイ	1 3 9
8	ナーン	2 6

9	チャンマイ	1 0 9
10	コーンケン	3 0
11	ローイエツ	5 1
12	ウボンラーチャターニー	3 3
13	ナコーンラーチャシーマー	9 5
14	ソンクラ	6 2
15	ナコーンシータマラート	3 3
16	ブーケツ	1 0
17	ペップブリー	3 8
18	ノンタブリー	2 3
19	ナコーンナーヨック	5
20	チャイナート	1 7
21	タラート	5
22	ターク	1 7
23	ラムパーン	3 3
24	メーホンソーン	7

56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	45	44	43	42	41
カーラシン	ウドーインターニー	チャンラーイ	プレー	ピチッ	チャチョンサウ	ペッチャブーン	アーントーン	カーンチャナブリー	サムッサーコーン	パンンガー	スラーターニー	パッターニー	ブリーラム	ヤソートーン	ナコーンパノム

1 4	8	4 5	1 0	3 0	1 5	1 5	1 1	2 1	7	2 3	3 5	1 8	4 5	1 3	1 7
--------	---	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---	--------	--------	--------	--------	--------	--------

40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	30	29	28	27	26	25
ローンブアラムプー	ラムプーン	パヤウ	カムペーンベッ	サケーウ	ナコーンサワン	シンブリー	パトゥムターニー	プラチュアプキリカン	ラノーン	チュムポーン	サトウーン	チャイヤブूम	ムッタダーハーン	サコーンナコーン	ローイ

7	1 8	1 7	1 9	4 2	1 6	1 1	1 0	4	7	9	1	3 6	5	1 9	9
---	--------	--------	--------	--------	--------	--------	--------	---	---	---	---	--------	---	--------	---

57	アムナートチャローン	6
58	スリン	40
59	ヤラー	3
60	パッタラン	29
61	カラビー	1
62	サムッソンクラーム	14
63	ナコーンパトム	18
64	サラブリー	40
65	ウタイターニー	6
66	チョンブリー	19
67	ウタラディッ	15
68	ノーンカイ	21
69	シーサケート	24
70	ナラティワート	4
71	トゥラン	20
72	サムップラカーン	7

73	ラヨーン	10
74	ピッサヌローク	17
75	マハーサーラカーム	18

合計

2103ヶ所

資料…博物館文化遺跡管理部門15管区より

タイ全土には、東北にあるクメール遺跡などを含めて上記のように2103ヶ所に旧跡が点在していますが、遺跡の他にも、大小様々なお寺がバンコクをはじめとして、バンコクに440寺、サムップラカーン県に122寺、ノンタブリー県に190寺、パトゥムターニー県に183寺、アユッタヤー県に503寺、アーントーン県に214寺、ロップブリー県に654寺あり、その他を含めると、全国に3万5772におよぶお寺があり、仏門に身を託したマハーニカリー派と、タムマユツ派の、36万1524人の僧侶（ブラピック）および、沙弥（サーマネー）により見守られています。

次に、各県のマハーニカリー派とタムマユツ派の僧侶および、沙弥の明細を記しておきます。

県 名

プラピック (僧侶)

サーマネーン (沙弥／小僧)

マハーニカイ タマユット 計 マハーニカイ タマユット 計

クレンティンブーナコーン	14,304	1,625	15,929	3,369	901	4,270
カラビー	620	13	633	116	-	116
カーンチャナブリー	5,381	304	5,685	984	101	1,085
カラシン	2,650	1,783	4,433	710	642	1,352
カムペンピッ	4,196	262	4,458	299	125	424
コーンケン	6,899	1,766	8,665	2,954	205	3,159
チャンタブリー	3,330	566	3,896	126	16	142
チャチョンサウ	4,552	158	4,710	893	14	907
チョンブリー	4,228	246	4,474	373	13	386
チャイナート	2,078	68	2,146	112	2	114
チャイヤブーム	5,154	480	5,634	750	47	797
チュムボーン	2,140	194	2,334	547	13	560
チャンラーイ	3,432	335	3,767	3,596	24	3,620
チャンマイ	5,842	698	6,540	6,347	260	6,607

タラート	823	57	880	94	5	99
トゥラン	1,064	-	1,064	233	-	233
ターク	1,664	46	1,713	901	7	908
ナコーンナーヨック	1,883	115	1,998	137	24	161
ナコーンパトム	3,994	286	4,280	432	196	628
ナコーンパノム	2,804	662	3,466	1,056	106	1,162
ナコーンラーチャミー	12,047	1,140	13,187	1,667	259	1,162
ナコーンシータム	2,891	436	3,327	604	103	707
ナコーンサワン	6,826	119	6,945	1,236	14	1,250
ノンタブリー	3,445	136	3,581	438	22	460
ナラーティワート	297	14	311	16	-	16
ナーン	1,222	10	1,232	1,739	-	1,739
ブリーラム	8,277	1,050	9,327	1,149	75	1,224
パトゥムターニー	4,737	122	4,859	594	183	777
ブラチュアブキリカン	2,040	195	2,235	168	72	240
ブラチーンブリー	2,389	330	2,719	357	12	369

バッテリー	406	17	423	65	2	67
アユツタヤー	5,533	211	5,744	351	864	1,215
パヤウ	1,143	108	1,251	1,326	16	1,342
ピチッ	3,735	20	3,755	315	1	315
ピッサヌロータ	4,701	160	4,861	872	14	886
ペッチャブーン	4,713	451	5,164	632	48	680
ペッチャブリー	3,120	195	3,315	245	25	270
パンガー	530	120	650	18	5	23
パッタルン	1,143	79	1,222	58	3	61
ブーケッ	550	70	620	50	1	51
ムックダホーン	1,338	551	1,889	128	24	152
マハーサーラカーム	4,068	393	4,461	741	17	758
メーホーンニン	452	63	515	399	9	408
ヤラー	216	32	248	37	4	41
ヤンロートーン	2,223	372	2,595	374	272	646
ローイェッ	6,132	1,411	7,543	1,193	327	1520

ラノーン	545	38	583	63	3	66
ラヨーン	2,164	137	2,301	276	197	473
ラーチャブリー	5,579	326	5,905	431	17	448
ロツブリー	4,270	474	4,744	295	16	311
ラムパーン	2,339	105	2,444	1,980	6	1,986
ラムプーム	1,570	33	1,603	1,769	3	1,722
ローイ	2,095	750	2,845	1,278	1,420	2,698
シーサケート	9,199	749	9,948	1,674	275	1,949
サコーンナコーン	3,718	2,079	5,797	835	49	984
ソนกラー	2,121	285	2,406	491	84	575
サトゥーン	200	21	221	24	1	25
サムツีカーコーン	2,162	69	2,231	137	21	158
サムンンシラム	1,850	60	1,910	83	11	94
サムップラカーン	3,728	198	3,031	222	45	67
サケーウ	2,942	89	3,031	213	7	220
サラブリー	3,753	242	3,995	337	21	358

シンブリー	1,544	90	1,634	236	354	590
スコータイ	2,824	60	2,884	427	2	429
スパンブリー	10,917	7	10,924	1,973	-	1,973
スラーターニー	3,655	120	3,775	450	78	528
スリン	7,086	519	7,605	1,280	-20	1,400
ノーンカーイ	3,012	1,250	4,262	1,570	342	1,912
ノーンプア	1,801	280	2,081	512	123	635
ラムプアーントーン	1,925	49	1,974	350	4	354
ウボンラーチャターニー	7,278	927	8,205	2,269	304	2,573
ウタイターニー	1,727	167	1,894	50	10	60
ウドーンターニー	5,756	2,829	8,585	1,561	348	1,909
ウタデイツ	2,123	50	2,173	223	5	228
アムナータチャローン	1,245	161	1,406	487	120	607

合 計 261,466 29,650 291,116 61,247 9,161 70,408

2010年12月31日の資料より（タムマユツ派は全体の約6%のみ）

第6章 日本軍に巻き込まれたタイ

歴史に残るサヤームとビルマ両国の紛争は、1538年から314年間、延べ44回にわたって続きました。戦っては大体止し、軍備の体制を整えてはまた戦った双方の紛争は、1852年1月のビルマ領内のチャントウンの戦いが最後となり、やっと終止符を打って現在に至っています。

一方、サヤームはビルマとの紛争中に、インドシナ半島を植民地化しようとした強敵、フランスとイギリス両国の圧力により、武器では勝ち目のない弱国だったサヤームは、最終的に自国の独立を守るために、1786年8月11日から1908年3月10日に至る間に、129万6877平方キロもあった大事な国土のうち、延べ14回にわたり78万2877平方キロにおよぶ領土（現在51万4000平方キロしか残っていない）を、歯を食いしばり、当時、両国の植民地だったカンボジア、ラオス、ビルマ、マレー（現マレーシア）などに譲り、手足をもぎ取られ、這ってでも最後まで独立を守り通してきました。

サヤームの失地領土面積及び年月日

第	失地領土	面積 (平方km)	年月日
1	マーク島 (ペナン)	375	1786年8月11日
2	マリッ、タワイ、タナウシー	55,000	1793年1月16日
3	バンタイマート	不明	1810年
4	セーンウィー、シヤントウン、ポン	90,000	1825年
5	ペラク州	不明	1816年
6	シップソーンパンナー	60,000	1825年5月
7	カンボジア領土に	124,000	1867年7月15日
8	シップソーンチュータイ	87,000	1888年12月22日
9	サラウイン川左岸13領土	30,000	1892年10月27日
10	右側領土をラオスに	143,000	1893年10月3日
11	ルワンプラバーン、チャンパーサック	62,500	1893年2月12日
12	シヤマート、プラタボーン、シーソーボーン	51,000	1906年3月23日
13	カラタン州、タランカヌー、サイプリー、パリス	80,000	1908年3月10日
14	カウプラウイハーン	2	1962年3月15日

これで森に囲まれた自然に恵まれた豊かなサヤームの、スワンナプーム（黄金の地）の大地に安静した平和が訪れるかに見えたのですが、予期していなかった中国大陸の内戦（蒋介石総統率いる国民党と毛沢東率いる共産党）や、日本軍の中国侵略、それに、欧州では1939年9月1日のドイツのポーランド侵攻作戦などがきっかけで、世界第2次大戦が勃発し、世界の各地に緊迫した戦雲を巻き起こしました。

日本は、この時点から急に東南アジアの資源に関心を示すようになり、後に1940年7月に、日本の上層部の方針で「南守北進から北守南進」と、決定し、徐々にインドシナ半島やタイにも陰悪な戦雲が迫ってきたのです。

やっこの思いで独立を勝ち得たタイは、一息つく暇もなく、ついに日本が巻き起こした太平洋戦争に巻き込まれてしまいました。

1941年12月8日に、大日本帝国は資源豊かな強敵アメリカ、イギリスに対して、前もって宣戦布告の宣言もなく、突如、日本軍の精鋭がマレー半島のコタバル、タイ南部のプラチュアプキリカン、スラータニー、チュムポーン、ナコーンシータマラート、ソンクラーに、一斉に奇襲上陸を執行し、各地で激戦を交えました。

一方、南方作戦奇襲成功後、時を前後して、太平洋上を隠密行動で航海していた機動部隊から飛躍した淵田美津中佐率いる第一陣の母艦機183機の急襲により、アメリカの真珠湾軍港も火の海

と化し、真珠湾奇襲攻撃で大戦果をあげました。その成功電を世界に流し、万歳、ばんざーい、と歓呼しました。ここに日本軍による太平洋戦争が勃発し、ドイツと肩を並べて第2次世界大戦の仲間入りしたのです。

1941年12月8日未明に、日本軍の奇襲攻撃により敵前上陸を執行した地点及び時間を参考までに記載しておきます。

0115 佗美支隊のコタバル第1次上陸部隊が敵岸に到着した。

0320 海軍機動部隊は真珠湾空襲第一撃を開始した。

（アメリカは12月7日午前7時49分だった）

0335 佗美支隊長は「0215第1回上陸成功」と第25軍に打電した。

0340 大本営はマレー上陸の現地軍の電報を受け、直ちに支那派遣軍、第23軍、北支那方面軍、第11軍、第13軍の各司令官に「マレー方面作戦開始」を通電した。
0350 第25軍は「8日0335マレー方面上陸開始」と大本営に打電した。

0400 近衛師団の吉田支隊はバンコクの南方海岸（バーンブー）に上陸した。

0412 第5師団主力のシンゴラ（ソンクラー）第1次上陸部隊は敵岸に到着した。

0700 近衛師団の先頭部隊はタイの国境を突破してバンコクに向かい前進を始めた。

1230 日本軍のタイ国通過に対するタイ国側の便宜供与に関する交渉が成立した。

2200 佗美支隊はコタバル飛行場を占領した。

(資料…戦史マレー進行作戦より)

日本の不意打ちによる今回の戦争を、アメリカでは開戦当初から「太平洋戦争」と発表し、日本では開戦後、同年の12月21日に、支那事変を含めて「大東亜戦争」と発表し、世界の各地で連合軍との戦いによる血みどろな地獄絵図が描かれたのです。

現在、第2次世界大戦があったことや、日本が戦争したことなどは、もう忘れかけていますし、信じがたい話ですが、日本が中国や、アメリカなど連合軍を相手に戦ったことすら知らない人がいる世代となってきました。

あの地獄絵図のような悲惨だった太平洋戦争は、2011年の12月8日で、開戦70周年を迎えます。

太平洋戦争がはじまった頃、僕はまだ小学2年生でしたので、戦争の恐さも、世界的情勢のことも何も知りませんでした。

当時、弱国だったタイの首相はピブン・ソンクラームでしたが、ピブン首相は中国人の血を引いていながら、信じがたいほど中国人を目の敵にしていました。

タイは、日本とは友好関係を保っていましたが、一方、英国とは親密な関係を持っていたので、密かに英国から武器の援助を受け軍部の共同防衛作戦を展開するなどの提案を英国に出していました。

しかし英国は、はじめの頃はドイツの猛攻に直面していた最中で、本国のロンドンがドイツ空軍の猛爆(1940年8月頃)に見舞われていたために、本国を死守するだけでも精一杯だった状況に追いつめられていたので、タイを援助する余力はなく、実現できませんでした。

日本を恐れ、常に日本の動静を警戒していたピブン首相は、日米の雲行きが次第に悪化し、戦争は避けられない、と見抜き、「タイは戦争に介入しない、中立を守る」と、口をすっぱくして中立厳正を宣言していました。

タイは、太平洋戦争が勃発する前年の1940年5月9日、日タイ平和条約を調印し、1940年6月12日に、日本と不可侵条約を結び、ホッとしていたのですが、この条約は、日本軍の勝手な行動により、踏みにじられてしまったのです。

当時、タイは日本と、日タイ友好条約を結んでいたもので、日本は無断でタイに進駐してくることはあり得ないはずだったのですが、要は、日本の南方作戦部隊は大本営の指示の下に、開戦当日、タイに上陸するにあたり、前もってなんの通報もなく独断でシャム湾周辺の美しい浜辺に奇襲上陸を決行したために、真っ白い綺麗な砂浜に、双方の大事な温かい血を染めてしまったのです。

タイに上陸した日本軍は、マレー半島およびビルマ攻略に進撃するために、タイを通過するだけ、と称していましたが、のちに、タイは日本と日タイ攻防同盟（1941年12月21日）を結び、さらに同月25日に、米英に対して宣戦布告まで宣言し、日本軍とビルマのチャントウン州の共同作戦まで随行することに決定したのです。

窮地に追いつめられたタイが、日本と同盟を結ぶにあたり、日本の武力の制圧の下に仕方なく日本と同盟を決意した、との意見もありましたが、真相を追求してみますと……

タイは日本と同盟を結ぶにあたり、当時のピブン内閣の閣僚内部では、「日本と手を組んだ方が将来有望だ」と、見込んだ賛成グループと、開戦当初から「日本は戦争に負ける」と、判断していたブリデー・パノムヨン摂政、のちにセーリータイ（自由タイ）の指導者となった反対派グループの2派に分裂していたのです。

戦時中日本軍は食料豊かなタイに駐屯し、輸送ルートとなるバンコクのワフラムポーン中央駅、チャウプラヤー川の西にあたる川向こうのトンブリー駅、まだ工事中だったクロントーイの波止場や、ドーンムアン空港などを占領し、兵站基地として、思いのまま自由に活用していました。

ただし、当初、タイに駐屯していた日本軍は、タイを占領した気分に入り、タイの風習文化、それに、法律をも軽視した眼に余る行為を示していた将兵が多かったため、タイ人は「タイは日本に占領されたんだ」と嫌われ、ジュン（背の低い日本人）または、アイ・ジュン、アイハーアイ・ジュン

ン（背の低い日本人奴）と、軽蔑した語気の荒い罵りかたで日本将兵の悪口をいっていました。

タイ人と日本兵とのいざごさは、バンコクだけではなく、田舎の日本軍の駐屯地でも、地元の女性問題をはじめ、日本の憲兵に怪しいと見られ、スパイ容疑で逮捕され、連行されてそのまま行方不明となってしまった人や、その他、様々な問題が起っていました。

特に、1942年に起きたタイ全土から、「アイハー・アイジュン」と、日本の兵士に罵声を浴びせたバーンポーン事件などは、今もなお、時々タイの週刊誌などで取りあげられて話題になっています。

バーンポーン事件

バーンポーン事件の記事の内容は、当時、地下組織によって密かに発行されていた『マハーチョン紙』のタイ語版と、『チンフワパウ』華字紙の記事をそのまま引用した（真実と相違し大げさに記載された部分もある）ものですが、タイ人の怒りを、参考までに簡単に省略してお伝えします。

1942年12月18日、ワッ・ドーントゥーム（ドーントゥーム寺）境内の鉄道工事の現場で、お坊さんが、現場を監視していた日本兵に手のひらで、ビンタをはられた。

お坊さんを侮辱したとして、働いていたタイの労務者が止めようとしたが、日本兵に銃剣で追いつてられ、発砲されて数人の死傷者がでた。

事件発生後、バーンポーンの郡長と警察官が止めにくいが、逆に日本兵に撃たれた。

のちに、カンチャナブリーのキャンプから、3台のトラックに乗った日本兵が応援に駆けつけ、バーンポーン警察署を包囲し、機関銃で撃ち込んできたので、警官も応戦した結果、タイ側は100名あまりの死傷者をだしたが、日本兵の死傷者は僅か4人のみだった（真相は日本軍医を含む6名死亡、重傷3名、タイの労務者家族30名が逮捕されたのみ）今回の事件で、日本兵との間に険悪な事態が生じている。

バーンポーン事件が原因となり、1942年12月26日、ピブン首相の発令により、タイの憲兵隊はバーンポーン周辺から他の地域に移動させられ、カンチャナブリー県および、ラーチャブリー県の県知事、郡長、警察長ならびに同僚を含めて、全員が交代させられる破目となった。

特に、バーンポーンの警察署長だったシースック・ウンカム少尉は本件の全責任を負わされて、マハーサーラカム県セックスー村に赴任させられたのである。

バーンポーン事件に関しては、さらに1942年12月31日に、次のような追加命令が公布された。

バーンポーンのターマカー郡、タームアン郡、各郡の安全体制をとるために、外国人の立ち入りを禁ず。10日以内に立ち退くこと。違反した者は投獄の罪に処す。

その後、また2ヵ月後に、北部7県に対して同じ布令が実施されたが、日本と共同戦線を張った

ピブンらしい処置の仕方である。と結ばれています。

1942年12月18日に発生した、タイの国民の感情を異常な雰囲気巻き込んだバーンポーン事件の真相を追求してみますと、当時、ビルマへの補給ルート之急ピッチで工事中だった鉄道建設に従事していた部隊がワツ・ドントウム（ドントウム寺）を占領し、境内に第9連隊本部と、連合軍の捕虜（POW）のキャンプがあったのです。

その日、ナコーンパトムからきたプーリム僧がワツ・ドントウム境内にいた捕虜に、可哀想だと思い、たばこを恵もうとした途端に、捕虜を見張っていた日本兵に怒鳴られ、いきなりビンタでバシッと、頬を叩かれたのが原因だったと、伝えられています。

現地部隊は自給自足

1941年12月8日の開戦と同時に、陸海空軍とも破竹の勢いで進撃した日本軍は、東南アジアをはじめ、太平洋上で勇敢に戦い、瞬く間に各地で大戦果をあげ、世界の人々を啞然とさせました。しかし、戦いが長引くにしたがい、のちに制海空権を敵に取られてしまい、威厳を誇る軍事力を減少された日本は、自由に身動きできない窮地に追い込まれてしまいました。

物資不足だった日本は、消耗した船舶や、艦船、航空機の増産も思うように急増できず、しかも肝心なガソリンや重油も次第に欠乏してきました。敵艦目指して体当たりを決行する、米兵を恐怖

のドン底に巻き込んだ、かの有名な神風特攻隊機などは、片道の給油しかなかったのです。

内地では食料も欠乏していましたので、すべてが配給制度になっていましたが、何といっても可哀想だったのは、食べ盛りだったお腹をすかしていた小さな子供たちでした。

したがって、海外に駐屯していた外地部隊に対しての補給はほとんど皆無に等しく、タイのような陸続きにいた部隊はまだましとしても、遙か彼方の太平洋上の小さな孤島で、島流しにされたような守備隊には、時々闇夜にまぎれて小型の潜水艦で補給していた程度に過ぎず、将兵は可哀想にひもじい思いで、いつ敵の機動部隊が現れるかもしれない海の彼方を睨み、悲壮な気持ちで守備にあたっていたのです。

自給自足への道

兵站地としてタイに駐屯していた日本軍は、ビルマのインパール作戦などで激戦を交えていた最前線に、補給しなければならぬ立場に迫られていました。食料は現地調達できるので問題ありませんでしたが、肝心な大量の武器弾薬は内地からの補給が必要とされていました。

しかし、大日本帝国は、海戦後わずか半年で、制海権をアメリカに半減されてしまったのです。

それは、1942年6月5日のミッドウェー海戦で、日本の運命が大きく左右されてしまったわけですが、最強を誇っていた日本の連合艦隊は、このミッドウェー作戦で、アメリカの機動部隊が

日本軍の暗号文を解読していたことを感知していなかったために、大敗を蒙る結果を招いたのです。

ミッドウェー海戦で、一瞬先に先手を打たれた日本の機動部隊は、飛来したアメリカの艦載機の急襲に遭遇し、一挙に大事な空母4隻（赤城、加賀、飛竜、蒼竜）を葬られてしまい、悲惨な大敗を被り、それ以来徐々に制海権も制空権もアメリカに奪われてしまったのです。

ですから、手足をもぎ取られた日本の戦力は徐々に低下し、外地部隊へ補給に向かう輸送船は、海軍の軍艦や航空機の護衛もなく、単独で航海していたのですが、ほとんどの船舶が航海中に敵の潜水艦や、空軍機の餌食となり、猛攻に遭遇し、沈められ、惨めな運命を辿っていたのです。

このように、内地からの補給はあてにならない窮地に追い詰められた状況下におかれていたので、軍部は自活方針を立て、弾薬などは邦人関係の小さな工場で作らせていました。

戦争で何が必要なのかも、何も知らなかった僕たち日本人学校の生徒は、或る日、先生から「学校の周りに落ちているくぎや、屑鉄、金物類を何でもいから集めてこい」と、命令され、全校生で探したことがありますし、「家へ帰ってからでも沢山拾ってこい」といわれ、数日間くずやさんみたいに袋を持って、草むらにしゃがんだりして探し歩いたことがあります。

皆で集めてきた屑鉄が何に使われたかは知る由もありませんが、結構集まりました。それからまもなくでしたけども、上級生は学校の真ん前の一軒家で私服の兵隊さんが、密かに迫撃砲の弾を造っていた現場を、担当者から火薬の詰め方や、造り方の説明を聞きながら見学したり、トロークチャ

ンの細い路地で、目の前にチャウプラー川がゆったりと流れている工場で、先輩の藤原さんのお父さんが管理してやっていた藤原鉄工所を見学したりしました。

藤原鉄工所は、先輩にあたる藤原さんのお父さんが責任者でしたが、工場ではドロドロになった真っ赤に溶かした鉄を地べたに並べてある型に流し込んだりして、いろんな武器を作っていました。ここでは主に手榴弾を作っていました。その頃20万個の手榴弾を軍部に収めるために、20003000人の労務者（主に中国人）を使い、生産力をあげていました。

このほかにも、軍部関係の仕事を請け負っていた邦人はまだ数人いますが、市販もしていた太った石畑さんのお父さんも、スリウォン通りのトローク・タングアンスワイで味噌や醤油を作って軍部に納めていました。

南サートーン通りとラーマ4世通りの交差点の近くにあった亀山衣服店では、日本軍の軍服を縫っていましたが、この仕立屋は、元は広東人のアクワンさんが開業していた仕立屋だったのですが、日本軍に買収されてしまったいわくつきの店でした。

タラートブルーにいたセーリーさんは、30人ほどの職工を使い小さな旋盤工場の、ヴィリアム店を経営していたオーナーでしたが、日本軍から10万個の手榴弾を作る大量の注文を取り、喜んでいました。ですが、タイで地下工作していた中国の反日分子から「日本軍に協力したら殺すぞ」と、脅迫され、ストップ令が掛かり、お流れとなってしまったケースもありました。

スリヴォン通りのデーチョーへ曲がる曲がり角の所に、北庄司さん宅の広い庭付きの会社（北庄司公司）兼社宅がありました。

僕は娘の、のりちゃんと日本人学校で一緒でしたので、バンコク市内で空襲があったりしたときに、空襲警報がウーウーと鳴りだすと、北庄司さん宅の、天井に分厚い鉄板で覆った頑丈な防空壕に避難したりしていました。

北庄司さんの仕事場は、スリウォンと、パトゥムワンのウテーンタワイ学校の近くにある工場と、2ヶ所に分かれていました。

北庄司さんは軍部との関係が深く、軍部から軍靴の注文をとり、スリウォンの工場では約5000人の職人を使い、1日に10000足の軍靴の生産にあたっていました。

プラトゥムワンの工場では、男女90人ほどで作業していましたが、そこでは、軍靴の底にあたる靴の裏の革張り作業だけに専念していました。

タノントックにあったBangkok Company（オーナー名不明）では、10000人のタイ人や中国人を雇い、木箱、マッチ、銃座、パン、醤油などを含め、いろんな物を作っていた大掛かりな工場がありました。

大手の三井物産などは、チャウプラー川の流岸に沿って4所に木造船工場を築き、1000トンから2500トンの木造船を造り、木造船の機動力となる焼玉エンジンの工場も完備していました。

ヤワラー通りで日高洋行の看板を掲げ、自宅（ニューロードの中郵便局の斜向かい）ではタイの人たちに柔道を教えていた日高秋雄（ひだかとしお）さんも、孵や、飯盒、ベルト、軍靴などの生産にあたり、日本軍のために尽くしていました。

この他にも、実名がはっきりわかりませんが、ラーマ4世通りのクローン・トイ市場（当時道は市場の所までしかなかった）の近くで、電池関係の営業をしていた「さいた」さんは、150人ほど（女30%）の工員を使い、乾電池や、懐中電灯を作り、軍部に納入していました。

このように自活に見舞われていた外地部隊は、ほとんどがタイと同じような心細い立場に直面していたと、思いますが、食べ物に恵まれていたタイに駐屯していた守備隊は、ほかの地域の部隊よりはずっと恵まれた境遇におかれています。

可哀想だったのは、戦場で激戦を交えていた将兵です。弾が尽きても気力だけで戦い、数人の決死隊を編成し、暗夜にまぎれて敵の陣地に潜り込み、食料や武器を奪って戦っていたのです。

1945年の敗戦間際まで各地で奮戦していた日本の守備隊は、ほとんどが後方からの補給もなく戦っていたのです。特に、悲惨だったのは、退却する余地もない太平洋上の孤島で死守していた将兵ですが、弾丸が尽きるまで敵の猛攻に耐え、最後は全員が潔く敵陣地に切り込み、とても想像もできない悲壮な玉碎（1942年12月8日のバサブア守備隊玉碎、1943年1月2日のブナ守備隊玉碎、1944年7月7日のサイパン守備隊玉碎、1944年9月27日のグアム守備隊玉

碎など）を遂げていたのです。

1945年当初からは、国内の海上輸送すらも困難を極め、兵糧攻めにされていた日本は、最後はアメリカが発明した世界の人道に違反する、当時たった2発しかなかった原子爆弾（日本では、はじめの頃新型爆弾といていた）の実験を兼ねた洗礼を受けたのです。

1発目は、1945年8月6日、当時の人口34万3000人だった平地の広島に投下し、瞬時に約7万8150人の生命を奪い、5万1408人が負傷（将兵の死傷者は含まぬ）および、行方不明となり、家屋建造物の損害が7万6327戸あったうちの4万8000戸全壊、2万2178戸半壊し、罹災者が17万6087人におよび、原爆の被爆で焼け爛れた皮膚の手当ての施しようもなく、可哀想に苦しみ喘ぎながら息絶え、バタバタ倒れていったのです。

2発目は、広島原爆投下に引き続き、同月9日に、山に囲まれた山地帯だった長崎に投下され、ここでも27万人の人口のうち、死者2万3753人、負傷者4万3020人にのぼる悲惨極まりない惨事を蒙ったのです。

世界の歴史はじまって以来、はじめて原爆の実験台にされた日本は泣き寝入りし、遂にポツダム宣言を受諾し、1945年8月15日、連合軍に無条件降伏し、同年9月2日、東京湾に停泊していたアメリカの戦艦ミズリー号艦上で、連合国最高司令官マッカーサー元帥立会いの下で、日本の代表重光外務大臣、梅津大本営参謀長両氏により、降伏状に調印しました。武装解除された日本

は、その後約7年間アメリカに占領されていたのです。

敗戦後のタイ

敗戦時、僕はバンコクのスリウォン通りの、1921年に建造されたドーム型のネルソン・ヘイズ・図書館前にあった、空色の二階建ての綺麗な心地よい家に住んでいましたが、9月2日、日本がミズリー号艦上で降伏調印した同日に、タイに堂々と進駐したマウンテンバッテン東南アジア連合軍最高司令官は、タイの日本軍の武装解除命令を下し、各部所でイギリス軍による武装解除が行われました。

日本の無条件降伏により、まもなく敵国人だった僕たち日本人の資産はいきなり凍結され、外出禁止令が公布され、バンコクの在留邦人の家庭には旧式の長い銃を持ったタイの警官が24時間体制で、家の門の前で警備にあたるようになりました。

家に軟禁され、買い物にも出られず、戦争に負けた日本人の運命は一体どうなるのかと、不安な気持ちにかられたりしましたが、まもなくノンタブリー県の、当時は船でしか行けなかった、電気も水道も何もない水浸しの田んぼの中にあった、連合軍の空襲でタイの人たちが避難していたバンコクから40キロほど離れた西北のバーンブアトーンキャンプに抑留される身となりました。

僕は第2キャンプにいましたが、バーンブアトーン抑留所の日本人担当のイギリスの将校、モー

リス中佐から「君の父は日本軍の特務機関だった、君はスパイの子だ」といわれていました。

僕はキャンプに抑留されていたときに、タイに残りたいと思い、タイ残留願書を提出していたのですが、1946年8月の段階で、急に日本への送還命令が下り、当時、バンコクの日本軍病院だった第16陸軍病院に移動させられ、病院で帰還船待ちとなりました。

ですが、すべては運次第、僕はタイ残留希望で、残留組の仲間に入っていたのですが、送還直前に、残留OKのVサインをもらい、運よくタイに残ることができたのです。

タイでは敗戦直前まで、ビルマ戦線から退却してきた部隊を含め、タイで最後の決戦を挑むために再編成し、約11万名にのぼる兵力で各地の主要地域の守備にあたっていました

ですが、敗戦となり、後に武装解除された将兵は、各部隊ごとに隔離され、数ヶ所の分散した捕虜収容所に収容されました。タイの各地にいた約3000名の在留邦人は、軍隊ときり離され、邦人は1945年9月はじめ頃からバンコクからおよそ40キロ離れた西北のノンタブリー県の運河沿いの田んぼの中にあったバーンブアトーンキャンプ抑留所への移動が開始されました。

バーンブアトーンには、3ヶ所にキャンプがあり、第1キャンプに台湾人約450人を含めて約1600人、第2キャンプが一番大きなキャンプで約2000人、第3キャンプは後から急増されたキャンプで、270人ほどしかいませんでした。有名な横田画伯、チャンマイの田中盛之助写真師、坊主に変装して潜り込んでいた辻参謀の7人の部下や、それに大使館関係の人が多かったキャ

ンプでした。

敗戦時義部隊に配属し、タイに配備されていた日本軍

(タイの資料より)

場 所	部 隊	兵 力 (人)
チャンラーイ	-	-
ラムパーン	-	-
バーンポーン	-	-
ピサヌローク	第 4 軍	8 0 0 0
チャンマイ	第 5 6 軍	1 5 0 0 0
ナコーンサワン	第 5 4 軍	1 0 0 0 0
カーンチャナブリー	第 1 5 軍	1 0 0 0 0
ナコーンパトム	第 3 3 軍	3 5 0 0
バーンポーン	第 3 3 軍	3 5 0 0
プラチュアプキリカン	第 2 9 軍	5 0 0 0
バンコク		2 0 0 0 0

ナコーンナーヨック	第 3 7 軍	1 2 6 0 0
(この内パークブリー郡バーンフアリーに25000人移動)		
プラタポーン	第 2 2 軍	1 0 0 0 0
(当時タイ領)		
	鉄道隊	5 0 0 0
	船舶隊	5 0 0 0

敗戦後邦人及び軍人が収容されたキャンプの場所

- 1 ナコーンナーヨック捕虜収容所
- 2 サラブリーのノーンホーイ病院
- 3 カーンチャナブリーのカウディン捕虜収容所
- 4 バーンポーン捕虜収容所
- 5 バンコクの第16病院
- 6 バンコクのサナーンパウ捕虜収容所
- 7 バンコク港クローン・トーイのNew Life Camp
- 8 戦犯容疑者ノンタブリー県のバーンクワン刑務所
- 9 邦人ノンタブリー県のバーンブアトーン抑留所3ヶ所

10 大使館員バンコクの旧ペツプリー通りの大使公邸

日本の資料より

1 1944年1月1日、タイに配備されていた日本軍の守備隊は独立混成第29旅団に編成され、12月に、野戦第39軍となりました。

独立混成第29軍旅団長 田中信男少将

独立歩兵第158大隊 片山文雄大佐

独立歩兵第159大隊 鈴鹿謙吉大佐

独立歩兵第160大隊 駒沢貞安大佐

独立歩兵第161大隊 照井勇次中佐

独立歩兵第162大隊 外池真七郎中佐

2 1945年7月16日、上記の第39軍を解消し、ビルマ戦線から撤退してきた第22師団及び15師団を、第18方面軍に再編成し、タイの防衛に備えました。

第18方面軍司令官 中村明人中将

第15軍司令官 片村四八中将

第4師団長 木村松治郎中将

第56師団長 松山裕三中将

第15師団長 渡左近中将

第22師団長 平田正判中将

独立混成第29旅団長 佐藤源八少将

3 敗戦時タイ全土に配備されていた第18方面軍の兵力は11万7150名で、部隊の名称は次のように区別され、各地に配備されていた判明した兵力は次の通りでした。

『義』 第18方面軍司令部司令官 中村明人中将

『富士』 第15軍司令部 片村四八中将

『竜』 第56師団長 松山裕三中将

『淀』 第4師団長 木村治郎中将

『祭』 改『霧島』 第15師団長 渡左近中将

『原』 第22師団長 平田正判中将

『体』 独立混成第29旅団長 佐藤源八少将

『弓』 第33師団長 田中信男少将

鉄道隊長 桑折勝四郎

4 敗戦時の兵力配置地域

チャンマイ	12000人
ラムパーン	12000人
ウボンラーチャターニー	12000人
ワンポー	10000人
パーンブリー	8000人
バーンボーン	11000人
ナコーンパトム	10000人
バンコク	20000人
ナコーンナーヨック	不明
5 終戦後軍人軍属及び邦人が収容された収容所	
ナコーンナーヨック捕虜収容所	
第15軍	8000人
第4 師団	12000人
第22師団	13000人
第37師団	10000人
第56師団	11000人

6 海軍及び自動車部隊	16000人
タイに残された作業隊員	9000人
6 バンコク	
バヤータイ捕虜収容所	760人
旧ベツプリー通りの大使館邸及び文化会館内	296人
7 ノンタブリー県	
バーンクワン刑務所 軍人延べ	700人
バーンクワン刑務所 邦人約	300人
バーンブアトーン第1抑留所約	1300人
バーンブアトーン第2抑留所約	1980人
バーンブアトーン第3抑留所約	270人
8 バーンブアトーンキャンプ及び大使公邸別紙資料より	
キャンプ名 男(人) 女(人) 子供(人) 合計(人)	
第1キャンプ	1037 100 90 1227
第2キャンプ	1667 302 不明 1969
第3キャンプ	220 41 9 270

大使館邸

71

85

26

182

合計

2995

528

125

3648

上記の内

* 第1キャンプの1227名は邦人のみ台湾人約450名は含まぬ

* 第1キャンプで男1人及び女1人がカリエスで死亡

* 第2キャンプで中原報の鳥越氏酒の飲みすぎで死亡

夕方男が1人クローンで溺れて水死

* 第3キャンプの横田画伯夫人盲腸で死亡

* 大使公邸には一般邦人約30名が同居していた

* ナコーンナーヨック収容所で644人の将兵が死亡

(現士官学校ビル所在地に埋葬していた)

* ナコーンナーヨック収容所にいた146人の朝鮮人は先に本国に引き揚げた

* この他に韓国(当時朝鮮)人約1200人が別にアユッタヤーに抑留されていた説があるが現場不明

上記のバーンブアトーンキャンプの資料は、2人の友人から入手した資料です。人数が一致しませんが、参考までに両方とも明記しておきます。

なお、第3キャンプには、命からがら着の身着のままで退却してきたビルマ組を含めて、約270人の同胞が収容されていました。

第3キャンプ内にはクローン(運河)に面して、竹の柱にニッパ椰子の屋根で覆われた9棟のバラック建の小屋があり、9班に分かれていました。

友人から入手した当時の第3抑留所の名簿を参照しますと、判読できない箇所もありますが、ビルマから戦火を逃れ、命がけでタイの北部から白骨街道だ、といわれた険悪な山岳地帯を徒歩で越境してこられた可哀想なビルマ組(名前の前の*印)の人が36名含まれています。

この他にも、敗戦後坊主に変装した辻参謀(辻政信)が青木憲信僧と名乗り、一時日本人納骨堂に身を潜め、のちに辻参謀が無事に重慶へ潜行するまで見守っていた、やはり坊主に変装して飛行機がなくて地上勤務になっていた元特攻隊員だった辻参謀の部下7名も、第3キャンプの第1棟に身を潜めていました。

ですが7名の部下は、日本へ引き揚げる寸前に、ニューライフキャンプで英軍に検挙され、隔離され、戦犯容疑者の疑いでバーンクワン刑務所に送還されたのですが、気の毒だった本人の名前の前にx印を記しておきます。

ビルマの山岳地帯のジャングルをさ迷い、タイに退却してきたビルマ組の人は、第1キャンプと、第2キャンプにもいましたが、身のまわりの所持品もお金もほとんどなく気の毒でした。キャンプ内では「ビルマさがり」と、いわれ、お国のために尽くしたのに冷たい視線で見られていました。

敗戦当初帝国大使館の人は、日本文化会館の人を含めて450名ほどがお国のために活躍していました。大使館関係の人は、山本熊一大使、石川総領事をはじめ、約296名が、主に静かな旧ペツブリー通りの木々に覆われて水上マーケットのようなクロン・ペツブリーが流れていた傍にあつた大使公邸内に軟禁されていました。

残りの約156名(名簿内の大使館嘱託には日本文化会館の人も含む)の人たちは、1946年6月10日に、第一陣でキャンプから日本へ引き揚げる日まで第3キャンプに収容されていました。

第3キャンプは9班しかない小さなキャンプでした。キャンプ内の各班の入れ替わりがあつたようですが、当時の古ぼけた判読できない部分もある名簿を参照し、何かのお役に立てばと思います、参考までに全員の姓名を記しておきます。

第1棟の名簿より

番号	棟及部屋番号	姓名	年齢	職業
1	1の1	細井正三	32	三菱商事

2	1の1	三田耕一	28	“
3	1の1	泉正雄	29	“
4	1の2	中山衛平	48	“
5	1の2	新部捨三	39	“
6	1の2	菊池輝明	24	“
7	1の3	高橋繁雄	38	“
8	1の3	池田柳太郎	49	“
9	1の4	*鈴木三郎	39	昭和製鉄
10	1の4	*邦本起成	37	“
11	1の5	*白畑史	41	“
12	1の5	*西本八重門	27	“
13	1の5	*下岡光男	27	“
14	1の9	智野藤吉	53	僧侶
15	1の9	小此木孝次	32	“
16	1の9	佐々木教悟	31	留学僧
17	1の7	x中島節也	23	“

4 2	4 1	4 0	3 9	3 8	3 7	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	3 0	2 9	2 8	2 7
2 の 5	2 の 5	2 の 5	不明	2 の 4	2 の 4	2 の 4	2 の 3	2 の 3	2 の 3	2 の 2	2 の 2	2 の 2	2 の 2	2 の 2	2 の 1
中島藤助	井上九蔵	寺田鉄次郎		鈴木清太郎	佐竹惟信	寺田富雄	野口定一	河村芳太郎	佐々木丈四郎	臼井正平	小野正直	松崎正義	角替益森	大庭強	小野正信
4 7	4 4	5 0		3 4	2 3	3 4	4 7	4 1	3 5	2 4	3 4	3 7	3 4	2 7	3 3
“	“	“		“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“

2 6	2 5	第2棟の名簿より			1 5	2 6	2 5	2 4	2 3	2 2	2 1	2 0	1 9	1 8
2 の 1	2 の 1	1 の 3	1 の 5	1 の 1	8 の ?	1 の 1 0	1 の 1 0	1 の 1 0	1 の 6	1 の 6	1 の 6	1 の 7	1 の 7	1 の ゝ
大西幸市	鈴木忠	東郷京一	鈴木嘉作	鈴木市郎	星野鉦造	大東一彦	大東喜美子	大東武夫	X小澤常敬	X小林憲雄	X富永徳孝	X久保厚仁	X矢神邦雄	X福沢孝
2 7	3 6	3 4	4 7	2 6	4 0	2 歳11ヶ月	2 6	3 6	2 3	2 3	2 2	2 2	2 1	2 0
“	泰紡債株式会社	食堂経営	“	太田商店	日本人会	“	“	大建産業	“	“	“	“	“	“

6 5	6 4	6 3	6 2	6 1	6 0	5 9	7 4	7 3	7 2	7 8	7 1	7 7	7 0	第3棟の名簿より	8 5
3 の 7	3 の 4	3 の 4	3 の 4	3 の 3	3 の 3	3 の 3	3 の 2	3 の 2	3 の 2	3 の 1	3 の 1	3 の 1	3 の 1		2 の 1
*木村俠一	*平川堺	*藤田義之	*西清一	藤原正策	津田義郎	渡邊進	*山田十一	*近藤貢	*東虎男	*田川トミ子	*東郷京市	*池田静子	*池田光男	杉浦嘉六	
3 4	2 9	2 4	3 7	5 2	3 8	3 8	2 8	4 3	3 1	3 4	3 4	3 5	4 5		3 8
丸永株式会社	食料品商	〃	日綿実業株式	〃	〃	泰国ゴム株式	運送業	食堂経営	食料品商	ナシ	食堂経営	ナシ	土木建築業	〃	

5 8	5 7	5 6	5 5	5 4	5 3	5 2	5 1	5 0	4 9	4 8	4 7	4 6	4 5	4 4	4 3
2 の 1 0	不明	2 の 9	2 の 9	2 の ∞	2 の 8	2 の 8	2 の 8	2 の 7	2 の 7	2 の 7	2 の 7	2 の 6	2 の 6	2 の 6	2 の 6
松本住紀	萩野 ？	菅 真 悟	片桐嘉寄男	吉居理	千葉正一	関 仁	渡邊晴忠	尾崎敬三	高野儀平	森俊太郎	山岡正男	渡邊隆夫	高橋澤治	渡邊昌一	杉山国夫
4 6		3 6	3 0	2 2	2 2	3 7	4 2	2 8	4 1	3 3	3 3	3 8	4 6	4 1	4 7
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

9 5	9 7	9 3	9 2	8 9 へ	9 1	9 0	8 8	8 6	8 7	8 3	8 5	8 4	8 2	8 0	7 9
4 の 6	4 の 6	不 明	4 の 5	4 の 4	4 の 4	4 の 4	4 の 4	4 の 3	4 の 3	4 の 3	4 の 2	4 の 2	4 の 2	4 の 1	4 の 1
*林正男	*児玉寿雄		*堀井宗治郎	*細井實	木村芳雄生	古島晴人	大場英司	*鈴木栄介	*大野正勝	*大伏廣	*竹内尚之	*大角重信	*川口典雄	*岩崎千代太郎	*坂部収
2 8	2 7		3 7	2 7	2 9	2 7	3 9	4 1	2 7	2 8	2 7	3 7	3 1	4 5	3 0
〃	〃		塩野義製薬	細井商店	八木株式	日綿実業	三井倉庫		〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

8 1	第4棟の名簿より														
4 の 1	1 2	1 3	1 0	1 1	0 7	0 8	0 7	0 9	0 6	0 5	6 9	6 8	6 7	6 6	不明
	3 の 7	3 の 6	3 の 6	3 の 6	3 の 5	3 の 5	3 の 5	3 の 5	3 の 2	3 の 1	3 の 8	3 の 8	3 の 7		
*花原定義	松尾光太郎	波多野秀	田中盛之助	中谷正一	小浜正助	湯浅亮司	石木貢	長野長雄	野村節男	堂本屋造	*古市誠一	*益永久太	*新井三之助		
4 4	2 7	4 6	7 3	3 1	3 2	3 1	3 4	6 2	2 9	5 0	3 6	5 0	3 2		
東洋綿花	大南公司	〃	写真業	東洋綿花株式	チエンマイ領事館	〃	田村駒株式	齒科医	自動車運転手	写真業	丸永株式会社	写真館経営	ダンス教師		

1 4 8	1 4 7	1 4 9	1 4 6	1 4 4	1 4 3	1 4 5	1 4 2	1 4 0		1 4 1	1 3 8	1 3 7	1 3 5	1 3 4	1 3 6
6 の 7	6 の 7	6 の 7	6 の 7	6 の 6	6 の 6	6 の 6	6 の 6	6 の 5	6 の 5	6 の 5	6 の 5	6 の 4	6 の 4	6 の 4	6 の 4
高橋貞雄	宮崎静馬	本郷信吉	伊藤武雄	山下泰弘	浜野信夫	丸山乗一	寺山成一	山根敏正	早川卓郎?	大槻吉蔵	大塚弦四郎	小谷英一	吉田季孝	村松光司	伊藤勇作
2 7	3 2	2 5	3 3	2 4	2 8	2 5	2 4	3 8		2 7	2 6	2 7	2 4	2 9	3 0
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

1 3 3	1 3 2	1 3 1	1 2 8	1 2 7	1 2 6	1 3 0	第6棟の名簿より		1 0 9	1 5 2	1 5 3	2 0 9	1 2 9	1 2 8	1 2 7	1 2 6
6 の 3	6 の 3	6 の 3	6 の 2	6 の 2	6 の 1	6 の 1			5 の ?	5 の 1	5 の 1	5 の 1	5 の 2	5 の 2	5 の 2	5 の 3
上原栄三郎	大西重紀	小竹健次郎	井上鳴子	酒巻政代	上村静代	上村辰巳			山田良子	鈴木泰	鈴木智子	鈴木忍	遠山千博	小林進	笹岡巖	八幡三郎
2 4	2 8	3 0	2 9	2 4	3 3	3 8			2 2	4 ヶ月	2 8	3 2	3 3	4 4	3 8	3 2
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

1 9 1	1 9 2	1 9 0	1 7 5	1 7 4	1 7 3	1 7 2	1 7 1	1 7 0	1 6 9	1 6 8	1 6 7	1 6 6	1 6 5	1 6 4	1 6 3
7 の 2	7 の 2	7 の 2	7 の 9	7 の 9	7 の 9	7 の 9	7 の 9	7 の 5	7 の 5	7 の 5	7 の 7	7 の 7	7 の 7	7 の 1	7 の 1
秋葉義男	藤田金之助	山本一秋	秋田寛信	中村悦夫	奥田重元	加藤忠夫	新井章	井上興九郎	今成豊吉	出羽倉次	佐藤憲治	万力廣	佐藤秀次	川勝勇二	中島富三郎
1 8	2 2	2 6	2 2	2 3	2 3	2 2	2 3	3 6	3 9	4 1	2 3	3 4	4 2	3 3	3 7
〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

1 6 2	7 の 1	6 の 9	1 6 1	1 6 0	1 5 9	1 5 8	1 5 5	1 5 7	1 5 6	1 5 4	1 5 2	1 5 1	1 5 0	1 5 3
第7棟名簿より			6 の 1 0	6 の 1 0	6 の 1 0	6 の 1 0	6 の 9	5 の 9	5 の 9	6 の 9	6 の 8	6 の 8	6 の 8	6 の 8
萩原英次	山田ヨシ子	西村秀男	中馬徹雄	山崎五市	中尾直	玉井一郎	斉藤為次	澤田博吉	北川虎男	難波経道	原英太郎	福井満	杉浦桂一	林幹彦
4 7	2 2	2 7	4 9	4 0	4 0	3 7	4 1	?	2 3	2 4	2 4	3 0	2 8	2 4
帝国大使館	白木産業	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃

2 3 5	2 3 4	2 3 3	1 8 8	1 8 7	1 8 6	1 8 5	1 8 4	1 8 3	1 8 2	1 8 1	1 8 0	1 7 9	2 3 2	2 3 1	2 3 0
8 の 7	8 の 6	8 の 6	8 の 6	8 の 5	8 の 5	8 の 5	8 の 4	8 の 4	8 の 4	8 の 3	8 の 3	8 の 3	8 の 2	8 の 2	8 の 2

田邊あき	加藤ヨシイ	加藤カツエ	加藤信雄	阿部勇吉	赤壁徳三郎	横山良一	伊藤亮三郎	片山強	藤澤亮三	柴武四郎	三田野徳治	荒井清	成瀬真理子	成瀬悠紀子	成瀬邦彦
------	-------	-------	------	------	-------	------	-------	-----	------	------	-------	-----	-------	-------	------

3 3 3	2 6 6	4 6 6	4 7 7	3 3 3	5 1 1	3 9 9	4 3 3	4 2 2	4 8 8	3 4 4	3 7 7	4 2 2	1 1 1	2 2 2	4 4 4
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

大使館嘱託

第8棟の名簿より

不明

2 2 9	1 7 8	1 7 7	2 0 1	2 0 0	1 9 9	1 9 8	1 9 6	1 9 7	1 9 5	1 9 4	1 9 3	1 5 1	1 5 0
8 の 2	8 の 2	7 の 1 0	7 の 1 0	7 の 8	7 の 8	7 の 6	7 の 6	7 の 6	7 の 4	7 の 4	7 の 4	7 の 3	7 の 3

成瀬静子	成瀬秀雄	高原嘉成	田島日出丸	桑原秀光	岩崎陽二	橋本澄作	桑原忠雄	島内直史	植松茂	飯塚勉	手代木善八	久保田さと子	中西柳
------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-----	-----	-------	--------	-----

3 0 0	3 3 3	3 1 1	2 7 7	2 3 3	2 4 4	2 7 7	3 8 8	3 3 3	2 5 5	2 8 8	4 1 1	2 8 8	4 4 4
-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------	-------------

二見産業株式

“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	日本人会
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	------

大使館員

2 6 2	2 5 9	2 6 0	2 5 6	2 5 8	2 5 5	2 5 7	2 0 3	2 6 4	2 0 2	2 0 4	第9棟の名簿より				2 0 6
9 の 3	9 の 3	9 の 3	9 の 2	9 の 2	9 の 2	9 の 2	9 の 1	9 の 1	9 の 1	9 の 4					9 の 4
澤田紀代	西畑律子	細井啓子	下原	平澤久子	高梶藤子	高梶春代	里見時宗	里見マリワラ	里見宗次	中島福三郎					伊藤勇
2 2	2 3	2 6	2 4	2 5	2 0	2 9	1 7	4 0	4 1	3 8					3 8
“	“	大使館嘱託	“	“	“	“	“	“	“	大使館文化会館					“
“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“					不明

2 0 5	2 4 9	2 4 8	2 4 7	2 4 9	2 4 6	2 4 5	2 4 4	2 4 3	2 4 2	2 4 1	2 4 0	2 3 9	2 3 8	2 3 7	2 3 6
9 の 4	8 の 1 0	8 の 1 0	8 の 1 0	8 の 1 0	8 の 9	8 の 9	8 の 9	8 の 9	8 の 8	8 の 8	8 の 8	8 の 8	8 の 7	8 の 7	8 の 7
松本薫	久松恵美子	久松幸枝	久松静	久松新臓	正寺良子	坂本喜代子	大石マサヨ	城戸初子	勝木富哉	船田富子	船田俊子	中島文子	竹蓋ちいほ	長谷川キミ	星野加津
4 4	8	1 3	3 9	5 1	2 5	3 2	2 7	2 6	2 5	2 0	2 2	2 3	2 2	3 1	3 0
“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“	“



$$\begin{array}{ccccccccccc} 9 & 9 & 9 & 7 & 7 & 7 & 5 & 9 & 9 & 9 \\ の & の & の & の & の & の & の & の & の & の \\ & & & 2 & 2 & 2 & 5 & 4 & 1 & 1 \\ & & & & & & & & 0 & 0 \end{array}$$

吉川英男
柳 博
伊藤勇
山田良子
石黒千司
上野遺司
津知屋袈裟寿
山本 一秋
藤田金之助
秋葉義男

$$\begin{array}{cccccccccc} 1 & 2 & 2 & 2 & 2 & 2 & 2 & 3 & 2 & 2 \\ 8 & 2 & 6 & 3 & 7 & 7 & 2 & 8 & 2 & 3 \end{array}$$

“ “ 大使館 “ “ “ 白木産業 “ “ “



2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2	2
2	1	1	1	1	1	1	5	1	6	6	6	1	0	0	6
0	9	6	2	5	4	3	4	1	6	5	3	0	5	6	1
9	9														
の	の	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9	9
1	1	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
0	0	9	7	7	7	7	6	6	5	5	5	5	4	4	3

島本達
伊藤勇
松本馨
磯秀一
磯テル子
磯宏一
磯啓周
大上聡
大上智多子
長井二千代
浦田義郎
佐伯末人
中島章
柏原豪
安藤浩
小高文直

$$\begin{array}{cccccccccccccccc} 2 & 2 & 4 & 2 & 2 & 3 & 3 & 2 & 2 & 1 & 1 & 3 & 4 & 4 & 3 & 2 \\ 3 & 5 & 5 & 3 & 6 & 0 & 2 & 3 & 9 & 1 & 3 & 8 & 0 & 5 & 0 & 1 \end{array}$$
[illegible]



キャンプの野外塾



第一キャンプで児童生徒のラジオ体操



バーンブアトーンキャンプ
の運河で水浴



皆で記念撮影

日本へ引き揚げ開始

敗戦後敵国人だった日本人は家庭に軟禁され、さらに各地の抑留所に収容されていましたが、在留邦人と軍隊は完全に別々に切り離されていました。

軍隊では、日本軍がタイで最後の決戦場にしようとして試みていたバンコクから東北へ107キロほど離れた標高1351メートルの山の嶺に囲まれた2万1000ライ（1ライは1600平米）もあるナコンナーヨックでしたが、敗戦と同時にそのまま英軍の管理下の日本軍の捕虜収容所となり、およそ70000名の将兵が収容されていました。

日本軍の将兵の引き揚げは、バーンブアトーンキャンプに収容されていた一般邦人よりも一足先に、1946年5月15日頃から開始されました。

ただし、国のために戦った作業隊として最後までタイに残された可哀想な9000名の隊員は、約2年間使役としてこき使われ、1947年末最後の引き揚げ船で、家族が待ちわびている祖国へ向かいました。

タイの地方に抑留されていた部隊の地方からの移動は、主に汽車を利用し、プラチンブリーで乗り継ぎ、バンコクの英軍が管理していたクローン・トイー港のニューライフ・キャンプ（新生キャンプ）で、机を並べた数人の英軍の調査官の前で取り調べを受けてから、クローン・トイー港から船に乗り、コ・シーチャン（シーチャン島）で本船に乗り換えて祖国へ向かっていました。

バーンブアトーンキャンプの邦人の引き揚げが開始されたのは、第1陣約3300名が、1946年6月10日の朝方からでした。

バーンブアトーンキャンプでトタン屋根で覆われた50トン積のトイレもない艀に詰め込まれた同胞は、クローン・バーンブアトーンを溯り、チャウプラヤ川で右折し、ノンタブリー県のバーンクワン刑務所の前を通過し、クローン・トイー港で上陸し、そこから英軍が管理していた遠方にあるニューライフキャンプ（新生キャンプ）まで歩かされたのです。

それと、敵愾心を持った意地悪なイギリス兵に身の回り品を没収されたりし、男は上半身裸にされ、戦犯容疑者や、辻正信参謀（体に弾痕の傷跡が30ヶ所ほどあった）が潜りこんでいないかを、徹底的に調べられ、各々が首実検され、CLEARANCE DETAINと記入された紙切れを渡され、DETAINと記入した紙を持っている人は、クローン・トイー港で乗船間際に隔離され、バーンクワン刑務所に放り込まれ、更にシンガポールのチャンギー刑務所に連行されたそうです。そんな気の毒な人たちもいたのです。

ニューライフキャンプで取調べを終えた一行約3300名の同胞は、6月15日の未明に叩き起こされ、まだ真つ暗なニューライフキャンプを4時半頃に出発し、各自が自分たちの重い手荷物をぶらさげ、あるいは子供をおんぶして波止場まで約1時間半も歩かされました。

閑散としてまだ寝静まった6時に、当時まだ未完成だったクローン・トイー港に到着し、人員

点呼をし、タイ当局からお別れに1人5キロのお米を貰い、港に停泊していた800トン級の南明丸に乗船し、チャウプラー川を河口目指して下り、東海岸のチョンブリー県のコ・シーチャン(シーチャン島)で待機していた本船の辰日丸へ向かいました。

小型の南明丸がコ・シーチャンで待っていた6779トンの辰日丸に到着し、親切な辰日丸の船員さんたちに迎えられた一行は、やっと本船に乗船し、これで間違いなく祖国に帰れると、ホッとしました。元気な若者は使役として終日みんなの荷物の荷揚げの手伝いをし、その日は疲れ果てた体を癒し、コ・シーチャンで大休止したのですが、とつぷりと暮れた夜空には、十五夜の満月の明るい月光が静寂な海面を照らして美しい侘しさを誘う夜でした。

辰日丸は16日の午前6時半にコ・シーチャンを後にし、戦火で破壊された祖国を目指して出航し、名残り惜しいタイに「サワッデー」と、別れを告げたのです。

航海中日本までの飲料水は、1日一人にコップ一杯のみの配給しかない厳しい規制がありました。が、みんな我慢し、7月3日に待望の鹿兒島に到着し、殺虫剤(DDT)を頭からまかれて、無事に祖国の地を踏んだのです。

第2陣は1946年8月7日、バーンブアトーンキャンプから第16陸軍に連行された135名のグループと、バンクワン刑務所で戦犯容疑の疑いで取調べを受けていた刑務所から釈放された日高秋雄さん一行を筆頭に225名のグループ、総勢360名がクロン・トイ港で合流し、リ

バティー型V93号の上陸用船艇に乘せられ、コ・シーチャン(シーチャン島)に待機していたウイリヤムデン・ハウエン号に乗り換え、8月22日無事に神奈川の浦賀に上陸し、待ちわびていた家族の元に戻りました。

最後にシンガポール経由で日本へ送還されたのは、僕と親しかった日高洋行の日高邦夫さんの家族、藤原鉄工所とタイランドホテルを経営していた藤原家の家族、ワンブラパーで歯科医を開業していた松尾さん一家、それに、パッターニーで医者をしていた父と親しかった芝さんの家族を含めて19名でした。

一行は、1946年10月中旬頃約300名の将兵と一緒にクロン・トイ港から小型船に乗船し、シンガポール経由で日本へ送還されることになっていました。

しかし、シンガポールのジョロンで本船に乗り換えて日本へ向かう予定になっていましたが、生憎迎えの帰還船がこなかったため、迎えの本船がくるまで待たされることになりました。ジョロンのゴム林には宿泊先も何の設備も何もない閑散とした所でしたので、一行は、急遽将兵と力を合わせて木を切り倒し、一時しのぎのほったて小屋を作り、そこで1ヶ月ほどキャンプ生活を余儀なくされました。結局同年の11月23日に無事に佐世保に到着し、やっとの思いで懐かしい故郷に辿り着いたのです。

タイにいた同胞はほとんど全員が日本へ送還されてしまいました。当初、タイ残留組の希望者は

1000名ほどいましたが、実際に公式にタイに残留できた人たちは、様々な条件の制約があり、わずか107名に過ぎませんでした。

僕も運よく残れたその中の一人ですが、在留邦人の他にも、軍のキャンプからひそかに逃げだした将兵もかなり（約1000人？）いましたが、当局から賞金付きで追跡され、あるいは密告されてほとんどの人たちが逮捕されてしまいました。

ですが、着の身着のままの状態で逃げ回っていて、運よく親切なタイ人に助けられ、田舎の農家などに身を潜め、農民になりすまして難を逃れ、のちにお世話になった農家の娘と結婚し、子宝に恵まれた人たちも結構いました。

日本は戦争に負けてしまいました。負けたために敵国人だった日本人の財産は全部凍結され、没収されてしまいました。

僕も日本人だったので、その仲間の一人ですが、悲しいかな、我が家の家財道具は、鍋釜をはじめ、小さな楊子入れからこまごました茶碗皿まですべてを、何一つ残さず綺麗さっぱり、タイ敵産管理局の役人に没収されてしまったのです。

日本の敗戦のお陰で、海外で活躍していた企業関係の資産や、個人の資産も凍結されてしまい、しかも愛着がある家庭の家財道具なども含めて全部没収されました。

戦争とは、お互いに堂々と殺し合う戦場だけでなく、本土にいる国民の生命をも罪の意識もなく

容赦なく奪い取り、住居も徹底的に破壊されてしまい、おまけに国家のために尽くした敗者は、罪の有無を問わず一方的に戦犯容疑者の責任を負わされ、死刑にされるかもしれない運命を背負わされてしまうのです。

戦争が終わったから、もうこれで安心だ、と楽観できるのは戦勝国の人たちであって、敗者は惨めな思いで、相手がなすがままに服従し、暗黒の棘の道を辿らなければならない羽目に落ちてしまうのです。

特に、敗戦の日まで海外に移住していた同胞は、長年汗水垂らして働き、コッコッ貯めた財産をはじめ、日々使用している必需品となる大事な商売道具や、家財道具までも容赦なく没収されてしまい、着の身着のままの素っ裸にされ、これからどうすればいいのか、どうやって生きていけばいいのかと、途方に暮れるものです。

タイの場合、タイの女性と結婚し、タイ人の家族と一緒に暮らしていた人たちは、この財産没収に関しては、運よく問題なく助かっていますが、わずか数人にすぎません。

僕もタイに残った一人ですが、当時、車もほとんどなかったクローン（運河）に囲まれた森の町、夜空に美しい星がキラキラ輝いていた、まだタイ式の高床式の家が残っていた静かなバンコクで、義理の母と2人で暮らすことになりました。

まず、住み慣れたタイ人の知人が多かったネルソン・ヘイズ・図書館周辺を物色し、スリウォン

通りに面した一番安いトタン屋根の古い汚い古ぼけた倉庫だった家を借りることにしました。

戦後はじめて住む家は、床下に汚水が溜まり、大きな溝鼠がチュートチュート叫び、鬼ごっこをしながら走り回っていました。

部屋の中は部屋の仕切りも、窓も台所も何もないただっ広い部屋が一部屋あるのみで、裸電球がたったひとつだけブラブラぶらさがっている埃だらけのお粗末なあばら家でした。

キャンプ生活から釈放されて、やっと自由の身となり、タイの学校へ行けると思っていた僕でしたが、家を借りたその日に、義理の母から「今日からお前が家の経費から生活費を全部賄うのだ」と宣言され、予期していなかっただけに、僕の人生はキャンプを出てから一変してしまいました。何も知らなかった無知な僕は、その日から家の柱となり、社会人となったのです。 社会人となったのですと、偉そうなことを言っても、実は、ならざるを得なかっただけの話です。

家を借りたのはよかったのですが、家の中を掃除する段階になって、はじめて気がついたことに、家の中には、埃を掃くほうきもバケツも雑巾も何もなかったのです。そこで、隣近所の知り合いから掃除道具を借りてきて大掃除をしました。掃除が終わってから一休みし、考えてみると、次にご飯を炊くにも、炊事道具はおろか、何もありませんでした。

義理の母がお金を持っていましたので、何とか助かりましたけれど、毎日使用する必要品を、まず最少限に止めるべく、茶碗、皿、コップ、おはし、スプーン、フォークを2人分ずつと、あとは、

やかん、鍋、釜、ナイフ、七輪、バケツ、ひしゃく、丸い洗面器、ほうき、ござ、ごみとり、枕、炭、松脂、マツチ、石鹼、お米、酢、醤油、砂糖、塩、大きな団扇などの、どうしても必要とする日常品だけを揃えました。布団や毛布は高かったのですが、買いませんでしたけれど、懷には1銭のお金もない着の身着のままの僕でしたが、僕はこの時点から気づかぬうちに節約をはじめていたのです。これが、僕が15歳のときに経験した、おんぼろのトタン屋根の下で暮らしながら、見知らぬ荒れ果てた複雑な社会へ飛び出した人生初スタートだったのです。

1銭のお金もなかった僕はどうしたらいいのか、お先真っ暗でしたけれど、母に勝手に決められたヤワラー通りのヤワラー薬局の2階で歯のクリニックを開業したばかりの、元ソングラーの我が家にいた西野智先生の所で仕事をするようになりました。

僕が西野先生の所で仕事をはじめたのは、1946年10月15日からでしたけれども、初日に僕が仕事に行く日になっても、母は無言のままで1銭のお小遣いもくれませんでした。

ですから、僕はスリウォンの我が家から、長ズボンがなかったのです、学生服の姿（半ズボンにワイシャツ）でチャローンクルン通りからヤワラー通りのバスや市電がのろろ走っている賑やかな中華街のヤワラーまで、元氣よくスタコラスタコラと、歩いて行きました。

初日は手ぶらで行きましたので、昼休みになっても、当時はまだ1杯50サタンだったかけ飯や、麺類にもありつけず、ひもじい思いをしましたけれども、水道の水を飲んで我慢するしかありません

でした。

次の日からは、我が家で七輪に火を起こし、ご飯を炊いてお弁当持参で歩いて通うようにしましたが、初日から社会学の良い経験をさせてもらいました。

僕は10月末に西野先生から半月分の給料、75バーツを頂戴し、生まてはじめて大金を手にした嬉しさを胸を膨らませて、家へ帰りました。ところが、それを母に生活費として全部取られてしまい、またすつからかな無銭人間となってしまったのです。

自分の小遣いがぜんぜんなかったのも、これではやっていけない、何とかしなければ、と思い、資本無しで現金収入を得る方法はないものか、と思案し、思いついたのが、魚の餌になるぼうふらや、道端に落ちている竹などでした。そこで、暇なときに竹を拾ってきて竹トンボを作って売ったりしましたし、ぼうふらなども、道端に落ちている針金とボロ布を拾ってきて網を作り、小さなバケツを片手に、汚水でじめじめしている民家の軒下に潜り込んで、ぼうふらを掬い、何度も水洗いし、綺麗にしてから、ヤワラー通りの熱帯魚を売っていたトカーンの路地まで、ぼうふらが一杯入ったバケツをぶら下げて売りに行ったりしましたが、すべては自分の判断で物事を解決し、自分が進もうとする生きる道を開拓するしかなかったのです。

自分が窮地に落ち込んだ場合は、お金がないから、どうにしようがないから、仕方がないから、などと諦めず、いじけたり、捨て鉢になったりしないで、じつくりと気を静め、冷静な気持ちにな

り、これからどうすればいいのか、前途についてよく考え、がまん強く生き抜くことです。

この人類が蠢いている世界の大地は、様々な民族による国家形成による複雑な社会構造になっています。善と悪が完全に対立した眼に見えない膨大な妄想の中に包まれている社会ですが、正義に満ちた正しい道を選び邁進しなければなりません。

僕の社会人としての始まりは、このスリウォン通りの蒸し暑いトタン屋根に覆われた屋根に石ころを投げられたりしたみすばらしいあばら家の一軒家でスタートし、様々なことを体験し、学校では習わなかった大人の社会学を堪能させていただきました。

日本人納骨堂の奇跡

バンコクの西に面したチャウプラヤー川が流れているサパーンプツ（ブツ橋）の麓に一世王の銅像がありますが、銅像の真ん前に大きな綺麗なワツ・リヤブ（またはワツ・プラナ）の寺院があります。

このワツ・リヤブの広大な境内の本堂の裏側にあたる所に、当時タイの国名がまだサヤーム（シャム）と呼ばれていた明治時代からバンコクに在住していた有志により、日本人墓地のカンパがはじまり、1人20〜50サタンずつ貯金をはじめていました。

1914年9月にバンコクにシャム日本人クラブ（現日本人会）が設立されてから、日本人クラ

ブで積立金を管理するようになり、1935年の時点で、積立金がやっと1500バーツに達したので、日本人墓地にする場所を物色しましたが、タイでは、外国人は土地を買えなかったために、止むを得ず納骨堂の建設に切り替えました。

納骨堂の建造にあたり、藤島護三郎さんの設計により、金閣寺型の美しい納骨堂が1935年5月に完成し、1936年6月12日に、日本の覚王山日泰寺より招来した、鎌倉時代の等身大の本尊釈迦如来坐像を納骨堂の本堂に安置し、明治時代から亡くなられた方々558余柱の霊を見守っています。

第2次大戦中のことですが、終戦間近だった1945年4月14日に、ワツ・リヤブの隣の発電所が連合軍の空襲に遭い、爆撃されてしまい、バンコクはその日から暗闇の世界に変貌し、夜空にピカピカ輝いているダイヤのような無数の星がとても綺麗に見えました。隣の発電所が爆撃された同日に、ワツ・リヤブも本堂に直撃弾が落ち、お寺の入り口の右側にあった綺麗な高い塔もまん中から折れてしまい、瓦礫の山と化してしまいました。

ですが、不思議なことに、納骨堂だけは屋根が多少吹っ飛んだ程度で、破片の掠り傷もほとんどなく無事に助かったのです。当時、お寺の本堂がすっ飛んでしまった瓦礫の中に、金閣寺型の納骨堂だけが青空にくっきりと浮いている姿を見たタイの人たちは、納骨堂の中に祭つてある日本の仏様は御利益がある、素晴らしい仏様だ、と尊敬され、大勢の人たちが参拝にきていました。

タイ人が尊敬していた納骨堂の不思議な御利益は、これだけではありませんでした。とても信じられないことですが、まだあるのです。

それは、1945年8月15日の日本帝国の敗戦と同時に、負けた日本人の資産は連合国に凍結されてしまい、タイに一任されていた敵産管理局に全部没収されてしまいました。

日本国内の一般庶民の家庭では「資産凍結だ、没収だ」といわれて、住居から家財道具まで持つて行かれたケースはなかったのではないかと思います。

しかし、僕みたいに海外に移住していた同胞にとっては、孝か不幸か知りませんが、何も悪いこともしていないのに、何故僕の所持品を何でも勝手に持つていくのだろうか、腹が立ちました。敗戦時、僕はバンコクにいましたが、兎に角、何も持つていなかったのに、それでも容赦なく強制的に身ぐるみ剥ぎ取られ、素っ裸にされたのです。

バーンブアトーンキャンプへ連行されたときに持つて行ける荷物（1人1個で刃物飛び道具は禁止と指定された）も、僕の場合は、小さなカバンがひとつだけでしたけど、カバンの中に詰め込んだ身の回りの所持品は、恥ずかしいかなお粗末なもので、歯ブラシがひとつ（歯磨粉なし）、学校の制服の着替えが2着、あとは手ぬぐいと、ふんどし、それと、学校で習っていた教科書のみでした。ですから、14歳のときに没収されずに手元に残っていた僕の全財産は、たったこれだけだったのです。

この中で僕が大事にしていたものは、このバーンプアトーンキャンプに持ってきた日本人学校で習っていた教科書と、キャンプに引つ張られてくる数日前に、いろんな写真をアルバムから剥がし、寄せ集めて整理してから、大きなビスケットの缶の中に入れて保管し、隣にいた中国系の人の良さそうな家主のおばさんに「いつか取りにきますから、お願いします」と頼み、預けておいた写真でした。

僕の所持品としては、この他に義理の母にあたる甥の田島のおじさんから護身用にもらっていた手の平ぐらいの2発入りの小さな銀色の拳銃でしたけど、拳銃にはあまり関心がありませんでした。さて、タイの大地に運よく残留できたおよそ100名の邦人は、ほとんどが数年タイに移住していた人で、タイ語ができる僕の知っている人ばかりでした。

約1年ぶりで電気も水道もなかったキャンプから釈放された邦人は、バンコク市内を自由に羽を伸ばして闊歩できるようになりました。誰（小谷亀太郎さん？）が一番はじめにワツ・リヤブの納骨堂の様子を見に行つたのかわかりませんが、不思議なことに、僕たちの日本人納骨堂は、お寺の瓦礫の中に没収されずに残っていることがわかったのです。

奇跡的に残った日本人納骨堂

タイにいた一般邦人の私産は全部没収されてしまったのに、日本人納骨堂だけはありがたいこと

に、タイの慈悲深い仏教心のお恵みとでもいましょうか、納骨堂で明治時代から永遠の眠りについている霊にも一切手を付けず、そのまま綺麗に保存されていたのです。

もし、納骨堂も一緒に没収されていたとしたら、恐らく過去帳とともに、祀られていた先祖代々の大事な遺骨も位牌も全部適当に処分されてしまい、何も残っていなかったのではないかと思います。

敗戦後のどさくさで、奇跡的に残った日本人納骨堂は、今でも皆の憩いの場所となっていますし、これからも大事に見守って行かなければなりません。

現在僕の手元に1996年の秋頃でしたか、秋山輝晃先生が送ってくださった日本人納骨堂の過去帳を、データーベースに記載した写しがありますので、簡単に省略して記しておきます。

15年前の過去帖データーベースより

No	名前	死亡年月日	職業その他
106	小ナカエ	1922年8月10日	
173	玉	1940年7月24日	1歳
144	相川太郎	1933年2月9日	
103	青柳和夫	1921年10月7日	

50	赤尾厚重	1910年12月31日	
217	秋里孝熊	1944年7月7日	58歳 運建西本組
193	麻田和夫	1942年2月28日	28歳 貿易統制会
43	麻生安次郎	1908年3月23日	
213	足立良敬	1944年7月	
254	天野巻臈		
238	荒木	1949	
136	安中作蔵	1930年12月30日	
44	飯塚	1908年10月14日	
111	井川清一	1923年1月5日	
69	池上キミ	1914年1月25日	
74	池崎ロノエ	1914年5月9日	
77	池田数馬	1914年5月6日	
9	池田興作	1896年	
94	池戸彦一	1919年1月23日	
97	井澤志恵	1919年4月18日	

191	石川尚次	1942年8月15日	江畑洋行
19	イシ子		盤谷旭ホテル
241	石田愛	1955年10月31日	
200	石寺芳江	1943年4月26日	博愛会
31	石橋サト	1906年4月30日	
267	石橋昌直	1957年8月10日	51歳 三菱支店長
63	磯部富美	1913年2月19日	
266	一川秀雄	1956年10月25日	57歳
53	井手康臈	1911年4月25日	
234	伊藤	1947年	三菱商事
233	伊藤太郎助	1946年	
2	伊藤ユリ子	1896年	
148	井上愛三	1934年7月5日	東京食堂
197	猪瀬富治	1943年2月28日	28歳 大南公司
181	猪俣義夫	1941年12月8日	海外土木
231	入江茂		南泰医師

131	岩本武郎	1910年3月24日	
47	上野貞利	1939年2月16日	19歳
169	上野正	1942年1月1日	昭和通商
186	宇田川春子	1943年1月6日	興和病院
198	宇都宮秀男		
15	梅子		盤谷ニューホテル
129	浦口興之助	1928年5月6日	
154	瓜生しげ子	1937年2月4日	三和洋行
115	江尻絹	1924年7月19日	
88	江尻京子	1917年4月30日	
125	江尻シゲ	1927年11月11日	
105	江尻雄二郎	1922年8月16日	
135	遠藤清夫人	1930年5月10日	
139	遠藤清	1930年12月11日	
163	王阿絵	1938年8月	
161	王連彰	1938年5月25日	病院長

260	大久保平八	1960年12月12日	川崎汽船
147	大谷久治	1934年4月29日	大谷洋行
194	太田信雄	1941年	タイランドホテル
205	大堀三郎	1943年6月27日	大東亜省(留学生)
29	大峰三郎	1904年	
155	概旭乗	1937年5月4日	公使館
30	大山勢以	1904年	
150	大山眞秀子	1934年4月9日	
172	小川君子	1940年8月15日	23歳 江畑洋行
118	小川常五郎	1926年1月24日	
184	奥田正知	1941年12月8日	大南公司
66	小澤正	1913年8月1日	
175	小田勇	1939年4月17日	1年6ヶ月
225	小田勇蔵		小田医院主
157	面田利平	1937年9月6日	面田理髪主
33	風間篤次郎	1906年6月7日	

141 柏原昆文太 1932年11月25日

145 柏原司郎 1933年4月11日

1 鍛本作造 1894年 ケンコイ地区工夫

他17名明治27～8年移民

239 片岡 錦城班

259 片柳昌平 1960年8月5日 大使館

149 加藤銅蔵 1934年8月13日

190 金岡重宏 1942年12月25日

64 金澤終香 1913年3月5日

134 金澤弘三郎 1929年12月6日

24 金子清

59 金子萬藏 1912年23月25日

82 河内密治 1915年11月29日

35 河岸岩男 1906年11月26日

160 河北栄太 1937年2月20日 写真業

80 川島鶴一 1915年4月4日

32 河田直雄 1905年8月14日

71 川田忠英 1914年3月10日

201 北村安平 1943年5月5日

10 木島某 1897年

261 北澤(岩本) 1961年4月27日 72歳

258 幾田友也 1959年5月7日 11ヶ月

257 幾田泰臣 1957年8月11日

185 京谷秀郎 1941年12月8日 23歳

108 許玉洵 1923年5月10日

62 清田幾次郎 1913年2月5日

121 清藤せん子 1926年4月30日

250 清藤正輔 三井物産

138 清藤男 1930年12月1日 8歳

75 窪田農夫雄 1914年12月31日

92 熊谷圀隆 1918年10月9日

164 熊谷助太郎 1938年7月18日 日の出薬局店

40 熊谷マツ 1907年7月12日

25	熊谷峰太郎	1901年5月18日	
128	郡司昭子		
13	けい		
180	小石原収助	1941年12月8日	海外土木
81	高載	1915年8月6日	
67	河野澄一	1913年8月11日	
99	越口喜之助	1919年11月31日	
237	小杉満紀子	1945年	5歳
246	小杉真木矢	1951年6月30日	5歳
167	小林進	1939年8月1日	
168	小山富嘉	1939年10月6日	50歳
151	宰川トク	1935年8月11日	東洋ホテル
207	斉藤敬三	1943年12月19日	19歳 東洋綿花
52	酒井カネ	1911年3月25日	
84	坂口清太郎	1916年7月28日	
178	坂本秀郎	1941年6月2日	

7	坂本増太郎	1896年8月	
85	桜間慶三	1916年8月18日	
73	桜間賢治	1914年4月10日	
48	佐々木寿太	1910年5月23日	
255	佐瀬芳之助	1960年1月7日	72歳
177	塩田厚	1941年6月9日	61歳 日の出薬局主
3	島田敬太郎	1896年4月	
215	島津秀雄	1944年6月17日	22歳
221	清水清一	1944年10月7日	40歳 正金銀行
17	シン子		盤谷ニューホテル
249	新野みつ	1955年9月7日	83歳
199	杉江杉三郎	1943年4月23日	興亜病院(小川病院)
203	須澤虎雄	1943年6月18日	オリエンタルホテル
132	鈴木宰助	1928年6月9日	
246	鈴木つゆ	1955年7月23日	
70	清田晴吉	1914年1月31日	

102	莊	1921年9月3日	
87	高田勝太郎	1917年8月28日	
26	高間芳次郎	1901年11月11日	写真業
140	竹内佐重郎	1932年11月2日	26歳 昭和通商
183	竹下好男	1941年12月8日	
170	田澤不実子	1940年2月1日	
5	田島鉄造	1896年7月	サラデーン農事試験所
263	田中敬	1961年4月10日	当歳
265	田中盛之助	1956年10月22日	88歳 写真業
159	田邊	1937年12月17日	
162	田邊吾一	1938年7月21日	
124	田邊芳藏	1926年6月13日	
219	谷村忠雄	1944年8月19日	36歳 酒伊興業
86	種子島参之	1916年6月11日	
110	田淵好	1923年2月17日	
196	玉城満吉	1943年2月11日	北庄司公司

36	檀野禮一	1907年3月13日	
16	チズ子		盤谷ニューホテル
165	張春木	1938年7月31日	
142	陳一修	1933年1月10日	
212	槌谷竹雄	1944年	
22	角田トモ	1900年4月10日	
72	土井トシシ	1914年3月23日	
182	富樫一彦	1941年12月8日	36歳 昭和通商
96	戸河里民平	1919年2月19日	
230	徳永三郎	1951年	横田病院
4	徳永米作	1896年4月	
232	鳥越		中元日報社
202	中井正吉	1943年3月31日	三菱
223	中川裕	1944年12月26日	28歳 安宅産業
60	長代八三郎	1878年3月13日	
235	永塚喜三郎		写真店主

209	中鶴豊吉	1944年3月7日	
166	中野久仁子	1939年1月31日	
91	中野定	1918年3月23日	
248	高野長雄	1956年12月10日	歯科医
120	長濱大三郎	1926年4月26日	
240	中元源三郎	1956年11月26日	理髪店主
222	中山征二	1944年11月5日	当歳
23	夏トヤ	1901年5月29日	
58	鍋島三郎	1912年1月17日	
208	西野照子	1944年	
195	西村美子	1943年1月8日	当歳
216	西村良太郎	1944年6月26日	30歳 丸永社
119	二宮修	1926年2月27日	
76	野並重助	1914年4月13日	
61	野間征一	1912年1月	在盤谷駐在帝国領事
187	橋本トノ	1942年12月7日	メナムホテル

210	橋本秀	1944年3月8日	盤谷メナムホテル
156	波多野磯子	1937年7月12日	
245	波多野文之	1957年2月7日	
206	畑実赤子	1943年7月2日	畑実医院
12	八戸剛二郎	1896年4月	
37	はこ	1907年7月	
20	はこ		盤谷旭ホテル
14	ハナ子	1897年	
18	花子		盤谷旭ホテル
224	馬場二郎	1945年8月20日	三菱支店長
153	濱岡茂	1936年11月24日	
27	濱崎栄吉	1902年2月10日	
95	林 傳	1919年4月23日	
264	原田あゝ	1955年10月31日	79歳
112	藤瀬輝三	1924年9月14日	
137	藤田南津美	1933年7月15日	三井物産

188	藤原一行	1942年11月4日	日産自動車	
189	藤原花子	1942年6月15日	タイランドホテル	
251	岐政次郎	1956年12月20日		
89	古川トク	1918年3月5日		
90	堀江ヨシ	1918年2月4日		
242	堀尾明寛	1956年1月30日		
174	本多寛次郎	1940年9月18日	江畑洋行	
127	本多紀登	1928年3月11日		
176	前原仁助	1941年1月29日		
253	牧チェム	1958年11月28日		
28	政尾一郎	1903年5月3日	盤谷帝国公使館	泰国司法省顧問
104	政尾藤吉	1921年8月10日		
107	松岡英造	1923年7月14日		
256	松岡正三	1960年2月28日	コロンボ計画技師指導者	
204	松岡太三郎	1942年10月16日	池原病院	
143	松尾英彦	1933年1月25日		

146	松田高雄		大工職	
152	松藤正敏	1936年11月1日		
228	松本武	1946年12月2日		
21	松本己之吉	1899年2月16日		
122	松本良助	1926年5月25日		
6	馬淵喜一郎	1896年6月	建築技師	
68	三浦ナミ	1913年11月5日		
41	水島安太郎	1907年8月3日		
158	溝上政徳	1938年8月3日	溝上洋行主	
49	三田梅吉	1910年11月12日		
243	三田き三郎		57歳	
113	三谷足平	1924年7月3日		
213	三成大蔵	1944年5月18日	28歳	正金銀行
262	水戸孝三	1961年7月7日	50歳	住友商事
56	三根 一	1911年12月6日		
57	三根秀子	1911年12月6日		

46	三根富美恵	1909年1月26日	
65	三根正子	1913年5月18日	
244	宮川岩二	1957年11月25日	72歳 大山商会店主
116	宮川京子	1925年7月9日	
123	宮川	1926年6月21日	ナリントラン
252	三宅真理子	1958年11月19日	
214	宮田園作	1944年	海外土木
100	村上太郎	1920年5月10日	
109	村上口	1923年3月13日	
79	村上慎一	1915年3月21日	
39	村上藤七		
220	村松元見	1944年9月7日	丸永
98	森川一	1919年5月22日	
38	森田寅蔵	1903年2月28日	
229	森屋真平	1953年	洗濯業
51	矢崎久吉	1911年3月23日	

227 柳田 日本人会書記

114	柳田ワカ	1924年11月15日	
83	矢野辰巳	1915年12月28日	
34	矢吹すすむ	1906年7月20日	
55	矢吹安次郎	1911年8月31日	
8	山下三郎	1896年	
117	山野周	1925年1月15日	
133	山本知加栄	1927年9月15日	
179	横内泰一	1941年7月16日	タイランドホテル
211	横田恭二	1944年4月25日	横田医院主
236	横田保子	1945年	
171	佳田忠一	1940年3月16日	39歳
54	吉田テキ	1911年6月14日	
78	吉田二太郎	1915年2月20日	
11	吉丸熊一	1896年4月	
226	吉村林蔵	1945年1月29日	キリンビヤホール主

130	米山仁助	1928年7月8日	
101	季東	1921年7月8日	
93	劉聘昇	1918年10月31日	
192	林淑俊	1942年6月24日	美達洋行
45	渡辺宮次郎	1907年1月24日	
42	和田房次郎	1908年2月12日	
126	和田豊	1927年12月1日	
075	高橋	1975年7月21日	金商又一支店長夫人
121	叶内	1980年1月26日	48歳 ひろたか
083	上林	1976年	当歳
048	渡辺洲司長女		6歳 於日本
057	野田家先祖代		
119	相川美	1979年12月15日	72歳
068	明石吉俊	1975年1月11日	松田商会
001	赤間麻里	1963年11月30日	当歳
012	赤谷路得子	1986年7月26日	17歳

056	飯田栄一	1969年7月20日	54歳
099	飯田栄二	1976年12月25日	25歳エジプト機事故
065	石原弘明	1974年12月5日	53歳メトロポールトラベ
035	一本木明裕	1970年7月13日	2歳
034	伊藤繁	1970年4月6日	松田商事
076	伊藤宗重	1975年8月6日	83歳
005	上中力	1965年9月4日	27歳 旭ガラス
047	上野関太郎	1972年11月16日	85歳
079	上松マサ	1975年11月28日	60歳 松幸レストラン
070	杉山いね	1973年5月31日	72歳
094	海妻良直	1976年12月26日	46歳エジプト機事故
092	梅木康生	1976年10月26日	3歳
063	江見洋子	1974年7月15日	41歳
098	大石ユリ子	1976年12月25日	31歳エジプト機事故
114	大作公一	1979年2月28日	53歳 大作商事社長
097	大島勸	1976年12月25日	42歳エジプト機事故

113	大田 温	1979年2月18日	28歳
054	大谷 アキ	1970年2月26日	86歳
928	大谷 清一	1969年7月6日	78歳 元日本人会会長
004	小川 虎雄	1965年8月6日	52歳
091	小沢 文夫	1971年10月6日	63歳
078	小野 彰平	1975年9月23日	68歳 キクヤ
069	住田 惣市	1974年6月13日	
036	加藤 登	1970年10月25日	三井OSK船医
021	金元 ウイ	1968年9月22日	20歳 チェー
096	菊田 佐吉	1976年12月23日	35歳 エジプト機事故
073	木村 常一	1975年5月30日	湯浅電気社長
041	グリッフィン 治子	1971年4月14日	於東京
123	小池 恵美	1980年2月19日	2歳
120	小泉 政秀	1980年2月19日	41歳 旅行者
104	高祖 晴美	1977年8月2日	38歳
060	河本 休三郎	1973年12月24日	65歳

095	小口 昭和平	1976年12月25日	51歳 エジプト機事故
019	小杉 施吉	1968年7月1日	74歳
014	小杉 市太郎	1967年2月7日	63歳
087	湖南 多美也	1976年8月29日	80歳
059	粉 生修	1973年10月18日	
115	混明 男	1979年3月28日	27歳
051	今野 二郎	1973年6月10日	28歳
093	坂本 義男	1976年10月27日	
043	佐々木 剛	1971年10月7日	
006	佐々木 幸子	1966年4月23日	51歳
015	佐竹 正男	1967年12月9日	24歳
101	始関 健治	1976年12月25日	27歳 エジプト機事故
007	芝 儀一	1966年6月1日	72歳 医師
004	柴崎 つね	1969年12月17日	78歳
018	城 信行	1968年6月22日	22歳 タイ名電舎
122	新野 芳四郎	1980年8月6日	81歳

056	推名コト	1973年	
016	杉山良子	1967年4月28日	12歳
081	鈴木徳次郎	1975年12月21日	68歳 医師
085	須藤佐代子	1976年7月9日	51歳
084	瀬戸テル	1974年12月1日	77歳
066	高瀬邦夫	1974年12月20日	54歳
049	高橋富雄	1957年1月14日	62歳
124	滝川しげの	1981年3月25日	69歳
010	田巻三郎	1967年7月15日	50歳 海外貨物監査
009	柴山成二	1966年10月30日	42歳 田崎土木建設
050	チャリオ・ハミタヴ	1973年1月21日	57歳
032	陳大	1969年12月24日	72歳
088	塚原英子	1976年9月12日	42歳
089	寺尾一松	1976年9月22日	80歳
022	寺尾初美	1968年11月1日	59歳
074	照屋喜光	1975年5月13日	61歳 医師

037	堂本弥造	1971年2月8日	76歳
052	富田誠	1972年6月15日	32歳キャセイ機事故
025	知野見一男	1968年11月13日	
045	中原栄子	1971年5月7日	33歳
103	中原敏郎	1977年7月30日	58歳
062	中 浩	1974年4月1日	27歳 東京海上
013	中村明人	1966年9月12日	元軍司令官
112	中村康夫	1979年1月23日	31歳サイアムダイキン
117	中山	1979年5月29日	39歳
077	中山波男	1975年8月5日	62歳 医師
027	新門健治	1969年3月28日	
105	西岡そのえ	1977年8月7日	77歳
020	西野英子	1968年9月14日	
033	西野智	1970年3月24日	62歳 歯科医
061	西村登	1974年4月6日	58歳 キャピタルカネボ
008	橋本博隆	1966年12月19日	時事通信社

053	長谷川義和	1973年6月24日	45歳	
086	波多野章三	1953年2月7日	68歳	
116	波多野亮次郎	1979年2月16日	58歳	タイ倉紡
039	浜田三州男	1970年10月17日	37歳	
038	浜田芳男	1971年3月5日		
107	林信雄	1977年9月17日	58歳	日本郵船
090	東間エイ	1965年1月24日	49歳	東南機械
118	日高秋雄	1979年10月13日	74歳	日高洋行
040	日高正智	1971年4月14日	5歳	
106	日高マツ	1977年8月8日	96歳	
077	平田千代	1975年4月23日		
023	藤島とし	1968年11月76日	79歳	
111	藤原若彦	1978年10月28日	51歳	経済協力事業
067	古沢博雄	1974年12月26日	88歳	
002	牧重信	1963年12月6日	71歳	
024	松尾先太郎	1968年11月8日	51歳	

102	松原栄治	1976年12月25日	22歳	エジプト機事故
042	三谷日生	1971年5月21日	75歳	
108	宮川久治	1977年11月22日	81歳	東洋綿花
084	向川文夫	1976年4月28日	25歳	ホワイトハウス
110	村上六次郎	1978年5月14日		
011	村上ワース	1966年1月11日		
058	茂木敏子	1973年9月20日		
082	森園佳代子	1976年1月15日	21歳	花屋
046	安川実	1972年5月11日	52歳	ジェトロ
017	山口洸	1968年6月13日	29歳	第一企画
031	山崎俊雄	1969年9月23日	42歳	タイ倉紡
109	山本徹明	1978年3月14日	38歳	淀川鉄鉱所
100	吉野孝司	1976年12月25日	24歳	エジプト機事故
030	ラムヤーイ	1969年6月21日	56歳	
071	若杉マツオ	1975年1月16日		
003	若林淑郎	1964年11月16日	26歳	矢崎電気

080 渡辺江太郎 1975年11月26日 73歳

026 鈴木嘉作 1969年3月20日 73歳

終戦後のバンコクの素顔

第2次世界大戦時タイは日本と「日タイ攻防同盟」に調印し、アメリカ、イギリスに宣戦布告をし、日本と共同で防衛線を張ったタイは、日本の敗戦と同時に連合軍、特にイギリスに占領され、遂に植民地にされるのではないかと思っていました……

タイは、米英に宣戦布告した布告状には、肝心なプリディー・パノムヨン摂政のサインがない（当時摂政アーティッタバ・アーパー親王、ピチャエンタラー・ヨーティン、プリディー・パノムヨン3人のサインが必要だったが、プリディーはアユッタヤーの自宅に雲隠れした）のを理由に、無効であるとし、同時にアメリカの後押しのお陰で、タイは無事に独立を守り通したわけですが、その技は、流石に今まで東南アジアで植民地にされずに独立を守り通してきた、したたかな不死身なタイ民族が持っている独特の粘り強さと、生き伸びる知恵があるからだと思います。

終戦後、9月初旬にバンコクに進駐した連合軍は、主にイギリスや豪州兵が多かったのですが、ひっそりしたバンコクの街角に、一時的でしたけども、七色の灯りを点した小さな貧弱なバーや、ダンスホールが芽生え、私服のイギリス兵が綺麗に着飾った女と手を繋ぎ、肩を組んで楽しそうに

歩く姿が目立つようになりました。

終戦当初、建築資材や、文房具、日用品、重油、ガソリンなど、主な必要品は、戦争に巻き込まれたお陰でほとんどが品切れで何もありませんでした。

例えば、建築材料などの釘ひとつにしても、家庭の垣根にしたり、広い農場の周囲に張り巡らせる鉄条網を引き伸ばして釘に改造したのを市販していましたが、鉄条網で出来た釘は腰が弱く、金槌で強く打ち込むと、おじいちゃんみたいにまん中から背中が曲がるので、手加減して打ち込まなければならず、釘が曲がるたびに金槌で釘を真っ直ぐに伸ばして使っていました。

連合軍の進駐が一番はじめにタイにもたらしたものは、硫黄マッチの出現でした。今までに一度も見たこともなかった細長いマッチの軸の先に黄色い硫黄が付着したマッチでしたけど、壁や板、石などの硬い物さえあれば、どこで擦っても勢いよくパツと燃える便利なマッチなので、みんなかなり珍しいと、重宝がられていました。

マッチといえば、当時パークナム電車が走っていたプララム4通りのサパーン・ダムの近くのクローン・フワラムボーン古い木橋を渡った所に、中国人が経営していた小さなマッチ工場がありました。

そこで「民生」ブランドのマッチを製造していましたが、マッチの芯にあたる白い軸が柔らかかったので、軽く擦ってもすぐ折れてしまうお粗末なものでした。

洗濯石鹼なども、灰を混ぜた緑色の四角い薄っぺらな石鹼が出回っていましたが、泡がぜんぜん立たない石鹼があるのみでしたし、歯磨粉も市販されていなかったのも、インド人が使っていた小さな木の枝で歯を磨いたりしました。

およそ3年9ヶ月間交戦を交えた世界第2次大戦が終局を迎えたバンコクにも、やっと平和が訪れてまいりました。

バンコクは戦場にはならなかったもので助かりましたが、そのかわり堂々と飛来する連合軍のB24やB29爆撃機の空爆に見舞われて破壊された瓦礫の山がまだいたる所に残っていました。

僕がお世話になっていたシーロム通りにあった橋本さんが経営していた東京食堂やロートシン病院も、1943年12月23日に直撃弾を受けてすつとんでいましたし、バーンラック市場の先にあったワツ・ヤンナワー（ヤンナワー寺）の傍にあったチャウプラー川に面した日本軍が占領していたボルネオ倉庫（現バンコクドック）も、1943年12月24日のクリスマスイブの夕方低空で飛来したB29★B24？★数機の爆撃機と戦闘機による機銃掃射で、守備にあたっていた清藤美奈子さんのお父さんを含めて、6名の日本人が爆死した悲しい思い出が残っています。

この他にもヤワラー通り、川向こうのトンブリー駅、フワラムポーン中央駅や、地方の小さな駅や鉄橋も空爆の被害に遭遇し、所どころに仮の木橋が架けられていました。

1946年8月の時点で、僕がバーンプアトーン第1キャンプからバンコクの第16陸軍病院に

連行されて行く途中でしたけども、日本の作業隊の人たちが、1945年1月2日に連合軍の空爆によって落とされたノンタブリー県のチャウプラー川に架かっていたラーマ6世鉄橋を、川のま中で水に漬かり、修復作業をしていた姿に出会いましたが、終戦後1年ほど経過していたにもかかわらず汽車の路線はまだ完全に復帰していなかったのです。

戦争に巻き込まれたタイは、戦火の被害で経済的にも火の車でしたので、復興はなかなか捗らず、シーロム通りの東京食堂の残骸などは雑草が生い茂り、10数年間最後まで残されたままになっていました。

第7章 ふらふらカメラマンの眼

僕は日本人学校にいた（1938〜1945年）とき、図画の時間に鉛筆や、クレヨンで白い画用紙に絵を描いたりしていましたが、なかなか思うようにうまく描けなかったので、絵を描くのはあまり好きではありませんでした。

日本が戦争に負けてノントブリー県のバーンブアトーン第2キャンプに抑留されていたときに、そこで、はじめて有名な横田先生（横田画伯）と知り合いになりましたが、先生から「正夫君、絵を描かないか」と、何回も誘われました。絵が苦手だった僕は、あまり興味がなかったので、いつも「いやです」と答えて、暫く横田先生の横に立って、クローンの風景を描いている先生の姿を見つめていました。

僕は小さいときからほとんど独りぼっちで過ごしていましたので、自然を眺めるのは好きでしたし、美しい自然に対する深い愛着も持っていました。

バーンブアトーンキャンプにいたときまでは、自然に対する愛着しか持っていませんでした。ですけれどキャンプから釈放され、15歳のときに複雑な大人の社会に飛び出してから、人々の喜怒哀

楽にも興味を持つようになりました。

僕が写真に興味を持つようになったきっかけは、17歳のときでしたが、チャローンクルン通りのタノントック船着場から乗り合いボートに乗り、サムップラカーン県のモーン族がいる静かなパークラッへ遊びに行ったときからでした。

パークラッの船着場から、クローンに添って見える寺院の境内に、こんもりと覆いかぶさるように森に包まれた美しい風景に見とれていた僕の脳裏に、何故だか急に写真を撮りたい、といった気持ち湧いたのです。

そのころ、僕はまだ知人宅のソーイ・トンロー（現スクムヴィッ・ソーイ55）に居候していたルンペンの身でしたので、懐は寂しいもので、カメラを買う金もなかったのです。

ですが僕はそれ以来、よく友人からカメラを借りて写真を撮り歩くようになりました。僕は写真の撮り方も、レンズの性能も何の知識もなく、写真を撮りはじめました。当時はまだ白黒のフィルムしかありませんでしたが、はじめの頃は何でもはつきり写るように、レンズの絞りをうんと絞って撮っていました。

勿論、画面の構図の決め方も、カットの仕方、光線の見方も何も知らずに、ただむやみやたらとシャッターを押していただけにすぎませんでした。

そのうちにもものたりなくなり、自分の思いつきで、映画館で映画を見ながら、画面の構図のセッ

テイングの仕方などを見習い、背景をぼかして撮る方法を徐々に覚え、一応ファインダーを通してどうにか写真として恥ずかしくない程度に撮れるようになりました。

カメラのファインダーを覗いているときは、いつも何を狙ったらいのか、目玉はなんなのか、どうすれば1枚の写真でうまく表現できるのか、と、瞬間的に考えて撮っていますが、自分で自分の写真を批判しながら、やっとどうにか写真を撮るコツを覚えたところです。

僕は写真を撮りはじめて、今年で63年になりますが、朝日新聞社の報道関係の写真や、NGO関係、日本人会のイベント、サークル関係の写真、暗いステージや、商品のカタログ、そのほか何の目的もなく、なんでも手当たり次第に撮っている眼の悪いフラフラカメラマンです。

僕はいつもフラフラしているので助かっているのかもしれませんが。バンコクのクーデター、ビルマ国境やカンボジア国境など内戦の現場取材で走り回っていて何回か見えない敵から撃たれたりしたことがあります。いつも体内に潜んでいる予知感のお陰で、危機一髪で運よく助かっています。僕は生まれてはじめてでしたが、飛行機事故で死亡し、腐敗しきった死体を見たのは、まだ国籍もなくて住友商事に勤めていたころでした。

それは、1962年7月19日のことでしたが、たまたま住友関係の人たち4名が乗っていた東京→香港→バンコク→シンガポール行きのエジプト機869便のユナイテッドアラブ航空機が、夜中にドーンムアン空港に着陸する寸前に、ナコーンラーチャシーマー県のカウヤイ国立公園の山の

中に落ちたときでした。

この飛行機には、日本人、アメリカ人、インド人、中国人、フィリピン人、それに、両親に会うために一時帰国した台湾の台北大学の医学部に留学していたタイ人のワンリー・アラームリッ女学生と、乗務員を含めた総勢26名全員が墜落事故で死亡しました。

そのとき、死体はラーマ4世通りの小さなワツ・フワンポーン（フワラムポーン寺）に収集されていたのですが、カウヤイで死体を積んでいたトラックが運悪く途中で引っくり返ったりして事故が再三にわたり起こったので、死体は墜落後予定よりも3日ほど遅れてお寺に運ばれてきました。

泥で汚れた細長い棺桶には、バラバラになった死体が数体重なり合っていました。棺桶の蓋を開けた途端に、腐敗した死体から死臭の凄い悪臭がプーンと鼻につき、寺中に悪臭が漂い、しかも死体には真っ白い丸々と太った大きな蛆虫がうようよ湧いていたのです。

僕は住友の同僚数人と、床に並んでいる腫れ上がった凄い形相をした死体を一人ずつ物色し、遺体を捜し求めましたが、僕にとっては生まれてはじめての経験でした。

余談になりますが、一緒に現場に駆けつけて遺体を捜していた先輩の同僚は、社からお昼の弁当が運ばれてきても、悪臭が漂う匂いと、凄い形相をした死体が目に焼きつき、気持ちが悪くて食べられない、といって、誰もお弁当には手をつけませんでした。

ですが、僕はお腹の虫がキューキュー鳴いていたので、死体や死臭の匂いなどもぜんぜん気にせず無神経だったので、平気で2人分のお弁当を、ひとりでパクパク食べてしまったのです。

タイは仏教国なのか？

1991年5月26日の午前4時ごろでしたが、朝日総局の大和総局長からの電話でたたき起こされ「スパンブリー県の山の中に飛行機が落ちた、直ぐ現場へ取材に行くように」との指示を受け、僕は長島さんと一緒に、ソムヌックさんが運転する朝日の車で現場へ駆けつけました。

途中で電話がありそうな場所を物色（当時は今のようどこからでも簡単にかけられる便利な携帯電話はなかった）しながら飛行機が落ちたスパンブリーの山を目指しました。

飛行機が落ちた山の麓にさしかかったところから、雨に濡れた山道はタイヤがスリップするし、飛行機が墜落した周辺の農村からビックアップ車で練り出してきたまるでお祭り騒ぎみたいな農民の車で渋滞し、車では移動できなくなっていました。

最終的に車から飛び降りて、まだ雨がしとしと降っていた竹やぶに覆われたツルツルすべる山の頂上まで登りましたが、飛行機は空中でエンジンが爆発して墜落していたので、死体も機体も広範囲にバラバラに落ちていました。

僕が現場に到着したときには、もうすでに死体を運ぶポータックタウン団体、地元の警察官、軍

の警備隊や村人の群れでごった返していました。要は、どこを向いても死体がゴロゴロ転がっていたのです。だが、何故だか死体は、男女ともほとんどが下着だけで、裸に近い状態で転がっていたのです。靴はそのまま残っていた死体もありましたが、肝心な上着やズボン、シャツ、スカート、ロングスカート、それに、時計、指輪、ネックレス、イヤリング、ハンドバッグ、かばんなどの、本人の証拠物件となる身の回りの維持品も何も残っていませんでした。

現場で取材をしていたとき、ひとりの警察官が死亡者のパスポートを3冊も持っていたのがいたので、「そのパスポートを見せて、写真を撮らせて」と頼んでみたのですが、当時、パスポートは金になる代物で、闇で1冊数万バーツで売れるので見せてくれませんでした。

パスポートの他にも、まだあけてないウイスキー瓶を持っている村人もいましたし、新品のビデオカメラを持っていた男もいましたが、「このビデオカメラは買ったばかりで使い方がわからないから撮り方を教えてください」と、真面目な顔をして話しかけてきた人もいました。

要は、竹藪が多い山の中で大勢の人たちが宝探しでもしているかのように見えますが、実は遺体を裸にしたのも、村人や死体を運んでいる連中の仕業（後に窃盗罪で逮捕された者が数人いた）だったのです。

死体を運んでいた連中の仲間は、どういう神経の持ち主か理解できませんが、死体が沢山転がっている場所を選んで、「カメラマン、死体と一緒に記念写真を撮ってくれ」といって、身内でもな

いまだ白い布も被せてない剥きだしの死体の傍に数人が集まってポーズをとるので、写真を撮ってあげたりしましたが、人間の心理としてちょっと考えられないことですし、可哀想な死んだ仏が浮かばれません。

一方、タイのカメラマンなどは、「あそこに死体が一杯転がっているよ、良い写真が撮れるよ」と、親切に教えてくれるのですが、日本の新聞は、タイの新聞と違って死体の写真は掲載できないので、ただ「コップ・クン・カップ（ありがとう）」と、お礼をいうのみです。ですから、バラバラになった飛行機の機体だけを、死体が見えないように配慮して撮らなければならない苦労が伴うのです。

僕はツルツルする滑りやすい山の中で転ばないように竹にしがみつき、気をつけながら谷底に落ちていた飛行機の機体の周辺を取材して山からおりてきたのですが、山の麓に辿り着いてびっくり、死体から剥ぎ取った乗客の衣類がなんと1台のピックアップ車に山積みされていたのです。

飛行機が落ちた現場周辺の農村からお祭り気分で行けつけた村人たちは、落ちていた飛行機の機体から細々とした部品を取り外し（売れるので）て持ち帰っていましたが見張りの警備員がそれを見ていても誰も咎める人はいませんでした。

タイの宗教は13世紀中頃インドから取り入れた仏教であり、95パーセントが信心深い仏教信者です。仏教には大乘仏教と小乗仏教がありますが、タイでは女性には触れてはいけない小乗仏教信仰者がほとんどです。タイの小乗仏教はマハーニカイ派と、タムマユツ派の2派にわかれています。

すが、タムマユツ派の方が戒律が厳しく食事も一日一食となっています。

小乗仏教は、現在小乗仏教とはいわず、上座部仏教と呼ばれ、タイの男子は一生に一度は兵役と同じように出家しなければならない、といわれています。ですが、厳しい社会経済に追われている現状なので、本人の意志次第で別に規制はされていません。

仏教の教えでは、前世、現世、来世があり、死んでもまた生まれ変わってくるといわれ、現世で悪行を残せば、来世は動物に生まれ変わり、現世で善意を施せば、良い境遇に再生できる、といわれています。

信じるか、信じないかは別としても、死んでしまった仏となった亡骸から、洋服や所持品をすっかり剥ぎ取り、ただ「空から落ちてきたありがたいお恵みです」といって、嬉しそうにして獲物を物色している人たちの行為は許せないし、これが現在の情けないタイの仏教信者の姿なのかと、唾然としますし、切ない悲しい気持ちにかられます。

スパンブリーに落ちた事故機は、ラウダ航空機ボーイング767、NG004便機で、バンコクからオーストリアのウィーンへ向かう便だったのですが、ドーンムアン空港を飛び発ち、わずか16分後の23時20分にスパンブリー県ダーンチャーン郡ブトー山中に落ち、外国人の乗客184名、タイ人はチャンマイの県知事夫妻などをはじめ39名、それと乗務員10名を含めて、223名全員が死亡した事故でしたが、日本人はいませんでした。

悲惨な津波に遭遇した南タイ

インドシナ半島で近隣諸国と国境を接しているタイの領土は、インドシナ半島の中央部の南北に約2500km（北緯5度30分～21度）、東西に約1250km（東経97度30分～105度30分）に位置しているお陰でか、地震や台風、竜巻、などの災害がほとんどなく、あるとしても、他の諸国で発生した地震の軽い余震か、または、時々暴風で農家が十数軒あるいは多いときで数百軒の家屋が破壊される程度で災害に遭遇しても、さほど大きな被害を蒙ったことはあまりありませんでした。

タイで起こる災害といえば、毎年訪れる40度を越す暑さになる乾季（11月～5月）地層から白い塩が吹きだし砂漠化する早魃^{かんばつ}、および大雨が降る雨季の期間（6月～10月）に発生する、生命をも容赦なく奪い去る洪水や土砂崩れです。

タイでは災害による大きな被害は起こらない平穩無事な国だから安心して暮らせる、といわれていました。ですが、タイでまさかと思う、想像すらしていなかった大津波が発生し、大惨事に遭遇したのです。

それは、7年前の2004年12月26日のことでした。ジョギングから戻った僕は、水を浴び、コーヒーを飲み、いつものように朝からベッドに引っくり返って大休止しながら、警察の情報網を聞いていましたが……

「タイ南部に地震発生、いまドーンムアン空港付近が地震で揺れています。いまスリヴォン、いまシーロム、いまサートーン、いまパララム・サム、いまパララム・シー、いまスクムヴィット・ソーイ19、いまソーイ33、いまソーイ39、いまスクムヴィット界隈のプールの水が大きく揺れて水がプールの外に溢れています」

と、矢継ぎ早に口走っている興奮したアナウンサーの声を聞いていたのですが、別に大したことはあるまい、と思い、あまり気にもせず地元紙を開いて目を通していました。

ですが、そのうちに、タイ南部のアンダマン海に面したプーケット周辺が津波に襲われ、死傷者多数、家屋も漁村ごと破壊され多大な被害を蒙っている、大変だ！大変だ！といった、緊急報が飛び込んできたのです。

周囲をアンダマン海に囲まれたプーケット島は僕の故郷でもあり、ピーエウ（エウ姉）、孫や親戚が大勢いる、今では有名なリゾート地となっていますが、姉は海から離れたプーケット市内のタラーン通りの繁華街で商売をしていたので大丈夫でしたし、ラーワイビーの浜辺の近くで綺麗な貝殻類のお土産店を経営していた弟にあたる親戚の店もありましたが、それも、島の最南端のプロムテーパービーチに防波堤のように伸びた海岸線と、カー海岸線の浜辺に突きでいた岬によって津波がさえぎられ、津波の進行方向がラーワイビーチから離れていたので無事でした。

今回のタイ南部で発生した津波の原因は、スマトラ島西方沖で、現地時間の7時58分頃にマグ

ネチュート9・1震度の大地震が発生したためでした。

地震が発生すると同時に、地震断層に長さ1000キロメートル、幅200キロメートルにおよぶ大津波（発生時波の高さ30メートルあった）が発生し、大津波がもたらした災害は、南タイだけでなくインド洋周辺地帯のモルジブ、セシル諸島など9ヶ国の広範囲におよび、約28万人の死傷者をだす被害となりました。

南タイのアンダマン海に面した我が故郷のプーケット県をはじめ、叔父さんがいるラノーン県、パニンガー県、カラビー県、トゥラン県、サトゥーン県など6県が津波に襲われ、多数の死傷者をだしました。

タイで津波が発生したのは、今までかつてなかったことですし、津波の経験も予備知識もなかったタイ人にとっては、まったく未知のケースでしたので、プーケットや、パンンガーのカウラックビーチでのんびりと遊んでいた人たちやビーチボーイは、海の水が急に引き、魚がビチビチ跳ねているのを見て、バケツを掲げて魚を獲りに行った人や、遠くから大波が押し寄せてくるので「ウワー凄い大波だ!」といって、喜んで大波を背景に記念写真を撮ったりして楽しんでた人たちがいました。みんな津波だとは知らず、プーケットでは6メートル、カウラックでは11メートルの高波に叩きつけられ、アツというまに、津波に飲み込まれてしまったのです。

一方、ビーチで象に乗って楽しんでた外国人の観光客は、ノソノソノソリと歩いていた象が急

に高地向けて凄い速さで走りだしたので、びっくりした象使いが象を追っかけましたが、追いつかず、大騒ぎとなったのですが、象の気転によって知らぬうちに運よく助かった人もいたのです。

この他にも、逃げ遅れた数人の人たちの中には、もうダメだ、と思い、浜辺の椰子の木や松の木に急いでよじ登り、木にしがみついてかろうじて助かった人もいました。

それと、動物で助かったのは、象だけでなく、放し飼いになっていた犬や猫などもみんな助かっているのです。動物にはある見えない予知感とでもいいましょうか、頭脳に短波が備わっているのかもしれません、助かっているのです。

タイでは地震や津波の経験はほと皆無に等しく、特に、今回の津波に関しては予備知識すらありませんでした。

したがって当局からは津波の警報すら発せられませんでした。

ビーチにいた大衆に対して知らせるにしても、そのようなきちんと整った警報設備も手配されていませんでしたので、前もって緊急警報を発するとしても、パトカーで走り回って知らせる方法しかなかったはずです。

今回の津波で受けた9ヶ国の被害は、USGS資料によると、死者28万3000人、行方不明1万4000人、家を失った人は112万7000人となっていますが、大変なことです。



日本人納骨堂があるリャブ寺または
ラーチャプラナ寺の前景



パンガー県の寺院内で死体を運ぶ
ボランティア



日本人納骨堂の前景



納骨堂で法要



寺院の境内で身内を探す可哀想な遺族

各国の津波の犠牲者は、インドネシア政府国家開発庁の資料によるデータも入手しましたので、ついでに記しておきます。

第	国名	死者(人)	行方不明(人)
1	インドネシア	11万229	1万2132
2	スリランカ	3万899	6034
3	インド	1万672	-
4	タイ	5303	3396
5	ソマリア	150	-
6	モルジブ	81	-
7	マレーシア	68	-
8	ビルマ	59	-
9	セシール諸島	3	-
合 計		15万7464人	2万7303人

なお、タイの死傷者及び被害は警視庁の資料によると下記の通りになります。

① 死者				
県名	タイ人	外国人	国籍不明	計
ブーケツ	150	111	17	279
パンンガー	1,389	2,114	712	4,225
カラビー	357	203	161	721
ラノーン	153	6	-	159
トゥラン	3	2	-	5
サトゥーン	6	-	-	6
合 計	2,059人	2,436人	900人	5,395人

② 行方不明

県名	タイ人	外国人	計
プーケット	245	363	608
パンンガー	1,352	303	1,655
カラビー	314	230	9
ラノーン	9	-	-
トゥラン	1	-	1
サトゥーン	-	-	-

合計 1,912人 896人 2,817人

③ 負傷

県名	タイ人	外国人	計
プーケット	591	520	1,110
パンンガー	4,344	1,253	5,597
カラビー	808	568	1,376

ラノーン	215	31	241
トゥラン	92	20	112
サトゥーン	15	-	15

合計 6,060人 2,392人 8,457人

南タイの津波で死亡した人たちは、行方不明も含めると、およそ8217人、負傷8457人になりますが、プーケット、パンンガー、カラビー、ラノーン、トゥラン6県の被害地域は、およそ47万5000ライ（1ライは1600平米）の広範囲におよび、土地25郡（準郡を含む）、95地区、407村、家屋4806軒が被災（内3302軒が全壊、1504軒が一部破損）したために住居をなくした住民は避難民となり、約5万8550人（1万2017家族）が、お寺や山の麓に点在していた避難所に避難していました。

この他に、漁師や観光業者にとって日々の生活に必要な大事な漁船（7299艘）や、観光船（981艘）が荒れ狂った津波に容赦なく破壊されてしまい、生活の活路を断ち切れ、途方にくれた気の毒な家族が大勢いました。

津波は人家や、尊い人の命を奪っただけでなく、僅か数分で可愛い子どもたちの親や保護者をも遠慮会釈もなく奪い、可哀想な1221人の孤児の置き土産までおいていったのです。

この1221人の孤児のうち、父親を亡くした孤児は413人、母親を亡くした孤児は747人、両親を亡くした孤児は92人で、保護者を亡くした孤児が34人もいるのです。

この他に、津波とは関係なく、父親、母親を他の県で亡くした可愛い孤児が208人いますが、可哀想な孤児たちは、親戚関係の人たちに引き取られて、侘しい気持ちで暮らしているのではないかと思います。

僕は津波が発生してすぐ、SVAのNGO関係の仲間と一緒に現場を取材して歩きましたが、津波で一番酷かったのは、ブーケツよりもパンンガー県のカウラック周辺の海岸線であり、ナムケムの漁村地帯でした。

カウラックに面したおよそ50キロ四方におよぶ4号線のハイウエーを何回も往復しましたが、どこまで行っても津波で破壊された家屋が続き、その周辺一体に転がっている水ぶくれした亡骸から発散する死臭がプンプン漂っていました。普段は静かな美しいのんびりしたりリゾート地にはまだ救援隊の手が届かず、哀れな死体がゴロゴロ転がっている墓場と化していました。

ナムケムでは、着の身着のまま助かった村人7、8人が放心した眼差しで、家の土台だけが残った哀れな我が家の瓦礫の跡をじっと見つめている光景に出会ったりしました。

海辺の荒れ果てた人気がない桟橋に立って周囲を見回していると、岸近くの浅瀬からやっこの思いで桟橋の上に這い上がってきた1人の疲れきった青年がいたのです。

僕は助かると思い、すぐ医者を探したのですが見当たらず、助けたくても手の施しようもなく、水を飲ませてあげたくても水もなく、何の手当てもしてあげられず、何とかしてあげなければと思っているうちに、可哀想に、その人は約1時間後に力尽きて息を引き取ってしまったのです。

医者さえいれば助かったであろうに、と思うと、残念であり、やるせない悲しい思いに浸りました。津波で瓦礫と化した悲惨な光景を取材しながら、道端のお寺に差しかったときでしたが、広い境内に真新しい白い布に包まれた死体が所狭しと一杯並んでいるのが目にとまりました。

棺桶が足りなくて地べたに並べてあったのですが、僕は今まで飛行機事故や、国境紛争の取材などで、政府軍と戦っているゲリラ部隊と鬱蒼としたジャングルの中を歩き回ってきましたでしたが、このように1000体以上の死体が並んでいる光景を見たのは、今回がはじめてでした。

僕は並んでいる遺体を撮るために、たまたま境内に遺体を運んできた大型トラックを見つけたので、足元がツルツルするトラックの屋根によじのぼり、写真を撮りパチリパチリと撮りました。

しかし、写真を撮っていると、自分の身内の者を探しているらしい数人の遺族の人たちが、悪臭がプンプン漂う境内で、黙々と無心に白布で覆われている死体の顔を、一人ずつ確かめながら探している姿に接したのです。

あー！一体どんな気持で慈愛に満ちた肉親を探しているのでしょうか、自分だったらどうするかと思うと、他人事ながら切ない気持ちに胸を締めつけられ、カメラのファインダーが涙で霞み、頭が下がる思いがしたのです。

タイの国民が正式に日本語の「つなみ」の言葉を知り、はっきりと覚えたのは、7年前のスマトラ沖地震で津波が発生して以来ですが、2004年12月26日、タイ南部を襲った津波が発生してから今年ですでに約7年の月日が経過しています。

ですが、現在もまだ親戚関係の方が引取りにこない29体（ビルマ人26体、タイ人2体）の遺体が残っています。

この他に、イサーン（東北タイ）および、ビルマから出稼ぎにきていた大勢の労務者が亡くなっています。身元不明などでまだ調査しなければならない387体の遺体が、南部タイのアンダマン海に面した美しいリゾート地の死体置き場に管理されたまま眠っています。

今回の悲惨な津波で、外国人の観光客が大勢亡くなっています。それに関した二次的な事件もありました。浜辺伝いに行儀よく並んでいる綺麗な平屋のバンガローに宿泊していた観光客は、室内にあった小さなセフティボックスに、大事な貴重品やパスポートを保管してあったのですが、津波に直面した直後に人々の悲しみもそっこのけで、これ幸いと喜んだ泥棒により、バンガローの金庫は全部ぶち壊され、宿泊者の証拠物件となる貴重品もパスポートも全部盗まれていたのです。

タイに地震は起きないのか

7年前に南タイで大津波の洗礼があつて以来、タイでもよく津波だ、地震だ、といった震災に関する課題がテレビや、新聞記事でも頻繁に取り上げられるようになりました。

南タイの津波が発生したときの事情を見てもわかるとおり、津波の経験も予備知識すらもなかった、あのような大惨事に見舞われたわけですが、地震対策にしてもまったく同じことがいえます。東南アジア諸国と隣接しているタイは、災害範囲から離れた緯度に位置しているのだから、大きな災害の心配はない、といっています。ですが、果たしてそうであろうか、と、地質学者が議論し、意見交換をしたりしている今日この頃です。

今までは隣接した諸国で地震が発生した場合、主に北部タイのチャンマイや、チャンライ周辺に軽い余震がある程度で、他の地域、特にバンコクには大した影響はありませんでした。

ですが、地質学者が提出した地震断層があると推定される県や、現在までに地震が発生した震度に関する次のようなデータが発表されています。

地震断層がある地域

第 県名 アムポー（郡）数

1	チャンマイ	12	
2	チャンラーイ	11	メーチャン、メーイン（チャンマイ）
3	プレー	7	
4	メーホーンソーン	5	
5	カムペンペツ	3	モイ（ターク）
6	ターク	7	トゥーン（ラムパーン、プレー）
7	ナーン	6	ブア
8	パヤウ	1	（ラムパーン、チャンラーイ）
9	ピッサヌローク	2	トーン（ラムパーン、プレー）
10	ラムパーン	5	
11	ラムブーン	3	ヌーター（チャンマイ、チャンラーイ）
12	ウタラディッ	4	
13	カラビー	1	
14	チュムポーン	4	
15	パンンガー	5	
16	ラノーン	5	プラチュアプキリカン、チュムポーン

タイでは過去において、地震に関する詳しい情報はあまり発表されていませんでしたが、2011年3月31日付けのマティチョン紙の資料によると、タイでは、1975年から2011年の35年間に、303回地震があった、と、過去において地震が発生した年月日の一部が掲載されていしたので、参考までに地震の記録を記しておきます。

17	スラーターニー	9	クローン・マルイ（カラビー）
18	カーンチャナブリー	7	シーサワツ（ウタイターニー）
19	プラチュアプキリカン	4	
20	スパンブリー	1	
21	ナコーンパノム	3	
22	ノーンカーイ	2	ターケーク（ナコーンパノム）

第	地震発生日	県名	震度
1	1975年2月27日	ターク	M5.6
2	1983年4月15日	カーンチャナブリー	M5.3
3	1983年4月22日	カーンチャナブリー	M5.2

4	1983年4月22日	カーンチャナブリー	M 5.9
5	1994年9月11日	チャンラーイ	M 5.1
6	1995年12月9日	プレー	M 5.0
7	1995年12月21日	チャンマイ	M 5.2
8	2006年12月13日	チャンマイ	M 5.1
9	2011年3月29日	チャンマイ	M 5.2
10	2011年3月29日	チャンラーイ	M 5.1

タイで地震が起きる可能性があるとみる地域は上記に示したように、北部11県、西部3県、南部6県、東部2県の22県、107郡、308地区、1406村周辺であると予測されています。

タイの火山は約1万1000年昔に噴火した火山もあり、火山帯はイサーン（東北タイ）のプノムルン火山、コーク火山、ルム火山、クラドーン火山、プラアンカーン火山、プラバート火山などに噴火跡が残っているので、タイでも地震が起きる可能性がであろうと推測されています。

だが今回、2011年6月25日、午後23時42分、地震はないといわれていたタイ南部のトゥラン県ムアン郡および、カンタン郡周辺でM3.5震度の地震が発生し、4、5軒の家に多少の被害が生じた程度でしたが、住民は大騒ぎになりました。

ですから、タイも今後本腰で地震対策に取りかかなければならないのではないかと思います。

タイでは大きな地震の経験もなければ、予備知識もほとんどなく、過去において1975年2月27日に、ターク県でM5.6震度の余震が発生し、珍しくバンコクも揺れたことがありました。

ちょうど地震が発生したとき、僕はスリヴォン通りの友人の10階建てのオフィスビルの1室にいたのですが、バンコクの高いビルも多少揺れたので、大騒ぎになりました。

そのとき、ビルにいた人たちは慌ててわれ先にと、エレベーターに駆け込み、階下におりていきました。

僕が「エレベーターは危険だから使用するな、階段からおりなさい」と、大声で叫んで注意しても、「エレベーターの方が速いから」といった感覚しかなく、しかも階下におりたらすぐ安全地帯に逃げなければならないのに、ビルの下からじっと自分たちのいるビルを見上げているだけなのです。車道で車を運転していた人たちも、わざわざ車を道端に停めてビルを見上げているだけなのですが、地震の怖さなどぜんぜん知らない証拠です。

タイではどの程度の地震対策が行われているのかは、ビルの専門家に聞かなければわかりませんが、2007年から15メートル以上の高さの建物を建造するときは、最低M7以上の耐震構造の建築法が公布されています。

現在バンコク近郊には約1100万人（公式住民登録されているのは約825万人）の住民が、

約233万4126軒の住居で、日々の生活を営んでいます。

綺麗な豪華な住宅地は、主にバンコクの近郊に点在していますが、市内のごたごたした狭い路地などには、長屋やスラムが入り乱れて点在し、サートーン、シーロム、スクムヴィツ、ペップリー、ラッチャダーなどの目抜き通には、立派な一流ホテル、近代化した大きなデパート、オフィスビル、豪華なマンション、コンドミニアムなど大小様々な建築物が所狭しと林立しています。

現在バンコクで一番高いビルは、プラトゥナムのバイヨックタワーですが、まだ建築ラッシュで5階建ての15メートル以上の高さのビルなどの建築が、西側のトンブリー地域を含めて2718ヶ所もあり、このうち、特に30階建て以上の高層ビルが60ヶ所もあります。

特に高い高層ビルの所在地は、次の目抜き通りに沿って建築中か、または建造されていますので記しておきます。

第	道路名	ビル名	高さ(メートル)
1	サートーン	The Met	228
2	プララーム3	The Pano	203
3	スクムヴィツ	Melennium Residence 2	199
4	スクムヴィツ	Melennium Residence 3	199
5	ラーチャダムリ	Grande Center Point	197
6	スクムヴィツ	Melennium Residence 4	192
7	スクヴィツ	Melennium Residence 1	192
8	サートーン	Empire Place	188
9	チャローンナコーン	Watermark Chaophraya	182
10	サートーン	Sathorn House	174

タイの高層ビルは、日本の高層ビルと同じように地震対策を基準にした規定どりの建築方式を実施しているのかどうかはわかりかねますが、一般家庭のレンガを積み重ねて積み木みたいにして建てた住宅街や、タウンハウスなどは、震度M7以上の地震に直面したとすれば、ひとたまりもなく積み木のように総崩れとなり、過去において体験したことがない悲惨な事態が生じることになると思います。

バンコク水没？

バンコクの土地は毎年5ミリから1センチほど沈下している、海の水位が毎年約5ミリずつ上がっている、と聞いていますが、昨年のはじめ頃から、あと十数年もすると、地球の温暖化の関係

で北極の氷山が溶けて海水の水位が数メートルも上がり、バンコクおよび、サムップラーカーン県、サムツソクラーム県、サムッサーコーン県周辺は水没するであろう、といった記事が地元紙に掲載されて以来、早めに北部の高地に土地を購入したほうがいいのではないか、といったタイ社会の井戸端会議の話題となっています。

実際にバンコクは洪水とは関係なく水没するのでしょうか、と念のために、タイ近海の海岸沿いの水深や、北極の氷山の環境などに関して調べてみましたが、北極や南極の氷山が溶けないようにするためには、いま問題となっている環境問題の一環として、世界の人類が如何にして温暖化を守り通すかによって左右されると思います。

温暖化問題で重大な課題を抱えています。が、現段階での見通しでは、2007年頃から海水の水位が徐々に18センチから59センチほどに上がり、30年ないし40年後の2050年頃には、北極の氷山が溶けてしまい、海水が増え、90センチから1メートル60センチぐらいの水位になるであろう、と予測されています。

タイの場合を思考してみますと、北極の氷山が溶けるとか、溶けないとかいう問題以前に、バンコク近郊周辺の、蟹や海蛇が多い泥海のバーンプー避暑地などは、もうすでに5年ほど前から知らぬうちにタイ湾に面した海岸線沿いは異状信号を発していたのです。

過去およそ55年の間に、約10万ライ（1ライは1600平米）におよぶ民家や綺麗な浜辺が

あつた陸地は、建物も含めて水没しているのです。

タイ湾に面したバンコクのバーンクンティヤン、サムップラカーン県河口の海岸線は、年間約20～25メートルにおよび陸地が徐々に水没していますが、現在約1キロメートルの広範囲にわたり大事な地元の人たちの土地が水没しています。

なお、サムップラカーン県の河口から、西側のサムッサーコーン県および、東に面したチョンブリー、ラヨーン、プラチュアプキリカン、クラビー、ナコーンシータマラート、パッタニー、ナラティワートまでおよそ1653kmある沿岸沿い22ヶ所も、約30年の間に5万6531ライの土地が水没していますし、アンダマン海に面した23kmにおよぶ海岸線8ヶ所でも、7187ライの失地が発生しているのです。

一方、南タイのアンダマン海周辺を含め、タイ湾に面したナコーンシータマラート、ソククラ、パッタニー、ナラティワート4県の資料もebookのtuhpp.orgで入手しましたので、驚くべき明細を記しておきます。

県 名	浜辺の距離	波に挟まれた距離
ナコーンシータマラート	135 km	112 km (47.5%)
ソククラ	160 km	39 km (24.4%)

パッターニー	135 km	26 km (19.3%)
ナラティワート	57 km	41.2 km (72.3%)

合 計	587 km	2182 km (37.2%)
-----	--------	-----------------

タイ湾に面した長い海岸線の砂浜はなぜ水没しているのかといえば、リゾート地や、工場団地を造るために、目ざわりとなるマングロープや、緑で覆われている大木を伐採したり、海岸線に沿って埋め立てをしたり、荒波を防ぐために波よけの防波堤を築いたりしたことなどが大きな原因となっています。

海岸に防波堤を築いて生じた被害は、ナコーンシータマラート県パークパナン郡では、海岸線に沿って、深さ約40メートルの溝が5kmの距離にわたり発生しました。

ソンクラーク県チャナ郡の場合も、海岸線に沿って、深さ約80メートルの溝が3kmの距離におよび、道路、電柱、家屋が砂浜とともに水没してしまい、どうにもならない悲哀が残っています。風とともに海岸線に押し寄せる波は、モンスーン時には、荒波が砂を沖へ持っていきますが、5月頃の波が静かな頃になると、モンスーン時に持っていた砂を、また元の位置に戻してくれる自

然の美しい現象があるのです。

膨大な浜辺を守るためには、誰にも指示されずに、自然におきる日々の満ち潮や引き潮は、風と波の自然がなすがままに任せておけばいいのに、人類が防波堤を築いたり、自然を守っている大事な木々を切り倒して自然の邪魔をしているからいけないのです。

大事な世界の海を守るためには、陸地が水没しないようにするためには、世界中の人々がみんなでもっとも自然を大事に見守らなければならないと思います。

参考までにアンダマン海及びタイ湾の海岸線に面した距離並びに県名を記しておきます。

第	県 名	海岸線の距離
1	クルンテープ（トンブリー側）	44 km
2	カラビー	116.2 km
3	チャンタブリー	80.2 km
4	チャチョンウ	12.2 km
5	チョンブリー	156.0 km
6	チュムボーン	222.2 km
7	トゥラン	119.2 km

8	タラート	165.6 k m
9	ナコーンシータマラート	225.0 k m
10	ナラティワート	59.0 k m
11	プラチュワプキリカン	224.8 k m
12	パッタニー	116.4 k m
13	パンンガー	216.2 k m
14	ペッチャブリー	90.6 k m
15	プーケット (タイで一番大きい幅 20.0 k m 長さ 45.0 k m ある島)	
16	ラノーン	93.2 k m
17	ラヨーン	100.0 k m
18	ソンクラ	154.6 k m
19	サトゥーン	114.8 k m
20	サムップラカーン	47.2 k m
21	サムツソンクラーム	21.2 k m
22	サムツサーコーン	38.8 k m
23	スラーターニー	156.0 k m

工業化を目指すタイ

昔から農業国だったタイは、1950年頃から工業開発を目指すようになり、政府機関による投資委員会（BOI）を制定しましたが、その後、1957年9月16日のサリット・タナラット元帥によるクーデターにより、ピブン・ソンクラーム首相が日本へ亡命し、サリット元帥による徹底した軍事独裁政権が誕生しました。

サリット首相は、地方の悪路だった幹線道路の改善に着手すると同時に、麻薬やアヘン窟の厳しい取り締まりをはじめ、放火罪で逮捕された犯人をサナムルアン広場で見せしめに、大衆の面前で銃殺の刑に処したりする凄惨な独裁者でした。

一方、サリット首相は、将来のタイの経済振興にも目をつけ、国産化政策を推進しました。海外からの投資を歓迎する工業化を目指していましたが、1963年12月に病死しました。しかし工業開発事業はそのまま継続され、1971年に工業省の管轄化による工業地区運営を管理するタイ工業団地公団（IEAT）により、バンコクのバーンチャーン工業団地が完成し、本格的な工業団地開発の出発点となりました。

現在38ヶ所の工業団地があり、このうちIEAT直轄の工業団地が12ヶ所、IEATと民間企業の合弁事業の工業団地が26ヶ所あり、3142ヶ所の事業所で44万5237人の雇用者が

職務に就いています。

工業省管轄のIEAT工業団地とは別に、民間企業が開発したインダスタリアル・ゾーン、インダスタリアル・パークなどの工業団地もあります。

政府機関による投資委員会(BOI)は、筆頭に首相を議長とし、工業大臣、財務大臣、商務大臣および、工業省、国家経済社会開発委員の次官、タイ工業連盟会長、タイ商工会議所会頭、タイ銀行協会会長など13名の委員並びに、5名の顧問により1977年に制定され、BOIにより各県を4つのゾーンに分別し、各ゾーンごとに、次のように異なった優遇恩典を与える方針をとっています。

ゾーン(1)は、中部のバンコク、ノンタブリー、プラトゥムターニー、サムツサーコーン、ナコーンナークヨックおよび、東部のサムツプラカーン県で、法人所得税の減免、機械設備の輸入税減免、工業団地敷地内で立地する場合は3年間の免税、税率10%以上の物品は50%免税、輸出製品原材料の輸入税免税などが含まれています。

ゾーン(2)は、中部のアユッタヤー、アーントーン、スパンブリー、ナコーンナークヨック、サラブリー、サムツソングラム、東部のチャチョンサーウ、チョンブリー、ラヨーン、西部のラーチャブリー、カーンチャナブリーおよび、南部のプーケット県で、法人所得税の減税、機械設備の輸入減免、工業団地内地域で立地する場合は5年間の免税、税率10%以上の物品は50%の減税、輸出

製品用原材料の輸入税免税などが含まれています。

ゾーン(3-1)は、中部のシンブリー、ロッブブリー、チャイナート、ナコーンサワン、ペツチャブリー、プラチュアブキリカン、東部のプラチンブリー、サケーウ、チャンタブリー、タラート、北部のチャンマイ、チャンラーイ、ラムプーン、ラムパーン、メーホンソーン、ターク、カムベンペツ、ピサヌローク、スコタイ、ウタラディツ、ウタイターニー、ピチツ、ペツチャブーン、東部のナコーンラーチャシーマー、コーンケン、ローイ、ムクダハーン、および南部のチュムポー、ラノーン、スラターニー、ナコンシータマラート、パッタラン、ソンクラ、トゥラン県で、法人所得税減免、機械設備の輸入税減免、工場団地内で立地する場合は8年間の免税、その後5年間は50%減税、輸送費、電気代、水道代の2倍までを収益がある日から10年間控除、インフラ設置、建築費の25%を収益がある日から10年間、純利益から普通の減価償却費に加えて控除可能、輸出製品材料の輸入税減免、5年間の延期可能などが含まれています。

ゾーン(3-2)は、北部のバヤウ、プレー、ナーン、東北部のチャイヤブーム、ノーンカーイ、ノーンブアラムプー、ウドーンターニー、カラシン、マハーサーラカム、ローイエート、ヤソートーン、サコーンナコーン、ナコンパノム、ブリーラム、スリン、シーサケート、アムナートチャローン、ウボンラーチャターニー、および南部のサトゥーン、パッタニー、ヤラー、ナラティワートで、法人所得税減免、機械設備の輸入税減免、8年間の免税、その後5年間50%減税、輸送費、電気

代、水道代の2倍までを、収益がある日から10年間控除、インフラ設置および、建築費の25%を収益がある日から10年間純利益から普通の減価償却費に加えて控除可能、輸出製品原材料の輸入税免税、5年間延期可能などが含まれています。

なお、各ゾーンの工業団地名も記しておきます。

Zone (1)

- 1 Nava Nakhon Industrial Zone Pathumthani
- 2 Hi-Tech Industrial Estate
- 3 Bangkadi Industrial Park
- 4 Rangsit Proper Estate
- 5 Rangsit Factory & Warehouse
- 6 Gemopolis Industrial Estate
- 7 Bangplee Industrial Estate
- 8 Bangkok Free Trade Zone
- 9 SME Factory
- 10 Samut Sakho Industrial Estate

- 11 Sinsakhon Printing City and Industrial Estate

- 12 Bang Chan Industrial Estate

- 13 Lat Krabang Industrial Estate

- 14 Bangpoo Free Trade

Zone (2)

- 1 Kaengkhoi Industrial Estate

- 2 SIL Industrial Land (Saraburi)

- 3 Thanamol Group

- 4 Nong Khae Industrial Estate

- 5 Factoryland Wang Noi

- 6 Ticon Logistics Park

- 7 Saha Rattana Nakhon Industrial Estate

- 8 Rojana Industrial Park (Ayutthaya)

- 9 Hi-Tech Industrial Estate

- 10 Bangpa-In Industrial Estate

- 11 Tanamol Group

1 2 Rachaburi Industrial Estate
 1 3 Kanchanaburi Industrial Estate
 1 4 Leam Chabang Industrial Estate
 1 5 Pinthong Industrial Estate (Sriracha)
 1 6 Saha Group Industrial Park Sriracha
 1 7 Ticon Logistics Park
 1 8 Pinthong Industrial Estate (Leam Chabang)
 1 9 Amata City Industrial Estate
 2 0 Asia Industrial Estate
 2 1 Padaeng Industrial Estate
 2 2 Map Ta Phut Industrial Estate
 2 3 Hemaraj Eastern Industrial Estate (Map Ta Phut)
 2 4 TPI Industrial Park
 2 5 Rayong Industrial Land
 2 6 Rojana Industrial Park (Rayong)
 2 7 Siam Eastern Industrial Park

2 8 G.K. Land Industrial Park
 2 9 Eastern Seaboard Industrial Estate (Rayong)
 3 0 Hemaraj Chonburi Industrial Estate
 3 1 Hemaraj Eastern Seaboard Industrial Estate
 3 2 Amata Nakorn Industrial Estate
 3 3 Tanamon Group
 3 4 TFD Industrial Estate
 3 5 Ticon Logistics Park
 3 6 Wellgriw Industrial Estate
 3 7 Gateway City Industrial Estate
 3 8 3 9 4 Industrial Park 1 2

Zone (3—1)

1 3 0 4 Industrial Park-1
 2 Park Way Industrial Zone
 3 Kabinburi Industrial Zone
 4 Saha Group Industrial Park Kabinburi

5 Nava Nakorn Industrial Zone Nakornrachasima

6 Suranaree Industrial Zone

7 Indra Industrial Park

8 Northern Region Industrial Estate

9 Saha Group Industrial Park Lumpnun

10 Phichit Industrial Estate

11 Vanchai Group Onndustrial Park

12 Southern Industrial Estate

Zone (๓—๔)

1 Halal Food Industrial Estate

工業団地の面積は大きささまざまですが、1971年にバトゥムタニー県に、はじめて設立したナワナコーン工業団地は6400ライ、1988年にアユッタヤーに設立したロージャナ工業団地は1万300ライ、1992年にラヨーンに設立したサイアム・イスタン工業団地は1650ライ、1995年にサムップラカーンに設立したSME Factory は300,000m²、2006年にバトゥムタニーに設立したランシットファクトリー&ウェアハウスは45ライ、この他に、2011年に、更

に5ヶ所に1万7000ライの工業団地の開発が企画されています。(1ライは1600平米、又は約484坪)

現在このように広範囲にわたり無数の工業団地が誕生していますが、経済をめざした工場拡大のために、大事な自然も破壊され、マブタブット工業団地地域では公害問題も生じています。今後どのように対処していくのであろうかと、見守っています。

タイの自然は破壊されている

僕は子供の頃から旅行が好きでしたので、まだタイの交通事情が悪かった頃から地方へトコトコとでかけ、美しい自然と語り合っていました。

まだ自分の車や自転車がなく懐が寂しかった頃は、ノロノログットンゴットン走る安い汽車や、おんぼろの途中でよくパンクするタイヤが擦り切れたローカルバスを利用して、見知らぬはじめての土地を探索したりしていました。

昔といっても、ここ半世紀ぐらいにしかなりませんが、地方のどこへ行っても、見上げるほどの巨大な木々に囲まれたタイは、さすがに森林の国だ、といわれただけあって、豊かな鬱蒼とした森に恵まれた山並みが遥くまで連なっていました。

ですが、ここ僅か十数年の間に、緑に覆われていた森林は姿を消し、悲しいかな、逆にどこへ行っ

ても山肌を丸出しにした禿山が目立つようになってしまったのです。

あんなに沢山あった森林の丸太は、一体どこへ消えたのであろうかと思いますが、森林を切り開き道路や鉄道の建設、膨大なダムの建設、農地開拓などがありますが、この他にも、山を管理している山を守るべき森林局の担当者とグルになって山を荒らしている地元の権力者などの手により、森林は小さな自動のこぎりでなぎ倒され、重たい丸太は軽い現金に変身した札束となり、勢力のある資本家や権力者の懐におとなしく収まっているのです。

タイの自然が破壊されているのは、北部の山岳地帯だけでなく、タイ湾やアンダマン海周辺に点在している大小様々な島々や、国立公園にもおよんでいます。観光地と称して、金をばら撒き、目障りになる木々を伐採し、立派なリゾート地を開発しているわけですが、そのために自然はどんどん破壊されているのです。

特に広大な敷地を占領しているゴルフ場や、公害問題が生じている工業団地にもいろいろと問題があります。業務上どうしても現場を綺麗に開拓し、きちんと整えなければなりません。

ですから、邪魔になる代物はすべてを容赦なく処理しなければならぬので、無意識のうちに、大事な自然を破壊していることになるのです。

会社を運営していく以上、貿易も商売も経済的に非常に大事なことです。美しい自然を少しでも残すべきか、それとも破壊すべきかを、世界の人口が増えるにしたがって、真剣に思考しなければ

ならない分岐転に直面する日がくると思います。

バンコクからフワヒンまで約200kmある避暑地に鉄道が開通したのは1911年でした。

汽車が開通すると同時に、海辺にステーションホテルやバンガローが造られ、駅の後ろにも緑に包まれた綺麗なゴルフ場ができ、タイでは、はじめてのゴルフ場が誕生し、金持ちの楽園地となりました。

タイの地方にできたはじめてのゴルフ場ではありませんが、のちにバンコクのドーンムアン空港内の空軍基地にも小さなゴルフ場ができました。当時のゴルフ場はこの2ヶ所しかありませんでしたが、現在2010年の資料によると、タイにある素晴らしい綺麗なリゾート地として開発されているゴルフ場は、バンコクを含めて、249ヶ所あり、約8万8054ライの広大な面積を占め、1ヶ所のゴルフ場の広さは、平均約357ライを占めることになりましたが、それだけ美しい自然が破壊されていることになるのです。

現在判明しているゴルフ場の名称を記しておきます。

バンコク近郊のゴルフ場

1 Alpine Golf & Sports Club

2 Arttaya Golf and Resort

- ๓๓ Bagkok Royal Country Club
- ๔ Bangkok Golf Club
- ๔๖ Bangkok Golf Mah Boonkrong International Par 3
- ๖ Ekachai Golf Country Club
- ๗ Floravill Chuan Club
- ๘ Green Valley Chuen Golf Club
- ๑๑ Kiarti Thanea Country Club
- ๑๐ Kirisada City Golf Hills
- ๑๑ Krungthep Kreetha Sport Club
- ๑๒ Krung Kavee Golf Course & Country Club
- ๑๓ Lakewood Country Club
- ๑๔ Lam Lukka Country Club
- ๑๕ Muang Kaew Golf Course
- ๑๖ Muang ๑ Ake Golf Club
- ๑๗ Muang ๑ Ake Vista Golf Course
- ๑๘ Muang ๑ Ake Wang Noi Golf Club

- ๑๑ Natural Park Ramintra Golf Club
- ๒๐ Navatane Golf Course
- ๒๑ Northern Rangsit Golf Club
- ๒๒ Panya Indra Golf Club
- ๒๓ Panya Park Golf Course
- ๒๔ Pinehurst Golf & Country Club
- ๒๕ President Country Club
- ๒๖ Porime City Golf Club
- ๒๗ Rajchapruek Club
- ๒๘ Rangsit Sport Club
- ๒๑ Royal Dust Golf Club
- ๓๐ Royal Thai Air Force Club
- ๓๑ Royal Thai Army Sport Center (East Course)
- ๓๒ Royal Thai Army Sport Center (West Course)
- ๓๓ Subhapruek Country Club
- ๓๔ Tanyatane Country Club

- ㊦㊧ Thai Country Club
- ㊦㊨ Thana City Golf & Country Club
- ㊦㊩ Thanont Golf View & Sports Club
- ㊦㊪ The Legacy Golf Club
- ㊦㊫ The Pine Golf & Lodge
- ㊦㊬ The Royal Golf Country Club
- ㊦㊭ Unico Golf Club
- ㊦㊮ Waterrill Golf & Gardens

中央地域のゴルフ場

- 1 Green World Private Golf Land
- 2 Bangpakong Riverside Country Club
- 3 Bangpoo Country Club
- 4 Bangsai Country Club
- ㊦ Dragon Hills Golf & Country Club
- 9 Dynasaty Golf & Country Club
- 7 Kamphaeng Phet Akarayothin Golf Course

- 8 NCR Country Club Golf & Marine
- 9 Rose Garden Golf Club
- 10 Suwan Golf & Country Club
- 11 The Royal Gems Golf & Sport Club
- 12 The Royal Gems Lodge ㊦㊦㊦㊦
- 13 The Vintage Club
- 14 Uniland Golf & Country Club

東部地域のゴルフ場

- 1 Bangpakong Golf Club
- 2 Bangpakong Riverside Country
- 3 Bangphra International Golf Club
- 4 Bangphra Golf Club
- 5 Chonburi Century Country Club
- 6 Crystal Bay Golf (Natural Park)
- 7 Eastern Star Golf Resort
- 8 Greast Lake Golf ㊦ Country Club

6 Khao Kheaw Country Club

10 Laem Chabang International Country Club

11 Mountain Shadow Golf Club (Natyural Park Hill)

12 Noble Place Golf Resort & Country Club

13 Ptaya Country Club & Resort

14 Phonex Golf & Country Club

15 Plutalung Navy Golf Course

19 Royal Century Country Club

17 Rayong Green Valley Country Club

18 Rotyal Lakeside Golf Club & Resort

16 Siam Country Club

20 Soi Dao Highland Golf Club & Resort

21 Sriracha International Golf Club

22 St. Andrews 2000

23 Treasure Hill Golf Club

24 Wangjuntr Golf Park

25 World Trade Golf & Sport Club

東北地域のクラブ場

1 Forest Hills Country (Sir James Country Club)

2 Friendship Meadows Country Club

3 Kirimaya Golf Resort Spa' Khao Yai

4 Misson Hill Golf Club and Rrsort (Khao Yai)

5 Rooks Khort Country Club Golf & Resort

6 Royal Hills Golf Course

7 Seoul Siam Resort & Country Club (Pakchong Highland)

8 The Contry Club Kha-yaig

9 The Khao Cha-Ngok Golf Club

10 Victory Park Golf & Country Club

11 Voyage Panorama Resort & Golf Club

北部地域のクラブ場

1 Bhumibol Dam Golf Course

2 Chiangmai Green Valley Country Club

- 3 Chiangmai Gymkhana Club Golf Course
- 4 Chiangmai Gighlands Golf & Spa Resort
- 5 Chiangmai i Lamphun Golf Club
- 6 Iyara Golf Course
- 7 Jiraprawat Golf Course
- 8 Lanna Golf Club
- 9 Royal Chiang Mai Golf Resort
- 10 Santiburi Country Club
- 11 Waterford Valley Chiang Rai

南部地域のクラブ場

- 1 Blue Canyon Country Club Canyon Course
- 2 Blue Canyon Country Club Lake Course
- 3 Hat Yai Country Club
- 4 Hat Yai Resort & Golf Club
- 5 Laguna Phuket Golf Club (Banyan Tree)
- 6 Loch Palm Golf Club

- 7 Phuket Country Club
 - 8 Southern Hills Golf & Country Club
 - 9 Thai Muang Beach Golf & Marina
- 西部地域及び南部北方地域のクラブ場

- 1 Barrington Saiyoke
- 2 Cha i Am Global Village
- 3 Evergreen Hills Golf Club & Resort
- 4 Grand Garden & Golf Club
- 5 Green World Hot Spring Resort & Golf Club
- 6 Kaeng Krachan Country Club
- 7 Milford Paradise & Golf (Hua Hin Seidl CountryClub)
- 8 Miford River Kwal Golf & Country Club
- 9 Mission Hills Golf Club (Kanchanaburi)
- 10 Nichigo Resort & Country Club
- 11 Palm Hills Resort & Country Club
- 12 Rachaburi Country Club

- 13 River Kwai Golf & Country Club
- 14 Royal (Villa) Rachaburi Golf Club
- 15 Sawang Resort Golf Club
- 16 Springfield Royal Country Club
- 17 The Imperial Lake View Hotel and Golf Club
- 18 The Majestic Creek Country Club
- 19 The Rotary Hua Hin Golf Club

山の声

僕は自然に恵まれたブーケツ島で生まれたせいなのか、それとも、小さいときから一人ぼっちにされて育ち、孤独だったせいかもしれません、自然の美しさに憧れ、綺麗な海や山が好きでした。ですから、海で泳いだり、山に登ったりするのも好きでした。

僕は無学で知識があまりなかったもので、いつも仕事にあぶれてフラフラしていました。が、1955年に運よくチョンブリー県シーラチャー郡バーンプラのSRタピオカ工場で、日本語とタイ語の通訳として、新工事現場の建造が終わるまで勤めることになりました。

工場の寮は2階建ての広いベランダつきの風通しのいい涼しい寮で、工事中の工場のまん前にあ

りました。

寮の裏のほうにはセメントで丸く囲んだあまり熱くない名ばかりの温泉があり、時々数人の観光客が車を停めて遊びにきている姿に接しました。

僕が工場に行った当初は、ちょうど温泉に添って貯水地にするために、遠くまで石を積み重ねて高い防波堤を築く工事が開始されたばかりで、貯水地（現在満水になっている綺麗なバーンプラの貯水地）には見渡す限り雑草が生い茂っているだけで、一滴の水もなく、雨が降るたびに水が少しづつ溜まっていた状態でした。貯水地の工事現場から離れた遠方に、林に覆われた緑に包まれた小高い山並みが聳えていました。

僕は休みの日には、よく一人で山登りをし、山の頂上から綺麗な景色を眺めて楽しみましたが、いつも山へ行くときは、口笛を吹き、所々に灌木がある農家も何もなかった山道を歩いてゆきました。いつものことながら、僕が口笛を吹きながら山に向かって歩きだすと、工場にいる可愛がっている数匹のワンちゃんが、目を輝かせて嬉しそうにして道案内兼ボディガード役をかねてついてくるのです。

青々とした野原や山には、頭の細長い綺麗なグリーンズネック、黒っぽい頭をパッチャンコにして飛び掛ってくるコブラ、腕の太さほどある大きなノロノロ這っているニシキ蛇、トカゲ、カメレオン、リスや可愛い綺麗な兎も一杯いました。

時々、雑草が生い茂っている凸凹^{でこぼこ}した山の傾斜で兎と出合ったりすると、兎はびっくりしてピョンピョン飛び跳ねて逃げるので、僕は犬と一緒に追いかけて、汗ダクダクになって鬼ごっこをしたりして日が暮れるころまで自然と戯れて遊んでいました。

山登りをしない日は、時々シーラチャーの何もなかった閑散とした車もあまり通らない寂れた下町を見物したり、コ・ロイー（離れ島）まで歩いてゆき、山の上にあるお坊さんが1人しかいなかった小さなお寺まで登って、海の景色を眺めたり、さざ波が押し寄せる浜辺をただフラフラ何キロも歩き、木陰で潮風にうたれて一休みしたりして、SR工場に戻っていました。

当時、コ・ロイーへ渡るには、錆付いた鉄道線路が通っていた細長い壊れかかった木の栈橋を使いました。架かっていたその板橋の隙間に足を突っ込まないように気をつけて歩かなければなりませんでした。

僕はあるとき、このコ・ロイーで泳いでいて、鯨に襲われて命拾いしたことがある想い出深い島ですが、古びた板橋は、今は道路に変身し、車で島まで行けるようになり、便利になりました。

よく山登りをした懐かしいシーラチャーの山にお別れをして以来、僕は時々、バンコクに近い小高いサラブリーの現在国立公園になっているカウ・ヤイヤ、ロップブリー、ナコーンナーヨックのサリカーの滝がある山や、ロイー県のプーカドウン（カドウン山）に登ったりしました。

ですが、そのうちに北部の波多野さんがいたチャンマイ周辺の山や、メーホーンソーン、チャン

ラーイなどの大きなチークの森林に覆われた、どこまでも山の峰が幾重にも重なって続いている雄大な山に憧れるようになりました。

僕は怖いものしらずで、ただの好奇心で北部の山に興味を抱いていたのですが、勿論、山へ行くのに下調べをしたこともありませんでしたので、はじめの頃は、山には近隣国から越境してきた綺麗な民族衣装を身に纏ったりス、ヤオ、モン（メーウ）、ムーソー（ラフ）、カリヤン（カレン）、アカ族などの山岳民族がいることも知らず、しかも、ヘロインの麻薬の元となるケシを栽培している危険地帯であることもすらもぜんぜん知らずに、平気でテクテク歩き回っていたのです。

のちに、ある親しい秘密警察の友人から「麻薬地帯を一人で歩くのは危険だ、消されてもわからないから護衛をつけて歩くように、仲間を紹介するから」と注意されてからは、ロバに1週間分ほどの食料を積み、タイ語があまりできない山岳民族のガイドと、銃を持った護衛をつけて、数人で山に入るようになりました。

「黄金の三角地帯」と呼ばれている山の中を歩くとき、特に村はずれにあるケシやマリファナが一杯植えてあるまだ足跡が残っている地域を通過するときは、周囲に気を配りながら歩いたものです。

北部で山登りをするときには、いつも山岳民族の村で、村長の家にホームステイさせてもらっていました。あるとき、食料の用意なしで山に登ったことがあります。食料について、ガイドがいるから安心だ、と思っていたいたら大間違いです。

要は、山全体に綺麗なケシの花が咲き乱れていたのを見つけた僕が、夢中になってケシの花の写真を撮っていたのですが、気づかぬうちにいつの間にか密林の中で、ビルマ領に迷い込んでしまったのです。

案内役のガイドが慌てて「方角がわからなくなってしまった」と、真っ青になってしまい、オドオドしていたので、僕の気転で、磁石の針を頼りに、ぼうぼうと生い茂っていたやぶを、細長い鉋で切り開きながら進み、やっと遙か彼方の山の頂上に、タイの山岳民族の村が見えときは、ホッとしましたが、その日は飲まず食わずで日が暮れる頃まで歩きました。

僕は冒険好きで、怖いもの知らずでしたので、どこでも一人で平気で行けたのかもしれませんが。

現在77県あるタイ全土の、道なき道を1人でドライブし、走り回り、様々な体験をしてきました。およそ50〜60年前までは、どこへ行くにも道路事情が非常に悪く、ハイウェーとは名ばかりで、道は赤土か、または、砂地でガタガタでしたし、川に直面しても橋がないか、橋が架かっていたらとしても、森林から切り倒した四角く切つてない大きな丸太を、そのままタイヤの幅に片方に2本ずつ並べてあるだけで、橋には足下駄も手すりも何もない、ただ橋の端から端に大きな長い丸太が差しかけてあるだけの危なっかしい丸太橋でしたので、姿勢を正し、ハンドルをぎゅっと握りしめて命がけで運転しなければなりませんでした。

ですから、橋もない川が深すぎて渡れない所に直面した場合には、車を町の本質宿か、山の麓の

村にある村長さんの家に預けてから、凸凹した山を目指し、『ジャングルの麻薬の密輸ルート』ともいわれていた、赤、白、紫の綺麗なケシの花が満開していた道なき道を探検して歩きました。

木々に覆われたジャングルを歩いていると、スパッとよく切れる鉋を腰にぶら下げた人や、細長い手製の銃を肩から担いだカレン人、重そうな荷を数頭のロバの背中に積んだ怪しげなチーンホーの連中の一行と出合ったりしました。

タイの北部の山は、ほとんどがビルマ国境と接しているので、国境近くには陸軍の警備隊と、国境警察警備隊（BPP）が駐屯していました。

その頃は、主力にあたる陸軍の警備隊は、主に山の麓の小川が流れている広い敷地に駐屯していましたが、BPPは国境および、山岳民族の村の見張りをかねた駐屯基地が、山上の頂上の所々に点在していました。

当時の山岳民族の人たちは、タイ語はほとんどできず、警備隊の兵士が小さな掘立小屋で、子供や大人たちにタイ語の読み書きから教えていた村が数ヶ所ありました。

その頃の山岳民族の人たちは、外部の珍客を恐れて（特に黒いアヘンの塊を隠していた村）か、警戒心が強く、遠くから村に近づいてくる人影を発見すると、どこかに見張りがいるらしく、みんな家の中に隠れてしまい、斥候兵みたいな見張り役が一人だけ顔をだして安全だと見極めてから、はじめてOKサインがだされていたので、生死、あるいは逮捕される一瞬を決めるスリルがあ

りました。

僕はチャンマイのドーイ・アンカーン（アンカーン山）にキングズプロジェクトがはじまった頃から、国境を警備している可哀想な警備隊の兵士や、行き場のない苛められているか弱い山岳民族の人や、地元の借金を抱えているタイの人たちと、およそ半世紀におよび接してきたお陰で、いろんなことを学び、よい人生勉強になりました。

山の民の行方

ビルマやラオスの隣国から越境し、タイの高地に移住している貧しい少数民族は、（ラーサドーン・チャウカウ）山岳民族ともいわれています。手の凝った文化を無言で表している綺麗な民族衣装を着飾っている山の民は、元は焼畑をしながら山の峰伝いを自由に行き来し、新たな土地を物色し、確保し、村を築き、年長者が村のコミニティーを形成し、ケシや農産物などを栽培して生計を立てていました。

しかし、山から山へ墾地を物色しながら自由に移住していた山の民は、タイ当局から勝手に移動することを禁止され、同時に、軽くて運びやすいよい収入源となっていたケシやマリファナの栽培を禁止されてしまいました。

したがって、現在は当局から指定され、各家族に割り与えられた僅か10ライ（1ライは

1600平米）前後の土地で家族が食っていかなければならないので、かなり苦しい窮地に直面しています。

土地を与えられたとしても、自分勝手によい土地を選択することもできませんので、よい土地に恵まれるか、悪い涸れた土地にあたるかは運次第です。

当局から農地を分割してもらったとしても、その与えられた土地の権限も所有権もなにもありません。利権もなければ、売買する権利もなければ、他の地域の土地を買うことも、移動することすらもできない見えない鎖で身を束縛されてしまっているのです。

それは何故かといいますと、国籍問題が絡んできますが、タイの国籍を取得している者のみが、自由に土地の売買ができる条件になっているからです。

タイのIDカードを持っていない人たちは、当局から各種族ごとに識別されたカラーカードの身分証明書が配布されています。

したがって、村から他の遠方の村、または、どこかの県、あるいは地方の学校で、学生寮から学校に通うとしても、田舎の村役所に出頭し、本人に配布された身分証明書を提出して「行き先と何月何日に村に戻ってきます」と明記した許可書（地方の病院に入院するときも同じ）を発行してもらわなければならない面倒な手続きがいるのです。

家族によっては、同じ兄弟であっても、タイ国籍を取得している人もいれば、何年経ってももら

えない人もいますが、役人に掴ませるワイロの問題が絡んでいるからではないかと、いわれています。

特に最近話題になっている、ビルマやカンボジアからイリーガルでタイに越境してきた連中が、村役所の役人にワイロを使い、タイのIDカードを発行してもらい、タイ人になりすまし、タイ人だと称している人たちが逮捕されているケースが増えています。

ワイロといえば、山なんかもそうですが、資本家である地元の権力者や政治家の仲間による、森林局や土地局の連中を買収し、グルになって、膨大な何千万ライにもおよぶ豊かな森林を「開発事業のために」と称して、瞬く間に伐採し、リゾート地に開発したり、様々なプランテーション地にしたりしています。このために山はめちゃめちゃに破壊されてしまい、禿山と化し、雨が降るたびに洪水や、土砂崩れが頻繁に発生し、山の麓に点在している村が、村ごと全部流され、あるいは、土砂崩れで生き埋めにされてしまう悲惨なケースが続出している現状です。

「森林を伐採し禿山にし、自然を破壊しているのは村人の仕業だ」と、いわれていますが、実際に山を荒らしているのは、山の民なのか、地元の山を守っているタイの村人なのか、それとも、他人の迷惑をも顧みず知らぬ顔をしている金欲に目が眩んだ権力者なのでしょうか？

山の民にしても、いつ権力者から「あそこはいい場所だ」といわれ、目をつけられ、圧力によって、村から平地に追いだされるかもしれない不安な気持ちを抱いている村もあるのです。

実際に、このようなケースが、もうすでに数十年前から起こっているのですが、反抗もできない

貧しい無力の少数民族は、ただおとなしく泣き寝入りするしかないのです。

数十年前までは自分の足を頼りにテクテク歩くか、愛嬌のある可愛い目を光らせた背の低い頑丈なロバの背中に跨って行かなければ、山岳民族がいる閑散とした風習文化に満ちた村へは行けませんでした。

村には道は愚か水道も電気もテレビも何もありませんでした。水道や電気はいまだにありませんが、村によって自家発電が入り、テレビが数時間だけ見れるようになった所もあります。

それと、山間を縫って走れるお粗末な山道がやっとできましたので、乾季間であれば、少数民族がいる村まではなんとか4輪駆動車で安心して行けるようになり、便利になりました。

道路ができたお陰で、山村には便利なオートバイやピックアップ車が增え、公衆電話や携帯電話も普及し、経済面もよくなるに従い、生活様式も徐々に変わり、便利な社会文化が山村に訪れると同時に、男女の衣装も普通のシャツ、ズボン、スカートなどの姿に変わり、大事な少数民族の伝統文化である民族衣装の姿が減少しているので、なんとなく侘しい心残りがする気持ちにかられるのです。

タイの法律では「タイで生まれた者はタイ人である」といわれていますが、何故だか、少数民族の仲間にはまだ国籍がないために、タイ人としての手当てや特権も何も得られず、苛められている可哀想な無国籍者の人たちが大勢いるのです。

現在、タイには無国籍者の人が難民も含めておよそ300万人もいる、といわれていますが、国籍がないためにお先真っ暗な人生を送らなければなりません。何とか国籍問題を解消し、行き場のない人たちのために、早急に夢と希望を、明るい世界を与えて欲しいものだと思います。

第8章 ビルマの民に人権と優しい安堵の光を

タイは昔から近隣諸国で国内の政変が起こったりすると、戦渦に巻き込まれた様々な民族が戦火を逃れ、安全な避難地として求めていたのが、タイの安らぎを与えてくれるスワンナプーム（黄金の地）の大地でした。

難民として逃げてきた人もいましたし、中国大陆から天秤棒を担いで出稼ぎ移民できていた貧しい中国人の人たちも大勢いました。

その中には、そのままタイに居住し、タイの女性と結婚し、タイ国籍を取得し、財閥となり、現在に至っている年老いた有名な華人も大勢います。

タイはビルマ、ラオス、カンボジア、マレーシアなど4ヶ国と国を接しているために、近隣諸国で内戦が起こったりするたびに、戦火に巻き込まれた難民が、命からがらでタイに避難してきます。

第2次大戦後、フランスの植民地だったベトナムは、フランス軍と紛争を起しましたが、フランス軍に追跡されたベトナムの難民が、1945年から1946年にかけてラオス領を越境し、タイとラオスの国境線となっているメコン川の濁流に飛び込み、美しい寺院が多い安堵の地を求めて

タイに逃げてきました。

当時、フランス軍に追跡されたおよそ7万人のベトナム難民がメコン川を渡り、イサーン（東北タイ）のノンカーイ、ナコーンパノム、ムックダハーン、ウドーンターニー、ウボンラーチャター、プラチーンブリー、ヤソートーン、サコーンナコーン、サケーウ、ノンブアラムプー、アムナートチャローン、スラーターニーおよび、パッタラン県周辺に、命からがら逃走してきました。タイは、可哀想なベトナム難民を受け入れ、身元を保証する白に緑のふちの難民カードを与え、タイで生まれた子は、タイ国籍を与えました。

およそ14年間タイに世話になったベトナム難民は、1960年に、祖国に帰りたい希望者だけ約35000人が帰国しました。ベトナム人は帰国に際して、タイにお世話になった記念に、ナコーンパノム県に、白い時計台の記念碑を残していますが、タイに残ったベトナムの難民35000人（このうち35737人はタイ国籍取得済みで、3491人が永住権保持者）は今ではタイ化し、タイ国籍を取得した人と、まだ無国籍者の人もいますが、現在もタイの各地で活躍している逞しい姿に接することができます。

タイは1960年以降から、更に1980年代にも、カンボジアの内戦で、約60万人におよぶカンボジア、ラオス、並びにベトナムのボートピープルを含めた難民の受け入れをし、最後にアランヤパテート（現サケーウ県）のカウイダーン・キャンプの閉鎖で、タイの難民キャンプの受け入

れは終止符を打ち、やっと近隣諸国に平和が訪れるかに見えました。

しかし、タイと長い国境線を接しているビルマでは、少数民族に対する軍事独裁政権の一方的な弾圧で、軍政に不満を抱いた少数民族グループによる内戦が発生し、徐々に激化し、1980年代頃からビルマの難民、主にカレン人、モン人が多いが、タイとビルマの国境線となっているモーイ川を小舟や浅瀬を歩いて渡り、少人数でタイ側に避難してくるようになり、現在に至っています。

ビルマの過去を振り返ってみますと、ビルマは、タイとはアユッタヤー王朝時代の1538年頃からチャックリー王朝の、ラーマ4世にあたるモンクット王時代の1852年まで、314年間にわたり、タイと戦乱を交えていました。が、その後、ビルマはイギリスの介入（1824-1826, 1852, 1855年の英緬戦争）により、イギリスの植民地となり、1886年英領インドに篇入され、ビルマ州となり、それ以来、タイとの紛争は終局を迎えました。

しかし、1941年12月8日未明の太平洋戦争勃発で、日本軍の介入があり、ビルマ進攻に関し、日本軍は開戦前から南機関の、鈴木敬司機関長の工作により、海路でアモイに脱出していたアウン・サン將軍とネ・ウイン2人を皮切りに、密に30名のビルマ独立義勇軍志望の有志を日本に集め、1941年4月から爆撃機で海南島の海軍地に移動し、三亜の海軍基地から50kmほど離れたジャングルでハードな軍事教練を受け、その後30名の有志は、10月5日に台湾の東海岸の玉里に移動し、台湾で開戦日まで待機していました。

1941年12月8日、太平洋戦争勃発と同時に、ビルマ独立義勇軍（BIA）に編成されていたアウン・サン将軍（アウン・サン・スーチー1991年ノーベル平和賞受賞者の、〈国民民主同盟（NDU）書記長の父〉）を先頭に、日本軍とともに陸路と海路に分かれ、ビルマの独立を目指してイギリス軍と戦い1942年6月、日本軍はビルマ全土を占領し、完全に軍政の支配下になり、23000人の兵力に増大していたビルマ独立義勇軍は国軍となりました。

はじめから「ビルマの独立を」と呼びかけアウン・サン将軍率いる30人の志士と、ビルマの独立を約束し、ビルマ機独立義勇軍を育てた大事な世話役だった南機関の鈴木大佐は、1942年6月に東京へ転任となり、日本軍の怠慢で7月末には解散となりました。

1943年8月1日、ビルマは日本軍の管理の下に独立を認められ、23000人に増大していたビルマ独立義勇軍は第15軍によりその中から3000人だけがビルマ防衛軍（BIA）に編成され、国軍となり、アウン・サン将軍が司令官になりました。

アウン・サン将軍は日本軍が約束通りビルマに真の独立を与えてくれないことに関し、密かに日本軍に反旗を翻すチャンスを狙い、日本に不満を抱いていたビルマ国軍、ビルマ共産党および、ビルマ人民革命党の仲間による反ファシス人民自由連盟（バサパラ、APPEL）が1945年3月27日、ベグーで抗日武装闘争を決峰し、全土で激戦が展開されるに至ったのですが、最終的に、日本の敗戦で終局を迎える結果となったのです。

ただし残念なことに、ビルマ独立義勇軍の指揮官だったアウン・サン将軍は、1947年7月19日午前10時半に、政界の権力争いではがみ合っていた保守派政治家のウー・ソー（U Saw）の陰謀で、会議室で憲法草案製作中に、4人のテロリストにより軽機関銃で、アウン・サン将軍を含む有志7名が瞬く間に暗殺されてしまったのです。

ネ・ウイン将軍体制

1945年8月15日の第2次大戦終戦後、イギリスの植民地だったビルマは、1948年1月4日に独立し、やがてネ・ウイン将軍体制となり、やがて大事な人権問題を無視した軍事独裁政権時代へと突入し、今日に至っています。

1962年ネ・ウイン将軍は軍事クーデターを起こし、革命評議会を設立し、憲法並びに議会を廃止し、更に7月にはビルマ社会主義計画党（BSP）を結成し、1964年3月に国家統制法で他の政党を完全に禁止しました。さらに1974年に革命評議会を解散し、大統領兼国家評議会議長となり、続いて、1981年11月、ネ・ウインは大統領兼議長を辞任し、党中央委員長に留まり、院政を敷きましたが、ネ・ウインは1988年7月の党大会で、すべての職務から手を引いてしまいました。

ビルマでは1988年9月に、ソウ・マウン国防相兼参謀総長を議長とした国家法秩序回復評議

会 (SLORC) による軍事クーデターが発生し、水平撃ちに乱射する軍部の発砲により市民348

人が死亡(死者1000人以上の説もある)1107人が逮捕されて投獄されたままになっています。

SLORCは1989年7月、目の瘤となるビルマ全土で民主化を叫びかける国民民主連盟 (NLD) の、か弱いアウン・サン・スー・チー書記長(暗殺されたアウン・サン・將軍の長女)を、国家破壊分子法違反との名目で、自宅軟禁し、政事活動に一切タッチするな、と、厳令を発したのです。

スー・チー女史は、1990年から数回にわたり自宅難禁されては解放され、また、自宅難禁され、延べ数年間にわたり自宅難禁を強いられましたが、昨年の2010年11月13日に、やっと自宅難禁から解放され、自由な身となりました。

ビルマの国民から多大の期待をかけられている民主化を目指す細身の身体から異常なエネルギーを発散するスー・チー女史の今後の行動力如何にもありますが、スー・チー女史は、バックグラウンドにアメリカの政治力を利用しながら、ビルマの民主主義運動に飛躍すると想われるものの、また、ビルマ軍部の弾圧により自宅難禁されないように配慮しながら行動しなければなりません。

ビルマ政府は1989年6月18日、国名を『ビルマ連邦』から『ミャンマー連邦』と改称し、都市名を『ラングーン』から『ヤンゴン』と変更し、2005年11月6日、ヤンゴンの北方約320km離れた中央平原のピンマナに首都を移し、ネイपीドー(御都・王都)と命名しました。ビルマがネイपीドーに首都を移した理由は、占い師の予言で、「近々にビルマで凄い地震が発

生し、大変なことになる恐れがあるから、首都の場所を変更したほうがよい」との、意見に基づいたものだと、聞いています。

反政府勢力は団結したが

鬱蒼とした山の峰に囲まれている67万6678平方キロにおよぶ豊かな資源に恵まれたビルマの多民族人口は、およそ5330万人ですが、ビルマ人、アラカン人、モン人、カレン人、カレニ人、パオ人、チン人、ワ人、ラフー人、シャン人、パラウイン人、カチン人、ナガ人など、言葉も違う135種の多民族におよぶ少数民族の人たちが今もなお、昔の美しい民族衣装の姿でビルマ全土に居住しています。

このうちビルマ民族が一番多く、69%を占め、ミャン族83%、カレン(カイン)民族63%、アラカン(ラカイン)民族45%、モン民族24%、チン民族23%、カチン民族14%、カヤー民族04%、その他の民族が56%となっています。

カレン民族は、ビルマがイギリスの植民地時代だった頃から、イギリスの手足となっていました。が、第2次大戦中もイギリス軍の手足となっていたので、アウン・サン將軍率いる独立義勇軍ともぶつかり、火蓋を交えたりしていたのです。

第2次大戦後ビルマは1948年1月4日に独立しましたが、民主化を目指す少数民族グループ

は、ビルマの軍事独裁政権から分離独立し、自分たちの手で政権を維持すべきだ、と、独立を叫び、カレン民族はタウングにカレン民族の臨時政府、カレン共和国建国独立を宣言し、カレン民族同盟 (KNU) デリラ組織を結成し、1949年1月13日からジャングルに立てこもり、ほかの反政府デリラグループと結成し、武力闘争の火蓋を切ったのです。

のちに、タイの国境に近いカイン州のマナプロに堅固な根拠地を構築し、カレン民族同盟 (KNU)、ビルマ民主同盟 (DAB)、カチン独立機構 (KIO)、NLD急進派、少数民族組織ビルマ同盟 (DAB)、全ビルマ学生民主戦線 (ABSDF) など、当初は21組織による約4万人の反政府力を結成し、政府軍と悲壮なゲリラ戦を繰り返していました。

ですが、マナプロのゲリラ基地は、政府軍の地下工作により、クリスチャン派と、仏教派のカレン民族同士の仲間割れが成功し、マナプロのゲリラ根拠地はビルマ軍指揮下の猛攻に遭遇し、大事な基地は焼かれ、1995年3月26日に占領されてしまったのです。

マナプロ基地が陥落した後、反政府グループは分裂してしまいましたが、ビルマの軍政権は当時まだ17グループほど残っていた反政府武装勢力のうちの16グループと停戦協定を結んだために、ボ・ミヤ将軍が率いるカレンのゲリラ部隊と、多数の反政府グループしか残っていない現状です。

カレン民族はモンゴル地方から南下してきたモンゴリアン系の民族ですが、居住地域は、主にビルマ南東部のカレン州、カヤ州、テナセリウム管区や、アラカン州などに分布しています。テナセ

リウム、アラカンのカレン族のことを、ポー・カレンといい、テナセリウムのカレン族を、イースト・ポー、アラカン地方のカレン族を、ウエスト・ポーと呼び、タイのモーイ川沿いの国境周辺のカレン州に居るカレン族は、スゴウ・カレンといわれています。ですが、タイではみんな同じようにカリヤン (カレン) と呼んでいます。

カレン民族の宗教は、昔 (1824年) のイギリスの植民地時代からキリスト教徒と仏教徒に分かれていましたが、スゴウカレン族やカレンニー族は、キリスト教徒が多数を占めていました。

カレン民族のキリスト教徒と、仏教徒のパーセントを調べてみましたが、資料によってキリスト信者が70%と表記されてある資料と、仏教徒が70%と記載されている資料があり、どちらが正しいのか不明な点がありました。

ビルマの宗教は、89.40%が上座部仏教で、キリスト教が4.94%、イスラム教が3.99%、ヒンドゥー教が0.51%、精霊信仰が1.12%となっています。

カレン民族の希望は、ビルマの軍事政権から独立し、コートレイ (花咲く大地) カレン共和国の建国を願望とし、今もなおビルマの強敵を相手に、苦境に追い込まれても、カレン独立をモットーに、少数民族のために、マラリヤに冒されながらも危険なジャングル地帯で死闘を繰り返しています。

カレン民族統一同盟 (Karen National Union) KNUゲリラ部隊の司令官であるボ・ミヤ将軍率いるカレン軍 (Karen National Liberation Army) KNLAは、次のように7軍管区に編制されて

います。

KNLAの最高司令官 ボ・ミヤ中将

第1軍管区タートン

司令官 ジョ・リー大佐

司令部 クイケエ

第1旅団 兵力 1300名

第2軍管区タウンゲー

司令官 ボニイ大佐

司令部 タクイチョウ

第2旅団 兵力 750名

第3軍管区ニヤンレビン

司令官 シヤ・ミン大佐

司令部 カウムダ

第3旅団 兵力 1800名

第4軍管区メルグイ、タボイ

司令官 オリバー大佐

司令部 メサミー

第4旅団 兵力 2000名

第5軍管区ドゥプラヤ

司令官 シュイ・サーイ大佐

司令部 チャッドン

第6旅団 兵力 1450名

第6軍管区パーン

司令官 テイ・マオン大佐

司令部 モパス

第7旅団 兵力 1850名

第7軍管区 総司令部

ラ・トゥー軍務局長／准将

司令部 マナプロウ

直結指揮 1個中隊

ムドロウ特別管区部隊

第20大隊

ワンカー特別管区部隊

第101大隊

タドワ特別管区編隊及び、

コンドー第1大隊

イラワジ特別編隊

兵力 3250名

合計兵力 12,400名

1991年のKNLA部隊編成内容

1個分隊 11名

1個小隊 33名 (3個分隊)

1個中隊 100名 (3個小隊)

1個大隊 400名 (4個中隊)

1個旅団 1,200名 (3個大隊)

1コンドー大隊 450名

1個ゲリラ隊 80名

1個ゲリラ編隊 240名 (3個ゲリラ隊)

ビルマ民主同盟 (反政府連合) 組織

DAB The Democratic Alliance of Burma (1998 年 11 月 18 日設立)

目的 1. 軍党政権を打倒する 2. 民主主義と人権を達成する

3. 国家に平和を回復させる 4. 真の連邦を建設する

DAB メンバー

- 1 ABMU The All Burma Muslim Union
- 2 ABSDF The All Burma Students Democratic Front
- 3 ABYMU The All Burma Yong Monks Union
- 4 ALP The Arakan Liberation Party
- 5 CNF The Chin National Front
- 6 CRDB The Committee for the Restoration Of Democracation in Burma
- 7 GBA The German Burma Association
- 8 KIO The Kachin Independence Organization
- 9 KNU The Karen National Union
- 10 LNO The Lahu National Organization
- 11 MLO The Muslim Liberation Organization
- 12 NUFA The National United Front of Arakan

- 13 NMSP The New Mon State Party
- 14 OBLF The Overseas Burma Liberation Front
- 15 OKO The Overseas Karen Organization
- 16 PSLP The Palaung State Liberation Party
- 17 PNO The Pa—o National Organization (潯猓)
- 18 PLF The Peoples Liberation Front
- 19 PPP The Peoples Patriotic Party
- 20 SSPP The Shan Static Progress Party
- 21 WNO The Wa National Organization

DAB メンバー 日本部執行委員会

Chairman General Bo Mya (KNU)

Vice—Chairman

- 1 Mr Brang Seng (KIO)
- 2 Naing Shwe Kyin (NMSP)
- 3 General Thwin (PPP)

General Secretary

U Tin Maung Win (CRDB)

Deputy General Secretary

1 Dr Tu Ja (KIO)

2 U Moe Thee Zon (ABSDF)

Secretary of Military Committee

Col. Maung Maung (KNU)

Deputy Secretary of Military Committee

Col. Zaw Seng (KIO)

Secretary of Foreign Committee

Dr Em Marta (KNU)

Deputy Secretary of Foreign Committee

U Kyaw Hla (MLO)

Secretary of Finance Committee

U Tin Maung Thet (ABMU)

Secretary of Organization and Information Committee

U Aya Saung (PLF)

Deputy Secretary of Organization & Information Committee

Khaing Saw Tun (NUFA)

1990年頃のビルマ正規軍10軍管区の編成

国軍最高司令官 タン・シユエ大将

陸軍司令官 タン・シユエ大将

海軍司令官 マウン・マウン・キン中将

空軍司令官 テイン・トゥン中将

陸軍参謀長 第二書記ティン・ウー少将

情報局長 第一書記キン・ニユン少将

兵站総局長 アウン・イエ・チョウ中将

第一特別作戦室長 セイン・アウン中将

第二特別作戦室長 チッ・スエ中将

司令官

「首都方面軍管区（司令部ラングーン）ミョウ・ニユン少将

2 中部方面軍管区 (司令部マンダレー) トウン・チ少将

3 東部方面軍管区 (司令部タウンジー) マウン・エー少将

4 西部方面軍管区 (司令部シットウエ) ミヤツ・ティン少将

5 南部方面軍管区 (司令部タウンダー) エー・タウン少将

6 南東方面軍管区 (司令部モールメイン) ソー・ミン少将

7 南西部方面軍管区 (司令部バツセイ) ミン・アウン少将

8 北部方面軍管区 (司令部ミツチナー) チョウ・バ少将

9 北東方面軍管区 (司令部ラシオ) マウン・ティン少将

10 北西部方面軍管区 (司令部モニャ) チョウ・ミン少将

第11 軽歩兵師団 司令部インタイン

第12 軽歩兵師団 司令部バーン

第13 軽歩兵師団 司令部サガイン

第14 軽歩兵師団 司令部タアトン

第15 軽歩兵師団 司令部カロン

第16 軽歩兵師団 司令部プロム

第17 軽歩兵師団 司令部ニャンレビン

第18 軽歩兵師団 司令部マクウエイ

第19 軽歩兵師団 司令部メイクテイラ

第101 軽歩兵師団 司令部不明

方面軍管区司令部 RC (Regional Command)

軽歩兵師団 LID (Light Infantry Division)

軽歩兵連隊 LIR (Light Infantry Regiment)

連隊 BR (Burma Regiment)

ビルマ大隊 BRF (Burma Rifles)

カチン大隊 KR (Kachin Rifles)

カヤ大隊 KyR (Kaya Rifles)

チン大隊 CR (Chin Rifles)

シャン大隊 SR (Shan Rifles)

1990 年頃の兵力 2008 年以降の兵力

総兵力 280,000 375,000

陸軍	260,000	350,000
海軍	10,000 (海軍歩兵 800)	13,000
空軍	10,000	12,000
人民警察軍	-	72,000
民兵	-	35,000

軍管区 12、軽歩兵師団 10、歩兵大隊 437、機甲大隊 10、高射砲大隊 7、砲兵大隊 7、
 戦車 150両、軽戦車 105両、
 小型艦艇約 100隻
 作戦機、ヘリコプター約 100機、
 中国からジェット戦闘機 F6 (Mig 16)、F7 (Mig 21) 10機、
 ユーゴスラビアからプロペラ機 G4、PC7、
 コルベット艦 3、戦闘飛行隊 3、(F7) 2機は滑走路で事故炎上
 対ゲリラ戦飛行隊 2、ヘリコプター飛行隊 4、
 ミグ 29など戦闘機 58機

ミャンマー連邦 SLORC

国家法律秩序回復委員会メンバー及び閣僚リスト

I SLORC メンバー

- 1 議長 タン・シュエ大将 国軍司令官、陸軍司令官
- 2 委員 マウン・マウン・キン中将 海軍司令官
- 3 委員 テイン・トウン・キン中将 空軍司令官
- 4 委員 アウン・イエ・チョウ中将 兵站総局長
- 5 委員 ポン・ミン中将 内務相
- 6 委員 セイン・アウン中将 第一特別作戦室長
- 7 委員 チツ・スエ中将 第二特別作戦室長
- 8 委員 チョウチヨウ・バ少将 北部軍管区司令官
- 9 委員 マウン・エー少将 東部軍管区司令官
- 10 委員 ニヤン・リン少将 前南東軍管区司令官
- 11 委員 ミヨウ・ニユン少将 ヤンゴン軍管区司令官
- 12 委員 ミン・アウン少将 南西軍管区司令官
- 13 委員 ミヤツ・ティン少将 西部軍管区司令官

- 14 委員 トウン・チ少将 中部軍管区司令官
- 15 委員 エー・タウン少将 中部軍管区司令官
- 16 委員 マウン・ティン少将 北東軍管区司令官
- 17 委員 マウン・フラ少将 国軍人事局長
- 18 委員 チョウ・ミン少将 北西軍管区司令官
- 19 委員 ソー・ミン少将 南東軍艦陸司令官
- 20 第一書記 キン・ニユン少将 情報局長
- 21 第二書記 ティン・ウー少将 陸軍参謀長

II 閣僚

(1) 大臣

- 1 首相兼国防相 タン・シユエ大将 (SLORC 兼任)
- 2 鉱山相 マウン・マウン・キン中将 (SLORC 兼任)
- 3 運輸相、労働相 ティン・トウン中将 (SLORC 兼任)
- 4 第一工業大臣 セイン・アウン中将 (SLORC 兼任)
- 5 農業相 ミン・アウン少将 (SLORC 兼任)

- 6 林業相 チツ・スエ中将 (SLORC 兼任)
- 7 内務相 ボン・ミン中将 (SLORC 兼任)
- 8 宗教相 ミョウ・ニユン少将 (SLORC 兼任)
- 9 文化相 アウン・イエ・チョウ中将 (SLORC 兼任)
- 10 共同組合相 ミヤツ・ティン少将 (SLORC 兼任)
- 11 計画財務相、貿易相 エー・ベル准将
- 12 保健相、教育相 ペー・ティン大佐
- 13 外相 オン・ジヨウ
- 14 情報相 ミョウ・タン准将
- 15 蓄水産相 マウン・マウン准将
- 16 エネルギー相 キン・マウン・ティン
- 17 鉄道運輸相 ウィン・セイン
- 18 第二工業相 タン・シユエ
- 19 建設相 キン・マウン・イン
- 20 通信・郵便・電信相 ソー・ター
- 21 社会福祉・救済復興相 タウン・ミン准将



ヌボキャンプ内の難民



ヌボキャンプの少年たち



ヌボキャンプにいたハンネンさん家族
2011年3月アメリカに定住

(2) 副大臣
 一 鉦山副大臣
 二 鉦山副大臣
 三 運輸副大臣
 四 内務宗教副大臣
 五 協同組合副大臣
 六 計画財務副大臣
 七 貿易副大臣
 八 保健副大臣
 九 教育副大臣
 一〇 情報副大臣
 一一 エネルギー副大臣

フライン・ウイン
 ミン・テイン
 サン・ウエイ
 タン・ニユン中佐
 タン・アウン
 ウィン・テイン准将
 ウィン・ナイン
 タン・ジン大佐
 チー・マウン大佐
 ソー・ニユン
 ティン・トウン



ヌボキャンプで SVA 主催の子供文化祭に出
演する嬉しそうな子供たち

ビルマ軍と戦って両目を失明
した可愛そうな KNU の兵士



421



マナプロ基地で警備に当
たっていた少年兵



キャンプ内で孫の未来を案
じる老人



マナプロ基地で、真ん中はボ・ミヤ將軍、向かっ
て左が KIO ブラン・セン書記長



向かって左から二人目が KIO
のブラン・セン書記長
三人目が KNU のタン・オン・
タン副大統領



マナプロ基地にい
た非番の少年兵

420

少数民族最大の勢力を誇るカレン民族同盟のボ・ミヤ將軍は、1976年から2000年まで議長を務めました。2006年12月に死亡しました。ボ・ミヤ將軍亡きあと、ノードとネーコー大佐二人の息子がムトゥ司令官とともに紛争を続けていましたが、現在三人の消息は不明です。

KNU (Karen National Union) だけは、タイの国境に近いモイ川沿いを転々と移動しながら反撃を繰り返していますが、現在KNUの他に、北部のメーホーンソン県パーンマパー郡のビルマ国境沿いで、チャイヨート・スック大佐の指揮下で、1996年から120回もビルマ軍と華々しく戦った、タイヤイ兵士が見守っているドーイ・タイレン (タイレン山) 高地に、約1万人の兵力で基地を見守っているSSA (Shan State Army) などがまだ頑張って戦っています。

ドーイタイレンの基地には、キャンプ、お寺、病院、身寄りのない孤児寮や、小学1年から中学3年までのドーイタイレン学校があり、在学中の生徒は小中合わせて約800人ですが、このうち両親を亡くしたラフー、バロンやタイヤイ族を含めた約200人の孤児が寝起きをともにし、一緒に勉強しています。

孤児の話によると、可哀想な話が一杯ありますが、父はビルマ軍にポーターとして連行され、再び帰らぬ身となり、母は数人のビルマ兵に強姦され、村は焼かれ、ジャングルに逃げ込み、数日隠れていてSSA兵士に助けられています。

現在12歳になったセーシマンニーさんの、彼女が6歳のときに直面した悲痛なメッセージが届い

ていますので、記しておきます。

お父さんはポーターとしてビルマ兵に連れて行かれて
殺されたの

お母さんは家の中で数人のビルマ兵に強姦されて、

私たち姉妹がいる目の前で、鉄砲で殺されたの

私たち姉妹は数珠繋ぎにされて、外に連れだされたの

泣いていたら通りかかった村の人が助けてくれたの

それで、妹と別れてこの孤児寮にきたの

大きくなったら看護婦になりたいわ

と、希望と真相を伝えていきます。

2011年12月初旬頃からビルマ軍とKNUやSSA反政府ゲリラグループとの間で、停戦協定を結ぼうとする兆しがでていますが、果たしてどのように進展するかは予断を許しません。

乾季が訪れる (11月―5月) たびに、ビルマ軍の攻勢が活発化し、そのたびに、ビルマ軍の砲火に追跡されながら、無言で国境線を示すモイ川を命がけで渡り、タイに逃げてくる可哀想なビルマの難民の姿が後を絶ちません。

タイの難民キャンプは確かアランヤプラテートにあったカウイダーンキャンプを閉鎖したのが

1993年で最後だったはずですが。しかし、ビルマから僅かな荷物をからげ、可愛い子供を背負って避難してくる難民を、人道的にも見捨てるわけにはいきません。

そのために、モイ川が流れているタイの国境沿いには1984年頃からターク県メーソート郡の105号線を北上したターソーンヤーン郡周辺に当初1万2000人の難民が流入し、その後、南部に下がったウンパーン郡に沿った106号線に沿ってビルマの戦災難民キャンプが竹の子式に誕生し、今では約10ヶ所のキャンプに、延べ約15万人の戦火に追われた難民が所狭しと分散して入居しています。

しかし、毎年のことながら乾季の季節になると、国境地帯ではビルマの正規軍の猛攻がはじまり、内戦で祖国を追われて避難してくる哀れな難民は、安全だとされるタイの戦災キャンプを目指し、生命からがら逃走してくるのです。

鬱蒼とした密林の山岳地帯には、所々に地雷も埋まっていますので、うっかり歩けません、逃走中に地雷を踏んで怪我する可哀想な人もでています。

ビルマの正規軍に襲撃されるたびに死傷者が生じますが、モイ川を無事に渡った者はタイのメーソートの病院、または、メーソートのカレン難民の、ミンティア医師(1989年から難民やビルマの労働者に無料治療を施している)のメートークリニックで介抱してもらえるものの、万一、ビルマ領内で倒れて逮捕された場合は、老若男女を問わず、まず死を覚悟で、観念するしかありません。

せん。

密林の中には腐敗したビルマ兵士の死体なども転がっていますが、死体の下に手榴弾が仕掛けてあったりするので、うかつに死体の処理をすることもできません。

死体を見て可哀想だと思つて死体に触れると、死を招くことになるかもしれませんので、気をつけないければなりません。

ビルマ国内では軍事政権と対立している少数民族、特にカレン民族などに対する弾圧は酷く、男は(女も時々強制され、拒否すれば即座に射殺されるし、夜は強姦されている)ポータとして狩りだされ、戦場に向うビルマ軍の重たい武器弾薬を担がされ、ゲリラとの戦闘がはじまれば、弾除けの的にまでされ、しかも一銭の報酬もなく虐められ奴隷の如く強制労働を強いられています。

それに、ビルマの兵士は一般の貧しい農家にも土足のままズカズカと入り込み、食料となる主食の米、飼っている家畜、鶏、豚などなんでも略奪し、しかも、か弱い可哀想な女性は、人妻であれ、未婚者であれ、強姦され、運の悪い女性は家族がいる目の前で殺害されたりしている現状で、人権を無視した悲惨極まりない野蛮的な許せない行為が堂々で行われ、繰り返されているのです。

ビルマ軍はこのほかにも、戦略村を築き、村人がゲリラ仲間との接触ができないようにするために、密林の中に点在している各地の村にいる村人を数ヶ所の戦略村に強制疎開させ、村人が逃走できないように目を光らせて見張り、一人でも逃亡者がいれば、容赦なくズドンと射殺しているのです。

このような状況下で、118000人の人たちが軍部が指定した場所に強制移住させられていますし、政府軍と停戦協定を結んだ元ゲリラ活動に従事していたおよそ220000人の人たちを、軍政の方針で、反政府地域に強制移動させられ、元仲間だった反政府ゲリラの監視役までさせているのです。

このほかに、軍政を恐れてジャングルの中に身を潜めている人たちが、10万人ほどいると、聞いていますし、ビルマ国内の村やキャンプには、今もなお、タイの国境周辺に点在している約300万人ないし300万人の人たちがタイに避難してくるチャンスを狙っている、といわれています。

タイのキャンプに避難している祖国にも帰れない難民は、2005年度からやっと第三国への定住ができるようになり、2006年だけでも約5000人以上の人たちが希望を胸に抱きしめて、アメリカ、オーストラリア、カナダ、日本、北欧諸国に定住の地を求めて去っていきました。

ビルマ国境沿いのタイの難民キャンプの公式名は、内務省避難民管理センターですが、内務省が管理し、UNHCRおよび、TBBC、MSF、SVAなど20団体の援助団体のNGOが可哀想な難民支援を行っています。

タイの人たちは、この難民センターのことを、スーンオパヨツ・ソククラーム（戦災難民センター）と呼んでいます。一般には難民キャンプだ、といわれています。

このように少数民族派によるビルマ国内の血生臭い泥沼のようないつ終わるともしれない内戦は、今年でもうすでに約64年になりますし、はじめの頃（1984年）に、タイの戦災キャンプに避

難してきた人たちは、もうおよそ27年間もキャンプ生活を余儀なくされているのです。

27年間も自由を束縛されてキャンプにいれば、悲観に暮れ、寂しい思いに駆られたりするかもしれませんが、配給品をもらいキャンプで生活していれば、食住には困らないと思います。ただし、当然のことですが、子供が生まれたり、病死する人たちがいるはずです。

ですから、キャンプ内を隅から隅まで歩き回ってみますと、林に囲まれた木陰には、故郷へも帰れずに亡くなった朽ち果てた寂しそうな墓や、まだ新しい墓に眠っている可哀想な亡霊が耳元で何かを囁いているかのような気がします。

ひっそりした墓場に並んでいる墓石には、死亡者の名前や死亡した年月日が刻まれています。今にも消えそうになっている一つひとつの矩形の墓に眠っている可哀想な霊には、それぞれの人生に關した様々な過去の思い出に残る個人史が残されていることと思います。ですが、残念なことに、もう誰もその本人の喜怒哀楽を語り告げられる者はいないのです。

キャンプ内には、自分の故郷である山川を見たこともなく、キャンプで生まれ、自分の祖国を知らないままキャンプで育った子供たちが大勢います。

両親は我が子の誕生を喜びますが、我が子を自分の国へ出生届をすることもできず、タイ当局に、タイ人として出生届をだしたくても、キャンプ内で生まれた難民の子は、タイ人として認められず、そのまま無国籍者としてキャンプで育ち、のちに社会人となるわけですが、国籍問題を（第三

国に定住すれば別ですが）何とかして解消しない限り、子供たちの将来に様々な悩みが降りかかってくる運命を背負っているのです。

タイは今年から（2011年7月1日より）タイの法律に基づき、タイ人の子供は7歳（今までは15歳）から身分証明書（IDカード）を作るように義務付けられるようになりました。

現在、7歳になる子が約80万人いますが、このうちアムポー（区役所）に出生届されていない子が約7万人います。この子たちは、区役所からの出生証明書がないために、身分証明書を取得できず、今後の頭痛のタネとなる国籍問題を抱えています。

メーソート郡のモーイ沿いに点在している難民キャンプの取り締まりは原則として厳しく、キャンプから外出することは禁止されているはずですが、見ている限りさほど厳しくなく、一部の難民はキャンプの外に自由に出入りしています。

何年も難民キャンプで暮らしている人たちは、キャンプ内で雑貨商や飲食店、お菓子を作ったり歩いたり、あるいは、山羊を飼い、山羊の乳を絞って売ったりしている人もいますし、キャンプの前を105号線に沿ってメーソートの町まで走っているソーンテウ（ミニバス）でメーソート周辺の町まで出稼ぎにゆき、工場やその他の職場で、安い日当で汗水たらして働き、第三国への定住を希望し、貧しいなりに夢を描き、コッコツと頑張って生計を立てている人もいます。

難民キャンプには国連（UNHCR）や、NGO関係の財団が難民の世話をしていますが、寺小屋

学校があっても、教材もほとんどなく、しかも生徒を指導するエキスパートとして適任の先生もないのです。仮にいたとしても、能力のある者はどんどん第三国の定住が決まり、キャンプから一人、また一人と、いなくなっているのです。

砲火に追われ生死の悪夢にさ迷い逃走してきた両親は、

私たちはもう二度と祖国には帰れない

帰ったらビルマ兵に逮捕されて殺される

第三国へ逃げる道しかない

だが、いけるかどうかわからない

我が子をよい学校に入学させ、大学までいかせたい

誰かスポンサーになってくれる人を探してほしい

といった、切ない願望を訴えているのです。

参考までにキャンプ内部の難民の移動状態を記しておきます。

ビルマ難民キャンプの所在地及び人口

（2005年3月SVA資料より）

位 地 場 所 人 口 県

K 1 メラウ 15345 メーホーンソーン

K 2	メラムルアン	13,435	メーホーンンーン	
K 3	メリ	44,952	ターク	
K 4	ヤンブアイデー	18,462	ターク	
K 5	スホ	12,223	ターク	
K 6	バンナムンヤン	4,352	カーンチャナブリー	
K 7	タムコン	10,409	ラーチャブリー	
合計		119,176	(2007 年 1 月 UNHCR 資料より)	

Female Male Total

Chiengmai Povince				
WH Wieng (Shan Refugees)				
		311	287	604
Mae Hong Son Province				
Site 1	Ban Kwai/Nai	9,455	10,218	19,673
Site 2	Ban Mae Surin	1,754	1,878	3,632
Site 3	Mae La Oon (K1)	7,529	8,008	15,616
Site 4	Mae Rama Luang (K2)	7,608	8,008	15,616

Tak Province

K 3	Mae La	24,127	25,236	49,363
K 4	Umpiem Mai	9,437	10,146	19,583
K 5	Nu Po	7,386	7,944	15,330Kanchanaburi Province
K 6	Ban Don Yang	2,365	2,301	4,666

Ratchaburi Province

K 7	Tham Hin	3,978	3,981	7,959
Total		73,956	78,289	152,245

(2010 年 1 月 31 日 UNHCR 国連高等難民弁務官事務所資料より)

Camp	HH	F-HH	Femal	Male	Total
Ban Don Yang	589	166	1,610	1,534	3,144
Ban Mae Surin	806	184	1,499	1,537	3,036
Huay Pu Kaeng	19	3	33	41	74
Huay Sua Thao	19	7	42	34	76
Mae La	6,813	2,200	15,141	14,865	30,006
Mae La Oon	3,358	712	6,650	7,071	13,721

Mae Rama Luang	2,866	578	6,657	6,848	13,505
Mai Nai Soi	3,333	665	6,383	6,536	12,921
Nu Po	2,405	620	4,847	4,937	9,784
Tham Hin	896	292	2,341	2,216	4,557
Umpium	3,377	1,041	6,202	6,275	12,477
Total	24,481	6,458	51,405	51,896	103,301

年齢別人口	年齢	女	男	計
	0 - 4	7,077	7,404	14,481
	5 - 11	9,467	9,847	19,314
	12 - 17	7,355	7,769	15,124
	18 - 59	25,004	24,440	49,444
	60 以上	2,502	2,436	4,938
総 計		51,405	51,896	103,301

カレンゲリラ（KNU）基地に潜り込んで

カレンのゲリラ基地に潜り込む方法はいろいろあります。僕は、まだ（KNU）のマナプロの最大の基地があった頃になりますが、その頃は、主にターク県メーソート郡、ターソーンヤーン郡や、メーホーンソーン県メーサリヤン郡周辺のゲリラの駐屯地（キャンプ）が点在している数ヶ所の地形を利用して潜り込んだりしていました。

メーソートか、または、ターソーンヤーン周辺でKNU基地へ潜り込むときは、国境線に沿ってモイー川が流れているので、愛車を藪の茂みの中に隠して渡ったりしましたが、メーソートのワンカーキャンプからの場合ですと、一番簡単に潜入できましたが、モイー川に架かっている、やっと一人で渡れる細長い丸太のギシギシ揺れる竹橋を渡り、川岸の土手の木陰に覆われた地点から約500メートルほど奥地にある森の中の塹壕があったゲリラ基地へ行けたのです。

勿論、生命の保証などはありませんけども、川岸の警備隊が見張っている検問所で許可を取ってからでないと入れませんが、その日のゲリラ基地（キャンプともいう）内の事情によって、すぐにOKがでる場合と、今日はだめだ、と断られる場合がありますので、その都度指示に素直に従うしかありません。

ワンカーキャンプには、タイミングよく内部で緊迫していたときに潜りこみ、僕がおとりになり、朝日の松本逸也カメラマンと一緒に取材したことがあります。

メーサリヤンから潜り込む場合は、メーソートから105号線を北上し、メーラノイ郡と交差し

ている108号線を左折し、車をメーサリヤン郡の木賃宿に預け、更にメーサリヤンの小さな閑散とした町から118号線を、サラウィン川が流れているバーン・サムレップ目指して西に進み、川幅の広い流れの速いサルウィン川の対面の森で警備にあたっているKNUの駐屯地にいる通信隊と連絡を取り、屋根のないスピードの速い尾長ボートのアレンジしてもらい、数人のKNUの私服の警備兵や、家族と一緒にボートに乗り、サルウィン川を南下し（サルウィン川はタイ領のソップモイー郡付近でモイー川と合流している）でゲリラ基地へ潜入したりしました。

KNUの根拠地だったマナプロ基地へも行き、ゲリラ兵士と雑魚寝したりしましたし、でっぴりした恰幅のいいボミヤ將軍にも会いましたが、龐大な基地の中を歩き回っていてハッと、気づいたことは、僕がまだ小学生だった太平洋戦争の頃のことを思い出したのです。

それは、ボミヤ將軍がいる司令部の門の前に、可愛い12歳ぐらいの少年兵がM16自動小銃を肩からぶらさげて守衛に立っていたのです。僕も第2次世界大戦中だった頃は、日本軍の偉い将校からビンタを張られ、へとへとになりながら厳しい軍事教練を強いられ、敵を速やかに殺す方法を習得し、最後には少年兵として実弾射撃の練習までさせられたのですが、カレンのゲリラ基地でも、戦力となる青年が不足しているのか、軍事教練を受けた少年兵が密林の中で銃を持って勇敢に戦っているのです。

僕の場合は、バンコクの日本人学校に入学した一年生ときからでしたが、中国人のことを、当

時は支那人とっていました。が、チャンコロ、チャンコロは悪い奴だから殺せ、アメリカ人のことを、鬼、ロシア人のことをロスケと、軽蔑した最低の言葉で習い、天皇陛下のことを、天皇陛下は神様であり、僕たちは神様の子供であると、頭に叩き込まれていたもので、それを、日本の敗戦の日まで信じきっていたのです。

要は、小さいときから完全に洗脳されていたわけですので、考えてみると、実に末恐ろしいことです。

カレンのゲリラ部隊が受けている教育方針は、どのように行われているのかは見たことがないのでわかりませんが、恐らく少数民族のために、カレン民族独立のために、平和のためにと、生命を捧げて戦っているのではないかと思います。

一国の国の方針、あるいは、一人の指導者により、洗脳術で国民を盲目にし、左右する威力はバカにできない凶悪な恐ろしい見えない武器だと思っています。

カレンの解放区とされている村人と共有しているゲリラ基地には、いつでもすぐ逃げられるように竹で造ったバラック建てのお末な仮小屋があり、軒下には万一敵に襲撃された場合に備えて、避難するための細長い塹壕が掘っており、いざというときは、すぐ塹壕の中に潜り込み、隠れるようになっていきますし、逆に、軒下から敵を襲撃できるように工夫された構造になっています。

ゲリラが活動している解放区の密林の支配地の所々にゲリラの駐屯地となっているキャンプがあ

りますが、基地の周囲には地雷を埋めてある所や、竹の先を尖らせた竹槍を逆立てた深い落とし穴や、大きなサッカーボールのような大きさの重みのある丸い分銅に細長い先の尖った刃物を一杯取り付けた分銅を、大木に吊るし、遠くから長い綱で操り、敵を攻撃する音のしない原始的な武器（撮影禁止）などが配備されてあった所もありました。

学校や病院、野戦病院らしき小屋は見たことがありませんが、医者を含めて医療器具や薬品なども皆無に等しいのではないかと思います。ゲリラの駐屯地にいる人たちはほとんどがハマダラカにより、チクリと刺されてかなり酷いマラリアに罹っています。マラリアの予防薬となるキニーネ（服用しすぎてもよくない）もあまりない状態ですが、蚊帳も吊らず（ないので）に寝るので、マラリアに罹るのが当然かもしれません。

病気をしても、立派な病院も良い医者もない基地で、重病患者や戦闘で負傷した重傷者がでた場合は、ほとんどがタイ側のメーソート郡の病院に運ばれてきて手当てしてもらっています。しかし担架もなく、険しい密林の中を、メーソートの病院まで運んでくるのは大変なことだと思います。それに衛生面では、ゲリラ基地にはきちんとした大事なトイレすらないのです。トイレとなっている場所は一ヶ所に決められ、基地からちよつと離れた野外の森の中にありますが、みんなは灌木の陰に隠れてしゃがんで用を達しています。

兎に角、足の踏み場もないほどジメジメした野外トイレの周辺から漂う悪臭は凄く、しかも真つ

白いまるまる太った蛆虫の群れがうようよしているのです。

マナプロ根拠地の林の木陰には、竹で囲まれた広い敷地内に、細長いテーブルを無数に並べてある野外大衆食堂があります。

食事の時間になると、カーンカーンカーンと、鐘が鳴り響き、暫くすると、数百人の大衆が押しかけてきて一列に並び、まず、食堂の入り口に置いてあるたつたひとつしかない小さな洗面器で、各自が両手を洗い、匙もフォークもないテーブルの両側に並んですわり、みんなと楽しそうに話しながら、細長い指先を器用に動かして食事をしている安泰した平和そうな雰囲気に接したりしました。

こうして、みんながお腹を満たしている日々の食料や、武器は一体どこから入手しているのでしょうか、と疑問に思うのですが、どう間違っても目と鼻先にあるタイからのルートしかないと思います。

現に僕自身が一度だけでしたけど、メーサリヤンでカレンのゲリラ兵士が私服で運転していた武器を満載した幌を被せてカムフラージュしたビックアップ車に乗せてもらい、バーン・サムレッツの船着場で武器を尾長ボートに積み換えて基地へ運んでいくのを目撃したことがあるのです。

ですから、主食となる米や食料、その他の日常品なども、当然、タイから密かに入手しているのではないかと思います。ビルマの正規軍に人権を無視され、苛められている少数民族派のグループ

による闘争は、今もなお続いています。よく続くものだと、感心するくらい続いています。

要は、カレンのゲリラ地区はほとんどがモーイ川を挟んだタイ領に近い地形を利用して陣取っていますが、理由は、万一ビルマ軍の攻撃に遭遇し、戦闘を交えて勝ち目が無い、と判断したときに、すぐタイへ逃走できるように配慮されているのです。ですから、ゲリラ基地が何回焼かれても、陥落しても、ゲリラ部隊は簡単にモーイ川を渡りタイに越境し、更に、タイ領内からモーイ川を遡行し、ビルマの解放区を目指し、安全地帯へ潜入し、また新たに陣地を構築して抵抗しているのです。タイの壁ともなっている少数民族派の、ビルマ軍との闘争は、第2次大戦終戦後、まもなく紛争が開始されているわけですが、この泥沼のような、いつ終わるともしれない死闘は、もうすでにおよそ60年間も続いているのです。

少数民族派の団結による密林に立て籠もり、山岳地帯の山の地形を利用し、正規軍との闘争を続けてきたゲリラ部隊の戦いは、タイ側に逃げ道がある限り、タイが無言で受け入れてくれる限り、終わらなき戦いであるかもしれないし、それと同時に、いくら頑張っても、今のままの状態では、ビルマの志願制の37万5000人の正規軍、それに7万3000人の人民警察、3万5000人の民兵および、大砲隊、戦車隊、航空隊などの戦力を完備しているビルマの正規軍を相手取って戦ったとしても、どう考えてみても勝ち目のない闘争ではないかと思えます。

過去において軍事独裁政権を維持し、地元の住民を勝手に奴隷のようにこき使い、人権を無視し

てきた現在までのビルマの政権に、最近、軍政から民主主義を目指す多少なりとも明るい日差しが差しかかっているかのように見受けられるようになりました。

それは、2003年から数年間続いたNLDスー・チー女史の自宅軟禁釈放および、2011年10月の恩赦で、窮屈な酷い地獄の刑務所だ、といわれている刑務所から、政治犯300人を含めた約6300人の犯人を釈放しているからです。

国のため、民族のために尽くそうとして逮捕されている政治犯はまだ500 - 1600人もいる、といわれていますが、近々に全員が無事に釈放されることを願うのみです。

ビルマの軍部による独裁政権は、やっと国家の改革に方針を決めたらしく、1997年7月に、東南アジア諸国連合（ASEAN）東南アジア地域協力機構に加盟（加同国タイ、インドネシア、フィリピン、マレーシア、シンガポール、ブルネイ、ベトナム、ラオス、ミャンマー、カンボジア10カ国）し、2005年12月にクアランプールで行われた第11回東南アジア会議の会場で、民主主義と人権擁護宣言にも参加していますので、お互いにビルマ民族同士の殺し合いをやめ、60余年におよぶ泥沼のような内戦に浸ったビルマの国民に一日も早く平和な安定した明るい自由な日々が速やかに訪れる日を切に願うのみです。

第9章 尋ね人欄

我が家は別に相談所でもなんでもないので、何故だかいろんな人からいろんな問い合わせや、相談、願いごとで頼みにくる人があとを絶ちません。

いろんなケースがありますが、時々日本から、私の父から聞いたのですが、私の兄、姉がタイにいるそうですので、探してください、と言って、頼みにくる人もいますし、逆にタイ人で日本人の父を探してくださいと頼みにくる場合もあります。しかしほとんどが正確な名前や現住所不明で流れとなっています。

人探しの他に、昔住んでいた家、または、店があった所へ案内して欲しいと頼みにくる人もいますし、今でも時々手芸品や木彫りなどを探してください、といった依頼などが飛び込んできます。すみませんが、次の三点に関してご存知の方がいらっしゃいましたら、お知らせくださいよろしくお願いいたします。

●日本へ行ったタイの留学生を探しています

第2次大戦中昭和17年（1942年）5月に、バンコクからタイの留学生11名が4382トンの大阪商船の、がんぢす丸で日本へ出航しました。しかし、5月28日の夜サイゴンに向かって航海中魚雷2本が、がんぢす丸の右舷中央部に命中し、1時間40分後に沈没。日田豊明船長と乗組員6名が死亡しましたが、船客70名と乗組員58名は翌朝4時頃日本の軍艦に救出され、無事に日本に上陸しました。この中にタイの留学生が11名いましたが、この11名の留学生を探している方がいますので、何方か留学生の消息をご存知の方がいらっしゃいましたら、お知らせください。

●バーンブアトーンキャンプの名簿を探しています

終戦後の1945年9月から1946年6月の間にバーンブアトーンキャンプに抑留されていた当時の第1キャンプおよび、第2キャンプの名簿を探しています。
名簿をお持ちの方がいらっしゃいましたら、お知らせください。

●左記写真の双虎の衝立を探しています

表面は双虎、裏面はタイ舞踊の衝立を探しています。
ご存知の方がいらっしゃいましたら、お知らせください。

衝立のサイズは、186×186 cmです。

大阪の実業家がタイ国へ贈った樟の大木の一枚板の大作で、縁の作りも本格的な朱塗りです。

連絡先は何れも

Masao Seto, 747/157 Soi Pradu 1, Sathupradit Road, Bangkok 10120, Thailand.



双虎の衝立 表



タイの踊り 裏面

今回は、はじめての試みで、紙をぜんぜん使用しないで読み物にする、世界中のどこにいても、誰でも自由に見れる、読める便利な読み物 E-book（電子版の本）に挑戦してみました。

今まで自費で出版していた本は、カラー写真をそのまま掲載すると高いので、全部白黒写真に焼き直して掲載していましたが、このデジタル版ですと、写真を白黒、または、カラーで掲載してもぜんぜん負担がかからないので、助かりますし、そのままカラーで綺麗な写真を掲載することができますようになりました。

電子版の発行にあたり、僕にとつては未知の世界ですし、どのように手配すればいいのか、さっぱりわかりませんので、すべてを友人の、アジア文化社の五十嵐勉編集長にお願いすることにしました。

タイに生きての取材や資料収集でお世話になった、アジアプレスの直井里予さん、西浦三郎さん、チヤンマイで活躍中の Lim・森と水と人をつなぐ会の木村茂さん、細々したことまで注意してくださった五十嵐勉さん、それに朝日総局スタッフのみなさんにも助けて頂き、どうにか本書を無事

に書き終わることができました。お世話になった皆様、本当にどうもありがとうございます。ありがとうございました。心より感謝いたします。

2011年12月30日

瀬戸正夫

参考文献

- 大東亜戦争全史 服部卓四郎著 原書房
マレー進行作戦 防衛庁防衛研究所戦史室著 朝雲新聞社
秘録陸軍中野学校 畠山清行著 新潮社
ナコンナヨーク奇跡の碑 藤田豊著 第三十七師団戦記出版社
戦時船舶史 駒宮真七郎著
タイ辞典 日本タイ学会編 めこん
タイ国経済概況(2010/2011年版) バンコク日本人商工会議所
タイ国日本人会80周年記念特別号 泰国日本人会
タイの歴史 ロン・サヤマナン著 二村龍男訳 近藤出版社
東南アジア通信8号1989秋季号 東南アジア通信
東南アジア通信16号1992夏季号 東南アジア通信
タイの主要工業団地と貸工場・倉庫 ニュースクリップ
近代日本総合年表 岩波書店
世界年鑑 共同通信社
世界精密地図 人文社

- 現代用語の基本知識2010 自由民社
基本地図帳2003―2004 二宮書店
朝日新聞社 資料室
アウンサン将軍と三十人の志士 ボ・ミンウン 中央公論社 (訳編者 田辺寿夫)
289 カウダン マティチョン仏暦2521-2549年
タムナーン76 チャンワッ アヌパン・ニティナイ著
ルークチーン・ラックチャート チャウヴォン・ポンピチツ著
Siam Almanac 92-94
History of Siam Paldisai Sitttharyakij

2015, 年 1 月 3 日電子出版発行

定価 五〇〇円 (税別)

〒一五八・〇〇八三
東京都世田谷区奥沢七・一五・一三
電話〇三・五七〇六・七八四七



発行者 渡辺政義
発行所 アジア文化社
文芸思潮出版部

著者 瀬戸正夫

タイに生きて

E-mail asiawave@qk9.so-net.ne.jp

Maid in Japan
落丁本・乱丁本はお取り替えます



著者◆瀬戸正夫 Profile *
せとまさお
1931 年 5 月 23 日ブーケッ生まれ
1945 年 3 月盤谷日本国民学校小学 6
年卒
1946 年 6 月バーンプアトーン抑留所
で高等科 2 年中退
様々な経歴の後
朝日新聞バンコク支局およびアジア総
局顧問
報道カメラマン 水泳教師
著書「父と日本に捨てられて」 など